科学研究費助成事業（科研費）
基盤研究（C）課題番号 19K00356　古代・中世の《翻訳》意識―訓読と翻案のあいだを探る―（研究代表者　南山大学 森田貴之）

中古・中世句題和歌一覧（稿）

森田貴之　阿尾あすか　小山順子
竹島一希　蔦　清行　山中延之

【目次】

中古・中世句題和歌一覧（稿）……森田貴之　阿尾あすか　小山順子
竹島一希　蔦　清行　山中延之　2

中古・中世句題和歌略史……小山順子　165

中古・中世句題和歌一覧（稿）

森田貴之　阿尾あすか　小山順子
竹島一希　蔦　清行　山中延之

本報告書は、中古・中世に作られた漢詩句・漢文摘句を句題とする和歌を一覧することを目的とするものである。いわゆる句題和歌は、和歌史において、営々と詠まれ続け、各作者・作品単位での研究も蓄積されてきた。しかし、個々の私家集に散らばる各作品を一覧することは容易ではなく、句題和歌史の全貌を把握することには課題も多い。

そこで、本一覧では、各家集・作品から句題和歌を原拠作品とともに集成し、また、同一句題を持つ他作品を簡便に把握し、相互に通覧できることを目指した。これにより、中世以前に編まれた句題和歌の広がりを知ることができ、作品相互の関係を知る手がかりとなるだろう。

なお、本稿では、句題が明示されているもの、五首以上の句題和歌を持つ作品のみを対象としており、断片的に収められた句題和歌、和歌の内容から句題和歌と判別できるが句題が明示されてはいない作品、漢故事などを踏まえた作品などは収録していない。

【収録作品一覧】

収録作品は、以下の通りである。（　）内は本稿における略称。およそ成立順によって配列したが、⑲・⑳など明らかに同一句題を組題として共有する作品については、先行する作品に併記して収録している。

①大江千里「句題和歌」（『千里集』より）一一五首：（千）
②藤原高遠『大弐高遠集』より四六首：（高）
③源道済『道済集』より一〇首：（道）
④大江匡房『匡房集』より一〇首：（匡）
⑤祝部成仲『成仲集』より五首：（成）
⑥藤原隆房『朗詠百首』九九首：（朗）
⑦慈円「文集百首」（『拾玉集』より）一〇〇首：（慈）
⑧藤原定家「文集百首」（『拾遺愚草員外』より）一〇〇首：（定）
⑨寂身「文集百首」（『寂身集』より）四〇首：（寂）
⑩源光行『百詠和歌』二四〇首：（百）
⑪土御門院「句題五十首（二種）」（『土御門院御集』より）一〇〇首：（土）
⑫藤原為家「朗詠百首」（『夫木抄』より）九首：（為）
⑬葉室光俊『閑放集』より一三首：（光）
⑭一条実経『円明寺関白集』より八首：（円）
⑮源資平『資平集』より一〇首：（資）
⑯飛鳥井雅有『隣女集』より一五首：（雅）
⑰日野俊光『俊光集』より七首：（俊）
⑱伏見院『伏見院御集』より七首：（伏）
⑲頓阿他『頓阿句題百首』五〇〇首：（頓）
⑳三条西公条『称名院句題百首』一〇〇首：（称）
㉑三条西実連『三条西実連詠草』より「五十首詠草　古集五言一句為題／春十首」ほか一六首：（連）
㉒『竹内僧正家句題歌』四〇首：（竹）
㉓『古文孝経和歌』二一首：（孝）
㉔永正元年八月二五日「禁裏月次御会和歌」八七首：（禁）
㉕「水無瀬殿法楽和歌（文集百首）」一〇〇首：（水）
㉖三条西実隆「夏日詠百首（文集百首）」一〇〇首：（実）
㉗「聖廟法楽和歌（杜甫句題五十首）」五〇首：（聖）

【担当】

下記の者が礎稿を担当し、相互にチェックを行い、統一を図った。

森田貴之　…　総合編集、①（千）、⑩（百）、⑮（資）
阿尾あすか　…　⑥（朗）、⑰（俊）、⑱（伏）
小山順子　…　各略解説、②（高）、③（道）、④（匡）、⑤（成）、⑫（為）、⑬（光）、⑭（円）、㉑（連）、㉒（竹）、㉓（孝）、㉔（禁）、㉗（聖）
竹島一希　…　㉕（水）、㉖（実）
蔦　清行　…　⑪（土）、⑲（頓）、⑳（称）
山中延之　…　⑦（慈）、⑧（定）、⑨（寂）、⑯（雅）

【凡例】

【略解説】…各作品冒頭に当該作品の解説を付した。

【参考】…主たる先行研究を示した。句題の推定等において参照した。

【底本】…各作品の底本を示した。ただし、先行研究の知見に従い、校訂した箇所もある。なお、【本文】は、〈句題原詩〉〈句題典拠〉などの箇所も含めて通行の字体で掲出した。踊り字は開き、濁点を適宜加えた。

【本文】

・部立などがある場合、それを掲出した後に、例えば（千1）などのように、本一覧独自の通し番号を示し、句題・和歌の順に掲出した。底本に明示が無く、推定した句題については（　）を付して示した。底本の欠字は〔　〕で示した。

・和歌末尾に底本による和歌番号を付した。

・〈句題原詩（原文）〉に、句題の出典情報ならびに該当する漢詩・漢文を示した。原則として八句以内の詩は全文を掲出したが、適宜、前略・後略した。その場合、（前略）（後略）などの形で示してある。なお、楽府などの場合、末尾にまとめて掲出していることがある。

なお、原詩・原文は以下のものを底本とし、原詩・原文の掲出にあたっては、基本的に別集を総集に優先させた。したがって、句題と原詩（文）句に異同がある場合もある。

《引用句題原詩・原文底本》

『雲台編』…『四部叢刊続編』集部
『王右丞文集』…古典研究会叢書漢籍之部（汲古書院、二〇〇五年）
『温飛卿詩集』…『温飛卿詩集箋注』（『景印文淵閣四庫全書』）
『韓非子』…中華書局『諸子集成』
『玉台後集』…傅璇琮・陳尚君・徐俊編『唐人選唐詩新編 増訂本』（中華書局、二〇一四年）
『元氏長慶集』…冀勤点校『元稹集』（中華書局、二〇一〇年）
『孝経』…新釈漢文大系『孝経』（明治書院、一九八六年）
『寇忠愍公詩集』…『四部叢刊』集部
『古今合璧事類備要』…『景印文淵閣四庫全書』
『山谷詩集注』…『山谷詩集注』（上海古籍出版社、二〇〇三年）
『三体詩』…『影印仮名つき錦繡段・三體詩・古文真寶』（クレス出版、一九九二年）元禄八年版
『司空表聖詩集』…『四部叢刊』集部
『詩人玉屑』…王仲聞点校『詩人玉屑』（中華書局、二〇〇七年）
『詩話総亀』…『四部叢刊』集部
『集千家註杜工部詩集』…天理図書館善本叢書漢籍之部三・四『集千家註杜工部詩集』（八木書店、一九八一年）
『苕溪漁隠叢話』…『景印文淵閣四庫全書』
『尚書』・『毛詩』・『春秋左氏伝』…『十三経注疏』（芸文印書館）
『初学記』…『初学記』（中華書局、二〇〇四年）
『翠微南征録』…『四部叢刊三編』集部
『石湖居士詩集』…『四部叢刊』集部
『石屏詩集』…『四部叢刊続編』集部
『銭考功集』…『四部叢刊』集部
『全唐詩』…『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）
宋之問詩…陶敏・易淑瓊校注『沈佺期宋之問集校注』（中華書局、二〇〇一年）
『宋詩紀事』…『景印文淵閣四庫全書』
『長江集』…『四部叢刊』集部
『帝範』…内閣文庫蔵寛文八年刊本（図立公文書館デジタルアーカイブ）
『丁卯詩集』…羅時進箋証『丁卯集箋證』（中華書局、二〇一二年）
『唐詩紀事』…王仲鏞校箋『唐詩紀事校箋』（中華書局、二〇〇七年）
『南陽集』…『景印文淵閣四庫全書』
『白氏文集』…『白氏文集歌詩索引』（同朋舎、一九八九年、底本・那波道円本）（『歌詩索引』未収部分については、『那波本白氏文集：宮内庁所蔵』〈勉誠出版、二〇一二年〉）
『文苑英華』…『文苑英華』（中華書局、一九九五年）
『分門纂類唐宋時賢千家詩選』…李更・陳新校証『分門纂類唐宋時賢千家詩選校證』（人民文学出版社、二〇〇二年）
『文選』…『文選』（中華書局、一九九五年）
『遊仙窟』…『醍醐寺藏本遊仙窟總索引』（汲古書院、一九九五年）
劉禹錫詩…陶敏・陶紅雨校注『劉禹錫全集編年校注』（中華書局、二〇一九年）
『李嶠百二十詠』…『李嶠百二十詠索引』（東方書店、一九九一年）
『菅家文草』『菅家後集』…日本古典文学大系『菅家文草 菅家後集』（岩波書店）
『御物小野道風筆屏風土代』…『大日本史料』第一編之六
『江吏部集』…群書類従（文筆部）
『新撰万葉集』…新編国歌大観（古典ライブラリー版）
『扶桑集』…群書類従（文筆部）

『本朝文粋』…新日本古典文学大系『本朝文粋』（岩波書店）
『本朝麗藻』…大曾根章介・佐伯雅子共編『校本本朝麗藻』（汲古書院、一九九二年）
『類聚句題抄』…本間洋一『類聚句題抄全注釈』（和泉書院、二〇一〇年）

・〈句題原詩（原文）〉のうち、句題該当箇所には傍線を附した。なお、当該詩文が、同一作品（併記した作品）内で、後出する和歌の句題にも採られている場合、破線・波線等を付して示し、重複掲載は避けた。後出箇所では、例えば、（千1）に既出、とのみ示している。前掲箇所を参照されたい。

・当該句題ないしその一部が『千載佳句』『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』に収録されている場合、それぞれ底本とした各文献の番号を用いて、〈句題他出〉に示した。各他出文献底本は次の通りである。

《他出文献底本》
『千載佳句』…金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　第1巻〈句題和歌、千載佳句研究篇〉』（培風館、一九四三年）
『和漢朗詠集』…『新編国歌大観』（古典ライブラリ『日本文学Web図書館』所収）
『新撰朗詠集』…『新編国歌大観』（古典ライブラリ『日本文学Web図書館』所収）

・『朗詠百首』など、〈句題原詩（原文）〉に直接拠らない作品については、〈句題典拠〉とし、その原詩（原文）が不明の場合、〈句題典拠〉所収の原詩（原文）を掲げ、〈句題典拠〉作品に記載された詩題・作者名を（「詩題」作者）という形で補った。なお、『和漢朗詠集』の詩題等は、和歌文学大系『和漢朗詠集　新撰朗詠集』（明治書院）によった。

・当該句題ないしその一部が、他の作品の句題として用いられている場合、〈同一句題〉として示した（『新編国歌大観』・『新編私家集大成』を用いた）。その作品が本一覧収録作品の場合には、閲覧の便のため、本一覧の通し番号で示し、それ以外の作品の場合には、「作者『歌集名』国歌大観番号（新編私家集大成番号）「句題」和歌」という形で示した。

①大江千里「句題和歌」（『千里集』）（千1～千115）

【略解説】
大江千里（生没年未詳、九世紀半ば～一〇世紀初め）の家集。『千里集』『句題和歌』と題される。宇多天皇より、昔から今の和歌の献進を命じられて完成させたものであると、寛平六年（八九四）四月二五日の自序に記されている。現存伝本は一二五首で、五言または七言の詩句一句を題としている。句題として用いられる詩句の出典は白楽天七四句、元稹一〇句をはじめ、判明しているものもあるが、出典不明句も二四句残されている。構成は、春二一首・夏一四首・秋二一首・冬一二首・風月一一首・遊覧一三首・離別一二首・述懐一二首。句題和歌ではない自詠一〇首は「詠懐」として部が立てられている。

【参考】
金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究編』（培風館、一九三三年、増補版一九五五年）、平野由紀子・千里集輪読会『千里集全釈』（風間書房、二〇〇七年）など

【底本】伝寂蓮筆本『千里集』（『古筆学大成17　私家集一』）を底本とし、『千里集全釈』を参照した。
※和歌番号は『新編国歌大観』（底本・書陵部蔵『大江千里集』）
※句題和歌にあたらない詠懐部は省略した

【本文】
春
（千1）
　咽霧山鶯啼尚少
やまふかみたちくる霧にむすればやなくうぐひすのこゑまれらなる（一）
〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一八「早春尋李校書」
　款款春風澹澹雲　柳枝低作翠襤裙　梅含鶏舌兼紅気　江弄瓊花散緑紋
　帯霧山鶯啼尚小　穿沙蘆筍葉纔分　今朝何事偏相覓　撩乱芳情最是君
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・早春・三、『和漢朗詠集』春部・鶯・六五
（千2）
　鶯声誘引来花下

うぐひすのなきつる声にさそはれて花のもとにぞ我はきにける（二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一五九「春江」
炎涼昏暁苦推遷　不覚忠州已二年　閉閤只聴朝暮鼓　上楼空望往来船
鶯声誘引来花下　草色勾留坐水辺　唯有春江看未厭　縈砂遶石渌潺湲

〈句題他出〉『千載佳句』遊牧部・春遊・八五三、『和漢朗詠集』春部・鶯・六七

〈同一句題〉（慈定6）、（土7）、木下幸文『亮々遺稿』三二「鶯声誘引来花下」、香川景樹『桂園一枝拾遺』三四「鶯声誘引来花下」

（千3）
偸閑何処無尋春
しづかなるときをもとめていづこにか花のありかをともにたづねむ（三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三八七「歳仮内命酒贈周判官蕭協律」
共知欲老流年急　且喜新正仮日頻　聞健此時相勧酔　偸閑何処共尋春
脚随周叟行猶疾　頭比蕭翁白未勻　歳酒先拈辞不得　被君推作少年人

（千4）
花枝看即落紛紛
花のえだをりつるからにちりまがふにほひのあかずおもほゆるかな（四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇七〇三「花下自勧酒」
酒盞酌来須満満　花枝看即落紛紛　莫言三十是年少　百歳三分已一分

〈句題他出〉『千載佳句』草木部・花宴・六七六

（千5）
不見洛陽華
神さびてふりぬるさとにすむ人はみやこににほふはなをだにみず（五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五八・二八一三「恨去年」
老去猶耽酒　春来不著家　去年来校晩　不見洛陽花

（千6）
晩帰多是看花廻
いまははやかへりきなましみちなりしはなをみしまにほどぞへにける（六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五八・二八一四「早出晩帰」
早起或因携酒出　晩帰多是看花廻　若抛風景長閑坐　自問東京作底来

〈句題他出〉『千載佳句』遊牧部・遊宴・八四七

（千7）
緑糸条弱不勝鶯
こづたひてみどりの糸のよはければうぐひすとむるちからだになし（七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三一四〇「楊柳枝詞八首（ノ三）」
依依嫋嫋復青青　勾引清風無恨情　白雪花繁空撲地　緑糸条弱不勝鶯

〈句題他出〉『千載佳句』草木部・柳・六〇八、『新撰朗詠集』春部・柳・九五

（千8）
尋花不問春深浅
花をのみたづねこしまに春をまだふかさあささもしられざりけり（八）

〈句題原詩〉朱慶余「同友人看花」（『全唐詩』巻五一四）
尋花不問春深浅　縦是残紅也入詩　毎箇樹辺行一匝　誰家園裏最多時

（千9）
狂風吹送毎年春
はかなくてそらなる風のとしをへて春ふきをくることぞあやしき（九）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一六「杏園」
浩浩長安車馬塵　狂風吹送毎年春　門前本是虚空界　何事栽花誤世人

（千10）
春暖山華処処開
あたたけき春の山辺の花のみぞところもわかずさきみだれける（一〇）

〈句題原詩〉原拠不明

（千11）
落尽閑花不見人
あとたえてしづけき山にさく花のちりはつるまでみる人もなし（一一）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一六「晩春」
　昼静檐疏燕語頻　双双闘雀動階塵　柴扉日暮随風掩　落尽閑花不見人
〈句題他出〉『千載佳句』人事部・閑居・四五一、『新撰朗詠集』雑部・閑居・五七五
〈同一句題〉木下長嘯子『挙白集』四二七「長楽寺にて之俊催し侍りける会に、落尽閑花不見人」、松永貞徳『逍遊集』五六七「落尽閑花不見人」

（千12）
　老眼花前暗
としふかくおいぬる人のかなしきはさけるはなさへおとろふなりけり（一二）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五八・二八三一「無夢」
　老眼花前暗　春衣雨後寒　旧詩多忘却　新酒且嘗看
　拙定於身穏　慵応趍件難　漸銷名利想　無夢到長安

（千13）
　花下忘帰因美景
花をみてかへらむことのわするるは色こきはなによりてなりけり（一四）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六一六「酬歌舞大見贈」
　去歳歓遊何処去　曲江西岸杏園東　花下忘帰因美景　樽前勧酒是春風
　各従微宦風塵裏　共度流年離別中　今日相逢愁又喜　八人分散両人同
〈句題他出〉『千載佳句』宴喜部・春宴・六九五、『和漢朗詠集』春部・春興・一八
〈同一句題〉（慈定9）、（円3）

（千14）
　歳時春猶少
とし月にまさるとしなしと思へばやはるしもつねにすくなかるらむ（一三）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九二一「晩春登大雲寺南楼贈常禅師」
　花尽頭新白　登楼意若何　歳時春日少　世界苦人多
　愁酔非因酒　悲吟不是歌　求師治此病　唯勧読楞伽
〈同一句題〉（慈定13）、（頓称14）

（千15）
　送春那得不慇懃
あかでのみすぎゆく春をいかでかはこころをいれてをしまざるべき（一五）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一七・一〇二二「春去」
　一従沢畔為遷客　両度江頭送暮春　白髪更添今日鬢　青衫不改去年身
　百川未有迴流水　一老終無却少人　四十六時三月尽　送春争得不殷勤
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・送春・一一三、『新撰朗詠集』春部・三月尽・四五

（千16）
　春光只是有明朝
かねてよりわがをしみこし春はただあけむあしたぞかぎりなるべき（一六）
〈句題原詩〉原拠不明
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』二八二「春光只是在明朝」

（千17）
　両処春光同日尽
はるをのみここもかしこもをしめどもみなおなじときつきぬるがうさ（一七）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七六七「酬和元九東川路詩十二首（ノ一一「望駅台」）」
　靖安宅裏当窓柳　望駅台前撲地花　両処春光同日尽　居人思客客思家

（千18）
　春翁酒易悲
はるばるにあひておいぬる身なればやゑひになみだのあかれざるらむ（一八）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二六一「残春詠懐贈楊慕巣侍郎」
　（前略）
　興来池上酌　醉出袖中詩　静話開襟久　閑吟放蓋遅
　落花無限雪　残鬢幾多糸　莫説傷心事　春風酒易悲

（千19）
　（可憐虚度好春朝）
あはれともわが身のみこそおもほゆれはかなきはるをすぐしきぬれば（一九）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻二一「酬楽天三月三日見寄」
常年此日花前醉　今日花前病裏銷　独倚破簾閑悵望　可憐虚度好春朝

（千20）
惆悵春帰不留得
なげきつつすぎゆく春ををしめどもあまつそらからふりすててゆく（二〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六三一「三月三十日題慈恩寺」
慈恩春色今朝尽　尽日徘徊倚寺門　惆悵春帰留不得　紫藤花下漸黄昏

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・送春・一一五、『和漢朗詠集』春部・三月尽・五二

（千21）
一歳唯残半日春
ひととせにまたふたたびもこじものをただひるなかぞはるはのこれる（二一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三一三一「三月晦日日晩聞鳥声」
晩来林鳥語殷勤　似惜風光説向人　遣脱破袍労報暖　催沽美酒敢辞貧
声声勧酔応須酔　一歳唯残半日春

〈同一句題〉（高43）、三条西実隆『再昌草』一五六三「同（三月尽、宰相中将和漢会）、詩歌　唯残半日春」

夏

（千22）
春条長足夏陰盛
このめ（もえ）はるさかえこしえだなればなつのかげとぞなりまさりける（二二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三七〇「樟亭双桜樹」
南館西軒両樹桜　春条長足夏陰成　素華朱実今雖尽　碧葉風来別有情

（千23）
鶯多過春語
うぐひすはすぎにし春ををしみつつなくこゑおほきころにぞありける（二五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五三・二三三九「病中書事」
三載臥山城　閑知節物情　鶯多過春語　蟬不待秋鳴
気嗽因寒発　風痰欲雨生　病身無所用　唯解卜陰晴

（千24）
蟬不待秋鳴
うつせみの身としなりぬる我なればあきをまたでぞなきぬべらなる（二六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五三・二三三九「病中書事」↓（千23）に既出

（千25）
鶯語渋漸稀
うぐひすはときならねばやなくこゑのいまはまれらになりぬべらなる（二八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九三五「春末夏初閑遊江郭二首（ノ二）」
柳影繁初合　鶯声渋漸稀　早梅迎夏結　残絮送春飛
西日韶光尽　南風暑気微　展張新小簟　熨帖旧生衣
（後略）

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』七七「鶯語漸漸稀」

（千26）
余華葉裏稀
ちりまがふ花はこのはにかくされてまれにほへる色ぞともなき（二七）

〈句題原詩〉原拠不明

（千27）
春尽啼鳥廻
かぎりとてはるのすぎにし時よりぞなくとりのねのいたくきこゆる（二九）

〈句題原詩〉原拠不明

（千28）
蓮開水上紅
あきちかくはちすひらくる水のうへはくれなゐふかき色にぞありける（三〇）

〈句題原詩〉『初学記』巻六・江第四・煬帝「夏日臨江」

夏潭蔭修竹　高岸坐長楓　日落滄江静　雲散遠山空
鷺飛林外白　蓮開水上紅　逍遥有余興　悵望情不終

（千29）
枝空華落稀
ふく風にえだもむなしくなりゆけばおつるはなこそまれにみえけれ（三一）

〈句題原詩〉原拠不明

（千30）
鳥思残花枝
なくとりのこゑふかくのみきこゆるはのこれるはなのえだをこふるか（三二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五・〇一七八「首夏同諸校正遊開元観因宿翫月」
（前略）
清和四月初　樹木正華滋　風清新葉影　鳥恋残花枝
向夕天又晴　東南余霞披　置酒西廊下　待月杯行遅
（後略）

〈同一句題〉（水実22）、加藤千蔭『うけらが花初編』三〇四「鳥思残花枝」

（千31）
月照平砂夏夜霜
月かげになべてまさごのてりぬればなつのよふかくしもかとぞみる（三三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三七四「江楼夕望招客」
海天東望夕茫茫　山勢川形闊復長　灯火万家城四畔　星河一道水中央
風吹古木晴天雨　月照平沙夏夜霜　能就江楼銷暑否　比君茅舎校青涼

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・夏夜・一三〇、『和漢朗詠集』夏部・夏夜・一五〇

（千32）
但能心静即身涼
わがこころしづけきときはふく風の身にはあらねどすずしかりけり（三四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一五・〇八五二「苦熱題恒寂師禅室」
人人避暑走如狂　独有禅師不出房　可是禅房無熱到　但能心静即身涼

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・避暑・一三三、『和漢朗詠集』夏部・納涼・一六一

〈同一句題〉（慈定22・寂9）、（円6）、藤原為家『為家集』四三四「心静即身涼〈文永八年四月十八日続百首題自和漢朗詠注出之〉」

（千33）
澗路甚清涼
山たかみたにをわけつつゆくみづはふきくるかぜぞすずしかりける（三五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三一三二「早夏遊平原迴」
夏早日初長　南風草木香　肩輿頗平穏　澗路甚清涼
紫蕨行看採　青梅旋摘嘗　療飢兼解渇　一盞冷雲漿

〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』四四七「澗路甚清涼」

秋部

（千34）
天漢迢迢不可期
あまの河ほどのはるかになりゆけばあひみむ事のさだめなきかな（三六）

〈句題原詩〉原拠不明

（千35）
秋霜似鬢年空長
秋のよのしもにたとへてわがかみはとしのはかなくおいしつもれば（三七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六一七「和談校書秋夜感懐呈朝中親友」
遥夜涼風楚客悲　清砧繁漏月高時　秋霜似鬢年空長　春草如袍位尚卑
詞賦擅名来已久　煙霄得路去何遅　漢庭卿相皆知己　不薦揚雄欲薦誰

（千36）
秋来転覚此身衰
おほかたのあきくるからに我身こそかなしきものとおもひしりぬれ（三八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一九・一二四三「新秋早起有懐元少尹」
秋来転覚此身衰　晨起臨階盥漱時　漆匣鏡明頭尽白　銅瓶水冷歯先知
光陰縦惜留難住　官職雖栄得已遅　老去相逢無別計　強開笑口展愁眉

（千37）
霜草欲枯虫思急
おくしもにくさのかれゆくときよりぞなくむしのねもたかくきこゆる（三九）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二八七「答夢得秋庭独坐見贈」
林梢隠映夕陽残　庭際蕭疎夜気寒　霜草欲枯虫思急　風枝未定鳥棲難
容衰見鏡同惆悵　身健逢杯且喜歓　応是天教相煖熱　一時垂老与閑官
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・暮秋・二〇二、『和漢朗詠集』秋部・虫・三二八
〈同一句題〉（匡6）、（土24）

（千38）
今宵織女渡天河
ひととせにただこよひこそたなばたのあまのかはらをわたるといふなれ（四〇）
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』秋部・七夕・一九四
今宵織女渡天河　朧月微雲一似羅（白）
〈同一句題〉三条西実隆『再昌草』三六六五「七夕公宴　今宵織女渡天河」、同『雪玉集』九八一「今宵織女渡天河」、三条西公条『称名院集』五三二～五三四「今宵織女渡天河」、三条西実枝『三光院詠』五五五「今宵織女渡天河」、冷泉為和『為和集』四〇七「今宵織女渡天河（七月七日禁裏御会）」、『後奈良院御製』四八一「今宵織女渡天河（同年（天文三年）七夕御会）」、『邦輔親王集』六八八～六九一「今宵織女渡天河」、山科言継『拾翠愚草抄』五八〇「今宵織女渡天河」、『邦房親王御詠』五六四「星夕詠今宵織女渡天河和歌」

（千39）
心情逢秋一似灰
ものをおもふ心のあきになりぬればすべてはひとぞみえわたりける（四一）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九四九「百花亭晩望夜帰」
百花亭上晩徘徊　雲影陰晴掩復開　日色悠揚映山尽　雨声粛颯渡江来
鬢毛遇病双如雪　心緒逢秋一似灰　向夜欲帰愁未了　満湖明月小船廻

（千40）
悲秋不到貴人心
おほかたのあきをかなしとみることにあてなる人はしらずぞありける（四二）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六八・三四七一「早入皇城贈王留守僕射」
津橋残月暁沈沈　風露凄清禁署深　城柳宮槐謾揺落　悲愁不到貴人心
〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・落葉・三〇八

（千41）
樹葉霜紅日
つねよりも秋のこのはにおくしものくれなゐふかくみゆるころかな（四三）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三〇九七「答夢得秋日書懐見寄」
幸免非常病　甘当本分衰　眼昏灯最覚　腰瘦帯先知
樹葉霜紅日　髭鬚雪白時　悲愁縁欲老　老過却無悲

（千42）
蕭条秋思苦
かすかなるときのみみゆるあきのよはものおもふことぞくるしかりける（四四）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六五四「社日関路作」
晩景函関路　涼風社日天　青巖新有燕　紅樹欲無蟬
愁立駅楼上　厭行官堠前　蕭条秋興苦　漸近二毛年

（千43）
悲秋縁欲老
すぎてゆく秋のかなしくみえつるはおいなむことをおもふなりけり（四五）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三〇九七「答夢得秋日書懐見寄」
↓（千41）に既出
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草拾遺』一三九「悲秋秋多老」

（千44）
紅樹欲無蟬
もみぢつつ色くれなゐにみゆる日はなくせみさへやなくはなりぬる（四六）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六五四「社日関路作」↓（千42）に既出

（千45）
（啼秋唧唧虫）
秋のよをさむみなきつるむしのねはわがやどにこそあまたきこゆれ（四七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一五・〇八七三「江夜舟行」
煙澹月濛濛　舟行夜色中　江舗満槽水　帆展半檣風
叫曙嗷嗷雁　啼秋唧唧虫　只応催北客　早作白鬚翁

（千46）
（旅雁秋深独別群）
ゆくかりのあきすぎがたにひとりしもともにおくれてなきわたるらむ（四九）

〈句題原詩〉原拠不明

（千47）
（涼風露転寒）
ふくかぜのおとたかくのみきこゆればおくつゆさへもさむくもあるかな（四八）

〈句題原詩〉原拠不明

（千48）
（樹紅霜更置）
このはみなからくれなゐにしぐるとてしものさらにもおきまさるかな（五〇）

〈句題原詩〉原拠不明

（千49）
（秋雁眉霜帰）
あきのよをさむみなきつつゆくかりのしもをしのぎてゆきかへるらん（五一）

〈句題原詩〉原拠不明

（千50）
（暁天秋露一鳴蟬）
しののめに秋おく露のさむければただひとりしもむしのなくなる（五二）

〈句題原詩〉原拠不明

（千51）
鳥棲紅葉樹
あきすぎばちりなん物をなく鳥のまづもみぢばのえだにしもすむ（五三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七五二「秋思」
病眠夜少夢　閑立秋多思　寂寞余雨情　蕭条早寒至
鳥棲紅葉樹　月照青苔地　何況鏡中年　又過三十二

（千52）
秋雁過尽無書到
秋のよをかりはなきつつすぐれどもまつことづてはみゆるよもなし（五四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七七五「寄上大兄　已後詩在邯林居作」
秋鴻過尽無書信　病戴紗巾強出門　独上荒台東北望　日西愁立到黄昏

（千53）
寒雁飛急覚秋尽
ゆくかりのとぶ事はやくみえしよりあきはかぎりとおもひなりにき（五五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七四二「晩秋夜」
碧空溶溶月華静　月裏愁人弔孤影　花開残菊傍疎籬　葉下衰桐落寒井
塞鴻飛急覚秋尽　隣鶏鳴遅知夜永　凝情不語空所思　風吹白露衣裳冷

〈同一句題〉（慈定36）

（千54）
寒雁声静客愁至
なくかりのこゑだにたえてきこえねばたびなる人は思まさりぬ（五六）

〈句題原詩〉原拠不明

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草拾遺』一四〇「寒雁声静客愁至」

（千55）
（蟬譟野風秋）

なくせみのこゑたかくのみきこゆるはのにふくかぜの秋ぞしるらし（二三）

〈句題原詩〉上官儀「入朝洛堤歩月」（『全唐詩』巻四〇）
脈脈広川流　駆馬歴長洲　鵲飛山月曙　蟬譟野風秋

冬部

（千56）
迎春先有好風光
いつしかと春をむかふるあしたからまづよきかぜのふくぞそうれしき（五七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三三九「臘後歳前遇景詠意」
海梅半日柳微黄　凍水初融日欲長　度臘都無苦霜霰　迎春先有好風光
郡中起晩聴衙鼓　城上行慵倚女牆　公事漸閑身且健　使君殊未厭余杭

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・早春・一一

（千57）
中霄似有春風至
さよふけて猶ねられねばはる風のふきくるかともおもほゆるかな（五八）

〈句題原詩〉原拠不明

（千58）
一年冬至夜偏長
ひととせにふゆくることはいまぞしるふしおきすれどあかしがたきに（五九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一四七「冬至夜」
老去襟懐常漫落　病来鬢鬢転蒼浪　心灰不及炉中火　鬢雪多於砌下霜
三峽南賓身最遠　一年冬至夜偏長　今宵始覚房櫳冷　坐索寒衣詆孟光

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・冬至・二二三

（千59）
新愁多待夜長来
あたらしきうれへはおほくさむきよのながきよりこそはじめなりけれ（六〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一七・一〇五三「歳暮」
窮陰急景坐相催　壮歯韶顔去不回　旧病重因年老発　新愁多是夜長来
膏明自爇縁多事　雁默先烹為不才　禍福細尋無会処　不如且進手中杯

（千60）
心灰不及炉中火
ものを思こころははひとくだくれどあつきおきにはおよばざりけり（六一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一四七「冬至夜」↓（千58）に既出
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・冬興・二一六、『新撰朗詠集』冬部・炉火・三四二

（千61）
鬢雪多於砌下霜
わがかみのみなしらゆきとなりゆけばおけるしもにもおとらざりけり（六二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一四七「冬至夜」↓（千58）に既出
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・冬興・二一六、『新撰朗詠集』冬部・炉火・三四二

（千62）
年年只是人空老
としどしとかずへこしまにはかなくて人はおいぬるものにぞありける（六六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三八八「与諸客携酒尋去年梅花有感」
馬上同携今日杯　湖辺共覓去春梅　年年只是人空老　処処何曽花不開
詩思又牽吟詠発　酒酣閑喚管絃来　樽前百事皆依旧　点検唯無薛秀才

（千63）
十分一盞暖於人
あくまでにみてるさけにぞさむきよは人の身までにあたたまりける（六三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五六・二七〇九「戯答皇甫監」
寒宵勧酒君須飲　君是孤眠七十身　莫道非人身不煖　十分一盞煖於人

（千64）
老眠早覚常残夜
おいてぬるめははやさめてとこしなへよはにすぐればねでのみぞふる（六四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五八・二九一一「睡覚」
　星河耿耿漏綿綿　月暗灯微欲曙天　転枕頻伸書帳下　披裘箕踞火炉前
　老眠早覚常残夜　病力先衰不待年　五欲已銷諸念息　世間無境可勾牽
〈句題他出〉『千載佳句』人事部・老病・五四七、『和漢朗詠集』雑部・老人・七二四

（千65）
　霜軽未殺萋萋草
よひよひにまだおく霜のかろければくさばをだにぞからせざりける（六五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三八六「早冬」
　十月江南天気好　可憐冬景似春華　霜軽未殺萋萋草　日暖初乾漠漠沙
　老柘葉黄如嫩樹　寒桜枝白是狂花　此時却羨閑人酔　五馬無由入酒家
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・初冬・二一二三、『新撰朗詠集』冬部・初冬・三三二

（千66）
　抱膝灯前影対身
ひとりゐてもゆるほのほにむかへばやかくおともなきみとぞなりぬる（六七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六六〇「邯鄲至除夜思家」
　邯鄲駅裏逢冬至　抱膝灯前影対身　想得家中夜深坐　還応説著遠行人

（千67）
　長年都不惜光陰
かくばかりおいぬとおもへばいまさらにひかりのすぐる事もをしまず（六八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一五・〇八九八「歳暮道情二首（ノ一）」
　壮日苦曽驚歳月　長年都不惜光陰　為学空門平等法　先斉老少死生心

風月部

（千68）
　風翻白浪花千片
おきべよりふきくる風はしらなみのはなとのみこそみえわたりけれ（六九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三七八「江楼晩眺景物鮮奇吟翫成篇寄水部張員外」
　澹煙疎雨間斜陽　江色鮮明海気涼　蜃散雲収破楼閣　虹残水照断橋梁
　風翻白浪花千片　雁点青天字一行　好著丹青図写取　題詩寄与水曹郎
〈句題他出〉『千載佳句』遊放部・眺望・八七二、『和漢朗詠集』雑部・眺望・六二四
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一四一七「風翻白浪花千片」

（千69）
　月照波心一顆珠
てる月はなみのこころにひかされてひとつかたにもみえわたるかな（七〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五三・二三三一「春題湖上」
　湖上春来似画図　乱峰囲繞水平舗　松排山面千重翠　月点波心一顆珠
　碧毯線頭抽早稲　青羅裙帯展新蒲　未能抛得杭州去　一半勾留是此湖
〈句題他出〉『千載佳句』地理部・山水・三二〇
〈同一句題〉小沢蘆庵『六条詠草拾遺』一六八「月照波心一顆珠」

（千70）
　柴扉日暮随風掩
わびてふるやどにひかりのくれゆけばふくかぜのみぞとざしなりける
（二四・七一重複）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一六「晩春」→（千11）に既出
〈句題他出〉『千載佳句』人事部・閑居・四五一、『新撰朗詠集』雑部・閑居・五七五
〈同一句題〉（土36）

（千71）
　不明不暗朧朧月
てりもせずくもりもはてぬ春のよのおぼろ月よぞめでたかりける（七二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七六五「嘉陵夜有懐二首（ノ二）」
　不明不闇朧朧月　非暖非寒慢慢風　独臥空牀好天気　平明閑事到心中
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・春夜・八三、『新撰朗詠集』春部・春夜・二三
〈同一句題〉（朗7）

（千72）
　鵲飛山月曙

かささぎのみねとびこえてなきゆけばみやまかくるる月かとぞみる（七三）

〈句題原詩〉上官儀「入朝洛堤歩月」（『全唐詩』巻四〇）→（千55）に既出

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草拾遺』九四「鵲飛山月曙」

（千73）

清景難逢宜愛惜

雲はれてきよき月かげもつねならずあらんかぎりはをしみこそせめ（七四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六五・三一八二「八月十五日夜同諸客翫月」

月好共伝唯此夜　境閑皆道是東都　嵩山表裏千重雪　洛水高低両顆珠

清景難逢宜愛惜　白頭相勧強歓娯　誠知亦有来年会　保得晴明強健無

（千74）

非暖非寒漫漫風

あつからずさむくもあらずよき程にふきくるかぜはやまずもあらなん（七六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七六五「嘉陵夜有懐二首（ノ二）」

→（千71）に既出

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・春夜・八三、『新撰朗詠集』春部・春夜・二三

（千75）

残月照山明

ふたつともみえぬを月の山ごとにてりわたりつつあきらけきかな（七五）

〈句題原詩〉原拠不明

（千76）

風景属閑人

さだめなくふきくるかぜはかきわけてなどかしげきに人につくらん（七七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二六三「春尽日天津橋醉吟偶呈李尹侍郎」

（前略）

興発詩随口　狂来酒寄身　水辺行嵬峨　橋上立逡巡

疎伝心情老　呉公政化新　三川徒有主　風景属閑人

（千77）

月宮有路無恩人

てる月の都ばかりはありといへどたづねてゆかむ程ぞしられぬ（七八）

〈句題原詩〉原拠不明

（千78）

可憐春風老

をしみてもとめまほしきをはるかぜのふきすぎがたくなりぬとおもへば（七九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三六〇「清明日観妓舞聴客詩」

看舞顔如玉　聴詩韻似金　綺羅従許笑　絃管不妨吟

可惜春風老　無嫌酒盞深　辞花送寒食　併在此時心

遊覧部

（千79）

山雲初晴水色新

雲もなくたには山さへはれゆけばみづのいろこそあらたなりけれ（八〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九一一「庾楼暁望」

独憑朱檻立凌晨　山色初明水色新　竹霧暁籠御嶺月　蘋風暖送過江春

子城陰処猶残雪　衙鼓声前未有塵　三百年来庾楼上　曽経多少望郷人

（千80）

猶愛雲泉多在山

しらくものなかをわけつつゆふぐれのめでたき事はやまにぞありける（八一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六六三「遊仙遊山」

闇将心地出人間　五六年来人怪閑　自嫌恋著未全尽　猶愛雲泉多在山

〈句題他出〉『千載佳句』遊放部・遊山・八六七

（千81）

借問青山何処高

とひしりてくものかけはしとひゆかんいづれのかたか山はさがしき（八二）

〈句題原詩〉原拠不明

（千82）
泉落青山出白雲
ゆくみづのあをき山よりおちくればしらくもかとぞみえまがひつる（八三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一七・一〇二九「題韋家泉池」
泉落青山出白雲　縈村遶郭幾家分　自従引作池中水　深浅方円一任君

（千83）
遥見人家花便入
よそにても花をあはれとみる程にしらぬやまにぞ我はきにける（八四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三三四四「（尋春題諸家園林）又題一絶」
貌随年老欲何如　興遇春牽尚有余　遥見人家花便入　不論貴賤与親疎

〈句題他出〉『千載佳句』草木部・雑花・六六四、『和漢朗詠集』春部・花付落花・一一五

〈同一句題〉（慈定8）

（千84）
可憐幽静地
さしわけてふかくあはれとみえつるははれてしづけきところなりけり（八五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九二五「遊宝称寺」
竹寺初晴日　花塘欲暁春　野猿疑弄客　山鳥似呼人
酒嫩傾金液　茶新碾玉塵　可憐幽静地　堪寄老慵身

（千85）
林下水辺無厭日
かげしげきみづのあたりはとしをへてすぎきぬれどもあかずぞありける（八六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五七・二七三五「池上即事」
行尋甃石引新泉　坐看修橋補釣船　緑竹挂衣涼処歇　清風展簟困時眠
身閑当貴真天爵　官散無憂即地仙　林下水辺無厭日　便堪終老豈論年

（千86）
欲偸風景暫遊春
ふくかぜのひかりをとめんとおもへばぞしばしもはるにあそぶべらなる（八七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三三〇八「令公南荘花柳正盛欲偸一賞先寄二篇（ノ二）」
可惜亭台閑度日　欲偸風景暫遊春　只愁花裏鶯饒舌　飛入宮城報主人

〈句題他出〉『千載佳句』遊放部・春遊・八五八（注）

（千87）
長作独遊人
あやなくもとしのをながくひとりしてあくがれわたる身とやなりなん（八八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三〇七八「微之敦詩晦叔相次長逝歸然自傷因成二絶（ノ一）」
併失鵷鸞侶　空留麋鹿身　只応嵩洛下　長作独遊人

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一七三一「長作独遊人」

（千88）
天高暮山遠
あまつそらちかくみつつはえつるはくれゆく山のふもとなりけり（八九）

〈句題原詩〉原拠不明

〈同一句題〉『霞関和歌集』雑・九〇五・呪願法師「天高暮山遠」

（千89）
野曠白雲浮
かぎりとてのべのはるかにみえつればたつしらくももふかくぞありける（九〇）

〈句題原詩〉原拠不明

（千90）
山花織錦時聊看
山ごとにはなのにしきをおれればぞみゆるところのやすきそらなき（九一）

〈句題原詩〉章孝標「駱谷行」（『全唐詩』巻五〇六）
捫雲裊棧入青冥　犧馬鈴騾傍日星　仰踏剣稜梯万仞　下緣氷岫杳千尋
山花織錦時聊看　澗水弾琴不暇聴　若比争名求利処　尋思此路却安寧

（千91）
（澗水弾琴不暇聴）
たにみづのことのねたえずきこゆればときのまをだにへだてずぞみる（九二）

〈句題原詩〉章孝標「駱谷行」→（千90）に既出

離別部
（千92）
涙霑双袖血成文
なくなみだこふるたもとにかかりてはくれなゐふかきあやとこそみれ（九三）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一八「送致用」
涙霑双袖血成文　不為悲身為別君　望鶴眼穿期海外　待烏頭白老江濆
遥看逆浪愁翻雪　漸失征帆錯認雲　欲識九回腸断処　潯陽流水九条分

（千93）
別無遠皆難見
わかるとしいひつるときははるけきをちかきもみぬぞこひしかりける（九四）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻二二「酬楽天吟張員外詩見寄因思上京毎与楽天於居敬兄升平里詠張新詩」
楽天書内重封到　居敬堂前共読詩　四友一為泉路客　三人両詠浙江詩
別無遠近皆難見　老減心情自各知　杯酒与它年少隔　不相酬贈欲何之

〈句題他出〉『千載佳句』別離部・別意・九〇〇

（千94）
悠悠一別已三年
ちかからぬときにひとたびわかるればとしのみとせぞへだたりにける（九五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一二〇六「三年別」
悠悠一別已三年　相望相思明月天　腸断青天望明月　別来三十六廻円

〈句題他出〉小沢蘆庵『六帖詠草』一五六九「悠悠一別已三年」

（千95）
別後相思夢魂遠
わかれにしきみをおもひてたづぬればゆめのたましひはるけかりけり（九六）

〈句題原詩〉原拠不明

（千96）
朝結故郷念
あさごとにむすぼほれつつすぐしつるふりにしさとをこふるこころは（九七）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻七「遺病十首（ノ一〇）」
朝結故郷念　暮作空堂寝　夢別涙亦流　啼痕暗横枕
昔愁憑酒遣　今病安能飲　落尽秋槿花　離人病猶甚

（千97）
別後愛惜容華改
わかれにし君にみせずていたづらにかたちのかはる身こそつらけれ（九八）

〈句題原詩〉原拠不明

（千98）
白雲一片随君去
しらくものわかるるごとにたちぬれどきみともにこそゆきかくれぬれ（九九）

〈句題原詩〉原拠不明

（千99）
後時相見是何時
わかれてののちもきみみんと思へどもこれをいづれのときとかはしる（一〇〇）

〈句題原詩〉原拠不明

（千100）

送故辞春両恨多
人おくるともにはるさへすぎぬればこれがうらみはあまるなりけり（一〇一）

〈句題原詩〉白居易「城西別元九」（『全唐詩』巻八八三）
城西三月三十日　別友辞春両恨多　帝里却帰猶寂寞　通州独去又如何

（千101）
万里経年別
ちかからずはるけき程にとしをへてひとりある人はくるしかりけり（一〇二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六八一「除夜寄弟妹」
感時思弟妹　不寐百憂生　万里経年別　孤灯此夜情
病容非旧日　帰思逼新正　早晩重歓会　羈離各長成

（千102）
不知何日又相逢
わかれてののちはしらぬをいかならんときにかまたはあはんとすらん（一〇三）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一八「奉和竇容州」
明公莫訝容州遠　一路瀟湘景気濃　斑竹初成二妃廟　碧蓮遥聳九疑峰
禁林聞道長傾鳳　池水那能久滞竜　自歎風波去無極　不知何日又相逢

（千103）
沈吟離別惜
そこひなくものをぞおもふあかでのみわかるることをおもふわが身は（一〇四）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一五「遣行十首（ノ一）」
惨切風雨夕　沈吟離別情　燕辞前日社　蛬是毎年声
暗涙深相感　危心亦自驚　不如元不識　倶作路人行

述懐
（千104）
自静心其延寿命
さだめなきこころはひとつをなしつるぞいのちをのぶるものにぞありける（一〇五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五七・二七四九「不出門」
不出門来又数旬　将何銷日与誰親　鶴籠開処見君子　書巻展時逢古人
自静其心延寿命　無求於物長精神　能行便是真修道　何必降魔調伏身

〈句題他出〉『千載佳句』人事部・閑意・四六六

（千105）
心更老於身
世中をおもひしりぬるこころこそ身よりはすぎておいまさりけれ（一〇六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七九二「答友問」
似玉童顔尽　如霜病鬢新　莫驚身頓老　心更老於身

（千106）
心似虚舟浮水上
こころをしあまのうきぎになしつればながるるみづにこころまされり（一〇七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六五・三二三二「詠懐」
随縁逐処便安閑　不住朝廷不入山　心似虚舟浮水上　身同宿鳥寄林間
尚平婚嫁了無累　馮翊符章封却還　処分貧家残活計　疋如身後莫相関

（千107）
何独朝朝暮暮閑
はかなくていつも我身のひとりしてあしたゆふべにしづかなるらむ（一〇八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六六五「長安閑居」
風竹松煙昼掩関　意中長似在深山　無人不怪長安住　何独朝朝暮暮閑

（千108）
浮生短於夢
よるべなくそらにうかべるこころこそゆめみるよりもはかなかりけれ（一〇九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一六二「野行」
草潤衫襟重　沙乾屐歯軽　仰頭聴鳥立　信脚望花行
暇日無公事　衰年有道情　浮生短於夢　夢裏莫営営
（同一句題）（水実97）

（千109）
憂喜皆心灰
かなしきもうれしきこともおほかるをこころひとつぞなたつかりける（一一〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一五八「感春」
巫峽中心郡　巴城四面春　草青臨水地　頭白見花人
憂喜皆心火　栄枯是眼塵　除非一杯酒　何物更関身

（千110）
身覚浮雲無所着
わがみをばうかべるくもになせればぞゆくかたもなくはかなかりける（一一一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一七・一〇六七「答元八郎中楊十二博士」
身覚浮雲無所着　心同止水有何情　但知蕭灑疎朝市　不要崎嶇隠性名
尽日観魚臨澗坐　有時随鹿上山行　誰能抛得人間事　来共騰騰過此生

（千111）
幻世春来夢
まぼろしのよとししりぬるこころにははるくるゆめとおもほゆるかな（一一二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五七・二七一七「想東遊五十韻并序」
（前略）
物表疎形役　人寰足悔尤　蛾須遠灯燭　兎勿近罝罘
幻世春来夢　浮生水上漚　百憂中莫入　一酔外何求
（後略）

〈同一句題〉（慈定93・寂38）、小沢蘆庵『六帖詠草』一六一二「幻世去来夢」、香川景樹『桂園一枝』雑下・八三六「或人の追善の題に、幻世春来夢」

（千112）
浮生水上漚
かりそめにしばしうかべるたましひのみづのあわともたとへられつつ（一一三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五七・二七一七「想東遊五十韻并序」
↓（千111）に既出

〈同一句題〉（慈定93・寂38）

（千113）
素鬢俄頃変春華
くろかみのしろくにはかになりぬればはるのはなとぞみえわたりける（一一四）

〈句題原詩〉『初学記』巻三〇・蟬第一二・顔之推「聴鳴蟬詩」
（前略）
鼎俎陳竜鳳　金石諧宮徵　関中満季心　関西饒孔子
詎用虞公立国臣　誰愛韓王游説士　紅顔宿昔同春花　素鬢俄頃変秋華
（後略）

（千114）
恩光春景去
我が君も春のひかりにひとしくはくさきなる身と知りぬべらなり（一一五）

〈句題原詩〉原拠不明

（千115）
夢中歓笑又勝愁
夢にてもうれしきことをみるときはただにうれふる身にはまされり

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五四・二四六九「城上夜宴」
留春不住登城望　惜夜相将秉燭遊　風月万家河両岸　笙歌一曲郡西楼
詩聴越客吟何苦　酒被呉娃勧不休　従道人生都是夢　夢中歓笑亦勝愁

〈句題他出〉『千載佳句』人事部・感興・五一一

〈同一句題〉（慈定80）

（①大江千里「句題和歌」ここまで）

②藤原高遠『大弐高遠集』（高1～高46）
③源道済『道済集』（道1～道10）

【略解説】
藤原高遠（九四九―一〇一三）の家集『大弐高遠集』に収められた白居易「長恨歌」「上陽白髪人」を句題とする和歌三六首と、同集に収められる他の句題和歌一〇首。うち二六首は白居易「長恨歌」を、一〇首は同じく白居易の「上陽白髪人」

を出典とする七言一句を句題としている（高13のみ二句を題とする）。さらに、同集に収められる五言一句を句題とする和歌を集成した。出典未詳の句題もあるが、漢詩句題と推測されるため、ここに拾遺として収めた。

なお、「長恨歌」を主題として詠む和歌は、「長恨歌の屏風を亭子院のみかどかかせたまひて、その所々よませたまひける」という詞書を有する『伊勢集』五二～六一を嚆矢として数多く、文学史的な意義も大きいが、ここでは本一覧の性質から、明確に漢詩句を題とするものに限定した。源道済（？―一〇一九）の家集『道済集』二四二～二五一は、四字結題に省略したものであり、本一覧では漢詩句から四字結題を抽出したものは収めない方針ではあるが、『道済集』所収の四字結題は、「長恨歌」の特定の詩句に基づくこと、さらには高遠の句題和歌との関わりも窺われるため、まとめて収載した。

【参考】

山崎誠「平安朝の和歌・物語と長恨歌――伊勢集・高遠集・道済集・道命阿闍梨および宇津保・源氏物語をめぐって――」（『中世文芸』49、一九七一年三月）、桑原博史『源道済集全釈』（風間書房、一九八七年）、近藤春雄『白氏文集と国文学　新楽府・秦中吟の研究』（明治書院、一九九〇年）

【底本】 新編私家集大成『高遠集』（底本・冷泉家時雨亭叢書『平安私家集十二』）
新編私家集大成『道済集』（底本・冷泉家時雨亭叢書『擬定家本私家集』）

②藤原高遠『大弐高遠集』（高1～高36）

【本文】

或人の、長恨歌、楽府のなかに、あはれなることをえらびいだして、これがこころばへを、廿首よみてをこせたりしに

（高1）
養在深窓人未識
からくしげあけてし見ればまどふかきたまのひかりを見る人ぞなき（二五五）

〈同一句題〉（道1）、加藤千蔭『うけらが花初編』一四九九「長恨歌の句をさぐりてよみけるに、養在深閨人未識といふこころを」

（高2）
春宵苦短日高起
あさひさすたまのうてなもくれにけり人とぬるよのあかぬなごりに（二五六）

（高3）
行宮見月傷心色
おもひやるこころもそらになりにけりひとりありあけの月をながめて（二五七）

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八〇
〈同一句題〉（道3）、（慈定53・寂21）

（高4）
馬嵬坡下泥土中
世中をこころつつみのくさのはにきえにしつゆにぬれてこそゆけ（二五八）

（高5）
大液芙蓉未央柳
はちすおふるいけはかがみと見ゆれどもこひしき人のかげはうつらず（二五九）

（高6）
昇天入地求之遍
おもひやるこころばかりはたぐへしをいかにたぐへむまぼろしのよを（二六〇）

（高7）
忽聞海上有仙山
たづねずはいかでかしらむわたつうみのなみまに見ゆるくものみやこを（二六一）

（高8）
九華帳裏夢中驚
うたたねのさめてののちのくやしきはゆめにも人を見さすなりけり（二六二）

〈同一句題〉（道8）

（高9）
七月七日長生殿
かつみるにあかぬなげきもあるものをあふよまれなるたなばたぞうき（二六三）

（高10）
　此恨綿綿無絶期
ありてのよなくてののちのよもつきじたえぬおもひのかぎりなければ（二六四）

〈同一句題〉（道10）

（高11）
　一閑上陽多少春（以下上陽人歌歌）
そこばくのとしつむはるにとぢられてはな見る人になりぬべきかな（二六五）

（高12）
　一生逐向空床宿
うちはへてむなしきゆかのさびしさにしばしまどろむときぞすくなき（二六六）

（高13）
　秋夜長　夜長無睡天不明
あきのよのながきおもひのくるしきはねぬにはあけぬものにぞありける（二六七）

〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三三
〈同一句題〉（匡9）、（朗27）

（高14）
　耿耿残灯背壁影
ともしびのほかげにかよふ身を見ればあるかなきかのよにこそありけれ（二六八）

〈句題他出〉『千載佳句』天象部・雨夜・二八五、『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三三

（高15）
　蕭蕭暗雨打窓声
こひしくはゆめにも人を見るべきにまどうつあめにめをさましつつ（二六九）

〈句題他出〉『千載佳句』天象部・雨夜・二八五、『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三三

（高16）
　春日遅遅独坐難天暮
ひとりのみながむるそらのはるのひはとくくれがたきものにぞありける（二七〇）

（高17）
　宮鶯百囀愁猒聞
ものおもふときはなにせむうぐひすのききいとはしきはるにもあるかな（二七一）

（高18）
　唯向深窓望明月
見る人もなきやとてらす月かげのこころぼそくも見へわたるかな（二七二）

〈同一句題〉（成2）

（高19）
　春往秋来不記年
はるあきのゆきかへりぢもしらなくになにをしるしにとしをかぞへむ（二七三）

（高20）
　外人不見見応咲
たまだれのみすのまうとく人は見む見へなむのちはくやしかるべく（二七四）

（高21）
　同長恨歌に、あはれなる事ありしをかきいでて、歌十六をよみくはへてやる、
　三千寵愛在一身
われひとりとおもふこころもよのなかのはかなき身こそうたがはれけれ（二七五）

〈同一句題〉（道2）

（高22）
　尽日君王看不足
見てもなをあかぬこころのこころをばこころのいかに思ふこころぞ（二七六）

（高23）
　花鈿委地無人収
はかなくてあらしのかぜにちるはなをあさぢがはらのつゆやをく覧（二七七）

（高24）
君王掩眼救不得
いかにせんいのちのかなふ身なりせばわれもいきてはかへらざらまし（二七八）

（高25）
聖主朝暮之慕情
あさゆふにしのぶこころのしるしにはあまかけりてもきみがしらなむ（二七九）

（高26）
君王相顧尽霑衣
せきもあへぬなみだのかはにおぼほれてひるまだになきころもをぞきる（二八〇）

（高27）
帰来池苑皆依旧
からころもなみだにぬれてきて見ればありしながらのあきはかはらず（二八一）

〈同一句題〉（道5）

（高28）
春風桃李花開口
はるかぜにゑみをひらくる花のいろはむかしの人のおもかげぞする（二八二）

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八一

（高29）
秋露梧桐葉落時
このはちるときにつけてぞなかなかにわがみのあきはまづしられける（二八三）

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八一

（高30）
西宮南門多秋草
ここのへのたまのうてなもあれにけりこころとじけるくさのうへのつゆ（二八四）

（高31）
宮葉満階紅不掃
おちつもるこのはこのははおのづからあらしのかぜにまかせてぞ見る（二八五）

（高32）
夕殿蛍飛思悄然
おもひあまりこひしき君がたましひとかけるほたるをよそへてぞ見る（二八六）

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八一

〈同一句題〉（慈定52・寂20）

（高33）
旧枕故衾誰与共
うちわたしひとりふすよのよひよひはまくらさびしきねをのみぞなく（二八七）

〈句題他出〉『新撰朗詠集』雑部・恋・七三三

〈同一句題〉（慈定55・寂22）

（高34）
蓬莱宮上日月長
ここにてもありしむかしにあらませばすぐる月ひもみじかからまし（二八八）

（高35）
在天願作比翼鳥
おぼろげのちぎりのふかきひととぢやはねをならぶる身とはなるらむ（二八九）

〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』一五〇〇「在天願作比翼鳥といふ事を」

（高36）
在地願為連理枝
さしかはしひとつ枝にとちぎりしはおなじみやまのねにやあるらむ（二九〇）

（高37）
南枝暖待鶯
かぜぬるみむめのはつはなさきぬればいづらはやどのうぐひすのこゑ（一六五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一七・一一〇四「江州赴忠州至江陵已来舟中示舍弟五十韻」
（前略）
夏口煙孤起　湘川雨半晴　日煎紅浪沸　月射白砂明
北渚寒留雁　南枝暖待鶯　騈朱桃露萼　点翠柳含萌
（後略）
〈同一句題〉（水実4）、『邦輔親王（新編私家集大成）』解題七七六、七七七「南枝暖待鶯」、西洞院時慶『前参議時慶卿集』一八五「南枝暖待鶯」、中院通村『後十輪院内府集』六五、六六「南枝暖待鶯」、『後水尾院御集』五三「南枝暖待鶯」、冷泉為村『為村集』二六六三〜三五九、加藤千蔭『うけらが花初編』五二「南枝暖待鶯」、村田春海『琴後集』六二「南枝暖待鶯」

（高38）
花開似美人
おる人にまぎるる花のけしきをばたれかにほひのかほるとかいはむ（一六六）
〈句題原詩〉原拠不明
〈同一句題〉飛鳥井雅親『続亜槐集』二四「花開似美人」

（高39）
日暖人閑釣
やまがははははるのうすらひとけにけりこころのどかに人のつりする（一六七）
〈句題原詩〉原拠不明

（高40）
花下移座居
よそながら見るにはあかずはるばかりをりくらしてんはなのあたりを（一六八）
〈句題原詩〉原拠不明

（高41）
春生人意中
はるきぬとおもふばかりのしるしにはこころのうちぞのどけかりける（一六九）
〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一五「生春二十首（ノ一四）」
何処生春早　春生人意中　暁妝雖近火　晴戯漸憐風
暗入心情懶　先添酒思融　預知花好悪　偏在最深叢
〈同一句題〉『風雅集』雑上・一四一一・顕輔「春生人意中といふ事を」、『新明題集』春・六一〜六四（後西院・雅章・通茂・弘賢）「春生人意中」、武者小路実蔭『芳雲集』一〇四七「春生人意中」、小沢蘆庵『六帖詠草』二五「春生人意中」、村田春海『琴後集』二六「春生人意中」、香川景樹『桂園一枝拾遺』四「春生人意中」

（高42）
風景一家秋
おほかたのあきならねどもわがやどにさきみだれたるはなとこそ見れ（一七二）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五三・二三七九「履道新居二十韻」
履道坊西角　官河曲北頭　林園四隣好　風景一家秋
門閉深沈樹　池通浅沮溝　抜青松直上　舗碧水平流
（後略）

（高43）
三月尽日　唯残半日春
おしむとやそらのけしきもおもふ覧いりあひのこゑにはるののこれる（一七三）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三一三一「三月晦日日晩聞鳥声」
晩来林鳥語殷勤　似惜風光説向人　遣脱破袍労報暖　催沽美酒敢辞貧
声声勧酔応須酔　一歳唯残半日春
〈同一句題〉（千21）、三条西実隆『再昌草』一五六三「同（三月尽、宰相中将和漢会）、詩歌　唯残半日春」

（高44）
菊綻暮流芳
かをとめておるべきものをきくのはなおりくるなみやをりつくす覧（一七七）
〈句題原詩〉原拠不明

（高45）
雪裏高山頭白早

やまたかみいくとせつめるゆきなればかしらのしろく見へわたるらむ（三一一）

〈句題原詩〉『劉禹錫集』巻一一「蘇州白舎人寄新詩有歎早白無児之句因以贈之」

莫嗟華髪与無児　卻是人間久遠期　雪裏高山頭白早　海中仙果子生遅
于公必有高門慶　謝守何煩暁鏡悲　幸免如新分非浅　祝君長詠夢熊詩

（高46）

海中仙菓子生遅

くだものはまみなることおろしとかうみにたりとはたれかいひけむ（三一二）

〈句題原詩〉『劉禹錫集』巻三一「蘇州白舎人寄新詩有歎早白無児之句因以贈之」

↓（高45）に既出

（②藤原高遠『大弐高遠集』ここまで）

③源道済『道済集』（道1～道10）

【本文】

（道1）

長恨歌、当時好士和歌よみしに、十首

養者深窓

たまだれのすだれもすかぬねやのうちにきみましけりと人にしらすな（二四二）

〈同一句題〉（高2）、加藤千蔭『うけらが花初編』一四九九「長恨歌の句をさぐりてよみけるに、養在深閨人未識といふこころを」

（道2）

寵愛一身

ももしきのきみがあさひのうつりがはしみにけらしないもがさごろも（二四三）

（道3）

行宮見月

みるままにものおもふことのまさるかなわが身よりる月にやあるらん（二四四）

〈同一句題〉（高3）、（慈定53・寂21）

（道4）

不見玉顔

おもひかねわかれし人をきてみればあさぢがはらに秋風ぞふく（二四五）

（道5）

池苑依旧

くさも木もむかしながらのやどなれどかはらぬものは秋のしらつゆ（二四六）

〈同一句題〉（高27）

（道6）

碧落不見

やるかたもなかりしこころまぼろしをまつにはまさるおもひそひけり（二四七）

（道7）

雲海沈沈

ひとかたの空もきはなきわたつうみにくもききわたり日ぞくれにける（二四八）

〈句題原文〉白居易『白氏文集』巻一二「長恨歌伝」

碧衣云、玉妃、方寝。請少、待之。于時、雲海沈々、洞天日晩。
瓊戸重闔、悄然無声。方士、屏息、斂足拱手門下。

（道8）

花帳夢驚

たれぞこのけさあけぼのの夢のうちにみやこのことをほのめかしつる（二四九）

〈同一句題〉（高8）

（道9）

誓両心知

たなばたやしらばしるらむあきの夜のながき契はきみもわすれじ（二五〇）

（道10）
　此恨綿綿
いはねさすつくばの山はつきぬともつきむ世ぞなきあ□ぬわがこひ（二五一）

〈同一句題〉（高10）

〈句題原詩（高1～10、21～36、道1～6・8～10）〉白居易『白氏文集』巻一二・○五九六「長恨歌」

漢皇重色思傾国　御宇多年求不得　楊家有女初長成　養在深閨人未識（高1）（道1）
天生麗質難自棄　一朝選在君王側　迴眸一笑百媚生　六宮粉黛無顔色
春寒賜浴華清池　温泉水滑洗凝脂　侍児扶起嬌無力　始是新承恩沢時
雲鬢花顔金歩揺　芙蓉帳暖度春宵　春宵苦短日高起（高2）　従此君王不早朝
承歓侍宴無閑暇　春従春遊夜専夜　後宮佳麗三千人　三千寵愛在一身（高21）（道2）
金屋粧成嬌侍夜　玉楼宴罷酔和春　姉妹弟兄皆列土　可憐光彩生門戸
遂令天下父母心　不重生男重生女　驪宮高処入青雲　仙楽風飄処処聞
緩歌縵舞凝糸竹　尽日君王看不足（高22）　漁陽鞞鼓動地来　驚破霓裳羽衣曲
九重城闕煙塵生　千乗万騎西南行　翠華揺揺行復止　西出都門百余里
六軍不発無奈何　宛転蛾眉馬前死　花鈿委地無人収（高23）　翠翹金雀玉搔頭
君王掩面救不得（高24）　迴看血涙相和流　黄埃散漫風蕭索　雲桟縈紆登剣閣
峨眉山下少人行　旌旗無光日色薄　蜀江水碧蜀山青　聖主朝朝暮暮情（高25）
行宮見月傷心色（高3）（道3）　夜雨聞鈴腸断声　天旋日転迴竜馭　到此躊躇不能去
馬嵬坡下泥土中（高4）　不見玉顔空死処（道4）　君臣相顧尽霑衣（26）　東望都門信馬帰
帰来池苑皆依旧（高27）（道5）　太液芙蓉未央柳（高5）　芙蓉如面柳如眉　対此如何不涙垂
春風桃李花開夜（高28）　秋雨梧桐葉落時（高29）　西宮南苑多秋草（高30）　宮葉満階紅不掃（高31）
梨園弟子白髪新　椒房阿監青娥老　夕殿蛍飛思悄然（高32）　孤灯挑尽未成眠
遅遅鐘鼓初長夜　耿耿星河欲曙天　鴛鴦瓦冷霜華重　翡翠衾寒誰与共（高33）
悠悠生死別経年　魂魄不曽来入夢　臨邛道士鴻都客　能以精誠致魂魄（高6）
為感君王展転思　遂教方士殷勤覓　排空馭気奔如電　昇天入地求之遍
上窮碧落下黄泉（道6）　両処茫茫皆不見　忽聞海上有仙山（高7）　山在虚無縹緲間
楼閣玲瓏五雲起　其中綽約多仙子　中有一人字玉真　雪膚花貌参差是
金闕西廂叩玉扃　転教小玉報双成　聞道漢家天子使　九華帳裏夢魂驚（高8）（道8）
攬衣推枕起徘徊　珠箔銀屏邐迤開　雲鬢半垂新睡覚　花冠不整下堂来
風吹仙袂飄颻挙　猶似霓裳羽衣舞　玉容寂寞涙闌干　梨花一枝春帶雨
含情凝睇謝君王　一別音容両眇茫　昭陽殿裏恩愛絶　蓬莱宮中日月長（高34）
迴頭下望人寰処　不見長安見塵霧　唯将旧物表深情　鈿合金釵寄将去
釵留一股合一扇　釵擘黄金合分鈿　但令心似金鈿堅　天上人間会相見
臨別殷勤重寄詞　詞中有誓両心知（道9）　七月七日長生殿（高9）　夜半無人私語時
在天願作比翼鳥（高35）　在地願為連理枝（高36）　天長地久有時尽（高10）（道10）　此恨綿綿無尽期

〈句題原詩（高11～20）〉白居易『白氏文集』巻三・○一三一「上陽白髪人」

上陽人　紅顔暗老白髪新　緑衣監使守宮門　一閉上陽多少春（高11）
玄宗末歳初選入　入時十六今六十　同時采択百余人　零落年深残此身
憶昔呑悲別親族　扶入車中不教哭　皆云入内便承恩　瞼似芙蓉胸似玉
未容君王得見面　已被楊妃遥側目　妬令潜配上陽宮　一生遂向空房宿（高12）
秋夜長（高13）　夜長無寝天不明　耿耿残灯背壁影　蕭蕭暗雨打窓声
春日遅（高16）　日遅独坐天難暮　宮鶯百囀愁厭聞（高17）　梁燕双棲老休妬
鶯帰燕去長悄然　春往秋来不記年（高19）　唯向深宮望明月（高18）　東西四五百迴円
今日宮中年最老　大家遥賜尚書号　小頭鞋履窄衣裳　青黛点眉眉細長
外人不見見応笑（高20）　天宝末年時世粧

上陽人　苦最多　少亦苦　老亦苦
少苦老苦両如何　君不見昔時呂向美人賦　又不見今日上陽白髪歌

（③源道済『道済集』ここまで）

④大江匡房『匡房集』（匡1～匡10）

【略解説】

大江匡房（一〇四一―一一一一）の家集『匡房集』所収の句題和歌一〇首。春・夏・秋・冬・雑それぞれ二首で構成されている。句題はすべて七言一句の漢詩句を用いているが、漢文体ではなく訓読された和文で記されている。なお『夫木抄』にも収載されている歌があるが、それらは題が漢文体で示されている。

【参考】

本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院、二〇〇二年）所収「大江匡房の和歌――和漢兼作家の表現――」

【底本】 新編私家集大成「匡房Ⅰ（『匡房集』）」（底本・冷泉家時雨亭叢書『平安私家集五』）

【本文】

（匡1）
いけになみのもんありて、こほりことごとにひらかしむ
そでひちしいけのこほりもうちとけてみどりのあやはなみぞたちける（三七九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五八・二八七四「府西池」
柳無気力枝先動　池有波文氷尽開　今日不知誰計会　春風春水一時来

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・立春・一、『和漢朗詠集』春部・立春・四

（匡2）
やはらかなる風、はなをひらかしむ
こちかぜにまづさくむめのちりぢりにほひたえせぬはるのはなかな（三八〇）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・早春・二九
暖日当頭催展菜　和風次第遣開花（「賞春」路半千）

（匡3）
みなづきのせのこゑは、あきのあめにたり
うちよするせぜのしらなみおとたかみまだみなづきにしぐれふるらし（三八一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二六六「香山避暑二絶（ノ一）」
六月灘声如猛雨　香山楼北暢師房　夜深起凭欄干立　満耳潺湲満面涼

〈同一句題〉（朗19）

（匡4）
かぜわたれば、たけのあひだに、ほたるのかげみだる
くれたけのよはにほたるのみだるるはこずゑすずしき風やふくらん（三八二）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題他出〉『千載佳句』天象部・風月・二七四
風起竹間蛍影乱　月明江上笛声多（「秋夜旅泊」道彦）

（匡5）
たえずあをきこけ、もみぢのいろ
もみぢばのこけぢのうへにちるときはしのぶとすれどいろにでにけり（三八三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六二〇「秋雨中贈元九」
不堪紅葉青苔地　又是涼風暮雨天　莫怪独吟秋思苦　比君校近二毛年

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・暮秋・二〇一、『和漢朗詠集』秋部・紅葉・三〇一

〈同一句題〉（慈定38・寂14）、『和漢兼作集』秋下・八六六・藤原定通「不堪紅葉青苔地」

（匡6）
しものくさかれなんとして、むしのおもひねむごろなり
はつしもにかれゆくくさのきりぎりすあきはくれぬときくぞかなしき（三八四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二八七「答夢得秋庭独坐見贈」

林梢隠映夕陽残　庭際蕭疎夜気寒　霜草欲枯虫思急　風枝未定鳥棲難
容衰見鏡同惆悵　身健逢杯且喜歓　応是天教相煖熱　一時垂老与閑官
〈句題他出〉『千載佳句』暮秋・二〇二、『和漢朗詠集』秋部・虫・三二八
〈同一句題〉（千37）、（土24）

（匡7）
さむきながれ、月をおもひて、すめることかがみのごとし
こほりわけながれにすめる月かげはたまくしげなるかがみとそ見る（三八五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九一三「江楼宴別」
楼中別曲催離酌　灯下紅裙間緑袍　縹緲楚風羅綺薄　錚摐越調管絃高
寒流帯月澄如鏡　夕吹和霜利似刀　樽酒未空歓未尽　舞腰歌袖莫辞労
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・冬夜・二二四、『和漢朗詠集』冬部・歳暮・三五九
〈同一句題〉（慈定42）、（土28）

（匡8）
ゆきを見て、しづかにゆきて、むまのおそきにまかせたり
ゆきやらでゆきのをばなとみつるかなひときふたきのこまにまかせて（三八六）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五八・二八九五「酔吟」
酔来忘渇復忘飢　冠帯形骸杳若遺　耳底斎鍾初過後　心頭卯酒未消時
臨風朗詠従人聴　看雪閑行任馬遅　応被衆疑公事漫　従前府尹不吟詩
〈句題他出〉『千載佳句』遊牧部・冬遊・八六五

（匡9）
よながうしてひとりゐて、よもあけがたし
うつみびのおきゐて人をこふるかないつかふせやのひましろむべき（三八七）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一三一「上陽白髪人」
（前略）
秋夜長　夜長無寐天不明　耿耿残灯背壁影　蕭蕭暗雨打窓声
春日遅　日遅独坐天難暮　宮鶯百囀愁厭聞　梁燕双棲老休妬
（後略）
〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三三
〈同一句題〉（高13）、（朗27）

（匡10）
せがかほはあらたまらざるに、君がこころはあらたまりにたり
うはなみはすゑのまつやまこえにけりたらひのみづのかげはかはらで（三八八）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一三四「太行路」
（前略）
古称色衰相棄背　当時美人猶怨悔　何況如今鸞鏡中　妾顔未改君心改
為君薫衣裳　君聞蘭麝不馨香　為君盛容飾　君看金翠無顔色
（後略）
〈同一句題〉『楢葉集』雑三・九〇三・定宗法師「大僧都経円、楽府段段の心を題にて　月次の歌よみ侍りけるに、大行路の、いかにいはむやいま鸞鏡のうちに妾顔未改君心改、といへる事を」

（④大江匡房『匡房集』ここまで）

⑤祝部成仲『成仲集』（成1～成5）

【略解説】
祝部成仲（一〇九九―一一九一）の家集『祝部成仲集』に収められる句題和歌五首。句題の出典は全て『白氏文集』所収の新楽府および「長恨歌」である。

【参考】
本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院、二〇〇二年）所収「祝部成仲の和歌――漢詩文世界からの瞥見――」

【底本】 新編私家集大成『成仲集』（底本・穂久邇文庫本）

【本文】
（成1）
楽府歌
海漫漫　童男卯女舟中老
とこわかのくすりたづねにいでしかどをいのなみたつふなぢなりけり（八七）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一二八「海漫漫」
（前略）

海漫漫　風浩浩
眼穿不見蓬萊島　不見蓬萊不敢帰　童男卯女舟中老　徐福文成多誑誕
（後略）

（成2）
上陽人　唯向深宮望明月
きみこふるなみだにくもる月なればきまさんよひやさやけかるべき（八八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一三一「上陽白髪人」
（前略）
鶯帰燕去長悄然　春往秋来不記年　唯向深宮望明月　東西四五百迴円
今日宮中年最老　大家遥賜尚書号　小頭鞋履窄衣裳　青黛点眉眉細長
（後略）

〈同一句題〉（高18）

（成3）
新豊折臂　自把大石把折臂
ひぢをだにをらざらませばけふまでにかひなきからもいけらましかは（八九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一三三「新豊折臂翁」
（前略）
夜深不敢使人知　偸将大石鎚折臂　張弓簸旗俱不堪　従茲始免征雲南
骨砕筋傷非不苦　且図揀退帰郷土　臂折来来六十年　一肢雖廃一身全
（後略）

（成4）
大行路　為君薫衣裳　君聞蘭麝不馨香
あはれてふきみがおもひのきえぬればたきもののかもなきにやあるらん（九〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一三四「太行路」
（前略）
古称色衰相棄背　当時美人猶怨悔　何況如今鸞鏡中　妾顔未改君心改
為君薫衣裳　君聞蘭麝不馨香　為君盛容飾　君看金翠無顔色
（後略）

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七七八

〈同一句題〉（朗80）、武者小路実陰『芳雲集』三八八三～三八八五「為君薫衣裳」

（成5）
百練鏡　四海安危照掌内
よものうみくまなくてらすきみなればますみのかがみなにかはせん（九一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻四・〇一四六「百錬鏡」
（前略）
我有一言聞太宗　太宗常以人為鏡　鑑古鑑今不鑑容
四海安危居掌内　百王治乱懸心中　乃知天子別有鏡　不是揚州百錬銅

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・帝王・六五五
（⑤祝部成仲『成仲集』ここまで）

⑥藤原隆房『朗詠百首』（朗1～朗99）

【略解説】
藤原隆房（一一四八―一二〇九）作。成立は、治承元年（一一七七）以降、遅くとも正治（一一九九～一二〇〇）以前に成立か。全体構成は、春一〇首・夏一〇首・秋一〇首・冬一〇首・祝五首・管絃五首・閑居五首・羈旅五首・述懐五首・餞別五首・恋五首・懐旧五首・無常五首・法文五首。羈旅と法文の二部以外の名称は、『和漢朗詠集』の部立に一致している。

【参考】
鈴木徳男「『朗詠百首』考」（『高野山大学国語国文』8、一九八二年三月）、佐藤恒雄『藤原定家研究』（風間書房、二〇〇一年）所収「藤原隆房「朗詠百首」とその意義」

【底本】新編国歌大観（底本・群書類従板本）

【本文】
春部
（朗1）
池凍東頭風度解
はるの池の汀をわたるこち風に氷のくさびうちとけにけり

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・立春・二
池凍東頭風度解　窓梅北面雪封寒（「立春日呈芸閣諸文友」菅原篤茂）

（朗2）
東岸西岸之柳　遅速不同
春のくるそなたやまづはめぐむらむこのもかのもの岸の青柳
〈句題原文〉『本朝文粋』巻八・序申・詩序一・時節・二一七・慶滋保胤「早春同賦春生逐地形」
（前略）至于彼東岸西岸之柳、遅速不同、南枝北枝之梅、開落已異、不是春土之有私、誠任陰土之自然也。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・早春・一一

（朗3）
望長安城之遠樹　百千万茎薺青
をちかたの遠き梢をみわたせばてごとに摘みし若菜なりけり（三）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻八・序申・詩序一・時節・二一八・源順「早春於奨学院、同賦春生霽色中、各分一字」
（前略）至彼鮮雲巻兮遊糸乱、兎月照兮曝布明、見天台山之高巖、四十五尺波白、望長安城之遠樹、百千万茎薺青。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・眺望・六二六

（朗4）
浅紅鮮娟　仙方之雪愧色
たちぬはぬころもにかかる雪の色もはづらんものを梅のにほひは（四）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一〇・序丙・詩序三・木・二八九・橘正通「春日陪第七親王風亭、同賦繞檐梅正開、応教」
（前略）浅紅嬋娟、仙方之雪媿色。濃香芬郁、妓鑪之煙讓薫。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・紅梅・九七

（朗5）
山桃復野桃　日曝紅錦之幅
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一〇・序丙・詩序三・木・三〇三・紀斉名「暮春遊覧同賦逐処花皆好」
（前略）山桃復野桃、日曝紅錦之幅、門柳復岸柳、風宛麴塵之糸。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・春興・二一

（朗6）
花明上苑　軽軒馳九百之塵
花みにといそぐ車はすぎぬれど我のみゆかで思ひこそやれ（六）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・花・一一三
花明上苑　軽軒馳九陌之塵　猿叫空山　斜月瑩千巖之路（「閑賦」張読）

（朗7）
不明不暗朧朧月
くまもなくさえぬものゆゑ春の夜の月しもなぞやおぼろけならぬ（七）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七六五「嘉陵夜有懐二首（ノ二）」
不明不闇朧朧月　非暖非寒慢慢風　独臥空牀好天気　平明閑事到心中
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』春部・春夜・二三
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・春夜・八三
〈同一句題〉（千71）

（朗8）
西楼月落花間曲
春の夜の有あけがたの月をみて花になづさふ宮のうぐひす（八）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・鶯・七一
西楼月落花間曲　中殿灯残竹裏音（「宮鶯囀暁光」菅原文時）

（朗9）
留春春不駐　春帰人寂寞

とどむれど春はとまらで帰りにきいかがはすべきけふの淋しさ（九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五一・二二四〇「落花」
留春春不住　春帰人寂漠　厭風風不定　風起花蕭索
既興風前歎　重命花下酌　勧君嘗緑醅　教人拾紅萼

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・三月尽・五〇

〈同一句題〉（慈定14）、『閑月和歌集』春下・一〇四・法印憲実「留春春不留といふことを」

（朗10）
（春夜欲明　望牛漢之西転）
あけがたに春の夜ただもなりぬれば西にぞ廻る星のやどりは（一〇）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻一〇・序丙・詩序三・聖廟・二七三・大江以言「三月尽日陪吉祥院聖廟、同賦古廟春方暮」
（前略）春夜欲明、望牛漢之西転、夏日告朔、指象魏而北轅。（後略）

〈句題典拠〉『新撰朗詠集』春部・春夜・二四

夏部

（朗11）
生衣欲待家人着
ぬぎかふる人をまつらむ春すぎて夏のけさたつ蟬の羽衣（一一）

〈句題原詩〉菅原道真『菅家文草』巻四・二五一「四年三月二十六日作」
我情多少与誰談　況換風雲感不堪　計四年春残日四　逢三月尽客居三
生衣欲待家人著　宿醸当招邑老酣　好去鶯花今已後　冷心一向勧農蚕

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・更衣・一四五

（朗12）
斑婕妤団雪之扇　代岸風兮長忘
川風のきし吹く夏の夕すずみいづらあふぎのゆくへしるらむ（一二）

〈句題原文〉大江匡衡『江吏部集』上・四時部「七言夏夜守庚申侍清涼殿、同賦避暑対水石、応製一首并序」
（前略）班婕妤団雪之扇、代岸風兮長忘。燕昭王招涼之珠、当沙月兮自得。（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・納涼・一六二

（朗13）
燕昭王招涼之珠　当沙月而自得
そらはれていさごを照らす月の色を涼しきたまのかげかとぞ思ふ（一三）

〈句題原文〉大江匡衡『江吏部集』上・四時部「七言夏夜守庚申侍清涼殿、同賦避暑対水石、応製一首并序」→（朗12）に既出

（朗14）
五月蟬声送麦秋
神まつる卯月もたてば五月雨のそらもとどろになく蟬の声（一四）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・蟬・一九三
千峰鳥路含梅雨　五月蟬声送麦秋（「発青泥店至長県西渡口」李嘉祐）

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・夏興・一二七

（朗15）
五月菖蒲素得名
むかしより行かたもなき沼水にいかであやめの名をながしけむ（一五）

〈句題原詩〉菅原道真『新撰万葉集』六二
五月菖蒲素得名　毎逢五日是成霊　年年服者齢還幼　鶴鵲嘗来味尚平

〈句題典拠〉『新撰朗詠集』夏部・端午・一四七

（朗16）
一声山鳥曙雲外
あし曳の山郭公一声をあけゆく空のよそにこそきけ（一六）

〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「自楞伽寺、晨起泛舟、道中有懐」
碧樹蒼蒼茂苑東　佳期迢遞路何窮　一声山鳥曙雲外　万点水螢秋草中
門掩竹斎微有月　棹移蘭渚淡無風　欲知此路堪惆悵　菱葉蓼花連故宮

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・郭公・一八二

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・早秋・一五六

〈同一句題〉（土12）、『和漢兼作集』夏部上・四三三・一条前摂政左大臣「一声山鳥曙雲外」、『閑月和歌集』夏・一二七・従三位隆博「おくりて侍りし歌の中に、一声山鳥曙雲外」

（朗17）
　池冷水無三伏夏
こやの池のみぎはは風の涼しくてここには夏をしらでふるかな（一七）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・納涼・一六四
　池冷水無三伏夏　松高風有一声秋（「夏日閑適」源英明）

（朗18）
　松高風有一声秋
松風のこずゑを渡る一こゑにまだきも秋のけしきなるかな（一八）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・納涼・一六四→（朗17）に既出
〈同一句題〉（土64）、一色直朝『桂林集』七三「松高風有一声秋といふ心を」、香川景樹『桂園一枝』二一八「松高風有一声秋」

（朗19）
　六月瀬声似秋雨
みな月のかはせをたたくささ水のおとにぞかよふ秋のむらさめ（一九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二六六「香山避暑二絶（ノ二）」
　六月灘声如猛雨　香山楼北暢師房　夜深起凭欄干立　満耳潺湲満面涼
〈同一句題〉（匡3）

（朗20）
　蛍火乱飛秋已近
夏たけて秋もとなりになりにけりすだく蛍のかげをみしま江（二〇）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻二〇「夜坐」
　雨滞更愁南瘴毒　月明兼喜北風涼　古城楼影横空館　湿地虫声遶暗廊
　蛍火乱飛秋已近　星辰早没夜初長　孩提万里何時見　狼藉家書臥満牀
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・蛍・一八六
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・晩夏・一四〇
〈同一句題〉（土15）、源実朝『金槐和歌集』一六九「蛍火乱飛秋已近といふ事を」、熊谷直好『浦のしほ貝』四七八「蛍火乱飛秋已近」

秋部
（朗21）
　二星適逢　未叙別緒依依之恨　五夜将明　頻驚涼風颯颯之声
たまさかに秋の一夜をまちえてもあくるほどなき星合の空（二一）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻八・序甲・詩序一・時節・二二四・小野美材「七夕代牛女、惜暁更、応製」
　（前略）原夫二星適遇、未叙別緒依依之恨、五夜将明、頻驚涼風颯颯之声。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・七夕・二一三
〈同一句題〉三条西実隆『雪玉集』九八〇「二星適逢未叙別緒依依之恨」

（朗22）
　秋夜待月　纔望出山之清光
あれやさはくまなき月のいづるかげ山のまにまにまたれまたれて（二二）

〈句題原文〉菅原道真『菅家文草』巻五・三六五「早春、観賜宴官人、同賦催粧、応製并序」
　（前略）於是画漏頻転、新粧未成。其慎命諧恩、来就列序者、譬猶秋夜待月、纔望出山之清光。夏日思蓮、初見穿水之紅艶。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・妓女・七一一

（朗23）
　秦甸之一千余里　凛凛氷舗
あまのはらそらさえ渡る月かげにいく里までか氷しくらむ（二三）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・十五夜付月・二四〇
　秦甸之一千余里　凛凛氷舗　漢家之三十六宮　澄澄粉飾（「長安八月十五夜賦」公乗億）

（朗24）
　胡雁一声　秋破商客之夢
雁がねはこしぢにやどる旅人のまどろむ夢やおどろかすらん（二四）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻三・対冊・八〇・大江澄明「弁山水」
　（前略）酈県潭畔、菊蕊含露而已黄。泰山阿中、桂葉蒙霜而猶緑。胡雁一声、秋破商客之夢。巴猿三叫、暁霑行人之裳。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・猿・四五七

（朗25）
　不是花中偏愛菊　此花開後更無花
一すぢに咲くにうつろふこころかはこののち花のなければこそは（二五）
〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一六「菊花」
　秋叢遶舎以陶家　遍遶籬辺日漸斜　不是花中偏愛菊　此花開尽更無花
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・菊・二六七
〈句題他出〉『千載佳句』草木部・菊・六五六

（朗26）
　鷓胡背上　数片之紅纔残
しもをいとふ鳥のうはげのくれなゐは散りし紅葉の残りなりけり（二六）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一〇・序丙・詩序三・木・三一四・源順「冬日於神泉苑、同賦葉下風枝疎」
　（前略）観夫葉随風下、枝逐日疎。梧楸影中、一声之雨空灑、鷓鴣背上、数片之紅纔残。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・落葉・三一〇

（朗27）
　秋夜長　夜長無睡天不曙
さらぬだにあくるひさしき秋の夜を物思ふ人の心づよさよ（二七）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一三一「上陽白髪人」
　（前略）
　秋夜長　夜長無寐天不明　耿耿残灯背壁影　蕭蕭暗雨打窓声
　春日遅　日遅独坐天難暮　宮鶯百囀愁厭聞　梁燕双栖老休妬
　（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三三
〈同一句題〉（高13）、（匡9）

（朗28）
　巴峡秋深　五夜之哀猿叫月
月の入るかた山かげになく猿はふけ行く秋をものがなしとや（二八）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・猿・四五四
　瑶台霜満　一声之玄鶴唳天　巴峡秋深　五夜之哀猿叫月（「清賦」謝観）

（朗29）
　縦以崤函為固　難留蕭瑟於雲衢
天のはら雲のかよひぢとざしせよ空に暮行く秋やとまると（二九）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻八・序甲・詩序一・時節・二二六・源順「九月尽日於仏性院、惜秋」
　（前略）縦以殽函為固、難留蕭瑟於雲衢、縦令孟賁而追、何遮爽籟於風境。豈如惜半日之残暉、期千秋之後会云爾。
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・九月尽・二七四

冬部
（朗30）
　十月江南天気好　可憐冬景似春華
神無月いりえの南そのさとは空にぞ春のかげをしるらん（三〇）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三八六「早冬」
　十月江南天気好　可憐冬景似春華　霜軽未殺萋萋草　日暖初乾漠漠沙
　老柘葉黄如嫩樹　寒桜枝白是狂花　此時却羨閑人醉　五馬無由入酒家
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・初冬・三五二
〈同一句題〉（慈定41）、武者小路実陰『芳雲集』二六九六「十月江南天気好」

（朗31）

曉入梁王之苑　雪満群山
くれ竹の夜もあけがたに見わたせば山の高根に雪こえにけり（三一）

〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・雪・三七四
曉入梁王之苑　雪満群山　夜登庾公之楼　月明千里（「白賦」謝観）
〈同一句題〉『新続古今集』冬・七〇二・前大納言親雅「雪満群山といふ事を」、飛鳥井雅親『亜槐集』七七一「雪満群山」、『霞関集』冬・六三八・源重澄「雪満群山」、加藤千蔭『うけらが花初編』八四九「雪満群山」

（朗32）
山深感動　先侵四皓之鬢辺
年ふれどみ山をいでぬおいらくのもとゆひごとに霜や置くらむ（三二）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・霜・三六九
閨寒夢驚　或添孤婦之砧上　山深感動　先侵四皓之鬢辺（「青女司霜」紀長谷雄）

（朗33）
暖泉流処草冬青
冬くれどなほしもがれぬさいたづま氷らぬ水のぬるきあたりは（三三）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・冬夜・二三四
明月開時山夜白　暖泉流処草冬青（「題水亭」衛塡）

（朗34）
炉火欲銷灯欲尽
うづみ火の消ゆるのみかは窓の前にそむくるかげもかかげつくしつ（三四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六九七「冬夜示敏巣」
炉火欲銷灯欲尽　夜長相対百憂生　他時諸処重相見　莫忘今宵灯下情
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』冬部・冬夜・三三六
〈同一句題〉（慈定44）

（朗35）
香炉峰雪撥簾看
ここながらやどの簾を巻きあげてみるおもしろき山のすゑなり（三五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九七八「香鑪峰下新卜山居草堂初成偶題東壁五首（ノ四）」
日高睡足猶慵起　小閣重衾不怕寒　遺愛寺鐘欹枕聴　香鑪峰雪撥簾看
匡廬便是逃名地　司馬仍為送老官　心泰身寧是帰処　故郷可独在長安
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山家・五五四
〈句題他出〉『千載佳句』隠逸部・山居・九九一

（朗36）
竜頷珠投顆顆寒
風やこれあられの玉をもて来らむちるかずごとに寒さまさるは（三六）

〈句題原詩〉菅原道真『菅家後集』四八九「白微霰」
如砕如粘取貌難　被風吹結雪相搏　麞牙米簸声声脆　竜頷珠投顆顆寒
念仏山僧驚舎利　名医道士怪鉛丸　袖中収拾慇懃見　応是為氷涙未乾
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・霰・三九一

（朗37）
四時零落三分減
いづちとて春夏秋のすぎぬらむとまるは冬のかげばかりして（三七）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・初冬・三五三
四時牢落三分減　万物蹉跎過半凋（「初冬即事」醍醐天皇）

（朗38）
急於流水難廻浪
みづのごと流れてすぐるとしなればゆく月なみのたち帰らめや（三八）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』冬部・歳暮・三四〇
急於流水無廻浪　去似奔車幾転輪（「荏苒歳云暮」大江朝綱）

（朗39）
　白頭夜礼仏名経
年暮れてかしらに雪はつもりつつみよの仏の御名をこそきけ（三九）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六八・三四三二「戯礼経老僧」
　香火一炉灯一盞　白頭夜礼仏名経　何年飲著声門酒　直到如今酔未醒
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・仏名・三九三
〈同一句題〉（慈定50）

雑部
（朗40）
　新豊酒色　清冷鸚鵡杯之中
もろ人の浪にうかぶるさかづきのそこまで澄めるおほみきの色（四〇）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・酒・四七九
　新豊酒色　清冷於鸚鵡杯之中　長楽歌声　幽咽於鳳皇管之裏（「送友人賦」公乗億）
（朗41）
　韓康独往之棲　花薬如旧
ひとりのみ詠むるやどのこずゑにも花はむかしにかはらざりけり（四一）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻三・対冊・八〇・大江澄明「弁山水」
　（前略）韓康独往之棲、花薬如旧。范蠡扁舟之泊、煙波惟新。蓋嶺之泉、聴鳴絃而忽湧、石門之水、懸曝布而遥飛。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山水・五〇五
（朗42）
　僕夫待巷　鶏籠山欲明
かへれとや我まつ人を思ふらんよこ雲わたる山もしろめば（四二）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻八・序甲・詩序一・天象・二〇五・紀斉名「仲秋陪中書大王書閣、同賦望月遠情多、応教」
　（前略）既而酒軍在座、兎園之露未晞、僕夫待衢、鶏籠之山欲曙。愧侍望月之席、独少凌雲之詞云爾。
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・酒・四四三
（朗43）
　厳粧金屋之中　青蛾正画
たはれめがあさけのかほをかざるとてけさうやりどをけさやあくらむ（四三）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・暁・四一八
　厳粧金屋之中　青蛾正画　罷宴瓊筵之上　紅燭空余（「暁賦」謝観）
（朗44）
　三壺雲浮　七万里之程分浪
みつのしま雲ぢはるかにわけたれば思ひ思ひにかくる白浪（四四）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻三・対冊・七〇・都良香「神仙」
　窃以、三壺雲浮、七万里之程分浪。五城霞峙、十二楼之構挿天。信迺列真之所宅、跡閉不死之区。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仙家付道士隠倫・五四三
（朗45）
　傅氏巖之嵐　雖風雲殷夢之後
あだにみし夢よりさきはしらざりき覚めてぞ人は思ひあはする（四五）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻五・表下・一二六・菅原文時「為一条左大臣、辞右大臣、第三表」
　（前略）故傅氏巖嵐、雖風雲於殷夢之後、厳陵瀬水、猶涇渭於漢聘之初。蓋以人各有性分、事或随時宜歟。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・丞相付執政・六七九
（朗46）
　旦南暮北　鄭太尉之渓風被人知
たに風のあした夕にかはるかなゆきかふみちに心せんとや（四六）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻五・表下・一二六・菅原文時「為一条左大臣、辞右大臣、第三表」

（前略）且夫聖代之丘園、昔猶多遺徳。明時之朝市、今必有隠才。春過夏闌、袁司徒之家雪応路達。旦南暮北、鄭大尉之谿風被人知。（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・丞相付執政・六八〇

（朗47）

遊子独行於残月　函谷鶏鳴

あそぶ子の入る月かげをしとふとてゆけば関ぢに鶏の声しつ（四七）

〈句題原文〉原拠不明

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・暁・四一六

佳人尽飾於晨粧　魏宮鐘動　遊子猶行於残月　函谷鶏鳴（「暁賦」謝観）

（朗48）

南望則有関路之長　行人征馬駱駅於翠簾之下

たますだれあけてもみつるあら〔　〕こまうちなめてすぐるたび人（四八）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻一一・序丁・詩序四・草・三二三・源順「秋日遊白河院、同賦秋花逐露開」

（前略）南望則有関路之長　行人征馬駱駅於翠簾之下、東顧亦有林塘之妙、紫鴛白鷗逍遥於朱檻之前。（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山家・五五八

（朗49）

鶏人暁唱　声驚明王之眠

すべらぎのかしこき夢をおどろかせともの宮つこあけぬとならば（四九）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻三・対冊・七二・都良香「漏剋」

（前略）夏至冬至、緩急之度斯存、春分秋分、中正之法已立。鶏人暁唱、声驚明王之眠。鳧鐘夜鳴、響徹暗天之聴。（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・禁中・五二四

祝部

（朗50）

万歳千秋楽未央

ちぢの秋よろづの年をへぬれども思ふことなきみとはしらなん（五〇）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・祝・七七四

嘉辰令月歓無極　万歳千秋楽未央（「雑言詩」謝偃）

（朗51）

尊猶南面　松花色十廻

千年ふる松は十かへり花咲けどおもがはりせぬ君がみよかな（五一）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻九・序乙・詩序二・帝道・二三四・大江朝綱「早春侍内宴、賦聖化万年春、応製」

（前略）徳是北辰、椿葉之影再改、尊猶南面、松花之色十廻。（後略）

〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・帝王付女帝法皇行幸・六一五

（朗52）

不老門前日月遅

年ふれどおいせぬかどをたてたれば過ぐる月日もしられざりけり（五二）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・祝・七七五

長生殿裏春秋富　不老門前日月遅（「天子万年」慶滋保胤）

〈同一句題〉（土100）

（朗53）

谷水洗花　汲下流而得上寿者三百余家

しらぎくのした行く水をくむ人はいのちながれのすゑはるかなり（五三）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻一一・序丁・詩序四・草・三二六・紀長谷雄「九日侍宴観賜群臣菊花、応製」

（前略）故谷水洗花、汲下流而得上寿者三十余家、地脈和味、餐日精而駐年顔者五百箇歳。（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・九日付菊・二六四

（朗54）

本朝之延暦延喜胤子多　我君亦胤子多

いにしへのひじりのみかどのみならずきみもながれのかずよしらずも（五四）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻一一・序丁・詩序四・和歌序・三四五・藤原伊周「一条院御時中宮御産百日和歌序」
（前略）酔恩之余、私相語云、隆周之昭王穆王暦数長焉、我君又暦数長焉、本朝之延暦延喜胤子多矣、我君又胤子多焉。康哉帝道、誰不歓娯。請課風俗、将献寿詞云爾。（後略）
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・帝王付女帝法皇行幸・六一六

管絃部
（朗55）
第一第二絃索索　秋風払松而疎韻落
琴の音のしらべにいかでかよふらん松のこずゑをはらふ秋風（五五）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一四一「五絃弾」
（前略）
第一第二絃索索　秋風払松疎韻落　第三第四絃冷冷　夜鶴憶子籠中鳴
第五絃声最掩抑　隴水凍咽流不得
（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・管弦・四六三

（朗56）
管絃之在長曲　怒不関於伶人
ところせやかなづる袖も久しきにいかにつきせぬことのねぞこは（五六）
〈句題原文〉菅原道真『菅家文草』巻二・一四八「早春内宴、侍仁寿殿、同賦春娃無気力、応製一首并序」
（前略）纖手細腰、受之父母、軟雲襟李、備于髪膚。況陽気陶神、望玉階而余喘。韶光入骨、飛紅袖以羸形。彼羅綺之為重衣、妬無情於機婦、管絃之在長曲、怒不関於伶人。変態繽紛、神也又神也。新声婉転、夢哉非夢哉。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・管弦・四六六

（朗57）
感同類於相求　離鴻去雁之応春囀
わかれ行く雲井のかりのなく声ににてもさへづる春の鶯（五七）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一一・序丁・詩序四・鳥・三四〇・菅原文時「仲春内宴侍仁寿殿、同賦鳥声韻管弦、応製」
（前略）感同類於相求、離鴻去雁之応春囀、会異気而終混、竜吟熊躍之伴暁啼。
（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・鶯・六八

（朗58）
一声鳳管　秋驚秦嶺之雲
すみ登るふえのしらべはひとこゑに嶺の白雲おどろかしけり（五八）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・管絃・四六二
一声鳳管　秋驚秦嶺之雲　数拍霓裳　暁送猴山之月（「連昌宮賦」公乗億）

（朗59）
新声宛転　夢歟非夢歟
うつつとも夢ともえこそ聞きわかねふきあはせたる笛のこゑごゑ（五九）
〈句題原詩〉菅原道真『菅家文草』巻二・一四八「早春内宴、侍仁寿殿、同賦春娃無気力、応製一首并序」↓（朗56）に既出

閑居部
（朗60）
不独記東都履道之里有閑居泰適之叟　亦令知皇唐大和之歳有理世安楽之音
ひとりゐて日をのみことは記し置かむ治むる世をも人にしらせん（六〇）
〈句題原文〉白居易『白氏文集』巻六一・二九四二「序洛詩」
（前略）故集洛詩別為序引、不独記東都履道里有閑居泰適之叟、亦欲知皇唐大和歳有理世安楽之音、集而序之。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・閑居・六一三

（朗61）
幽思不窮　深巷無人之処
さ夜更けてゆく人もなき道すがらいづくにかよふ心とかしる（六一）
〈句題原文〉原拠不明

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・閑居・六一五
幽思不窮　深巷無人之処　愁腸欲断　閑窓有月之時（「閑賦」張読）
〈同一句題〉『五十四番詩歌合　康永二年』三七～七二「幽思不窮」、熊谷直好『浦のしほ貝』一二一三「幽思不窮」

（朗62）
愁腸欲断　閑窓有月之時
ひとこずてさびしき窓にある物はさし入る月の影ばかりのみ（六二）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・閑居・六一五→（朗61）に既出
〈同一句題〉（伏4）

（朗63）
陶門跡断春朝雨
くる人のあとぞともしき我がかどに雨ふりこむる春のあしたは（六三）
〈句題原詩〉『本朝麗藻』下・閑居部・九五・大江以言「閑中日月長」
閑中気味属禅房　唯得自然日月長　幽室浮沈無短晷　陰居隣里有余光
陶門跡絶春朝雨　燕寝色衰秋夜霜　我是柴扉樗散士　閑忙苦楽両相忘
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・閑居・六二二

（朗64）
陵園配妾月前心
春のおもひ秋のあはれぞつきもせぬひとりそへ行く月を詠めて（六四）
〈句題原詩〉『類聚句題抄』三七・大江以言「閑中秋色変」
捋鬚徐歩苔寒径　垂拱単居柳悴陰　帰老休臣霜後眼　陵園怨妾月前心
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・閑居・五七九

羈旅部
（朗65）
鳳凰池上月　送我過商山
水のおもにやどりし月のこよひさは秋の山ぢをともにすぎぬる（六五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三〇九「宿陽城駅対月自此後詩赴杭州路中作」
親故適廻駕　妻奴未出関　鳳皇池上月　送我過商山
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』秋部・月・二三〇
〈同一句題〉『雲葉和歌集』羈旅・九六八・按察使隆衡「親故尋廻駕　証従未出関　鳳凰池上月　送我過商山」

（朗66）
暁入長松之洞　巖泉咽号嶺猿吟
あか月はいはもる水もむすぶ（せカ）なりやまとよむまでましらなきそ（六六）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・行旅・六四三
暁入長松之洞　巖泉咽嶺猿吟　夜宿極浦之波　青嵐吹皓月冷（「別路江山遠序」藤原為雅）

（朗67）
蒼波路遠雲千里
はるばると雲のはつかにみわたせば漕ぎゆく舟の波ぢいくらぞ（六七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・行旅・六四六
蒼波路遠雲千里　白霧山深鳥一声（「石山作」橘直幹）

（朗68）
白霧山深鳥一声
みねつづき霧たち渡るみ山べにきけば稀なる鳥の声かな（六八）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・行旅・六四六→（朗67）に既出

（朗69）
壮士衣単易水秋
もののふの衣やうすき秋風にかは瀬も寒きたびねしてけり（六九）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・行旅・六〇八
征徒旆重故関暁　壮士衣単易水秋（「羈中風露冷」具平親王）

述懐部
（朗70）
恨同伯鸞　歌五噫而将去
なげくこと一つのみにもなかりけり人のこころや我が身なるらん（七〇）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一〇・序丙・詩序三・木・三一七・橘正通「初冬同賦紅葉高窓雨」
（前略）遂使白楽天三友之居、閑夢難結、謝安石蓄妓之処、幽思更催者也。正通齢亜顔駟、過三代而猶沈、恨同伯鸞、歌五噫而将去。去留未定、請垂博愛云爾。
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・述懐・七五九

（朗71）
顧不運之質　多積淪落之悲
いかにこは我が身のうきになしはててさのみこりつむなげきなるらむ（七一）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻六・奏状中・申官爵・一五〇・橘直幹「請被特蒙天恩兼任民部大輔闕状」
（前略）望後進之歓華、眼疲雲路、対傍人之栄貴、顔低泥沙。独仕有道之邦、猶抱貧賤之恥、久顧不運之質、多積淪落之悲。（後略）

（朗72）
范蠡収責　棹扁舟以逃名
さざなみやうかぶ小舟に棹さしてところせき世を漕ぎはなれにき（七二）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻四・表上・摂政関白辞職表・一〇二・大江朝綱「為貞信公辞摂政第三表」
（前略）又范蠡収責、棹扁舟而逃名。謝安辞功、鞭孤雲而養志。是皆擺寵光於既盛、慎禍胎於未萌者也。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・述懐・七五七

（朗73）
騄驥倚輈於呉坂馬鳴良楽　知与不知也
かへりみてひく人なくはやがてさはなづみしこまやいばえざらまし（七三）
〈句題原文〉『文選』巻二四・贈答三・劉琨「答盧諶書」
昔騄驥倚輈於呉阪長鳴於良楽、知与不知也。百里奚愚於虞而智於秦、遇与不遇也。
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・述懐・七〇〇

（朗74）
昨日山中木　才取於己
いかにさはおもひさだめむ世中をとてもかくてもありあけの月（七四）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一〇・序丙・詩序三・木・二九九・藤原篤茂「仲春於左武衛将軍亭、同賦雨来花自湿」
（前略）如予者、昨日山中之木、材取諸己、今日庭前之花、詞慙於人。猥染疎毫以記勝事云爾。
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・文詞付遺文・四七四

餞別部
（朗75）
前途程遠　馳思於雁山之暮雲
ゆく道のほどをもえこそしら雲のゆふゐる山にながめをぞする（七五）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻九・序乙・詩序二・祖餞・二五三・大江朝綱「夏夜於鴻臚館餞北客」
（前略）嗟呼、前途程遠、馳思於雁山之暮雲、後会期遥、霑纓於鴻臚之暁涙。予翰苑凡叢、楊庭散木。媿対遼水之客、敢陳孟浪之詞云爾。
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・餞別・六三二

（朗76）
李門浪高　人送我何日
としごとに人をのみこそ送りつれいつまた人の我を送らむ（七六）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻九・序乙・詩序二・祖餞・二四九・大江以言「暮春於文章院、餞諸故人赴任、同賦別路花飛白」
（前略）楊岐路滑、吾之送人多年、李門浪高、人之送吾幾日。仰訴霊廟之精、俯

慙祖席之客云爾。

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・餞別・六三四

（朗77）

泣尋沙塞出家郷

なくなくぞしらぬ越ぢへ尋ねいるふるき宮古をいづるわが身は（七七）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・王昭君・七〇〇

翠黛紅顔錦繡粧　泣尋沙塞出家郷（「王昭君」大江朝綱）

（朗78）

昔為鴛与鴦　今作参将商

おもひきやをしのちぎりをたちはなれほどは雲ゐのやどりせんとは（七八）

〈句題原詩〉『文選』巻二九・蘇子卿「詩四首（ノ一）」

骨肉縁枝葉　結交亦相因　四海皆兄弟　誰為行路人

況我連枝樹　与子同一身　昔為鴛与鴦　今為参与辰

（後略）

（朗79）

尋陽江畔夜送客

いざよひの月も入江の夜ふかきにいづくをさして漕ぎはなるらん（七九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一二・〇六〇三「琵琶引」

潯陽江頭夜送客　楓葉荻花秋索索　主人下馬客在船　挙酒欲飲無管弦

醉不成歓慘将別　別時茫茫江浸月　忽聞水上琵琶声　主人忘帰客不発

（後略）

〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・餞別・五九二

恋部

（朗80）

為君薫衣裳　君聞蘭麝不馨香

うらめしやそでの匂ひはかはらぬよ人のこころの昔にもにぬ（八〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻三・〇一三四「太行路」

（前略）

古称色衰相棄背　当時美人猶怨悔　何況如今鸞鏡中　妾顔未改君心改

為君薫衣裳　君聞蘭麝不馨香　為君事容飾　君看金翠無顔色

（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七七八

〈同一句題〉（成4）、武者小路実陰『芳雲集』三八八三～三八八五「為君薫衣裳」

（朗81）

南翔北嚮難付寒温於秋雁

ひきつれて秋はみなみへゆくかりよ〔　〕たまづさを人につたへよ（八一）

〈句題原文〉『本朝文粋』巻七・書状・一八三・大江朝綱「為清慎公、報呉越王書加沙金送文」

（前略）別贈答信、到宜収納。生涯阻海、雲濤幾重。南翔北嚮、難付寒温於秋鴻、東出西流、只寄瞻望於暁月。（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八三

（朗82）

可憎病鵲半夜驚人

一人ぬるやもめがらすはあなにくやまだ夜深きにめをさましつる（八二）

〈句題原文〉張鷟『遊仙窟』

（前略）詎知可憎病鵲夜半驚人、薄媚狂鶏三更唱暁。遂則披衣対坐、泣涙相看。

（後略）

〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・恋・七三二

（朗83）

楊貴妃帰唐帝思

面かげを恋ふる我が身に添へおきて命はのべの露と消えにき（八三）

〈句題原詩〉『類聚句題抄』九九・源順「対雨恋月」

雲稠尚望清光透　水暗難忘素影生　楊貴妃帰唐帝思　李夫人去漢皇情

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・十五夜付月・二五〇

〈同一句題〉（土81）

（朗84）
　李夫人去漢皇情
たまかへす草をもうゑじ中中にみるに思ひのしげさまされば
〈句題原詩〉『類聚句題抄』九九・源順「対雨恋月」→（朗83）に既出
〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝』八〇二「李夫人漢皇帝情」

懐旧部
（朗85）
　金谷酔花之地　花毎春匂而主不帰
ちれどまたはなはさきけり春ごとにかなしや人の行きてかへらぬ（八五）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一四・願文下・追修・四二二・菅原文時「為謙徳公、報恩修善、願文」
（前略）嗟呼、人命不定、吾生難知。彼金谷酔花之地、花毎春匂而主不帰。南楼翫月之人、月与秋期而身何去。況寵深者思又深、栄甚者畏又甚。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・懐旧・七四五

（朗86）
　南楼嘲月之人　月与秋期而身何去
年ごとに月と秋とはめぐりきてみし人の身はいづちなるらむ（八六）
〈句題原詩〉『本朝文粋』巻一四・願文下・追修・四二二・菅原文時「為謙徳公、報恩修善、願文」→（朗85）に既出

（朗87）
　王子晋之昇仙　後人立祠於緱嶺之月
このみねにたつるやしろはむかしみし人を忍ぶのものとなりけり（八七）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一一・序丁・詩序四・草・三三六・源相規「初冬陪菅丞相廟、同賦籬菊有残花」
（前略）宜宛廟堂之荘厳、不比俗境之愛翫。既而奠礼漸畢、遊宴亦闌。昔王子晋之昇仙、後人立祠於緱嶺之月、羊太傅之早世、行客堕涙於峴山之雲。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・懐旧・七四六

（朗88）
　遺文三十軸　軸軸金玉声
水ぐきのあとはむかしにかはらねば見るに涙のかわくまぞなき（八八）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五一・二二一七「題故元少尹集後二首（ノ二）」
　遺文三十軸　軸軸金玉声　竜門原上土　埋骨不埋名
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・文詞付遺文・四七一

（朗89）
　東平王之思旧里也　墳上之風靡西
ふる里をなほ恋しとやおもふらんそなたへなびくとりべのの草（八九）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻三・対冊・八八・藤原広業「松竹」
（前略）秋風索索、子野之商絃譲音、暁霜森森、南山之羽括呑舌。東平王之思旧里也、墳上之風靡西、天門山之伝新名也、峡中之煙掃地。（後略）
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・懐旧・六九四

無常部
（朗90）
　未及暮景　蜉蝣之世無常
いかにとよ常有るべしと思ふかはゆふかげまたぬかげろふのよを（九〇）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・無常・七三九
　未及暮景　蜉蝣之世無常　不待秋風　芭蕉之命易破

（朗91）
　孟嘗君之多楽　猶泣雍門之微吟
琴のねに物のあはれをしらざりし人の心をひきかへしてよ（九一）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『新撰朗詠集』雑部・無常・七四〇
　孟嘗君之多楽　猶泣雍門之微吟　漢文帝之至尊　已望霸陵而傷思（「已上出家以後序」橘在列）

（朗92）
　生者必滅　釈尊未免栴檀之煙
むまれてもしぬるうきよのためしにはいでてぞいりし中空の月（九二）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一四・願文下・追修・四二三・大江朝綱「為中務卿親王家室、四十九日願文」
　弟子重明、稽首和南。生者必滅、釈尊未免栴檀之煙、楽尽哀来、天人猶逢五衰之日。雖知苦海之常理、還迷涙川之難留。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・無常・七九三

（朗93）
　楽尽哀来　天人猶逢五衰之日
空をとぶあまつ乙女もかざりあれば花のかざしはしぼまずもあらじ（九三）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一四・願文下・追修・四二三・大江朝綱「為中務卿親王家室、四十九日願文」↓（朗92）に既出

（朗94）
　夕為白骨朽郊原
はかなしやかばねは野辺にさらされていづらけさまで有りしすがた（九四）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・無常・七九四
　朝有紅顔誇世路　暮為白骨朽郊原（「中陰願文」藤原義孝）
法文部
（朗95）
　十方仏土之中　以西方為望
かりのみをしばしこのよにやどし置きて心はにしにはこぶとをしれ（九五）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仏事・五九〇
　十方仏土之中　以西方為望　九品蓮台之間　雖下品応足（「極楽寺建立願文」慶滋保胤）
〈同一句題〉藤原為家『為家集』一五七八「以西方為望（文永八年四月続百首題自和漢朗詠之内注出之）」

（朗96）
　昔忉利天之安居九十日　刻赤栴檀而模尊容
くまもなき月のみかほをうつしもて帰らぬほどのかたみとぞせし（九六）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一三・願文上・雑修善・四一〇・大江匡衡「為仁康上人、修五時講、願文」
　（前略）昔忉利天之安居九十日、刻赤栴檀而模尊容、今跋提河之滅度二千年、瑩紫磨金而礼両足。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仏事・五九二

（朗97）
　十二因縁心裏空
世の中に人となるよりをはりまでおもへばなにかまことなりける（九七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山寺・五八三
　三千世界眼前尽　十二因縁心裏空（「竹生島作」都良香）

（朗98）
　念極楽之尊一夜　山月正円
夜もすがらあはれ心のすむ月にみだのみかほをよそへたるかな（九八）
〈句題原文〉『本朝文粋』巻一〇・詩序三・法会・二七八・紀斉名「七言暮春勧学会聴講法華経、同賦摂念山林」
　（前略）于時梵宮日暮、仙境春閑。念極楽之尊一夜、山月正円、先勾曲之会三朝、洞花欲落。（後略）
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仏事・五九四

（朗99）
　願以今生世俗文字葉狂言倚語之誤　翻為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁
はかなくも風にあざむくことの葉をまことの道にひるがへしてむ（九九）
〈句題原文〉白居易『白氏文集』巻七〇・三六〇八「香山寺白氏洛中集記」

（前略）何我有本願。願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤、転為当来世世讃仏乗之因転法輪之縁也。（後略）

〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仏事・五八八

（⑥藤原隆房『朗詠百首』ここまで）

⑦慈円「文集百首」『拾玉集』（慈1～慈100）

⑧藤原定家「文集百首」『拾遺愚草員外』（定1～定100）

⑨寂身「文集百首」『寂身集』（寂1～寂40）

【解説】

建保六年（一二一八）成立。慈円の勧進により詠作され、北野社に奉納された。主宰者である慈円が、白居易『白氏文集』から百の句題を選んでいる。慈円『拾玉集』・藤原定家『拾遺愚草員外』に百首が収められるほか、寂身『寂身集』にも同題で四〇首が残る。なお、八条院高倉にも同じ題の詠が残されており、参加していたものと推測される。構成は春一五首・夏一〇首・秋一五首・冬一〇首・恋五首・山家五首・旧里付懐旧五首・閑居一〇首・述懐一〇首・無常一〇首・法門五首。

【参考】

佐藤恒雄『藤原定家研究』（風間書房、二〇〇一年）所収「定家の漢詩文受容」、雋雪艶『藤原定家「文集百首」の比較文学的研究』（汲古書院、二〇〇二年）、文集百首研究会『文集百首全釈』（風間書房、二〇〇七年）など

【底本】新編国歌大観『拾玉集』（底本・青蓮院蔵本）

新編私家集大成『定家Ⅱ（拾遺愚草員外）』（底本・宮内庁書陵部蔵本）

新編私家集大成『寂身（寂身法師集）』（底本・宮内庁書陵部蔵本）

【本文】

春十五首

（慈1）

今日不知誰計会　春風春水一時来

しがのうらやとくる氷の春風に今朝をけふとはいつか告げけん（一九〇七）

（定1）

今日不知誰計会　春風春水一時来

氷とくもとの心やかよふらん風にまかするはるの山水（四〇七）

（寂1）

今日不知誰計会　春風春水一時来

けふぞとは誰山風に契をきてうちいづる浪に春を知けん（一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五八・二八七四「府西池」

柳無気力枝先動　池有波文氷尽開　今日不知誰計会　春風春水一時来

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・立春・二、『和漢朗詠集』春部・立春・五

〈同一句題〉（土1）、飛鳥井雅種『家集』五「春風春水一時訪といふことを」、加藤千蔭『うけらが花初編』二八六「春風春水一時来」、中院通村『後十輪院内府集』三五四「春風春水一時来」、『後水尾院御集』一九六「春風春水一時来」、香川景樹『桂園一枝』二「春風春水一時来」、同『桂園一枝拾遺』三「春風春水一時来」、武者小路実陰『芳雲集』一〇六一「春風春水一時来」、賀茂真淵『賀茂翁家集』二四「春風春水一時来」、『難波捨草』春上・六・藤原信房「春風春水一時来といふ事をよみ侍る」、『霞関集』春・二二・備前守高久「春風春水一時来」

（慈2）

春風先発苑中梅　桜杏桃李次第開

春をへて花さくはるの春風にさく桜あればちる梅の花（一九〇八）

（定2）

春風先発花中梅　桜杏桃李次第開

さきぬ也よのまの風にさそはれて梅よりにほふ春の花園（四〇八）

（寂2）

春風先発苑中梅

さまざまの花のしるべと吹風にいかでか梅のさきはじむらん（二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五五・二六〇八「春風」

春風先発苑中梅　桜杏桃梨次第開　薺花榆莢深村浦　亦道春風為我来

〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』八三「春風先発苑中梅」、小沢蘆庵『六帖詠草』一〇〇「春風先発苑中梅」

（慈3）

白片落梅浮澗水

雪をくぐる谷のを川は春ぞかしかきねの梅のちりけるものを（一九〇九）

（定3）

白片落梅浮澗水
白妙の梅さく山の谷風や雪げにきえぬせぜのしがらみ（四〇九）
（寂3）
白片落梅浮澗水
芦引のやまぢの梅やちりぬらん色こそにほへ水のしら浪（三）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一八・一一五七「春至」
若為南国春還至　争向東楼日又長　白片落梅浮澗水　黄梢新柳出城牆
閑拈蕉葉題詩詠　悶取藤枝引酒嘗　楽事漸無身漸老　従今始擬負風光
〈句題他出〉『千載佳句』草木部・梅柳・六〇六、『和漢朗詠集』春部・梅・八七
〈同一句題〉（土4）
（慈4）
黄梢新柳出城牆
春のやどのつづくかきねを見わたせば梢にさらす青柳の糸（一九一〇）
（定4）
黄梢新柳出城牆
このさとのむかひの村のかきねより夕日をそむる玉のを柳（四一〇）
（寂4）
黄梢新柳出城牆
見わたせばかきほの柳うちなびき宮こにふかきあさ緑かな（四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一八・一一五七「春至」→（慈定寂3）に既出
〈句題他出〉『千載佳句』草木部・梅柳・六〇六、『和漢朗詠集』春部・梅・八七
（慈5）
春来無伴閑遊少
浅みどり春のながめもやどさびてひとり暮れぬる山のはの空（一九一一）
（定5）
春来無伴閑遊少
おもふどちむれこし春もむかしにて旅ねの山に花やちるらむ（四一一）
（寂5）
春来無伴閑遊少
たれゆへにむかしは花を尋けん我とのどけき春の心を（五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六二八「曲江憶元九」
春来無伴閑遊少　行楽三分減二分　何況今朝杏園裏　閑人逢尽不逢君
（慈6）
鶯声誘引来花下
うちかへし鶯さそふ身とならむ今夜は花の下にやどりて（一九一二）
（定6）
鶯声誘引来花下
衣でにみだれておつる花のえやさそはれきつる鶯のこゑ（四一二）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一八・一一五九「春江」
炎涼昏暁苦推遷　不覚忠州已二年　閉閤只聴朝暮鼓　上楼空望往来船
鶯声誘引来花下　草色勾留坐水辺　唯有春江看未厭　縈砂遶石渌潺湲
〈句題他出〉『千載佳句』遊牧部・春遊・八五三、『和漢朗詠集』春部・鶯・六七
〈同一句題〉（千2）、（土7）、木下幸文『亮々遺稿』春・三二「鶯声誘引来花下」、
香川景樹『桂園一枝拾遺』春・三四「鶯声誘引来花下」
（慈7）
遂処花皆好　随年貌自衰
春をへてまどなる花の色ぞこきわがもとゆひの霜はきえねど（一九一三）
（定7）
遂処花皆好　随年貌自衰
やどごとに花のところはにほへども年ふる人ぞ昔にもにぬ（四一三）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九一七「桜桃花下歎白髪」
遂処花皆好　随年貌自衰　紅桜満眼日　白髪半頭時
倚樹無言久　攀条欲放遅　臨風両堪歎　如雪復如糸
〈同一句題〉三条西実隆『再昌草』四一五一「（大永二年）三月八日、中書王御会
遂処花皆好」、冷泉為和『為和集』八六二「遂処花皆好随年貌目衰　三
月廿一日家会」
（慈8）
遥見人家花便入　不論貴賤与親疎
花をやどのあるじとたのむ春なれば見にくる友をきらふものかは（一九一四）
（定8）

遥見人家花便入　不論貴賤与親疎
はるかなる花のあるじのやどとへばゆかりもしらぬのべの若草（四一四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六六・三二四四「（尋春題諸家園林）又題一絶」
貌随年老欲何如　興遇春牽尚有余　遥見人家花便入　不論貴賤与親疎
〈句題他出〉『千載佳句』草木部・雑花・六六四、『和漢朗詠集』春部・花付落花・一一五
〈同一句題〉（千83）

（慈9）
花下忘帰因美景
春の山に霞の袖をかたしきていくかに成りぬ花の下ぶし（一九一五）
（定9）
花下忘帰因美景
時しもあれこし路をいそぐ雁がねの心しられぬ花の本哉（四一五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六一六「酬歌舞大見贈」
去歳歓遊何処去　曲江西岸杏園東　花下忘帰因美景　樽前勧酒是春風
各従微官風塵裏　共度流年離別中　今日相逢愁又喜　八人分散両人同
〈句題他出〉『千載佳句』宴喜部・春宴・六九五、『和漢朗詠集』春部・春興・一八
〈同一句題〉（千13）、（円3）

（慈10）
落花不語空辞樹　流水無心自入池
はなも水も心なぎさやいかならむ庭に浪たつはるの木のもと（一九一六）
（定10）
落花不語空辞樹
山吹の色よりほかにさく花もいはでふりしく庭のこのもと（四一六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五七・二七九九「過元家履信宅」
鶏犬喪家分散後　園林失主寂寥時　落花不語空辞樹　流水無情自入池
風蕩醼船初破漏　雨淋歌閣欲傾欹　前庭後院傷心事　唯是春風秋月知
〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・落花・一二六
〈同一句題〉『続後撰集』春下・一四〇・八条院高倉「落花不語空辞樹といへる心を」

（慈11）
花落城中地　春深江上天
夕霞ふかくなり行くすみのえに都の花をおもひやるかな（一九一七）
（定11）
花落城中地　春深江上天
春の空入江の浪にうつる色みやこもふかく花やちるらん（四一七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇三九七「寄江南兄弟」
（前略）
忽憶分首時　憫黙秋風前　別来朝復夕　積日成七年
花落城中地　春深江上天　登楼東南望　鳥滅煙蒼然
（後略）

（慈12）
背灯共憐深夜月　踏花同惜少年春
あり明の月にそむくるともし火の影にうつろふ花を見るかな（一九一八）
（定12）
背灯共憐深夜月　踏花同惜少年春
そむけつるまどの灯ふかき夜のかすみにいづる二月の月（四一八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六三三「春中与盧四周諒華陽観同居」
性情懶慢好相親　門巷蕭条称作隣　背燭共憐深夜月　踏花同惜少年春
杏壇住僻雖宜病　芸閣官微不救貧　文行如君尚憔悴　不知霄漢待何人
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・春夜・八二、『和漢朗詠集』春部・春夜・二七

（慈13）
歳時春日少　世界苦人多
暮れて行く春はかすみの色ながらあやしくぬるる人の袖かな（一九一九）
（定13）
歳時春日少
いたづらに春日すくなき一年のたがいつはりにくるるすがのね（四一九）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九二一「晩春登大雲寺南楼贈常禅師」
花尽頭新白　登楼意若何　歳時春日少　世界苦人多
愁酔非因酒　悲吟不是歌　求師治此病　唯勧読楞伽

〈同一句題〉（千14）、（頓称14）

（慈14）
　留春春不留　春帰人寂莫
をしめどもとまらぬけふはよしの山梢にひとりのこる春風（一九二〇）

（定14）
　留春春不留　春帰人寂寞
うらむとてもとの日かずのかぎりあれば人もしづかに花もとまらず（四二〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五一・二二四〇「落花」
　留春春不住　春帰人寂莫　厭風風不定　風起花蕭索
　既興風前歎　重命花下酌　勧君嘗緑醅　教人拾紅萼
　（後略）

〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・三月尽・五〇

〈同一句題〉（朗9）、『閑月和歌集』春下・一〇四・法印憲実「留春春不留といふことを」

（慈15）
　厭風風不定　風起花蕭索
山ざくら風に成行く梢よりたえだえおつる滝のしらいと（一九二一）

（定15）
　厭風風不定　風起花蕭索
春のゆく梢の花に風たちていづれの空をとまりともなし（四二一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五一・二二四〇「落花」→（慈14）に既出

〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・三月尽・五〇

夏十首

（慈16）
　微風吹袂衣　不寒復不熱
夏のかぜになり行くけふの衣手の身にしまぬ色ぞみにはしみける（一九二二）

（定16）
　微風吹袂衣　不寒復不熱
たちかふるわが衣でのうすければ春より夏のかぜぞすずしき（四二二）

（寂6）
　微風袷衣吹　不寒復不熱
朝まだき日影もうすき衣手にいつより風の遠ざかる覧（六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二三八「首夏病間」
　（前略）
　況茲孟夏月　清和好時節　微風吹袷衣　不寒復不熱
　移榻樹陰下　竟日何所為　或飲一甌茗　或吟両句詩
　（後略）

（慈17）
　残鶯意思尽　新葉陰涼多
鶯の夏のはつねをそめかへてしげき梢にかへるころかな（一九二三）

（定17）
　新葉陰涼多
陰しげきならの葉がしは日にそへてまどより西の空ぞ少き（四二三）

（寂7）
　残鶯意思尽　新葉陰涼多
さそはれし花のかもなき夏山のあらぬみどりに鶯ぞなく（七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四一四「青竜寺早夏」
　（前略）
　日西寺門外　景気含清和　閑有老僧立　静無凡客過
　残鶯意思尽　新葉陰涼多　春去未幾日　夏雲忽嵯峨
　（後略）

（慈18）
　盧橘子低山雨重
香をとめてむかしをしのぶ袖なれや花たちばなにすがるあま水（一九二四）

（定18）
　盧橘子低山雨重
むらさめに花たちばなやおもるらんにほひぞおつる山のしづくに（四二四）

（寂8）
　盧橘子低山雨重
あしひきの山のむら雨いくかへり花たちばなに露をそふらん（八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三六一「西湖晩帰廻望孤山寺贈諸客」
柳湖松島蓮花寺　晩動帰橈出道場　盧橘子佗山雨重　栟櫚葉戦水風涼
煙波澹蕩揺空碧　楼殿参差倚夕陽　到岸請君迴首望　蓬莱宮在海中央
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋興・一七九、『和漢朗詠集』夏部・花橘・一七一
〈同一句題〉（土13）

（慈19）
池晩蓮芳謝
風わたる池のはちすの夕月よ人にぞあたるかげも匂ひも（四二五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五五・二六〇四「池窓」
池晩蓮芳謝　窓秋竹意深　更無人作伴　唯対一張琴

（慈20）
風生竹夜窓間臥　月照松時台上行
松風に竹のはにおく露落ちてかたしく袖に月を見るかな（一九二六）

（定20）
風生竹夜窓間臥
風さやぐ竹のよなかにふしなれて夏にしられぬ窓の月哉（四二六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一九・一二八〇「七言十二句贈駕部呉郎中七兄」
四月天気和且清　緑槐陰合沙堤平　独騎善馬銜鐙穏　初着単衣支体軽
退朝下直少徒侶　帰舎閉門無送迎　風生竹夜窓間臥　月照松時台上行
（後略）
〈句題他出〉『千載佳句』天象部・風月・二六九、『和漢朗詠集』夏部・夏夜・一五一

（慈21）
青苔地上消残雨　緑樹陰前逐晩涼
苔のうへに晴行くあめの岩かげに風こそすぐれゆふ暮の空（一九二七）

（定21）
青苔地上消残雨　緑樹陰前逐晩涼
夕立のなごりの露を染すてて苔のみどりにくるる山かな（四二七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六六・三二六四「池上逐涼二首（ノ一）」
青苔池上銷残暑　緑樹陰前逐晩涼　軽屐単衣薄紗帽　浅池平岸庳藤床
簪纓怪我情何薄　泉石諳君味甚長　徧問交親為老計　多言宜静不宜忙
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・納涼・一三九、『和漢朗詠集』夏部・納涼・一五九
〈同一句題〉（土14）

（慈22）
不是禅房無熱到　但能心静即身涼
心をや御法の水もあらふらむひとりすずしき松のとざしに（一九二八）

（定22）
不是禅房無熱到　但能心静即身涼
嵐山すぎの葉かげのいほりとて夏やはしらぬ心こそすめ（四二八）

（寂9）
不是禅房無到熱　但能心静即身涼
しづかなる心ぞ夏をへだてけるてる日にもるる宿ならねども（九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一五・〇八五二「苦熱題恒寂師禅室」
人人避暑走如狂　独有禅師不出房　可是禅房無熱到　但能心静即身涼
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・避暑・一三三、『和漢朗詠集』夏部・納涼・一六一
〈同一句題〉（千32）、（円6）、藤原為家『為家集』四三四「心静即身涼〈文永八年四月十八日続百首題自和漢朗詠注出之〉」

（慈23）
暑月貧家何処有　客来唯贈北窓風
夏をとふ人やあはれにきても見んむなしくはらふ窓の北風（一九二九）

（定23）
暑月貧家何所有　客来唯贈北窓風
吹をくるまどの北風秋かけて君がみけしの身にやしまぬと（四二九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五五・二五二八「新昌閑居招楊郎中兄弟」
紗巾角枕病眠翁　忙少閑多誰与同　但有双松当砌下　更無一事到心中
金章紫綬看如夢　皁蓋朱輪別似空　暑月貧家何所有　客来唯贈北窓風
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・納涼・一三八

（慈24）

蕭颯風雨天　蟬声暮啾啾
くれはどりあやにくにふる夕だちにぬれぬれはるる蟬の声かな（一九三〇）
（定24）
蕭索風雨天　蟬声暮啾啾
空蟬の夕のこゑはそめかへつまた青葉なる木木の下陰（四三〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一七九「永崇里観居」
季夏中気候　煩暑自此収　蕭颯風雨天　蟬声暮啾啾
永崇里巷静　華陽観院幽　軒車不到処　満地槐花秋
（後略）
〈同一句題〉（円5）、『夫木抄』三五九九・八条院高倉「文集百首歌に、窓風雨天蟬声」
（慈25）
夏臥北窓風　枕席如涼秋
さよふけて窓おしあくるうたたねの枕すずしき庭のまつ風（一九三一）
（定25）
夏臥北窓風　枕席如涼秋
やどからにせみの羽衣秋やたつ風のた枕月のさ莚（四三一）
（寂10）
夏臥北窓風　枕席如涼秋
しきたへの枕に秋やちかからん風にみだるる夏の夜の夢（一〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一九六「贈呉丹」
（前略）
冬負南栄日　支体甚温柔　夏臥北窓風　枕席如涼秋
南山入舎下　酒甕在床頭　人間有閑地　何必隠林丘
（後略）
秋十五首
（慈26）
夜来風雨後　秋気颯然新
山のはに雨そほふりて風ぞゆくこれより秋の色や見ゆらむ（一九三二）
（定26）
夜来風雨後　秋気颯然新
よるの雨のこゑ吹のこす松風に朝けの袖は昨日にもにず（四三二）

（寂11）
夜来風雨後　秋気颯然新
あま雲のはるるならひの風ぞとておどろかぬにも秋ぞ見えける（一一）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六七・三三七一「雨後秋涼」
夜来秋雨後　秋気颯然新　団扇先辞手　生衣不著身
更添砧引思　難与簟相親　此境誰偏覚　貧閑老瘦人
（慈27）
団扇先辞手　生衣不着身
から衣あふぎは袖のよそながらうらめづらしきかぜを待つかな（一九三三）
（定27）
団扇先辞手
はしたかを手ならす比の風たちて秋の扇ぞ遠ざかり行（四三三）
（寂12）
団扇先辞手　生衣不着身
てになれし夏のあふぎに吹かへてうすき衣にたたぬ秋風（一二）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六七・三三七一「雨後秋涼」→（慈26）に既出
（慈28）
大底四時心惣苦　就中断腸是秋天
あだに思ふうれへは秋の空ながら雲に心やなびき行くらむ（一九三四）
（定28）
大底四時心惣苦　就中断腸是秋天
さくら花山郭公雪はあれどおもひをかぎる秋はきにけり（四三四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇七九〇「暮立」
黄昏独立仏堂前　満地槐花満樹蟬　大抵四時心総苦　就中腸断是秋天
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋興・一七七、『和漢朗詠集』秋部・秋興・二二三
（慈29）
八月九月正長夜　千声万声無了時
つちのおとよいくらに成りぬ衣うつ長月の夜の有明の空（一九三五）
（定29）

八月九月正長夜　千声万声無終時
長月をまつよりながき秋の夜のあくるもしらず衣うつこゑ（四三五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一九・一二八七「聞夜砧」
誰家思婦秋擣帛　月苦風凄砧杵悲　八月九月正長夜　千声万声無了時
応到天明頭尽白　一声添得一茎糸

〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・擣衣・三四五

（慈30）
相思夕上松台立　蛬思蟬声満耳秋
きりぎりすよる松風にこゑわびてあくるより又日ぐらしのこゑ（一九三六）

（定30）
相思夕上松台立　蛬思蟬声満耳秋
夕ぐれは物おもひまさる蛬身をかへてなくうつせみのこゑ（四三六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇七〇四「題李十一東亭」
相思夕上松台立　蛩思蟬声満耳秋　惆悵東亭風月好　主人今夜在鄜州

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・早秋・一四六、『和漢朗詠集』秋部・秋晩・二三〇

〈同一句題〉（俊2）、『新続古今集』秋上・四二八・前中納言定嗣「相思夕上松台立
蛬思蟬声満耳秋といへる心を」、加藤千蔭『うけらが花初編』五六五「相
思夕上松台立　蛬思蟬声満耳秋」

（慈31）
遅遅鐘漏初長夜　耿耿星河欲曙天
鐘の音をねざめてきくや秋ならむ袖にまぢかき天の川なみ（一九三七）

（定31）
遅遅鐘漏初長夜　耿耿星河欲曙天
鳥のねをとしもふばかり待し夜の鳴てもながき暁の空（四三七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九六「長恨歌」
（前略）
夕殿蛍飛思悄然　孤灯挑尽未成眠　遅遅鍾鼓初長夜　耿耿星河欲曙天
鴛鴦瓦冷霜華重　翡翠衾寒誰与共　悠悠生死別経年　魂魄不曽来入夢
（後略）

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋夜・一八六、『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三四

〈同一句題〉（土17）

（慈32）
残影灯閉牆　斜光月穿牖
秋のよはかべにともし火きえやらでまどにかたぶく月ぞかなしき（一九三八）

（定32）
残影灯閑牆　斜光月穿牖
わがしたふ人はとひこずまどごしに月さしいりて秋風ぞ吹（四三八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇五一二「夢与李七庾三十三同訪元九」
（前略）
覚来疑在側　求索無所有　残灯影閃牆　斜月光穿牖
天明西北望　万里君知否　老去無見期　踟躕搔白首

（慈33）
黄茅岡頭秋日晩　苦竹嶺下寒月低
やどしむるかた岡山のあさぢ原露にかたぶく月をみるかな（一九三九）

（定33）
黄茅岡頭秋月晩
たれもさや心の色のかはるらむをかのあさぢに夕日さすころ（四三九）

（寂13）
黄茅岡頭秋日晩　苦竹嶺下寒月低
夕露や岡のあさぢにのこる覧影こそなびけ山のはの月（一三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九〇「山鷓鴣」
山鷓鴣　朝朝暮暮啼復啼　啼時露白風凄凄　黄茅岡頭秋日晩　苦竹嶺下寒月低
畠田有粟何不啄　石楠有枝何不棲　迢迢不緩復不急　楼上舟中夜闇入
（後略）

（慈34）
月隠雲樹外　蛍飛廊宇間
秋の雨に月さへくもる軒ばよりほしともいはじほたるなるらん（一九四〇）

（定34）
月陰雲樹外　蛍飛廊宇間
しぐれ行雲のこずゑの山のはに夕たのむる月もとまらず（四四〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六七五「旅次景空寺宿幽上人院」
不与人境接　寺門開向山　暮鐘鳴鳥聚　秋雨病僧閑
月隠雲樹外　蛍飛廊宇間　幸投花界宿　暫得静心顔

（慈35）
碍日暮山青蔟蔟　浸天秋水白茫茫
秋の水は秋の空にぞ成りにけるしろき浪まにうつる山かげ（一九四一）

（定35）
碍日暮山青蔟蔟　浸天秋水白茫茫
山をこそ露も時雨もまだ染ね空の色ある秋の水哉（四四一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九九九「登西楼憶行簡」
毎因楼上西南望　始覚人間道路長　碍日暮山青簇簇　浸天秋水白茫茫
風波不見三年面　書信難伝万里腸　早晩東帰来下峡　穏乗船舫過瞿唐

〈句題他出〉『千載佳句』遊牧部・眺望・八七四、『和漢朗詠集』雑部・山水・五〇一

〈同一句題〉（禁1～25・76～79）

（慈36）
寒鴻飛急覚秋尽　隣鶏鳴遅知夜永
いかにせん夜半にまたるる鳥のねをいそがぬ秋とおもはましかば（一九四二）

（定36）
寒鴻飛急覚秋尽　隣鶏鳴遅知夜永
まきのやにとなりの霜は白妙のゆふつけ鳥をいつかきくべき（四四二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇七四二「晩秋夜」
碧空溶溶月華静　月裏愁人弔孤影　花開残菊傍疎籬　葉下衰桐落寒井
塞鴻飛急覚秋尽　隣鶏鳴遅知夜永　凝情不語空所思　風吹白露衣裳冷

〈同一句題〉（千53）、（禁26～50・80～83）

（慈37）
前頭更有蕭条物　老菊衰蘭両三叢
秋の霜にうつろひ行けば藤ばかまきてみる人もかれがれにして（一九四三）

（定37）
老菊衰蘭両三叢
ふぢばかま嵐のくだくむらさきに又しら菊の色やならはん（四四三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六七・三三八四「杪秋独夜」
無限少年非我伴　可憐清夜与誰同　歓娯牢落中心少　親故凋零四面空
紅葉樹飄風起後　白鬚人立月明中　前頭更有蕭条物　老菊衰蘭三両叢

〈句題他出〉『千載佳句』草木部・蘭菊・六五九、『和漢朗詠集』秋部・蘭・二八六

（慈38）
不堪紅葉青苔地　又是涼風暮雨天
やどぞいづく空のけしきに苔むして秋くれ方の松かぜのこゑ（一九四四）

（定38）
不堪紅葉青苔地　又是涼風暮雨天
こけむしろもみぢふきしく夕時雨心もたえぬ長月のくれ（四四四）

（寂14）
不堪紅葉青苔地　又是涼風暮雨天
紅葉ちるこけの緑をあかずとや夕をそむる嶺のむら雲（雨歟）（一四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六一〇「秋雨中贈元九」
不堪紅葉青苔地　又是涼風暮雨天　莫怪独吟秋思苦　比君校近二毛年

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・暮秋・二〇一、『和漢朗詠集』秋部・紅葉・三〇一

〈同一句題〉（匡5）、『和漢兼作集』秋下・八六八・藤原定通「不堪紅葉青苔地」

（慈39）
葉声落如雨　月色白似霜
夜もすがら月に霜おくまきのやにふるかこの葉も袖ぬらすらむ（一九四五）

（定39）
葉声落如雨　月色白似霜
こゑばかりこの葉の雨は古郷のにはもまがきも月の初しも（四四五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五〇「秋夕」
葉声落如雨　月色白似霜　夜深方独臥　誰為払塵牀

（慈40）
万物秋霜能壊色
秋のいろを冬の物にはなさじとてけふよりさきに霜のおきける（一九四六）

（定40）
万物秋霜能壊色

した草のしぐれもそめぬかれ葉まで霜こそ秋の色はのこさね（四四六）
（寂15）
　万物秋霜能壊色
くれて行秋をおもはぬときは木も霜にはもるる色なかりけり（一五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一五・〇八八七「歳晩旅望」
　朝来暮去星霜換　陰惨陽舒気序牽　万物秋霜能壊色　四時冬日最凋年
　煙波半露新沙地　鳥雀群飛欲雪天　向晩蒼蒼南北望　窮陰旅思両無辺
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・冬興・二一一七、『和漢朗詠集』冬部・霜・三六七
冬十首
（慈41）
　十月江南天気好　可憐冬景似春華
けふを冬とかへりてつぐる春の色はいかなるえより思ひそめけむ（一九四七）
（定41）
　十月江南天気好　可憐冬景似春花
この里は冬をく霜のかろければ草のわか葉ぞ春の色なる（四四七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三八六「早冬」
　十月江南天気好　可憐冬景似春華　霜軽未殺萋萋草　日暖初乾漠漠沙
　老柘葉黄如嫩樹　寒桜枝白是狂花　此時却羨閑人醉　五馬無由入酒家
〈句題他出〉『和漢朗詠集』冬部・初冬・三五二
〈同一句題〉（朗30）、武者小路実陰『芳雲集』二六九六「十月江南天気好」
（慈42）
　寒流帯月澄如鏡
月故ぞ水はかがみと成りにける木のはがくれをはらふ浪まに（一九四八）
（定42）
　寒流帯月澄如鏡
山水にさえゆく月のますかがみこほらずとてもながるとも見ず（四四八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九一三「江楼宴別」
　楼中別曲催離酌　灯下紅裙間緑袍　縹緲楚風羅綺薄　錚摐越調管絃高
　寒流帯月澄如鏡　夕吹和霜利似刀　樽酒未空歓未尽　舞腰歌袖莫辞労
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・冬夜・二二四、『和漢朗詠集』冬部・歳暮・三五九

〈同一句題〉（匡7）、（土28）
（慈43）
　策策窓戸前　又聞新雪下
槙の戸をおし明がたの空さえて庭白妙に雪降りにけり（一九四九）
（定43）
　策策窓戸前　又聞新雪下
初雪のまどのくれ竹ふしながらおもるうれ葉の程ぞきこゆる（四四九）
（寂16）
　策策窓戸前　又聞新雪下
風さやぐ松のとぼその明がたにことしまだみぬ雪を見る哉（一六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二六一「冬夜」
　家貧親愛散　身病交遊罷　眼前無一人　独掩村斎臥
　冷落灯火暗　離披簾幕破　策策窓戸前　又聞新雪下
　（後略）
（慈44）
　炉火欲消灯欲尽　夜長相対百憂生
きえぬるかほのめく夜半のともし火にたえぬ思ひはしぎのはねがき（一九五〇）
（定44）
　炉火欲消灯欲尽　夜長相対百憂生
暁は影よはり行灯にながきおもひぞひとりきえせぬ（四五〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六九七「冬夜示敏巣」
　炉火欲銷灯欲尽　夜長相対百憂生　他時諸処重相見　莫忘今宵灯下情
〈句題他出〉『新撰朗詠集』冬部・冬夜・三三六
〈同一句題〉（朗34）
（慈45）
　唯有数叢菊　新開籬落間
しら菊の霜にうつろふませの中に今はことしの花もおもはず（一九五一）
（定45）
　唯有数叢菊　新開籬落間
さく花の今はの霜にをきとめてのこるまがきの白菊のいろ（四五一）

（寂17）
唯有数叢菊　新開籬落間
のこる色は秋なき時のかたみぞと契しきくもうつろひにけり（一七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二五二「東園翫菊」
（前略）
唯有数叢菊　新開籬落間　携觴聊就酌　為爾一留連
憶我少小日　易為興所牽　見酒無時節　未飲已欣然
（後略）

（慈46）
南窓背灯坐　風霰晴紛紛
思ひやれかぜにあられの遠くちりてささひきむすぶいほのともし火（一九五二）

（定46）
南窓背灯座　風霰暗紛紛
風の上にほしの光はさえながらわざともふらぬあられをぞきく（四五二）

（寂18）
南窓背灯坐　風霰暗紛紛
山めぐるあられの風もはれぬめりしばしはのこれよひのともし火（一八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二五一「村雪夜坐」
南窓背灯坐　風霰暗紛紛　寂寞深村夜　残雁雪中聞

（慈47）
寂寞深村夜　残雁雪中聞
をかのべの杉の木のまに雪ふかみ跡なきかりの雲に残れる（一九五三）

（定47）
寂寞深村夜　残雁雪中聞
さととをき薗の村竹ふかき夜の雪の雲まをわたるかりがね（四五三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二五一「村雪夜坐」↓（慈定46・寂18）に既出

（慈48）
望春春未到　可在海門東
みちのくや春まつしまのうは霞しばしなこその関路にぞ見る（一九五四）

（定48）
望春春未到　応在海門東
清見がたあけなむとする年なみの関戸の外に春や待らん（四五四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五三・一三二九「閑臥」
尽日前軒臥　神閑境亦空　有山当枕上　無事到心中
簾巻侵床日　屏遮入座風　望春春未到　応在海門東

（慈49）
雪尽終南又欲春
峰つづき春に先だつ春の色やきえせぬ雪を空にけつらむ（一九五五）

（定49）
雪尽終南又欲春
いたづらに日数ふりつむ山の雪あかしくらさば春の曙（四五五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六四九「過天門街」
雪尽終南又欲春　遥憐翠色対紅塵　千車万馬九衢上　廻首看山無一人

（慈50）
香火一炉灯一盞　白頭夜礼仏名経
つもりゆくかしらの雪も消えやせん三世の仏ををがむ光に（一九五六）

（定50）
白頭夜礼仏名経
としふればわがくろかみもしらいとのよるは仏の名をとなへつつ（四五六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六八・三四三二「戯礼経老僧」
香火一爐灯一盞　白頭夜礼仏名経　何年飲著声門酒　直到如今酔未醒
〈句題他出〉『和漢朗詠集』冬部・仏名・三九三
〈同一句題〉（朗39）

恋五首
（慈51）
夜深方独臥　誰為払塵床
見せばやなちりもはらはぬ枕より夢のたえぬるかたしきの袖（一九五七）

（定51）

誰為払床塵
あれはてぬはらはば袖のうき身のみあはれいく世の床のうら風（四五七）
（寂19）
夜深方独臥　誰為払床塵
ふす床の涙のちりはつもれどもよそにふけゆくかたしきの袖（一九）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五〇「秋夕」↓（慈定39）に既出
（慈52）
夕殿蛍飛思悄然　秋灯挑尽未能眠
君ゆゑにうちもねぬよの床のうへに思ひを見する夏虫のかげ（一九五八）
（定52）
夕殿蛍飛思悄然　秋灯挑尽未能眠
くるとあくとむねのあたりももえつきぬ夕のほたる夜はのともし火（四五八）
（寂20）
夕殿蛍飛思悄然　秋灯挑尽未能眠
夏虫の影にはまがふともし火もおよばざりける身の思ひ哉（二〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九六「長恨歌」↓（慈定31）に既出
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八二
〈同一句題〉（高32）
（慈53）
行宮見月傷心色
いかにせんなぐさむやとて見る月のやがて涙にくもるべしやは（一九五九）
（定53）
行宮見月傷心色
あさぢふややどる涙の紅にをのれもあらぬ月のいろかな（四五九）
（寂21）
行宮見月傷心色
うき色の草のはごとに見ゆる哉月もいかなる露にすむらん（二一）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九六「長恨歌」
（前略）
蜀江水碧蜀山青　聖主朝朝暮暮情　行宮見月傷心色　夜雨聞鈴腸断声
天旋日転迴竜馭　到此躊躇不能去　馬嵬坡下泥土中　不見玉顔空死処
（後略）
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八〇
〈同一句題〉（高3）、（道3）
（慈54）
夜雨聞猿断腸声
このしたの雨に鳴くなるましらよりもわが袖のうへの露ぞかなしき（一九六〇）
（定54）
夜雨聞猿断腸声
恋てなくたかねの山の夜の雨おもひぞまさる暁の雨（四六〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九六「長恨歌」↓（慈53）に既出
（慈55）
旧枕古衾誰与共
如何にせんかさねし袖をかたしきて涙にうくはまくらなりけり（一九六一）
（定55）
旧枕古衾誰与為
とこの上に旧枕もくちはててかよはふ夢ぞ遠ざかり行（四六一）
（寂22）
旧枕古衾誰与共
ぬししらばいづくの夢をたづねてもをのれくちぬとつげのを枕（二二）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九六「長恨歌」↓（慈31）に既出
〈句題他出〉『新撰朗詠集』雑部・恋・七三三
〈同一句題〉（高33）
山家五首
（慈56）
従今便是家山月　試問清光知不知
秋の月はくもりなければしりぬらんわがすむいほの行末の空（一九六二）
（定56）
従今便是家山月　試問清光知不知
しるや月やどしめそむるおいらくの我山のはの影やいく夜と（四六二）

〈寂23〉
　従今便是家山月　試問清光知不知
いまよりはおなじみ山の秋ぞとて契もなれぬ月をとふ哉（二二三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六六・三二七四「初入香山院対月」
　老住香山初到夜　秋逢白月正円時　従今便是家山月　試問清光知不知
〈句題他出〉『新撰朗詠集』秋部・月・二三二

〈慈57〉
　始知天造空閑境　不為忙人留貴人
おもはずよ我のみぞすむ山里によを行人もたちとまれとは（一九六三）
〈定57〉
　始知天造空閑境　不為肥人冨貴人
明くらす人のならひをよそにみて過る日かげもいそぎやはする（四六三）
〈寂24〉
　始知天造空閑境　不為肥人富貴人
身にさむき嵐もとをくならひにし人はしのばず山のはの庵（二二四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六七・三三六一「春日題乾元寺上方最高峰亭」
　（前略）
　迴看官路三条線　却望都城一片塵　賓客暫遊無半日　王侯不到便終身
　始知天造空閑境　不為奔忙富貴人

〈慈58〉
　蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草庵中
草の庵の雨にたもとをぬらすかな心より出でし都こひしも（一九六四）
〈定58〉
　廬山雨夜草庵中
しづかなる山路の庵の雨の夜に昔恋しき身のみふりつつ（四六四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一七・一〇七九「廬山草堂夜雨独宿寄牛二李七庾三十二員外」
　丹霄携手三君子　白髪垂頭一病翁　蘭省花時錦帳下　廬山雨夜草菴中
　終身膠漆心応在　半路雲泥跡不同　唯有無生三昧観　栄枯一照両成空
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・山家・五五五

〈同一句題〉『続後撰集』雑中・一一二四・貞慶「廬山雨夜草庵中といふことを、年ごろいかなりけむと思ひけるに、世をのがれてのちよみ侍りける」、『続門葉和歌集』秋下・三七一・親瑜「廬山雨夜草庵中といへる心を読める」

〈慈59〉
　人間栄耀因縁浅　林下幽閑気味深
山かげや秋のこのもと色ふかみあさくも花を思ひけるかな（一九六五）
〈定59〉
　人間栄耀因縁浅　林下幽閑気味深
あらしをく田のものは草しげりつつ世のいとなみのほかや住うき（四六五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六六・三二四八「老来生計」
　老来生計君看取　白日遊行夜酔吟　陶令有田唯種黍　鄧家無子不留金
　人間栄耀因縁浅　林下幽閑気味深　煩慮漸銷虚白長　一年心勝一年心
〈句題他出〉『千載佳句』隠逸部・幽居・一〇一五、『和漢朗詠集』雑部・閑居・六一七
〈同一句題〉（俊7）、（禁51～75・84～87）、加藤千蔭『うけらが花初編』一四九六「林下幽閑気味深」

〈慈60〉
　何時解塵網　此地来掩開
いつよりかすむべき山のいほならむかつがつとまるわがこころかな（一九六六）
〈定60〉
　山秋雲物冷
秋山の岩ほのまくらたづねてもゆるさぬ雲ぞ旅心ちする（四六六）
〈寂25〉
　何時解塵網　此地来掩関
みねにゐる雲のさかひは遠けれどいるべき山と松風ぞふく（二五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇二〇六「秋山」
　久病曠心賞　今朝一登山　山秋雲物冷　称我清羸顔
　白石臥可枕　青蘿行可攀　意中如有得　尽日不欲還
　人生無幾何　如寄天地間　心有千載憂　身無一日閑
　何時解塵網　此地来掩関
〈同一句題〉（水実39）

旧里付懐旧五首

（慈61）
　前庭後苑傷心事　只是春風秋月知
ありし世のやどのけしきをとふ物は秋の夜の月庭の春風（一九六七）

（定61）
　前庭後苑傷心事　只是春風秋月知
おほ空の月こそのこれすみなれし人の影みぬ軒の草ばに（四六七）

（寂26）
　前庭後苑傷心事　只是春風秋月知
ぬしやたれ里はあれにしふか草に見ぬよの秋をのこす月影（二二六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五七・二七九九「過元家履信宅」→（慈定10）に既出

（慈62）
　蒼苔黄葉地　日暮旋風多
もみぢばをゆふ吹くかぜにまかすれば苔むす庭はうち時雨れつつ（一九六八）

（定62）
　蒼苔黄葉地　日暮旋風多
秋風はもみぢを苔に吹しけどいかなる色と物ぞかなしき（四六八）

（寂27）
　蒼苔黄葉地　日暮旋風多
木葉ふく夕の風はわたれども跡はかもなき苔のかよひぢ（二七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一・〇〇〇四「凶宅詩」
　長安多大宅　列在街西東　往往朱門内　房廊相対空
　梟鳴松桂枝　狐蔵蘭菊叢　蒼苔黄葉地　日暮多旋風
　（後略）

（慈63）
　挿柳作高林　種桃成老樹
引きうゑし木木の梢にとしたけてやどもあるじもおいにけるかな（一九六九）

（定63）
　挿柳作高林
なをざりにさしし柳の一枝や日影こだかき夕暮の色（四六九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四二三「重到渭上旧居」
　旧居清渭曲　開門当蔡渡　十年方一還　幾欲迷帰路
　追思昔日行　感傷故游処　挿柳作高林　種桃成老樹
　（後略）

（慈64）
　閑日一思旧　旧遊如目前
ながめわぶる軒のしのぶに露おちて昔をかへすゆふ暮の空（一九七〇）

（定64）
　閑日一思旧　旧遊如目前
おもかげはただ目のまへの夢ながらかへらぬむかしあはれいくとせ（四七〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六二・二九八一「思旧」
　閑日一思旧　旧遊如目前　再思今何在　零落帰下泉
　退之服流黄　一病訖不痊　微之錬秋石　未老身溘然
　（後略）

（慈65）
　黄壤誰知我　白頭独憶君　唯将老年涙　一灑故人文
かきとむるむかしの人のことのはを老の涙にそめて見るかな（一九七一）

（定65）
　唯将老年涙　一灑故人文
人しのぶ老の涙の玉章をかた見とみればいとどふりつつ（四七一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五一・二二一六「題故元少尹集後二首（ノ一）」
　黄壤詎知我　白頭徒憶君　唯将老年涙　一灑故人文
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・懐旧・七四一

閑居十首

（慈66）
　但有双松当砌下　更無一事到心中
庭の松よおのが梢の風ならで心のやどをとふ物ぞなき（一九七二）

（定66）
　但有双松当砌下　更無一事到心中
わがやどの砌にたてる松の風それよりほかはうちもまぎれず（四七二）

（寂28）
　但有双松当砌下　更無一事到心中
心にはそむるおもひもなきものをなにのこるらむ軒の松かぜ（二八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五五・二五二八「新昌閑居招楊郎中兄弟」
　紗巾角枕病眠翁　忙少閑多誰与同　但有双松当砌下　更無一事到心中
　金章紫綬看如夢　皁蓋朱輪別似空　暑月貧家何所有　客来唯贈北窓風
〈句題他出〉『千載佳句』隠逸部・幽居・一〇一四、『和漢朗詠集』雑部・松・四二一
〈同一句題〉（土50）

（慈67）
　山林太寂寞　朝闕苦喧煩　唯茲群閣内　囂静得中間
いづくにも心やゆかず成りぬらむただ我がやどをわがやどにして（一九七三）
（定67）
　山林太寂寞　朝闕苦喧煩　唯茲辞閣内　囂静得中間
あし引の山ぢにはあらずつれづれと我身世にふるながめする里（四七三）
（寂29）
　山林太寂寞　朝闕苦喧煩　唯茲群閣内　囂静得中間
世をすてて入たつみちはあさけれど心のおくの宿ぞすみよき（二九）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇三五八「郡亭」
　（前略）
　終朝対雲水　有時聴管絃　持此聊過日　非忙亦非閑
　山林太寂寞　朝闕空喧煩　唯茲郡閣内　囂静得中間

（慈68）
　偶得幽閑境　遂忘塵俗心　始知真隠者　不必在山林
柴のいほにすみえて後ぞ思ひしるいづくもおなじゆふ暮の空（一九七四）
（定68）
　偶得幽閑境　遂忘塵俗心　始知真陰者　不必在山林
つま木こるやどともなしにすみはつるをのが心ぞ身をかくしける（四七四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三七〇「翫新庭樹因詠所懐」
　（前略）
　時与道人語　或聴詩客吟　度春足芳色　入夜多鳴禽
　偶得幽閑境　遂忘塵俗心　始知真隠者　不必在山林

（慈69）
　更無俗物当人眼　但有泉声洗我心
うれしくもながむる空はむなしくて心をあらふ山の井の水（一九七五）
（定69）
　更無俗物当人眼　但有泉声洗我心
世のうさもはなれておつる滝のをとに心のそこもいまぞすみぬる（四七五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五四・二四八九「宿霊巌寺上院」
　高高白月上青林　客去僧帰独夜深　葷血屏除唯対酒　歌鐘放散秪留琴
　更無俗物当人眼　但有泉声洗我心　最愛暁亭東望好　太湖煙水緑沈沈
〈句題他出〉『千載佳句』釈氏部・寺・一〇二五、『和漢朗詠集』雑部・山寺・五七九
〈同一句題〉（土48）、村田春海『琴後集』四五三「但有泉声洗我心」

（慈70）
　尽日坐復臥　不離一室中　中心本無繫　亦与出門同
ひとりのみ草の戸ざしにあけくれてつたはふ松をよそにみるかな（一九七六）
（定70）
　尽日坐復臥　不離一室中　中心本無繫　亦与出門同
あくがるる心ひとつぞさしこめぬまきのいたどのあけくるる空（四七六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二三五「夏日」
　東窓晩無熱　北戸涼有風　尽日坐復臥　不離一室中　中心本無繫　亦与出門同

（慈71）
　外順世間法　内脱区中縁　進不厭朝市　退不恋人寰
身のほかにわが身ありとや人は見む心になきは心なりけり（一九七七）
（定71）
　進不厭朝市　退不恋人衆
さとちかきすみかをわきてしたはねど仕るみちをいとふともなし（四七七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二七〇「贈杓直」
　（前略）
　早年以身代　直赴逍遥篇　近歳将心地　迴向南宗禅

外順世間法　内脱区中縁　進不厭朝市　退不恋人寰
自吾得此心　投足無不安　体非道引適　意無江湖閑
有興或飲酒　無事多掩関　寂静夜深坐　安穏日高眠
秋不苦長夜　春不惜流年　委形老小外　忘懐生死間
昨日共君語　与余心膂然　此道不可道　因君聊強言

（慈72）
深閉竹間扉　静掃松下地　独嘯晩風前　何人知此意
夕ざれのながめを人やしらざらむ竹のあみ戸に庭のまつ風（一九七八）
（定72）
深閉竹間扉　静払松下地　独嘯晩風前　何人知此意
ゆふまぐれ竹の葉山にかくろへて独やすらふ庭の松かぜ
（寂30）
深閉竹間扉　静掃松下地
ならひある夕の空をしのべとや竹のあみ戸に松風ぞふく（三〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二五八「閑居」
深閉竹間扉　静掃松下地　独嘯晩風前　何人知此意
看山尽日坐　枕帙移時睡　誰能従我遊　使君心無事

（慈73）
頽然環堵客　蘿蔧為巾帯　自得此道来　身窮心甚泰
こけのおびにあきの山もと夕まぐれ中中いまは物もおもはず（一九七九）
（定73）
頽然環堵客　蘿蔧為巾帯
あらはれてうき世へだつる色やこれ山ぢに深き苔の狭衣（四七九）
（寂31）
頽然環堵客　蘿蔧為巾帯
いにしへはおもはで過し身のはての中中やすき苔の袖かな（三一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二三〇「遣懐」
（前略）
操之多惴慄　失之又悲悔　乃知名与器　得喪俱為害
頽然環堵客　蘿蔧為巾帯　自得此道来　身窮心甚泰

（慈74）
心足即為富　身閑仍当貴　富貴在此中　何必居高位
谷かげや心のにほひ袖にみちぬたかねの花の色もよしなし（一九八〇）
（定74）
心足即為富　身閑仍当貴　富貴在此中　何必居高位
なげかれずおもふ心にそむかねば宮もわら屋もをのがさまざま（四八〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二三四「閑居」
（前略）
綿袍擁両膝　竹几支双臂　従旦直至昏　身心一無事
心足即為富　身閑乃当貴　富貴在此中　何必居高位
（後略）

（慈75）
看雪尋花翫風月　洛陽城裏七年閑
思ふべしすみかや心はなと月と都にみても七とせはへぬ（一九八一）
（定75）
看雪尋花翫風月　洛陽城裏七年閑
人とはぬ月と花とにあけくれてみやこともなし年年の空（四八一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六三・三〇一八「閑吟」
貧窮汲汲求衣食　富貴営営役心力　人生不富即貧窮　光陰易過閑難得
我今幸在窮富間　雖在朝庭不入山　看雪尋花翫風月　洛陽城裏七年閑

述懐十首
（慈76）
置心世事外　無憂亦無喜
うしつらしと思ひしことのうせ行くやこの世のほかの心なるらん（一九八二）
（定76）
置心世事外　無憂今無喜
心からつつむも袖のよそなればくたすばかりのものもおもはず（四八二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二三六「適意二首（ノ一）」
（前略）
一朝帰渭上　泛如不繫舟　置心世事外　無喜亦無憂

終日一蔬食　終年一布裘　寒来弥懶放　数日一梳頭
（後略）
〈同一句題〉山科言国『言国詠草』七一五「無憂（ナシ ウレイモマタ）亦無喜（ヨロコヒモ）」
（慈77）
欲留年少待富貴　富貴不来年少去
心にはなほいかがともいはしろの松ばかりにやとしのつもらむ（一九八三）
（定77）
欲留年少待富貴　富貴不来年少去
さりともと待こしほどはすぎの戸につもれば人の月ぞふりゆく（四八三）
（寂32）
欲留年少待富貴　富貴不来年少去
かげあらばもれじといひしゆかりまでたのみむなしき松のおい末（三二）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五八〇「浩歌行」
（前略）
朱顔日漸不如故　青史功名在何処　欲留年少待富貴　富貴不来年少去
去復去兮如長河　東流赴海無迴波　賢愚貴賤同帰尽　北邙塚墓高嵯峨
（後略）
（慈78）
春去有来日　我老無少時
はまゆふやとしをかさぬるみくまののうらみはおいののこりなりけり（一九八四）
（定78）
春去有来日　我老無少時
鶯のふるすはさらにかすめどもうき老らくの帰る日ぞなき（四八四）
（寂33）
春去有来日　我老無少時
猶春をみねの霞にたのめても待日すくなき老の行すゑ（三三）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二三九「晩春沽酒」
百花落如雪　両鬢垂作糸　春去有来日　我老無少時
人生待富貴　為楽常苦遅　不如貧賤日　随分開愁眉
（慈79）
我有一言君記取　世間自取苦人多
そめてもつわがことのはを手向くれば神もあはれとてらさざらめや（一九八五）
（定79）
我有一意君記取　世間自取苦人多
いとまなきあまのつりなわうちはへてうきもしづみもあはれ世の中（四八五）
（寂34）
我有一言君記取　世間自取苦人多
しるや君たれも見るめの心からをのれと浪に袖ぞしほるる（三四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六五・三二五六「感興二首（ノ二）」
魚能深入寧憂釣　鳥解高飛豈触羅　熱処先争炙手去　悔時其奈噬臍何
樽前誘得猩猩血　幕上偸安燕燕窠　我有一言君記取　世間自取苦人多
（慈80）
従遣人生都是夢　夢中歓笑亦勝愁
うつつかもあるかこころのありがほに夢にゆめ見る身とはしらずや（一九八六）
（定80）
従導人生都是夢　夢中歓咲忽勝愁
おほかたのうき世にながき夢のうちも恋しき人をみてはたのまじ（四八六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五四・二四六九「城上夜宴」
留春不住登城望　惜夜相将秉燭遊　風月万家河両岸　笙歌一曲郡西楼
詩聴越客吟何苦　酒被呉娃勧不休　従道主人都是夢　夢中歓笑亦勝愁
〈同一句題〉（千115）
（慈81）
生死尚復然　其余安是遣
きえぬるかきえぬにも又身をなしてふじのけぶりに春の曙（一九八七）
（定81）
生死尚復愁　其余安足遣
たまきはるいのちをだにもしらぬ世にいふにもたえぬ身をばなげかず（四八七）
（寂35）
生死尚復然　其余安足道
きえてをく身は朝露のあだなれば夕風をまつ恨だになし（三五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六九・三五二八「逸老」
（前略）
筋骸本非実　一束芭蕉草　眷属偶相依　一夕同棲鳥
去何有顧恋　住亦無憂悩　生死尚復然　其余安足道
是故臨老心　冥然合玄造

（慈82）
身心一無繫　浩浩如虚舟
わたつみやつながぬ舟の島がくれ吹くともいはじおきつしほかぜ（一九八八）
（定82）
身心一無繫　浩浩如虚舟
うら風や身をも心にまかせつつゆくかたやすきあまのつり舟（四八八）
（寂36）
身心一無繫　浩浩如虚舟
つながれぬ心をいへばうき舟の風のたよりをまつ心地して（三六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻七・〇二九八「詠意」
（前略）
或吟詩一章　或飲茶一甌　身心一無繫　浩浩如虚舟
富貴亦有苦　苦在心危憂　貧賤亦有楽　楽在身自由

（慈83）
委形老少外　忘懐死生間
おもひとくにかたちなければ心なし人てふ名をもけがしけるかな（一九八九）
（定83）
委形老少外　忘壊死生間
おきふしも人のとがめぬ床の上は長もしらず秋の夜の霜（四八九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二七〇「贈杓直」→（慈定71）に既出

（慈84）
我若未忘世　雖閑心亦忙　世若未忘我　雖退身難蔵　我今異於是　身世交相忘
世をもいとふまたうきよにもいとはれてとまる心のなきぞうれしき（一九九〇）
（定84）
我若未忘世　雖閑心忽忙　世若未忘我　雖退身難蔵　我今異於是　身世交相忘
よの中もいとふ心も軒におふる草の葉ふかく霜やをくらん（四九〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六一・二九五八「詠興五首并序（ノ三「池上有小舟」）」
（前略）
寅縁潭島間　水竹深青蒼　身閑心無事　白日為我長
我若未忘世　雖閑心亦忙　世若未忘我　雖退身難蔵
我今異於是　身世交相忘

〈同一句題〉『風雅集』雑下・一九四二・宗尊親王「我若未忘世　雖閑心亦忙　世若未忘我　雖退身難蔵といふ事を」

（慈85）
人生無幾何　必寄天地間　心有千載憂　身無一日閑
ながむればあまつみ空に風たちてただなに事もゆふ暮の空（一九九一）
（定85）
人生無幾何　如寄天地間　心有千載憂　身無一日閑
したむせぶ色やみどりの松風のひと日やすめぬ身をしほりつつ（四九一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇二〇六「秋山」→（慈定60・寂25）に既出

無常十首
（慈86）
親愛日零落　存者仍別離
わがたぐひ今はなぎさに行く舟のまたわかるるにしほたれにけり（一九九二）
（定86）
親愛自零落　存者仍別離
むさしのの草葉の露もをきとめず過る月日ぞ長別路（四九二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四二四「白髪」
（前略）
親愛日零落　在者仍別離　身心久如此　白髪生已遅
由来生老死　三病長相随　除却無生念　人間無薬治

〈同一句題〉『新勅撰集』雑三・一二六二・八条院高倉「文集、親愛自零落存者仍別離といふ心をよみ侍りける」

（慈87）

逝者不重廻　存者難久留
此世にはふたたびあはぬ別路にとどまる人のなきぞかなしき（一九九三）
（定87）
逝者不重廻　存者難久留
かへらぬもとまりがたきも世の中はみづゆく川におつる紅葉ば（四九三）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇二二三「効陶潜体詩十六首（ノ十一）」
（前略）
神仙但聞説　霊薬不可求　長生無得者　挙世如蜉蝣
逝者不重迴　存者難久留　踟蹰未死間　何苦懐百憂
（慈88）
往事眇茫都似夢　旧遊零落半帰泉
思ひいづるむかしは夢のうたたねにともなき袖のぬれぬ日ぞなき（一九九四）
（定88）
往事眇茫都似夢　旧遊零落半帰泉
見しはみな夢のただぢにまがひつつむかしは遠く人はかへらず（四九四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一七・一一〇七「十年三月三十日別微之於澧上十四年三月十一日夜遇微之於峡中停舟夷陵三宿而別言不尽者以詩終之因賦七言十七韻以贈且欲寄所遇之地与相見之時為他年会話張本也」
（前略）
歯髪蹉跎将五十　関河迢遰過三千　生涯共寄滄江上　郷国俱抛白日辺
往事渺茫都似夢　旧遊零落半帰泉　酔悲灑涙春杯裏　吟苦支頤暁燭前
（後略）
〈句題他出〉『千載佳句』人事部・感嘆・五一七、『和漢朗詠集』懐旧・七四三
〈同一句題〉（土45）、（伏6）、『新葉集』哀傷・一三二三・花山院師賢「旧遊零落半帰泉といふことを読み侍りける」、香川景樹『桂園一枝』七五五「往時眇茫都似夢」
（慈89）
秋風満袂涙　泉下故人多
わたり河ふかくも思ふゆふ暮の袖の涙に秋風ぞふく（一九九五）
（定89）
秋風満衫涙　泉下故人多
老らくのあはれ我よもしら露の消ゆく玉に涙おちつつ（四九五）
（寂37）
秋風満衫涙　泉下故人多
ながきよに消にし露の名残とや秋の涙の袖にみつらむ（三七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二四・三〇七九「（微之敦詩晦叔相次長逝歸然自傷）又一首」
長夜君先去　残年我幾何　秋風満衫涙　泉下故人多
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・懐旧・七四一
〈同一句題〉『続門葉和歌集』秋上・二六一・釈迦院弥鶴丸「文集の中に秋風満袂涙といへるこころを」
（慈90）
原上新墳委一身　城中旧宅有何人
苔の下にむなしくくちん心にもわが故郷にたれしのぶらん（一九九六）
（定90）
原上新墳委一身　城中旧宅有何人
とりべ山むなしき跡はかずそひて見し古郷の人ぞまれなる（四九六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六七七「過高将軍墓」
原上新墳委一身　城中旧宅有何人　妓堂賓閣無帰日　野草山花又欲春
門客空将感恩涙　白楊風裏一霑巾
（慈91）
生去死来都是幻　幻人哀楽装何情
いきしぬるならひはすべてまぼろしの花みるやどに山おろしのかぜ（一九九七）
（定91）
生去死来都是幻　幻人哀楽繋何憶
さく花もねをなくむしもをしなべてうつせみの世にみゆる幻（四九七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一五・〇八九七「放言五首幷序（ノ五）」
泰山不要欺毫末　顔子無心羨老彭　松樹千年終是朽　槿花一日自為栄
何須恋世常憂死　亦莫嫌身漫厭生　生去死来都是幻　幻人哀楽繋何情
（慈92）

早世身如風裏灯　暮年髪作鏡中糸
ともす火に風こそわたれますかがみむなしきかげの身をいかにせん（一九九八）
（定92）
早世身如風裏灯　暮年髪作鏡中糸
世中は木草もたへぬ秋風になびきかねたるよひの灯（四九八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五八・二八五一「夭老」
早世身如風裏燭　暮年髪似鏡中糸　誰人断得人間事　少夭堪傷老又悲
（慈93）
幻世春来夢　浮生水上泡
とにかくにうき世を春の夢ぞとも水のあはれに思ひしれとや（一九九九）
（定93）
幻世春来夢　浮生水上漚
淵となるしがらみもなき早瀬河うかぶみなわぞ消てかなしき（四九九）
（寂38）
幻世春来夢　浮世水上漚
世中は春の夢路にせく川のみなはにめぐる程ぞはかなき（三八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五七・二七一七「想東遊五十韻并序」
（前略）
物表疎形役　人寰足悔尤　蛾須遠灯燭　兎勿近置罘
幻世春来夢　浮生水上漚　百憂中莫入　一酔外何求
（後略）
〈同一句題〉（千111・112）、小沢蘆庵『六帖詠草』一六一二「幻世去来夢」、香川景樹『桂園一枝』八三六「或人の追善の題に、幻世春来夢」
（慈94）
耳裏頻聞故人死　眼前唯覚少年多
見るもきくもあさぢにすがる夕露にあなはかなやとあらし吹くなり（二〇〇〇）
（定94）
耳裏頻聞故人死　眼前唯覚少年多
みどり子ぞありふるままの友と見てなれしはうとき夕暮の空（五〇〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三七七「悲歌」
白頭新洗鏡新磨　老逼身来不奈何　耳裏頻聞故人死　眼前唯覚少年多
塞鴻遇暖猶迴翅　江水因潮亦反波　独有衰顔留不得　酔来無計但悲歌
（慈95）
古墓何代人　不知姓与名　化作道旁土　年年春草生
うづもれぬ名をだにきかぬ苔のうへにいくたび草のおひかはるらむ（二〇〇一）
（定95）
古墓何代人
つかふりてそのよもしらぬ春の草さらぬ別と誰したひけん（五〇一）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇〇六六「続古詩十首（ノ二）」
（前略）
古墓何代人　不知姓与名　化作路傍土　年年春草生　感彼忽自悟　今我何営営
法門五首
（慈96）
追想当時事　何殊昨夜中　自我学心法　万縁成一空
野も山もみなおほ空に成りにけりいかなる道に心行くらむ（二〇〇二）
（定96）
追想当時事　何殊昨夜中　自我学心法　万縁成一空
おほ空のむなしき法を心にて月に棚引雲ものこらず（五〇二）
（寂39）
追想当時事　何殊昨夜中　自我学心法　万縁成一空
いつまでかむなしき空にたどりけん雲も霞も色ぞのこらぬ（三九）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四六〇「夢裴相公」
（前略）
既寤知是夢　憫然情未終　追想当時事　何殊昨夜中
自我学心法　万縁成一空　今朝為君子　流涕一霑胸
（慈97）
廻念発弘願　願此見在身　但受過去報　不結将来因
むすばじと忍ぶ契の行へかな過ぎにしかたを思ひとくにも（二〇〇三）
（定97）
廻念発弘願　願此現在身　但受過去報　不待将来因

つらき身のもとのむくひはいかがせんこの世の後の夢はむすばじ（五〇三）

（寂40）

回念発弘願　願此現在身　但受過去報　不結将来因

さてくちぬ猶身にむすぶ契あらばこの世ながらもとかまほしきに（四〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四八四「（自覚二首）又一首」

（前略）

廻念発弘願　願此見在身　但受過去報　不結将来因

誓以智恵水　永洗煩悩塵　不将恩愛子　更種憂悲根

（慈98）

誓以智恵水　永洗煩悩塵

さとるべき御法の水のかひもあらばまよふちりをもすすがざらめや（二〇〇四）

（定98）

誓以智恵水　永洗煩悩塵

さとりゆく心の水にあらはればつもりてよものちりものこらじ（五〇四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四八四「（自覚二首）又一首」

↓（慈定97・寂40）に既出

〈同一句題〉『玉葉集』釈教・二七一〇・藤原忠良「誓以智恵水　永洗煩悩塵」、『夫木抄』雑一六・一六二六五・八条院高倉「誓仏智恵水　永洗煩悩塵」

（慈99）

由来生老死　三病長相随　除却無生忍　人間無薬治

さとり行く聖の位それならで三のやまひを誰かのぞかむ（二〇〇五）

（定99）

由来生老死　三病長相随　除却無生忍　人間無薬治

舟のうちにうきよの岸をはなれてやしらぬ薬の名をば尋ねん（五〇五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四二四「白髪」↓（慈定86）に既出

（慈100）

此身何足恋　万劫煩悩根　此身何足厭　一聚虚空塵

身をよせてこひじいとはじ花桜うきねよりこそ思ひそめけれ（二〇〇六）

（定100）

此身何足恋　万劫煩悩根　此身何足厭　一聚虚空塵

おほ空にただよふほどもありがほにうかべるちりをなにかはらはん（五〇六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五七七「逍遥詠」

亦莫恋此身　亦莫厭此身　此身何足恋　万劫煩悩根

此身何足厭　一聚虚空塵　無恋亦無厭　始是逍遥人

〈同一句題〉（円8）、『新後拾遺集』釈教・一五〇五・花園院「此身何足厭　一聚虚空塵」

（⑦慈円・⑧藤原定家・⑨寂身「文集百首」ここまで）

⑩源光行『百詠和歌』二四〇首（百1～百240・百異1～百異3）

【略解説】

源光行作。元久元年（一二〇四）一〇月成立。唐の李嶠の詩集『李嶠百詠』所載の一二〇首の各詩から二句ずつを選び、その句ごとに張庭芳の注解本を利用した注を付し、それを題として和歌を詠作したもの。『蒙求和歌』『新楽府和歌』とともに、光行の漢詩文和歌化三部作をなす。『李嶠百詠』は天象部・坤儀部・芳草部・嘉樹部・霊禽部・祥獣部・居所部・服玩部・文物部・武物部・音楽部・資材部を立て、各部につき一〇首の漢詩が収められている。それを踏襲した上で、各詩から二句を題として選び、一句につき一首を詠んでいる。各部二〇首、計二四〇首、跋文に七言絶句と和歌が各二首付されている。

【参考】

池田利夫『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠』（笠間書院、一九六九年）所収「百詠和歌と李嶠百詠」など

【底本】新編国歌大観（底本：内閣文庫蔵乙本）

※京都国立博物館断簡（『新編国家大観』解題所収）より独自歌のみ、（百異1～百異3）として収録した。

【本文】

天象部

日

（百1）

日出扶桑路

谷の戸のふかき木末を出づる日にたかねの里はいまぞあけ行く（一）

（百2）

傾心比葵藿

二神山のみねの朝日にあふひ草おのがかげのみかたぶきにける（二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・日・〇〇一

旦出扶桑路　遥昇若木枝　雲間五色満　霞際九光披

東陸蒼竜駕　南郊赤羽馳　傾心比葵藿　朝夕奉堯曦

月

（百3）

莫開二八時

さきそむるいろにはれゆく月影のくもるは花のおつるなりけり（三）

（百4）

分暉度鵲鏡

へだてこし昔のかげもかへりきてあひ見る月の鏡なりけり（四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・月・〇〇二

桂生三五夕　莫開二八時　分暉度鵲鏡　流影入蛾眉

皎潔臨疏牖　玲瓏鑑薄帷　願陪北堂宴　長賦西園詩

星

（百5）

蜀郡霊槎転

空にしる人もありけりあまの河くものうき木の波のかよひ路（五）

（百6）

今宵潁川曲　誰識聚賢人

いかにして星のやどりにかよひけんともにあふよのともしびのまど（六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・星・〇〇三

蜀郡霊槎転　豊城宝気新　将軍臨北塞　天子入西秦

未作三台輔　寧為五老臣　今宵潁川曲　誰識聚賢人

風

（百7）

松声入夜琴

ふかぬまはいつかはことのねにかよふ風こそ松のしらべなりけれ（七）

（百8）

若至蘭台下　還掃楚王襟

心あれやみゆきのあきをしりがほに花のうてなをはらふゆか風（八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・風・〇〇四

落日正沈沈　微風生北林　帯花疑鳳舞　向竹似竜吟

月影臨秋扇　松声入夜琴　若至蘭台下　還払楚王襟

〈句題他出〉『相撲立詩歌合』九・斎宮女御・「松声入夜琴」

雲

（百9）

煙熅万年樹

行すゑは雲ゐはるかにしらがしの枝にも葉にもよろづよの色（九）

（百10）

掩映三秋月

はれぬよの空もおもへばうきものや心と月のおぼろなるかは（一〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・雲・〇〇五

大梁白雲起　氛氲殊未歇　錦文触石来　蓋影凌天発

煙熅万年樹　掩映三秋月　会入大風歌　従竜起金闕

煙

（百11）

瑞気凌丹閣

しほがまの煙に似たるうすぐもや人のうらみのはれにけるいろ（一一）

（百12）

松篁暗晩暉

やま人のゆふげのほかにたなびくはたかねの松のけぶりなりけり（一二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・煙・〇〇六

瑞気凌丹閣　空濛上翠微　迴浮双闕路　遥払九仙衣

桑柘凝寒色　松篁晴晩暉　還当紫霄上　時接白雲飛

露

（百13）
夜警千年鶴
秋の夜はふけにけらしなあしたづのさはべの露に子をおもふ声（一三）
（百14）
朝晞八月風
露の身の草のいほりにあくるまはさせぼがすゑをよそにやはみる（一四）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・露・〇〇七
滴瀝明花苑　蔵蕤泫竹叢　玉垂丹棘下　珠湛緑荷中
夜警千年鶴　朝晞八月風　願凝仙掌内　長奉未央宮

霧

（百15）
漢帝出平城
旅人のきりにまよひしみちしもぞわが身ひとつのはれまなりける（一五）
（百16）
別有丹山霧
たれもみき昨日の空の夕霧にけさ山のはのしぐるべしとは（一六）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・霧・〇〇八
曹公之夢沢　漢帝出平城　別有丹山霧　玲瓏素月明
類煙迷更重　方雨散還軽　儻入飛熊夢　寧思玄豹情

雨

霊童出海見
（百17）川上やひま行くこまのはやきせにあくるほどなく夕立の空（一七）
神女向山廻
（百18）雲となり雨となりける名残までおもへばかなしゆめの旧里（一八）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・雨・〇〇九
西北雲膚起　東南雨足来　霊童出海見　神女向山廻
斜影風前合　円文水上開　十旬無破塊　九土信康哉

雪

（百19）
瑞雪警千里
雪ふかきあづまのおくの千さとまであきらけきよを白川のせき（一九）
（百20）
大周天闕路　今日海神朝
跡なしとおもひし雪のしるべにぞふかきこころのすゑはとほりし（二〇）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』乾象部・雪・〇一〇
瑞雪驚千里　従風暗九霄　地疑明月夜　山似白雲朝
逐舞花光散　臨歌扇影飄　大周天闕路　今日海神朝

坤儀部

山

（百21）
古壁丹青色
あき山のこずゑはやすくうつしけりしかのねのみぞ筆にまかせぬ（二一）
（百22）
已開封禅処　希謁聖明君
花の山な高き峰の跡ふりて春のみゆきにいつかあふべき（二二）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・山・〇一一
仙嶺鬱氤氳　峨峨上翠氛　泉飛一道帯　峰出半天雲
古壁丹青色　新花錦繡文　已開封禅処　希謁聖明君

石

（百23）
巌花鏡裏発
むかしみしにほひはいづら鏡山いはねの花のかげばかりして（二三）
（百24）
入宋星初隕
谷水のいしまにもかくやどりけりあまの河原のほしのひかりは（二四）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・石・〇一二
宗子維城固　将軍飲羽威　巌花鏡裏発　雲葉錦中飛
入宋星初落　過湘燕早帰　儻因持補極　寧復想支機

原

（百25）
江淹起恨年
しもうづむまくずが原や秋風のくれゆくごとにうらみけるあと（二五）

（百26）
長在鶺鴒篇
旧里はさぞなこひしき水鳥のおもはぬくさの原になく声（二六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・原・〇一三
王粲銷夏日　江淹起恨年　帯川遥綺錯　分隰迴阡眠
膴膴横周甸　莓莓開晋田　方知急難響　長在鶺鴒篇

野

（百27）
鶉飛楚塞空
これやこのみやこのたつみ鶉なくふしみのおくの野べの夕暮（二七）

（百28）
独在傅巖中
草枕ゆめぢにさきしいろながらさむるうつつにみよし野の花（二八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・野・〇一四
鳳去秦郊迥　鶉飛楚塞空　蒼梧雲影去　涿鹿霧光通
草暗平原緑　花明春径紅　誰言版築士　独在傅巖中

田

（百29）
菖菜布竜鱗
やましろのよどののあやめおひにけり鳥羽田のさなへ今やとるらん（二九）

（百30）
嘉禾九穂新
きのふみし山田の早苗ひと本にいくへなみよる今朝のほだちぞ（三〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・田・〇一五
貢禹懐書日　張衡作賦晨　杏花開鳳畛　菖葉布竜鱗
瑞麦両岐秀　嘉禾九穂新　寧知帝王力　撃壤自安貧

道

（百31）
玉関塵似雪
せきの戸を雪にしらむとみしはらや沙にあくるそらめなりけり（三一）

（百32）
今日中衢士　堯樽更可逢
せきのとをささでいくかになりぬらんみちある御代にあふさかの春（三二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・道・〇一六
銅馳分鞏洛　剣閣抵臨邛　紫微三千里　青楼十二重
玉関塵似雪　金穴馬如竜　今日中衢士　堯樽更可逢

海

（百33）
万里大鵬飛
越の海そらとぶ程はおほとりの影ばかりこそ底にみえけれ（三三）

（百34）
珠含明月暉
三か月の影とひとつにみし珠はおなじなみまに有明のそら（三四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・海・〇一七
習坎疏丹壑　朝宗合紫微　三山巨鼇踊　万里大鵬飛
楼写春雲色　珠含明月輝　会当添霧露　方遂衆川帰

江

（百35）
霞津錦浪動
かすみしくしが津の春を来てみれば花のにしきをあらふさざなみ（三五）

（百36）
濤如白馬来
難波江のあしのはなげのこまの色としづみしあとの浪のおもかげ（三六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・江・〇一八
日夕三江望　霊潮万里廻　霞津錦浪動　月浦練光開
瀬似黄牛去　濤如白馬来　英霊已傑士　誰識卿雲才

河

（百37）
河出崑崙中
浪のおとも行すゑとほく響くなりよよにたえせぬ玉川の水（三七）

（百38）
徳水千年変
水の色もまだすみやらずこのよにはかげやどすべき人やなからむ（三八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・河・〇一九
河出崑崙中　長波接漢空　桃花生馬頰　竹箭入竜宮
徳水千年変　栄光五色通　若披蘭葉検　還沐上皇風

洛

（百39）
元礼期仙客
かぎりあればよもぎのしまにすむ人のなごりもかくやつゆけかるべき（三九）

（百40）
陳王睹麗人
山姫のかすみの袖にあくがれぬ風にひれふるあけぼのの空（四〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』坤儀部・洛・〇二〇
九洛韶光媚　三川物候新　花明珠鳳浦　日映玉鶏津
元礼期仙客　陳王睹麗人　玄亀方錫瑞　緑字佇来臻

芳草部

蘭

（百41）
虚室重招尋
ふぢばかまなづさふ露の名残までいくかきえせぬにほひなるらん（四一）

（百42）
雪麗楚王琴
草のいほに雪をしらべし琴の音のなごりにふるは涙なりけり（四二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・蘭・〇二一
虚室重招尋　忘言契断金　英浮漢家酒　雪麗楚王琴
広殿軽香発　高台晩吹吟　汾河応擢秀　誰肯訪山陰

菊

（百43）
金精九日開
なが月のきくもあはれと思ひしれここぬかごとのはなのまとゐを（四三）

（百44）
霍靡寒潭側
白菊のそこにうつろふ色みればしづえをわけて落つる谷水（四四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・菊・〇二二
玉律三秋暮　金精九日開　栄舒洛媛浦　香泛野人杯
霍靡寒潭側　芼茸暁岸隈　黄花今日晩　無復白衣来

竹

（百45）
蕭条含曙氛
霜がれの冬にはよそのみどりにてなつはあきある竹のした陰（四五）

（百46）
誰知湘水上　流涙独思君
よをかさね物おもふ袖とひとつにや竹のすゑ葉も涙おちける（四六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・竹・〇二三
高幹楚江濆　蕭条含曙氛　白花揺鳳影　青節動竜文
葉払東南日　枝捎西北雲　誰知湘水上　流涙独思君

藤

（百47）
神農嘗薬罷
藤浪のにほはざりせば老いにけるまつのたのみをなににかけまし（四七）

（百48）
花分竹葉杯
かすみくむ春のたもとのにほふまで色こき藤のはなのさかづき（四八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・藤・〇二四

吐葉依松磴　舒苗長石台　神農嘗薬罷　質子寄書来
色映蒲萄架　花浮竹葉杯　金堤不相識　玉潤幾年開

萱

（百49）
忘憂自結叢
野辺の色に秋の心もわすれ草むしは恨むるころときけども（四九）

（百50）
香伝少女風
天つ風をとめの袖をそめてけり野原のはなのかをさそひきて（五〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・萱・〇二五
履歩尋芳草　忘憂自結叢　葉舒春夏緑　花吐浅深紅
色湛仙人露　香伝少女風　含貞北堂下　曹植動文雄

萍

（百51）
二月虹初見　三清蟣正浮
春の色のたなびく空を知りがほにやがてなみよる池のうき草（五一）

（百52）
蘋随旅客遊
誰もかく春の浪路にうき草やさそふ水あらばあくがれぬべし（五二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・萍・〇二六
二月虹初見　三清蟣正浮　青蘋含吹転　紫葉映波流
屢逐明神薦　頻随旅客遊　既能甜似蜜　還冀就王舟

菱

（百53）
東平春溜通
くみてしる人もありけりひしとりしいもがすがたの池のこころを（五三）

（百54）
潭花発鏡中
ひしうつる鏡や見しと人とはばうきぬの池のかげをこたへん（五四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・菱・〇二七
鉅野昭光媚　東平春溜通　影揺江浦月　香引棹歌風
日色翻池上　潭花発鏡中　五湖多賞楽　千里望難窮

瓜

（百55）
欲識東陵味　青門五色菰
門田にはいつつの色と見しかども心のたねはふたつなかりき（五五）

（百56）
竜蹄遠珠履
旅人のくつの通ひ路こころせよこまのわたりに露おちぬとも（五六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・瓜・〇二八
欲識東陵味　青門五色瓜　竜蹄遠珠履　女臂動金花
六字方呈瑞　三仙実可嘉　終期奉絺綌　謁帝佇非賒

茅

（百57）
堯帝成茨罷
ながきよのすみかとこれをしらで見ばあやしかるべき草のいほかな（五七）

（百58）
殷湯祭雨旋
浅茅生やめづらしかりし雨のおとはなみだよりこそふりはじめけれ（五八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・茅・〇二九
楚国供王日　衡陽入貢年　麞包青野外　鵁嘯綺楹前
堯帝成茨罷　殷陽祭雨旋　方期大君錫　不懼小巫捐

荷

（百59）
魚戯排細葉
風ふかでなみよる池の荷かなうき葉がしたにうをさわぐらし（五九）

（百60）
亀浮見緑池
荷葉のみどりの池にすむ亀のかげにちとせはあらはれにけり（六〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』芳草部・荷・〇二〇
新溜満澄陂　円荷影若規　風来香気遠　日落蓋陰移
魚戯排細葉　亀浮見緑池　魏朝難接影　楚服且同枝

嘉樹部

松

（百61）
鶴棲君子樹
やどしむる鶴の八千よの老木までいかにくちせぬ松のちぎりぞ（六一）

（百62）
風掃大夫枝
ふらぬ日はおなじみどりの松が枝に雨のめぐみの春の一しほ（六二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・松・〇二一
鬱鬱高山表　森森幽澗垂　鶴棲君子樹　風払大夫枝
百尺条陰合　千年蓋影披　歳寒終不改　勁節幸君知

桂

（百63）
花満自然秋
風かをる春のにほひをみつるかなかつらの里の秋の木ずゑに（六三）

（百64）
仙人葉作船
かつら河木葉の船にさをさして浪をわたるは山おろしのかぜ（六四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・桂・〇二二
未殖銀宮裏　寧移玉殿幽　枝生無限月　光満自然秋
俠客条為馬　仙人葉作舟　願君期道術　攀折可淹留

槐

（百65）
暮律移寒火
うづみ火となりて霜こそきえやらね雪にこりつむしづのつま木は（六五）

（百66）
鴻儒訪道来
花にきほひもみぢあらそふ友なれやこのした陰のみちもなきまで（六六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・槐・〇二三
暮律移寒火　春宮長旧栽　葉生馳道側　花落鳳廷隈
烈士懐忠至　鴻儒訪道来　何当赤墀下　疎幹擬三台

柳

（百67）
楼際萊如雲
いとはまし月にのぼりし秋ならばみどりにくもるのきの柳を（六七）

（百68）
夜星浮竜影
誰かみる天川原のたま柳雲に浪よる春のひかりを（六八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・柳・〇二四
楊柳正氤氲　含煙総翠氛　檐前花似雪　楼際葉如雲
星夜浮竜影　春池写鳳文　短簫何以奏　攀折為思君

桐

（百69）
孤秀嶧陽峰
おく山のたかねの桐にのこるなり身にしむ秋の風のしらべは（六九）

（百70）
秋葉弄珪陰
露のそめ風のみがきしもみちばはそよぐも玉のひびきなりけり（七〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・桐・〇二五
孤秀嶧陽岑　亭亭出衆林　春花雑鳳影　秋葉弄珪陰
忽被夜風激　遂逢霜露侵　不因将入爨　誰為作鳴琴

桃

（百71）
裏露似啼粧
朝露のくれなゐにほふ花のかほこぼるる色ぞなみだなりける

（百72）

仙人路漸長
水上や浪路の花にさをさすもこかげにすむもおなじ旅人

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・桃・〇三六
独有成徯処　紅桃発井傍　含風如笑臉　挹露似啼粧
隠士顔応改　仙人路漸長　還欣上林苑　千歳奉君王

李
（百73）
花明玉井春
春風になみよる花のしづくまでむすぶ手にほふ玉の井の水
（百74）
特用表真人
さきそむる花の木末はやそぢまでかすみにこもるおい木なりけり

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・李・〇三七
潘岳閒居暇　王戎戲陌晨　蝶来芳径馥　鶯囀合枝新
葉暗青房晩　花明玉井春　方知有霊幹　特用表真人

梨
（百75）
秋来葉早紅
伊せ島やいくしほ風のそめつらんからくれなゐのおふの浦なし（七五）
（百76）
還冀識張公
移しうゑしただひともとは夏山にたぐひもなしの木末なりけり（七六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・梨・〇三八
擅美玄光側　伝芳瀚海中　鳳文疎蜀郡　花影麗新豊
春暮条応紫　秋来葉早紅　若今逢漢主　還冀識張公

梅
（百77）
院樹斂寒光　梅花独早芳
雪きえてめぐむ柳もあるものをまだふる年の梅のはつ花（七七）

（百78）
若能長止渇
旅のそら思ひの外になぐさみぬすゑを梅津のさきにきくより（七八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・梅・〇三九
院樹斂寒光　梅花独早芳　雪含朝暝色　風引去来香
舞袖廻春径　歌塵起画梁　若能長止渇　何暇泛瓊漿

橘
（百79）
千株布葉繁
千もとまでおもひおきける立花のにほひは家の風にのこれり（七九）
（百80）
玉蘊含霜動
吹く風になみよる霜やたちばなの花ちる里の庭のおもかげ（八〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』嘉樹部・橘・〇四〇
万里盤根植　千株布葉繁　既栄潘子賦　方暁陸生言
玉蘊含霜動　金衣逐吹翻　願随潮水曲　長茂上林園

霊禽部
鳳
（百81）
有鳥自丹穴　其名曰鳳凰
山風のねぐらの枝もならさぬをのどけきよとや鳥はいづらん（八一）
（百82）
九包応霊瑞
ふかき山のきりの木末にすむ鳥の心のはなはひとつ色かは（八二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・鳳・〇四一
有鳥自丹穴　其名曰鳳凰　九苞応霊瑞　五色成文章
屢向秦楼側　頻過洛水傍　鳴岐今已見　阿閣佇来翔

鶴
（百83）

翺翔一万里
野原ゆくつばめも空にかよひなん雲ゐの鶴の友となりなば（八三）
（百84）
来去幾千年
三千代へてあれにし里に鳴く鶴の声はむかしのあるじなりけり（八四）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・鶴・〇四二
黄鶴遠聯翩　従鸞下紫煙　翺翔一万里　来去幾千年
已憩青田側　来遊紫禁前　莫言空警露　猶冀一聞天

烏
（百85）
日路朝飛急
いまぞしる山の端いづるやたがらすかげは朝日とひとつなりけり（八五）
（百86）
白首何年改
故郷をへだてはてやや山がらすしろきにかへる色なかりせば（八六）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・烏・〇四三
日路朝飛急　霜台夕影寒　聯翩依月樹　迢遞繞風竿
白首何年改　清琴此夜弾　霊台如可託　千里向長安

鵲
（百87）
危巣畏風急
かささぎのすをぞよのまにしむるなるあけば木ずゑに風やふくべき（八七）
（百88）
愁随織女帰
かささぎのわたすほどなく明けわたる夜はのつばさや夢のうき橋（八八）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・鵲・〇四四
不分荊山抵　甘従石印飛　危巣畏風急　遠樹覚星稀
遠逐行人至　愁随織女帰　儻遊明鏡裏　朝夕奉光暉

雁
（百89）
春輝満朔方　帰雁発衡陽
ふるさとの春しりがほにかへる雁都の北やまづかすむらむ（八九）
（百90）
寄語能鳴伴
杣山やきのふの暮にひきかへてけふをたのむのかりもよしなし（九〇）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・雁・〇四五
春暉満朔方　帰雁発衡陽　望月驚弦影　排雲結陣行
往還倦南北　朝夕苦風霜　寄語能鳴伴　相随入帝郷

鳧
（百91）
颯沓睢陽渓
むれてすむをしのかもどりことはんなれまつ池とたれかをしへし（九一）
（百92）
王喬曳舄来
久堅の雲をあゆみしあとはただふたつのかものつばさなりけり（九二）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・鳧・〇四六
颯沓睢陽渓　浮遊漢渚隈　銭飛出井見　鶴引入琴哀
李陵賦詩罷　王喬曳舄来　何当帰太液　翺集動成雷

鶯
（百93）
声分折柳吹
うぐひすのこほる涙は青柳のいとのをよりぞうちとけてなく（九三）
（百94）
遷喬若可冀　幽谷響還通
鶯のたかきにうつる声すなり谷の木ずゑの雲のそこより（九四）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・鶯・〇四七
芳樹雑花紅　群鶯乱暁空　吟分折柳吹　韻叶落梅風
写囀清歌裏　含啼妙管中　遷喬苦可冀　幽谷響還通

雉

（百95）
白雉振朝声　飛来表天平
ゆきの色のきぎすあさたつ春ののにのどけきみよのあとはふりにき（九五）

（百96）
楚郊疑鳳出
つひにかくはぐくむ御代にあひにけり鳥のなたてのねにしづみしを（九六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・雉・〇四九
白雉振朝声　飛来表太平　楚郊疑鳳出　陳宝若鶏鳴
童子懐仁至　中郎作賦成　幸君看飲啄　耿介独含情

燕

（百97）
差池沐時雨
天つ風雲とともにやかへすらんもとのいはねにつばめきにけり（九七）

（百98）
相賀雕楹側
我だにもけふこそきつれ真木の屋の軒のつばめのすみなれにける（九八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・燕・〇五〇
天女伺辰至　玄衣澹碧空　羌池沐時雨　飄颻舞春風
相賀雕楹側　双飛翠幕中　莫驚留不去　猶冀識呉宮

雀

（百99）
入幕応王祥
雀いるははそのはらはあきふかきこずゑぞさそふしるべなりける（九九）

（百100）
朝遊漣水傍
みち人のおちぼにいそぐむらすずめともよぶ声をひとりしるかな（一〇〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』霊禽部・雀・〇四八
大廈将成日　嘉賓集杏梁　銜書表周瑞　入幕応王祥
暮宿空城裏　朝遊漣水傍　願斉鴻鵠志　希逐鳳凰翔

祥獣部

竜

（百101）
銜燭耀幽都
あきをやくもみぢの色の灯にこのしたやみもさもあらばあれ（一〇一）

（百102）
含章擬鳳雛
ひなどりの行末とほくみえしかな竜田のおくの雲ゐはるかに（一〇二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・竜・〇五一
銜燭耀幽都　含章擬鳳雛　西秦飲渭水　東落薦河図
帯火移星陸　騰雲出鼎湖　希逢聖人歩　庭闕奉晨趨

麟

（百103）
成角喩英才
まこも草なべてしげれることの葉もつのぐむいろにしかんものかは（一〇三）

（百104）
画像臨仙閣
あらかりし浪をしづめしから人のかげをえしまの月に見るかな（一〇四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・麟・〇五二
漢時応祥開　魯郊西狩廻　寄音中鐘呂　成角喩英才
画象臨仙閣　蔵書入帝台　莫驚今吐哺　為睹鳳凰来

象

（百105）
万推方演夢
草枕たびねの夢をみよし野のきさ山風のおどろかしける（一〇五）

（百106）
恵子正焚書
わか草のつまも煙とのぼりにし野べをかさねていかがやくべき（一〇六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・象・〇五三
鬱林開郡畢　睢陽作貢初　万推方演夢　恵子正焚書

執燧奔呉域　量舟入魏墟　六牙行致遠　千葉奉高居

馬

（百107）
天馬来従東
吾妻路の関の千里をこえずして都にこまのなをとどめける（一〇七）

（百108）
蒼竜遥逐日　紫燕迥追風
つばめとぶかすみのそことみる程にいばゆる声はのべの春ごま（一〇八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・馬・〇五四
天馬来従東　嘶驚御史驄　蒼竜遥逐日　紫燕迥追風
明月承鞍上　浮雲落蓋中　得随穆天子　何暇唐成公

牛

（百109）
商歌初入相
あはれしる御代にあはずは身のほどをうしといひてもかひなからまし（一〇九）

（百110）
不降五丁士　如何九折通
くらかりし山路ははれぬ彦星のうはの空なるかげにはかりて（一一〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・牛・〇五五
商歌初入相　燕陣早横功　欲向桃林下　先過梓樹中
在呉頻喘月　奔楚屢驚風　不降五丁士　如何九折通

豹

（百111）
（委質超羊鞹）
山下風におつるこの葉のふるかははかはる淵瀬もいかがしら波（一一一）

（百112）
若今逢霧雨　長隠商山幽
山ふかみ霧にかくれしけだ物のあとふむべくもなき身なりけり（一一二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・豹・〇五六
車法肇隆周　鼯文闡大猷　還将君子変　来蘊太公謀
委質超羊鞹　飛名列虎侯　若今逢霧露　長隠南山幽

熊

（百113）
乗春別館前
梓弓はるのかすみにいるさやまめづらしかりしためしにぞひく（一一三）

（百114）
猶冀飲清泉
こぎわたす瀬瀬をもなにかあやぶまんひのくま川の浪のしるべに（一一四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・熊・〇五七
導洛宜陽右　乗春別館前　昭儀匡漢日　太傅翊周年
列射三侯満　興師七歩旋　莫言舒紫褥　猶冀飲清泉

鹿

（百115）
奈花開旧苑
きえかへりをしみしともも哀なり子を思ふしかの露の命を（一一五）

（百116）
方懐大夫志　抗手別心期
さをしかのはなれぬとももあるものをわが思ふなかのかからましかば（一一六）

（百異1）
（先生折角時）
雲井よりふきくるかぜにこはぎはらをれふすしかのこゑきこゆなり

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・鹿・〇五八
涿野開中冀　秦原闘帝圻　奈花開旧苑　萍葉吐前詩
道士乗仙日　先生折角時　方懐丈夫志　抗手別心期

羊

（百117）
跪飲懲澆俗
はかなしと見ゆる羊のあゆみにもなほこのみちの浅からぬかな（一一七）

（百118）

仙人擁石去
つつじさく色におどろく心にてねざすいはほぞ身をなしてける（一一八）
（百異2）
仙人擁石去
ひつじとも石ともいひしこゑごとにいくたびかはるすがたなりけむ
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・羊・〇五九
跪飲懲澆俗　行駆夢逸材　仙人擁石去　童子駆車来
夜玉含星動　晨毛映雪開　莫言鴻漸力　長牧上林隈

苑
（百119）
目随槐葉長
しげりゆかんみどりの空ぞしられけるいつかをそむるこのめはるさめ（一一九）
（百120）
漢月澄秋色
吹く風に雲のけごろもはるる夜や月のうさぎも秋をしるらん（一二〇）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』祥獣部・兎・〇六〇
上蔡鷹初撃　平岡兎不稀　目随槐葉長　形逐桂条飛
漢月澄秋色　梁園映雪暉　唯当感純孝　郛郭引兵威

居処部
城
（百121）
独下仙人鳳
めづらしき花の都を人とはばこずゑのとりのなをやちらさん（一二一）
（百122）
白日麗城隅
契あればあくる日影にあひにけりみちよしづみしこけのしたより（一二二）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・城・〇六一
四塞称天府　三河建洛都　飛雲満城闕　白日麗牆隅
独下仙人鳳　群驚御史烏　何辞一万里　辺檄拒匈奴

門
（百123）
煌煌紫禁隈
ながきよのおいせぬ門の空よりやわかむらさきの光さすらむ（一二三）
（百124）
疎広遺栄去
いまはとてよをあやぶみし初こそ家路にかへるかどでなりけり（一二四）
（百異3）
（疎広遺栄去）
ふるさとにかへるなごりもせきわびぬみやこのかどのあけぼののそら
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・門・〇六二
赫赫彤闈敞　煌煌紫禁隈　阿房万戸列　閶闔九重開
疏広遺栄去　于公待詔来　誰知金馬路　方朔有奇才

市
（百125）
漸離初撃筑
つばいちのやそのちまたに袖ぬれしあきのしぐれの竹をうつおと（一二五）
（百126）
誰肯掛秦金
春秋のあはれをいかが人ごとにいはれの市のいにしへの跡（一二六）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・市・〇六三
闤闠開三市　旗亭起百尋　漸離初撃筑　司馬正弾琴
細柳竜鱗照　長槐兎目陰　徒知観衛玉　誰肯掛秦金

井
（百127）
蜀都宵映火
つつゐつの井筒の底に夏の夜はもゆるほたるの光をぞくむ（一二七）
（百128）
杞国旦生雲
うす雲の五重の色やうつるらん底さへはれぬ山の井の水（一二八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・井・〇六四
玉甃談仙客　銅台賞魏君　蜀都宵映火　杞国旦生雲
向日蓮花浄　含風李樹薫　已開千里国　還協五星文

宅
（百129）
寂寂蓬蒿径
草のいほは蓬にのこる庭の跡の心ぼそくてすむとしらずや（一二九）
（百130）
喧喧湫隘廬
年をへて住みなれぬれば里とよむ市のとなりものどけかりけり（一三〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・宅・〇六五
寂寂蓬蒿径　喧喧湫隘廬　屢逢長者轍　時引故人車
孟母卜隣罷　将軍辞第初　誰憐草玄処　独対一牀書

池
（百131）
鏡潭明月輝
明けぬるかふたみの池の浪の上に月の鏡の影をのこして（一三一）
（百132）
欲識江湖心　秋来賦潘省
さりともとたのむの池もうづもれてみくさがしたにすみぞあひぬる（一三二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・池・〇六六
日落天泉暮　煙虚習池静　鏡潭明月輝　錦磧流霞景
花揺仙鳳色　雲浮濯竜影　欲識江湖心　秋来賦潘省

楼
（百133）
百尺重城際　千尋大道隅
道のべの霞にすけるたかき屋はそらと庭とのなかばなりけり（一三三）
（百134）
銷憂乗暇日　誰識仲宣才
なつの日はみどりのまどを吹く風に身のうき雲ぞしばしはれぬる（一三四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・楼・〇六七
百尺重城際　千尋大道隈　落星臨画閣　井幹起高台
舞随緑珠去　簫将弄玉来　銷憂乗暇日　誰識仲宣才

橋
（百135）
形似雁初飛
行くかりの雲のかけはし見渡せばおくるるつらぞとだえなりける（一三五）
（百136）
即今滄海晏　無復白雲威
四方の海道もなかりしいにしへや思ひよりける浪のいはばし（一三六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・橋・〇六八
烏鵲塡応満　黄公去不帰　色疑虹始見　形似雁初飛
巧作七星影　能図半月輝　即今滄海晏　無復白雲威

船
（百137）
画鷁浪前開
あかしがた島がくれゆく水鳥やあさこぐ舟の跡のおもかげ（一三七）
（百138）
羽客乗霞至
ほのぼのと春の浪路にたなびくやかすみの船のつなでなるらん（一三八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・舟・〇六九
征棹三江暮　連檣万里廻　相烏風処転　画鷁浪前開
羽客乗霞至　仙人弄月来　方今同傅説　飛楫巨川隈

車
（百139）
丹鳳棲金轄
たれしかもうつしとめけんを車のとこめづらなる鳥のねぐらを（一三九）
（百140）
光乗奉王言
世を照す人をば露もしら玉やみがくはくらき心なりけり（一四〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』居処部・車・〇七〇
天子馭金根　蒲輪闢四門　五神趨雪路　双轍似雷奔
丹鳳棲金轄　飛熊載宝軒　無階忝虚左　先乗奉王言

床
（百141）
伝聞有象牀　疇昔薦君王
旅人のうきねのとこになりにけりきさのたがはのゆふなみのうへ（一四一）
（百142）
珊瑚七宝装
かをる香に光をさへぞかさねける花の台のななのたまゆか（一四二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・牀・〇七一
伝聞有象牀　疇昔薦君王　瑇瑁千金起　珊瑚七宝装
桂筵含柏馥　蘭籍払沈香　願奉羅帷夜　長承秋月光

席
（百143）
避坐承宣父
苔むしろおなじ岩ねをへだててぞあをねがみねのみなをとひける（一四三）
（百144）
蘭気襲廻風
ふぢばかま風のにほひをかたしくやまがきにちかきねやのさ莚（一四四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・席・〇七二
避坐承宣父　重趨揖戴公　桂香浮半月　蘭気襲同風
舞払丹霞上　歌清白雪中　佇将文綺色　舒巻帝王宮

帷
（百145）
高褒大守車
とほかりし心の月はをぐるまやきりをかかげしことのほかまで（一四五）
（百146）
方知決勝策　黄石遺兵書
玉章のあとをかたみに残しても人の心にまけんものかは（一四六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・帷・〇七三
久閉先生戸　高褒太守車　羅将翡翠合　錦逐鳳凰舒
明月弾琴夜　清風入幌初　方知決勝策　黄石遺兵書

簾
（百147）
暁風清竹殿
竹の屋のみどりの窓をふく風のあか月ちかく夜はなりにけり（一四七）
（百148）
戸外水精流
玉の戸にたまのしづくをかけながすひかりはみづの光なりけり（一四八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・簾・〇七四
暁風清竹殿　初日映秦楼　曖曖籠珠綱　纖纖上玉鉤
窓中月影入　戸外水精浮　巧作盤竜勢　長従飛燕遊

屏
（百149）
錦中雲母列
うとからぬ袖をしもこそへだてけれとよのみそぎのをみのもろ人（一四九）
（百150）
山水含春動
花の色も浪のみどりの春の色もかきながしてぞみるべかりける（一五〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・屏・〇七五
洞徹琉璃敞　威紆屈膝廻　錦中雲母列　霞上織成開
山水含春動　遊仙倒景来　修身行竭節　誰弁作銘才

被
（百151）
孔懐欣共寝
たへていかがよをとほしけん旅人のおなじ衣の関のあらしに（一五一）
（百152）
蘭交聚北堂
うときをももらさざりける心かな子をおもふ袖のひろきあまりに（一五二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・被・〇七六
桂友尋東閣　蘭交聚北堂　象筵分錦繡　羅薦合鴛鴦
桃李同歓密　塵泥別恨長　孔懐欣共寝　花萼幾含芳

鏡
（百153）
含清朗魏台
あきらけきみよの鏡の今もあらば人のこころのくまは見てまし（一五三）
（百154）
方知楽彦輔　自有鑑人才
くらきよりくらきにまよふ道までも人こそ人のかがみなりけれ（一五四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・鏡・〇七七
明鏡払塵埃　含情朗魏台　月中烏鵲至　花裏鳳凰来
玉彩疑氷徹　金輝似日開　方知楽彦輔　自有鑑人才

扇
（百155）
花軽不満面
身にそふる花のあふぎの風もなほなつの心のちらばこそあらめ（一五五）
（百156）
逐暑含風転
なつの日は扇のかぜもうき草のしげみがすゑとひとつにやふく（一五六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・扇・〇七八
翟羽旧伝名　蒲葵実暁清　花軽不隔面　羅薄障誰声
逐暑含風転　臨秋帯月明　還取同心契　特表合歓情

燭
（百157）
浮香迎綺茵
藤ばかま露にかかぐるともし火のひかりぞ秋のにほひなりける（一五七）
（百158）
若逢燕相国　特用挙賢人
浅からぬこころのそこのともし火にかかげぬほどは人のしるかは（一五八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・燭・〇七九
兎月清光隠　竜盤画燭新　三星花入夜　四序玉調辰
吐翠依羅幌　浮香市綺茵　若逢燕相国　特用挙賢人

酒
（百159）
臨風竹葉満　湛月桂香浮
いかなれば色はさめたる竹の葉のしづくにゑはぬ人なかるらん（一五九）
（百160）
長陪河朔遊
杯やすずしさ招くたまばはき手にとるからにゆらく秋風（一六〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』服玩部・酒・〇八〇
孔坐洽良儔　陳筵幾献酬　臨風竹葉満　湛月桂香浮
毎接高陽宴　屢陪河朔遊　会従玄石飲　高臥出円邱

経
（百161）
漢室鴻儒盛
なみたてるいつきの花のなをきけばふかきことのはの林なりけり（一六一）
（百162）
五千道徳闡
さらで又さとりをひらく道はなしうれしかりける法の門かな（一六二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・経・〇八一
漢室鴻儒盛　鄒堂大義明　五千道徳闡　三百礼儀成
青紫方拾芥　黄金徒満籯　誰知懐逸弁　重席挫群英

史
（百163）
談諧方亹亹
みかの原今朝は思ひぞいづみ河あふせの浪のかへる名残を（一六三）
（百164）
方朔初匡漢
東方みちのおくまでふみ見ればよよのむかしの跡ぞきえせぬ（一六四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・史・〇八二
馬記天官設　班図地理新　談玄方亹亹　文質乃彬彬
方朔初還漢　荊軻昔向秦　正辞堪載筆　終冀作良臣

詩

（百165）
陳王七歩才
庭の面を七あゆみせし跡ごとにしげるむくさの色ぞほどなき（一六五）

（百166）
祖徳信悠哉
なきあとをとほざかりぬと歎きにしそのよもいまはむかしなりけり（一六六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・詩・〇八三
都尉双鳧遠　梁王駟馬来　扇中紈素裂　機上錦文廻
天子三章伝　陳王七歩才　緇衣行擅美　祖徳信悠哉

賦

（百167）
布義孫卿子　登高楚屈平
たかねよりながむるすゑにのこるかは花のにほひも月のひかりも（一六七）

（百168）
平楽正飛纓
さき草やみつばよつばの深き色は人のこころのそむるなりけり（一六八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・賦・〇八四
布義孫卿子　登高楚屈平　銅台初下筆　平楽正飛纓
乍有凌雲気　時聞擲地声　造端恒体物　無復大夫名

書

（百169）
垂露春花満
いろいろの花のひもとく秋の野のにほひにすがる露の玉づさ（一六九）

（百170）
請君看入木　一寸信非虚
もじの関春のいりける跡見ればきえぬかすみの色ぞ残れる（一七〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・書・〇八五
削簡竜文見　臨池鳥跡舒　河図八卦出　洛字九疇初
垂露春花満　崩雲骨気余　請君看入木　一寸信非虚

檄

（百171）
張儀韞璧征
結びおく行へをだにも白露の玉ゆらぎけるぬれ衣かな（一七一）

（百172）
頭風雖覚愈　陳草未知名
真葛はらうらめづらしき言の葉にこころのやみの風ははれにき（一七二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・檄・〇八六
羽檄本宣明　由来激木声　聯翩通漢国　迢遞入燕営
毛義奉書去　張儀韞璧征　頭風雖覚愈　陳草未知名

紙

（百173）
妙跡蔡侯施
あま人のひきかへてけるいほのあみはかよふちどりのあと見せんとや（一七三）

（百174）
莫驚反覆字　当取葛洪規
心あてにたれかはさてもみくまのやかすみみだるるうらの浜ゆふ（一七四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・紙・〇八七
妙跡蔡侯施　芳名古伯馳　雲飛錦綺落　花発縹紅披
舒巻随幽顕　廉方合軌儀　莫驚反覆手　当取葛洪規

筆

（百175）
含毫山水隈
峰の木ずゑ谷の岩瀬の流まで心の筆をそむべかりけり（一七五）

（百176）
錦色夢中開
たのめしも思ひかへすとみし夢もおなじかきねのみづぐきのあと（一七六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・筆・〇八八
握管門庭側　含毫山水隈　霜暉簡上発　錦色夢中開
鸚鵡摛文至　麒麟絶句来　何当遇良史　左右振奇才

硯

（百177）
開氷小学前
山水の石間のつららとけしよりきしのわか草春をそむなり（一七七）

（百178）
君苗徒見熱
ふかかりし色のゆかりにまけしとやおもひすてけるむらさきの石（一七八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・硯・〇八九
左思裁賦日　王充作論年　光随錦文散　形帯石巖円
積潤修毫裏　開氷小学前　君苗徒見芸　誰識士衡篇

墨

（百179）
上党結松心
たれしかも松の煙のゆくへまでおもひたちけるすみよしのはる（一七九）

（百180）
繞画蠅初落
すみだ河ちりけるなみを見る月のさばへなすかとおどろかれつつ（一八〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』文物部・墨・〇九〇
長安分石炭　上党作松心　繞画蠅初落　含滋綬更深
素糸光易染　皁畳映逾沈　別有張芝学　書池幸見臨

武物部

剣

（百181）
鍔上蓮花動
つばなぬく野べのたよりに見つるかな池のはちすのさきそむる色（一八一）

（百182）
匣中霜雪明
明がたに夜はなりにけりはこね山霜と雪とのひましらむまで（一八二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・剣・〇九一
我有昆吾剣　求趨天子庭　白虹時切玉　紫気早干星
鍔上蓮花動　匣中霜雪明　倚天持報国　画地取雄名

刀

（百183）
惟良佩犢旋
ひとところ苗代水につながれてうしやうきなをながしはてける（一八三）

（百184）
含毫彩筆前
思ふ事深きいはねをふみなれて筆のかよひぢけづりなさばや（一八四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・刀・〇九二
列辟鳴鑾至　惟良佩犢旋　帯環疑写月　引鏡似含泉
割錦紅鮮裏　含毫彩筆前　莫驚開百練　輒擬定三辺

箭

（百185）
燕城忽解囲
夕づくひ入野のすすきほのめかす露こそ人のなみだなりけり（一八五）

（百186）
堯沈九日暉
浪の上にあやなくおつる日かげかなうはの空にもいるやと思へば（一八六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・箭・〇九四
漢郊初飲羽　燕城忽解囲　影随流水急　光帯落星飛
夏列三成軌　堯沈九日暉　断蛟雲夢沢　希為識忘帰

弓

（百187）
桃文称避悪　桑質表初生
みどり子のあたりをはらふためしにはくはの弓をも引くべかりけり（一八七）

（百188）

徒切烏号思　攀竜遂不成
弓はりの月をしたひしもろ人のこころのやみにしづみはてける（一八八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・弓・〇九三
桃文称避悪　桑質表初生　婉転琱鞬際　還如半月明
空彎落雁影　虚引怯猿声　徒切烏号思　攀竜遂不成

弩
（百189）
玉彩輝星芒
梓弓雲ゐ遥にみしはただたなびく星の光なりけり（一八九）
（百190）
玄猿坐見傷
親を思ふあまたの道を尋ぬともまさるためしはまたやなからん（一九〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・弩・〇九五
挺質本軒皇　申威振遠方　銅牙流暁液　玉彩耀星芒
高雁行応尽　玄猿坐見傷　蘇秦六百歩　持此説韓王

旌
（百191）
告善楼台側　求賢鬧肆中
しるべする雲のはたての色なくは人の心の月をみましや（一九一）
（百192）
影麗天山雪
なみたてるふもとも雪の色なれや峰の梢のしろきのみかは（一九二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・旌・〇九六
告善楼台側　求賢市肆中　擁旄分彩雉　持節曳丹虹
影麗天山雪　光揺朔塞風　方知美周政　懸旆閲車攻

旗
（百193）
縦横斉八陣　舒捲引三軍
やはた山麓もみえずこめつればかすみのうちを人もかよはず（一九三）

（百194）
虹輝接曙雲
立ちのぼるけぶりのあとの名残かなとよはた雲のあかつきの色（一九四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・旗・〇九七
桂影承宵月　虹輝接曙雲　縦横斉八陣　舒巻列三軍
日蕩蛟竜影　風翻鳥獣文　誰知懐勇志　盤地幾繽紛

戈
（百195）
落景駐琱鋋
花すすきいかにまねきし影ならんしづむ夕日のたちかへるまで（一九五）
（百196）
夕償金門側　朝提玉塞前
旅人のかれひもしるし玉鉾の道のをかべのしひの落葉は（一九六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・戈・〇九八
富父春喉日　殷辛泛杵年　暁霜白含刃　落影駐琱鋋
夕償金門側　朝提玉塞前　願随竜影度　横陣彗雲辺

鼓
（百197）
震谷似雷驚
夕立の雲の名残のひびきかと神まつりける空をきくかな（一九七）
（百198）
仙鶴排門起
つばさこそ雲に入るとも白鶴の声ばかりだにのこらましかば（一九八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・鼓・〇九九
舜日諧鼗響　堯年韻土声　向楼疑吹撃　震谷似雷驚
仙鶴排門起　霊鼉帯水鳴　楽云行已奏　礼也冀相成

弾
（百199）
来此傍垂楊

春風の柳がすゑを吹くたびに袂におつる露のしら玉（一九九）

（百200）
莫欣黄雀至　須憚微軀傷
おのが身のきしかたをだにかへりみぬまどひはきみの心のみかは（二〇〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』武器部・弾・一〇〇
俠客遠相望　佳遊満帝郷　共持蘇合弾　来此傍垂楊
金落疑星影　珠流似月光　莫欣黄雀至　須憚微軀傷

音楽部

琴

（百201）
風前中散至　月下歩兵来
思へただ月もあらしのふかき夜のことのねそよぐ竹のはやしを（二〇一）

（百202）
淮海曽為室
松風にかよふひびきをうつしきていは屋のとこのものとなしける（二〇二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・琴・一〇一
名士竹林隈　鳴琴宝匣開　風前中散至　月下歩兵来
淮海魯為室　梁岷旧作台　子期如可聴　山水響余哀

瑟

（百203）素女昔伝名
ひきわけしいとだに悲しいそぢまでいかになみだにむすぼほれけん（二〇三）

（百204）流水潜魚聴
山水のいかにながれしおとなればこころすみけるなみのいろくづ（二〇四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・瑟・一〇二
蒼祇初制法　素女昔伝名　流水潜魚聴　叢台舞鳳驚
嘉賓歓未極　君子楽相并　儻入邱之戸　応知由也情

琵琶

（百205）半月分絃出
遠山のいづれのをより出でつらんなかばの月の夜はの面影（二〇五）

（百206）唯有胡中曲　希君馬上弾
こまうへに声うらみけるよつのをの心ぼそくやとほざかりなん（二〇六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・琵琶・一〇三
裁規勢漸団　鑠質本多端　半月分絃出　叢花払面安
将軍曽入賞　司馬屢飛観　唯有胡中曲　希君馬上弾

箏

（百207）
蒙恬芳軌設
たけむすぶことぢはよよにかはれどもこゑの色のみときはなりけり（二〇七）

（百208）
游楚清音列
ことのをにそむる心の深ければしばしもいかがひきはなつべき（二〇八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・箏・一〇四
蒙恬芳軌設　遊楚清音列　形通天地規　絃写陰陽節
鄭音既寥亮　秦声復悽切　君聴陌上桑　為弁羅敷潔

笛

（百209）
羌笛写竜声
河竹に吹きつたへけるあらしかなめづらしかりし浪の響に（二〇九）

（百210）
逐吹梅華落
思へただ梅ちる里の春風に吹きあはすなる横ぶえの声（二一〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・笛・一〇七
羌笛写竜声　長吟入夜清　関山孤月下　来向隴頭鳴
逐吹梅花落　含春柳色驚　行観向子賦　坐憶隣人情

笙

（百211）
形写歌鸞翼
鳥の音のことにしむよりあはれなりおなじつばさのふえときけども（二一一）

（百212）
蹌蹌鳥獣来
笛の音の聞えぬ里の外ならばなべてとらふす野辺とみまほし（二一二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・笙・一〇八
懸匏曲沃上　孤篠汶陽隈　形写歌鸞翼　声随舞鳳哀
歓娯自北里　純孝即南陔　今日虞音奏　蹌蹌鳥獣来

鐘
（百213）
既接南隣磬　還随北里笙
あはれなる入会の鐘に打ちそへて隣の石もひびきにけり（二一三）
（百214）
秋至含霜動
山風のたたくにも猶つれなくて霜にはたへぬかねの音かな（二一四）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・鐘・一〇五
既接南隣磬　還随北里笙　平陵通曙響　長楽驚宵声
秋至含霜動　春帰応律鳴　欲知恒待扣　金簧有余鏗

簫
（百215）
搜索動猿吟
秋ふかきみ山のいほのふえの音にましらなくなりあか月の空（二一五）
（百216）
仙人幸見尋
ふえの音のうらがなしくや聞えけん帰るそらなき鶴のけ衣（二一六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・簫・一〇六
虞舜調清管　王褒賦雅音　参差横鳳翼　搜索動猿吟
霊鶴時来致　仙人幸見尋　為聴楊柳曲　行役幾傷心

歌
（百217）
漢帝臨汾水
あきはてぬ木葉の色も立田川よを秋風のなをながしけり（二一七）
（百218）
梁上繞飛塵
日ごろへてこゑやゆるがずなりぬらんのどかに見ゆるうつばりの塵（二一八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・歌・一〇九
漢帝臨汾水　周仙去洛浜　郢中吟白雪　梁上繞飛塵
歌発行雲駐　声嬌子夜新　願君聴扣角　当自識賢臣

舞
（百219）
佳人満石城
むれたちてかすみの袖をかへすなりはるのみやまの所なきまで（二一九）
（百220）
（花袖雪前明）
いつしかとこころのいろはうつろひぬめづらしかりしはなのたもとを（二二〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』音楽部・舞・一一〇
妙妓遊金谷　佳人満石城　霞衣席上転　花袖雪前明
儀鳳諧清曲　廻鸞応雅声　非君一顧重　誰賞素腰軽

資財部
珠
（百221）
（昆池明月満）
しらざりき思ひはなちし釣の糸のかへりて玉のをとならんとは（二二一）
（百222）
彩逐霊蛇転
なづさひし軒のあやめに思ひきや袖の玉水かかるべしとは（二二二）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・珠・一一一
粲爛金琪側　玲瓏玉殿隈　昆池明月満　合浦夜光開
彩逐霊蛇転　形随舞鳳来　誰憐被褐者　懐宝自多才

玉

（百223）
映廡先過魏
くやしくぞ思ひすてける玉椿さらでは人にをられましかば（二二三）
（百224）
連城欲向秦
おもはずなかりのつかひの玉章のまた故郷にかへるべしとは（二二四）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・玉・一一二
映廡先過魏　連城欲向秦　洛京連勝友　燕趙類佳人
芳圻晴虹媚　常山瑞馬新　徒為卞和識　不遇楚王珍

金
（百225）
南楚標前貢
あきらけき御代のためとや咲きそめしみちのくにやまのはなの光は（二二五）
（百226）
西秦識旧城
今ぞしる花のみやこのふるきなを関よりにしの秋の色とは（二二六）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・金・一一三
南楚標前貢　西秦識旧城　祭天封漢氏　擲地響孫声
向日披沙浄　含風振鐸鳴　方同楊伯起　独有四知名

銀
（百227）
思婦屏輝掩　遊人燭影長
ながき夜の光とともにしらみゆく閨にきえせぬ秋のともし火（二二七）
（百228）
玉壺初下箭
あまの川ひまゆくときのはやきせも玉のしづくのもらぬにぞしる（二二八）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・銀・一一四
思婦屏暉掩　遊人燭影長　玉壺初下箭　桐井旧安牀
色帯長河色　光浮満月光　霊山有玲瓏　仙闕薦明王

錢
（百229）
漢日五銖建
夏衣うすきいろにぞかへてけるいつへかさねしはなのたもとを（二二九）
（百230）
金門応入論
身にあまる民の心もあるものをいふにたらぬはわがよなりけり（二三〇）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・錢・一一五
漢日五銖建　姚年九府流　天竜帯泉宝　地馬列金溝
趙壱嚢初乏　何曽筋欲収　金門応入論　玉井冀来求

錦
（百231）
漢使巾車促
幾度かゆきかへりけるを車のにしきのひものとくる夜な夜な（二三一）
（百232）
色美廻文妾
かれはてし人をうしとや立田姫はぎのにしきの色に出でける（二三二）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・錦・一一六
漢使巾車送　河陽歩障新　雲浮仙石暁　霞満蜀江春
色美廻文妾　花軽綰墨賓　若逢朱太守　不作夜遊人

羅
（百233）
雲薄衣初巻
朝ぼらけ雲の衣をおるものはしづはた山のあらしなりけり（二三三）
（百234）
蟬飛翼転軽
みやま木の枝もゆるがず照す日はなほおもげなるせみの羽衣（二三四）
〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・羅・一一七
妙舞随裙動　嬌歌入扇清　蓮花依帳発　秋月鑑帷明
雲薄衣初巻　蟬飛翼転軽　若珍三代服　同擅綺紈名

綾

（百235）
落花遥写霧
いと桜ちりくる色をたよりにて浪のあやおる池の春かな（二三五）

（百236）
飛鶴近図雲
めもあやにたれかみざらん村雲に鶴とびわたる夕ぐれのそら（二三六）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・綾・一一八
金縷通秦国　為衾値漢君　落花遥写霧　飛鶴近図雲
色帯氷綃影　光含霜雪文　何当画秦女　煙霧出氛氲

素

（百237）
魚腸遠方至
かきつめし跡を見ましやもしほ草つりするあまのたよりならずは（二三七）

（百238）
砧杵調風響
いく里の人のねざめとなりぬらんあらしの空にころもうつなり（二三八）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・素・一一九
濯手天津女　織腰洛浦妃　魚腸遠方至　雁足上林飛
砧杵調風響　綾紈写月暉　非君下山路　誰賞故人機

布

（百239）
浣火有炎光
雪しろきふじのたかねやいにしへのけぶりの底にさらしける色（二三九）

（百240）
孫被登三相
水上やたかねにのぼる旅人の袖しろたへの布引の滝（二四〇）

〈句題原詩〉『李嶠百二十詠』玉帛部・布・一二〇
潔績創羲皇　緇冠表素王　曝泉飛掛鶴　浣火有炎光
孫被登三相　劉衣闢四方　佇因春斗粟　来穆採花芳

（⑩源光行『百詠和歌』ここまで）

⑪土御門院「句題五十首」（Ⅰ・Ⅱ）『土御門院御集』（土1～土100）

【略解説】

土御門院（一一九五―一二三一）の家集『土御門院御集』所収の句題五十首二種。句題はすべて七言一句。1～50のⅠ「詠五十首和歌」の句題は、『千載佳句』を出典とする唐詩詩句から、51～100のⅡ「詠五十首和歌　貞応二年二月十日」は、『和漢朗詠集』を出典とする邦人漢詩句から選んでいる。二種とも、春一〇首・夏五首・秋一〇首・冬五首・恋五首・雑一五首という構成は共通している。Ⅱは年月記から貞応二年（一二二三）二月一〇日成立、年月記の無いⅠも一月二四日～一二月三日成立と推定されており、土御門院が承久の乱により土佐に配流された後に詠んだものである。

【参考】

金子彦二郎『句題和歌選集』（長谷川書房、一九五五年）、岩井宏子『土御門院句題和歌全釈』（風間書房、二〇一二年）

【底本】 新編国歌大観（底本・書陵部蔵桂宮本）

【本文】

Ⅰ「詠五十首和歌」

春

（土1）
春風春水一時来
時わかぬあらしも浪もいかなればけふあらたまの春をしるらん（一三一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五八・二八七四「府西池」
柳無気力枝先動　池有波文氷尽開　今日不知誰計会　春風春水一時来
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・立春・二
〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・立春・五
〈同一句題〉（慈定寂1）、飛鳥井雅種『家集』五「春風春水一時訪といふことを」、加藤千蔭『うけらが花初編』二八六「春風春水一時来」、中院通村『後十輪院内府集』三五四「春風春水一時来」、『後水尾院御集』一九六「春風春水一時来」、香川景樹『桂園一枝』二「春風春水一時来」、同『桂園

一枝拾遺』三「春風春水一時来」、武者小路実陰『芳雲集』一〇六一「春風春水一時来」、賀茂真淵『賀茂翁家集』二四「春風春水一時来」、『難波捨草』春上・六・藤原信房「春風春水一時来といふ事をよみ侍る」、『霞関集』春・二二一・備前守高久「春風春水一時来」

（土2）
　春入枝条柳眼低
さほ姫のいとよりかくる青柳の枝もたわわに春はきにけり（一三二）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻二二「寄楽天」
　莫嗟虚老海壖西　天下風光数会稽　霊汜橋前百里鏡　石帆山峥五雲渓
　氷銷田地蘆錐短　春入枝条柳眼低　安得故人生羽翼　飛来相伴醉如泥
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・早春・五
〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・早春・九

（土3）
　雁返炉峰頂北霞
嶺こえて秋こしみちやまよふらんかすみの北に雁も鳴くなり（一三三）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・春興・五九
　虹横布水台南雨　雁返炉峰頂北霞（「送欧陽孝廉及第帰彭沢」喩鳧）

（土4）
　白片落梅浮澗水
ながれくむ袖さへ花に成りにけり梅ちるやまのたに川の水（一三四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一五七「春至」
　若為南国春還至　争向東楼日又長　白片落梅浮澗水　黄梢新柳出城牆
　閑拈蕉葉題詩詠　悶取藤枝引酒嘗　楽事漸無身漸老　従今始擬負風光
〈句題典拠〉『千載佳句』草木部・梅柳・六〇六
〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・梅・八七
〈同一句題〉（慈定寂3）

（土5）
　樹根雪尽催花発
このもとの雪はややけぬあしびきの山のさくらよはやもさかなん（一三五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二五一「歎春風贈李二十侍郎二絶（ノ二）」
　樹根雪尽催花発　池岸氷銷放草生　唯有鬚霜依旧白　春風於我独無情
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・早春・一三

（土6）
　暖雨晴開一径花
春雨の野べのふるみち露しげみぬれて色こき花ざくらかな（一三六）

〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「贈鄭処士」
　道傍年少莫矜夸　心在重霄鬢未華　揚子可曽過北里　魯人何必敬東家
　寒雲暁散千峰雪　暖雨晴開一径花　且売湖田釀春酒　与君書剣是天涯
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・早春・一二一
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』二〇八「暖雨晴開一径花」

（土7）
　鶯声誘引来花下
うぐひすのさそふ山辺にあくがれて花のこころにうつる比かな（一三七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一五九「春江」
　炎涼昏暁苦推遷　不覚忠州已二年　閉閤只聴朝暮鼓　上楼空望往来船
　鶯声誘引来花下　草色勾留坐水辺　唯有春江看未厭　縈砂遶石淥潺湲
〈句題典拠〉『千載佳句』遊牧部・春遊・八五三
〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・鶯・六七
〈同一句題〉（千2）、（慈定6）、木下幸文『亮々遺稿』三二「鶯声誘引来花下」、香川景樹『桂園一枝拾遺』三四「鶯声誘引来花下」

（土8）
　遊糸繚乱碧羅天
おほ空にたがおりなせるくれはどりあやにみだるる野べのいとゆふ（一三八）

〈句題原詩〉劉禹錫「春日書懐寄東洛白二十二楊八二庶子」
　曽向空門学坐禅　如今万事尽忘筌　眼前名利同春夢　酔裏風情敵少年

野草芳菲紅錦地　遊糸撩乱碧羅天　心知洛下閑才子　不作詩魔即酒顛

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・春興・七三

〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・春興・一九

（土9）

紛紛花落門空閉

風にちる山さくら戸のさしもやは人めまれにて春をおくらん（一三九）

〈句題原詩〉劉長卿「赴南中題褚少府湖上亭子」（『全唐詩』巻一五一）

種田東郭傍春陂　万事無情把釣糸　緑竹放侵行径裏　青山常対巻簾時

紛紛花落門空閉　寂寂鶯啼日更遅　従此別君千万里　白雲流水憶佳期

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・暮春・九六

（土10）

紫藤花下漸黄昏

ふぢなみの花の夕ばえしをるなよあすより後の春のかたみに（一四〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六三一「三月三十日題慈園寺」

慈恩春色今朝尽　尽日徘徊倚寺門　惆悵春帰留不得　紫藤花下漸黄昏

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・送春・一一五

〈句題他出〉『和漢朗詠集』春部・三月尽・五二

〈同一句題〉三条西実隆『再昌草』五四七〇「（大永八年四月）去月分　紫藤花下漸黄昏」

夏

（土11）

初着単衣支体軽

久かたのあまの羽衣まだきねどかくこそけふの風はふくらめ（一四一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一九・一二八〇「七言十二句贈駕部呉郎中七兄」

四月天気和且清　緑槐陰合沙堤平　独騎善馬銜鐙穏　初著単衣支体軽

退朝下直少徒侶　帰舎閉門無送迎　風生竹夜窓間臥　月照松時台上行

（後略）

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・首夏・一二一

〈句題他出〉『新撰朗詠集』夏部・更衣・一三五

〈同一句題〉（円4）

（土12）

一声山鳥曙雲外

よこ雲のをちかた山の郭公声より後の夜半ぞすくなき（一四二）

〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「自楞伽寺、晨起泛舟、道中有懐」

碧樹蒼蒼茂苑東　佳期迢遞路何窮　一声山鳥曙雲外　万点水蛍秋草中

門掩竹斎微有月　棹移蘭渚淡無風　欲知此路堪惆悵　菱葉蓼花連故宮

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・早秋・一五六

〈句題他出〉『和漢朗詠集』夏部・郭公・一八二

〈同一句題〉（朗16）、『和漢兼作集』夏上・四三三・一条前摂政左大臣「一声山鳥曙雲外」、『閑月和歌集』夏・一二七・従三位隆博「おくりて侍りし歌の中に、一声山鳥曙雲外」

（土13）

盧橘子低山雨重

たが袖のなみだとか又しのぶべき花たちばなの雨の下露（一四三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二〇・一三六一「西湖晩帰迴望孤山寺贈諸客」

柳湖松島蓮花寺　晩動帰橈出道場　盧橘子低山雨重　栟櫚葉戦水風涼

煙波澹蕩揺空碧　楼殿参差倚夕陽　到岸請君廻首望　蓬萊宮在海中央

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・秋興・一七九

〈句題他出〉『和漢朗詠集』夏部・橘花・一七一

〈同一句題〉（慈定18・寂8）

（土14）

緑樹陰前逐晩涼

まだあをきははその杜の夕かげになくもすずしきせみのは衣（一四四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二六四「池上逐涼二首（ノ一）」

青苔地上銷残暑　緑樹陰前逐晩涼　軽屐単衣薄紗帽　浅池平岸庳藤床

簪纓怪我情何薄　泉石諳君味甚長　徧問交親為老計　多言宜静不宜忙

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・納涼・一三九

〈句題他出〉『和漢朗詠集』夏部・納涼・一五九

〈同一句題〉（慈定21）

（土15）

蛍火乱飛秋已近

小篠原しのにみだれて飛ぶほたる今いくよとか秋をまつらん（一四五）

〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻二〇「夜坐」

雨滞更愁南瘴毒　月明兼喜北風涼　古城楼影横空館　湿地虫声遶暗廊

蛍火乱飛秋已近　星辰早没夜初長　孩提万里何時見　狼藉家書臥満牀

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・晩夏・一四〇

〈句題他出〉『和漢朗詠集』夏部・蛍・一八六

〈同一句題〉（朗20）、源実朝『金槐和歌集』一六九「蛍火乱飛秋已近といふ事を」、熊谷直好『浦のしほ貝』四七八「蛍火乱飛秋已近」

秋

（土16）

窓中海月初知秋

住吉のちぎのかたそぎもる月のゆきあひのかげに秋はきにけり（一四六）

〈句題原詩〉皇甫冉「宿淮陰南楼酬常伯能」（『全唐詩』巻二五〇）

淮陰日落上南楼　喬木荒城古渡頭　浦外野風初入戸　窓中海月早知秋

滄波一望通千里　画角三声起百憂　佇立分宵絶来客　煩君歩屧忽相求

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・秋興・一八四

（土17）

耿耿星河欲曙天

七夕もしばしやすらへ天河あくるもおのがかげならぬかは（一四七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻十二・〇五九六「長恨歌」

（前略）

梨園弟子白髪新　椒房阿監青娥老　夕殿蛍飛思悄然　孤灯挑尽未成眠

遅遅鐘鼓初長夜　耿耿星河欲曙天　鴛鴦瓦冷霜華重　翡翠衾寒誰与共

（後略）

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・秋夜・一八六

〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三四

〈同一句題〉（慈定31）

（土18）

寒露已催雁北至

はつかりのきこゆる夜半の白露やねざめはじめのなみだなるらん（一四八）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・早秋・一六〇

寒露已催鴻北去　火雲漸散月西流（「秋夕」金立之）

（土19）

遶壁暗蛬無限思

ねやちかきかべのそこなるきりぎりすおもひくらべの秋ぞへにける（一四九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六八・三四六〇「感秋詠意」

炎涼遷次速如飛　又脱生衣著熟衣　遶壁暗蛩無限思　恋巣寒燕未能帰

須知流輩年年失　莫歎衰容日日非　旧語相伝聊自慰　世間七十老人稀

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・秋興・一六五

（土20）

蟬鳴黄葉漢宮秋

ならのはの名におふ宮のうす紅葉そむるやせみのなみだなるらん（一五〇）

〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「咸陽西門城楼晩眺」

一上高城万里愁　蒹葭楊柳似汀洲　溪雲初起日沈閣　山雨欲来風満楼

鳥下緑蕪秦苑夕　蟬鳴黄葉漢宮秋　行人莫問前朝事　渭水寒声昼夜流

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・早秋・一五七

（土21）

月穿疎屋夢難成

あれまさる床の月影うちはらひ夢によがれてあかす比かな（一五一）

〈句題原詩〉杜荀鶴「旅中臥病」（『全唐詩』巻六九二）

秋来誰料病相縈　枕上心猶算去程　風射破窓灯易滅　月穿疏屋夢難成

故園何啻三千里　新雁纔聞一両声　我自与人無旧分　非干人与我無情

〈句題典拠〉『千載佳句』天象部・風月・二七三
〈同一句題〉（光14）

（土22）
南楼月下擣寒衣
おもひやる心を月になぐさめて夜さむの衣うちもたゆまず（一五二）

〈句題原詩〉『玉台後集』劉元叔「妾薄命」
（前略）
陽春白日照空暖　紫燕銜花向庭満　彩鸞琴裏怨声多　飛鵲鏡前妝梳断
旦逐新人殊未帰　還令秋至夜霜飛　北斗星前横旅雁　南楼月下擣寒衣
（後略）

※従来、『文苑英華』があげられてきたが、より蓋然性の高いものとして『玉台後集』とした。

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・秋夜・一八九
〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・擣衣・三四六

（土23）
菊為重陽冒雨開
長月やおのが比とてさく菊の露もとををに雨はふりつつ（一五三）

〈句題原詩〉皇甫冉「秋日東郊作」（『全唐詩』巻二四九）
間看秋水心無事　臥対寒松手自栽　廬岳高僧留偈別　茅山道士寄書来
燕知社日辞巣去　菊為重陽冒雨開　浅薄将何称献納　臨岐終日自遅迴
〈句題典拠〉『千載佳句』時節部・重陽・二五六
〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・九日付菊・二六一
〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝拾遺』三一四「菊為重陽冒雨開」

（土24）
霜草欲枯虫思苦
すず虫の声ふるさとのあさぢ原ただかれねともおけるはつ霜（一五四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二八七「答夢得秋庭独坐見贈」
林梢隠映夕陽残　庭際蕭疏夜気寒　霜草欲枯虫思急　風枝未定鳥棲難
容衰見鏡同惆悵　身健逢杯且喜歓　応是天教相煖熱　一時垂老与閑官

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・暮秋・二〇二
〈句題他出〉『和漢朗詠集』秋部・虫・三二八
〈同一句題〉（千37）、（匡6）

（土25）
林葉蕭蕭一夜霜
秋の色はひと夜ばかりの初霜にうつろひはつる木木の紅葉ば（一五五）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・秋夜・一九五
満山月色連渓下　林葉蕭蕭一夜霜（「月夜山居」何玄）

冬

（土26）
紅葉添愁正満階
ちりつもるもみぢに橋はうづもれてあとたえはつる秋のふる郷（一五六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六五・三一八六「酬皇甫郎中対新菊花見憶」
愛菊高人吟逸韻　悲秋病客感衰懐　黄花助興方携酒　紅葉添愁正満階
居士葷腥今已断　仙郎杯杓為誰排　愧君相憶東籬下　擬廃重陽一日斎
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・暮秋・一九八

（土27）
鳥雀群飛欲雪天
雲ゐゆくつばさもさえて飛ぶ鳥のあすかみゆきのふるさとの空（一五七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一五・〇八八七「歳晩旅望」
朝来暮去星霜換　陰慘陽舒気序牽　万物秋霜能壊色　四時冬日最凋年
煙波半露新沙地　鳥雀群飛欲雪天　向晩蒼蒼南北望　窮陰旅思両無辺
〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・冬興・二一九
〈同一句題〉林述斎『隅田川二百首』一九三「鳥雀群飛欲雪天」、望月長孝『広沢輯藻』六二七「鳥雀群飛欲雪天」

（土28）
寒流帯月澄如鏡

いほさきのすみだ河原のかは風にこほりのかがみみがく月かげ（一五八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九一三「江楼宴別」
　楼中別曲催離酌　灯下紅裙間緑袍　縹緲楚風羅綺薄　錚鏦越調管絃高
　寒流帯月澄如鏡　夕吹和霜利似刀　樽酒未空歓未尽　舞腰歌袖莫辞労

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・冬夜・二二四

〈句題他出〉『和漢朗詠集』冬部・歳暮・三五九

〈同一句題〉（匡7）、（慈定42）

（土29）
　蘆花風起暮潮来
みしまえやあしの葉ちかくみつ塩のほなみにかよふ冬の河かぜ（一五九）

〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「遊銭塘青山李隠居西斎〈一作李郢詩〉」
　小隠西亭為客開　翠蘿深処遍青苔　林間掃石安棋局　巖下分泉遥酒杯
　蘭葉露光秋月上　蘆花風起夜潮来　雲山繞屋猶嫌浅　欲棹漁舟近釣台

〈句題典拠〉『千載佳句』四時部・秋興・一七三

（土30）
　晩過千山雪気寒
夕暮の山のしら雪ふみならし立ちかへるべきあとはつけてき（一六〇）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題典拠〉『千載佳句』別離部・行旅・九五六
　夜吟孤枕潮声近　晩過千山雪気寒（「江夜歳暮」趙嘏）

〈同一句題〉楊梅兼行『兼行集』六四「同月（永仁二年四月）廿四日御つぎうた、詩の詞、晩過千山雪気寒」

恋

（土31）
　与君後会知何日
たのめおくあすのいのちもしらなくにはかなき物はちぎりなりけり（一六一）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五七・二七五一「臨都駅送崔十八」
　勿言臨都五六里　扶病出城相送来　莫道長安一歩地　馬頭西去幾時迴
　与君後会知何処　為我今朝尽一杯

〈句題典拠〉『千載佳句』別離部・餞別・九二八

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・餞別・六三一

〈同一句題〉村田春海『琴後集』九七一「与君後会知何日」

（土32）
　雪月花時最憶君
おもかげもたえにし跡もうつりがも月雪花にのこるころかな（一六二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五五・二五六五「寄殷協律」
　五歳優遊同過日　一朝消散似浮雲　琴詩酒伴皆抛我　雪月花時最憶君
　幾度聴鶏歌白日　亦曽騎馬詠紅裙　呉娘暮雨蕭蕭曲　自別江南更不聞

〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・憶友・四二三

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・交友・七三四

〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』一五〇一「雪月花時最憶君」

（土33）
　故情歓喜開書後
たまづさやかきとどめけるあとみればむかしにかへる人のことのは（一六三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五三・二三三五「得湖州崔十八使君書喜与杭越隣郡因成長句代賀兼寄微之」
　三郡何因此結縁　貞元科第忝同年　故情歓喜開書後　旧事思量在眼前
　越国封疆呑碧海　杭城楼閣入青煙　呉興卑小君応屈　為是蓬莱最後仙

〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・書信・四二六

（土34）
　分袂二年似夢寐
夢かとよわかれし袖の涙よりふた秋かけて露のかわかぬ（一六四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五三・二三二〇「答微之詠懐見寄」
　閣中同直前春事　船裏相逢昨日情　分袂二年労夢寐　並牀三宿話平生
　紫微北畔辞宮闕　滄海西頭対郡城　聚散窮通何足道　醉来一曲放歌行

〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・遇友・四二八

（土35）
何況鶏鳴即須別
きぬぎぬのわかれやさてもかなしきと暁しらぬ鳥のねもがな（一六五）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五八・二八六七「夜宴惜別」
笙歌旖旎曲終頭　転作離声満坐愁　箏怨朱絃従此断　燭啼紅涙為誰流
夜長似歳歓宜尽　酔未如泥飲莫休　何況鶏鳴即須別　門前風雨冷脩脩
〈句題典拠〉『千載佳句』別離部・別意・九〇二

雑
（土36）
柴扉日暮随風掩
ゆふづくひさす人もなき柴の戸にあるじがほにもふくあらしかな（一六六）
〈句題原詩〉元稹『元氏長慶集』巻一六「晩春」
昼静檐疏燕語頻　双双闘雀動階塵　柴扉日暮随風掩　落尽閑花不見人
〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・閑居・四五一
〈句題他出〉『新撰朗詠集』雑部・閑居・五七五
〈同一句題〉（千70）

（土37）
草堂深鎖白雲間
谷ふかき草のいほりのさびしきは雲の戸ざしの明ぼのの空（一六七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『千載佳句』遊牧部・遊覧・八四五
漁艇遠飄滄海上　草堂深鎖白雲間（「途中偶題」道彦）
〈同一句題〉（俊6）

（土38）
月入斜窓暁寺鐘
かねの音にいく有明をうれふらんねざめがちなる窓の月かげ（一六八）
〈句題原詩〉元稹『元稹集』巻一九「鄂州寓館厳澗宅」
鳳有高梧鶴有松　偶来江外寄行蹤　花枝満院空啼鳥　塵榻無人憶臥竜
心想夜閑唯足夢　眼看春尽不相逢　何時最是思君処　月入斜窓暁寺鐘
〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・憶友・四二〇

（土39）
野寺訪僧帰帯月
法のしにまよへる道をたづねてぞ野寺の月にひとりかへりし（一六九）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『千載佳句』遊牧部・春遊・八五九
野寺訪僧帰帯月　芳林携客酔眠花（「贈東郊」鮑溶）
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・僧・六〇五

（土40）
嶺猿群宿夜山静
ひとりすむみ山の夜半のさびしさはげにわびしらにましら鳴くなり（一七〇）
〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「韶州駅楼宴罷」
檐外千帆背夕陽　帰心杳杳鬢蒼蒼　嶺猿群宿夜山静　沙鳥独飛秋水涼
露堕桂花棋局湿　風吹荷葉酒瓶香　主人不酔下楼去　月在南軒更漏長
〈句題典拠〉『千載佳句』地理部・山水・三三〇

（土41）
孤館宿時風帯雨
時雨ふるこよひばかりのこがらしにやどはなくともころもかせ山（一七一）
〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「瓜洲留別李詡」
泣玉三年一見君　白衣憔悴更離群　楊堤惜別春潮晩　花榭留歓夜漏分
孤館宿時風帯雨　遠帆帰処水連雲　悲歌曲尽莫重奏　心繞関河不忍聞
〈句題典拠〉『千載佳句』別離部・送別・九二〇
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・行旅・六四一

（土42）
世間飄泊海無辺
かぢをたえおほうみのはらにゆく舟のあとはかもなきよをいかにせん（一七二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九五三「寄李相公崔侍郎銭舎人」
曽陪鶴馭両三仙　親侍竜輿四五年　天上歓華春有限　世間漂泊海無辺
栄枯事過都成夢　憂喜心忘便是禅　官満更帰何処去　香炉峰在宅門前
〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・感興・五一四

（土43）
雲愛山高旦暮帰
わがごとやあさゆふ晴れぬものはおもふたかまの山のよそのしら雲（一七三）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『千載佳句』隠逸部・山居・一〇〇七
月知渓静尋常入　雲愛山高旦暮帰（「懐旧」無名）
〈句題他出〉『新撰朗詠集』雑部・雲・三七七

（土44）
莫対月明思往事
袖の月にむかしの秋なおもひ出でそそれゆゑにこそかげもやつるれ（一七四）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七九六「贈内」
漠漠闇苔新雨地　微微涼露欲秋天　莫対月明思往事　損君顔色減君年
〈句題典拠〉『千載佳句』天象部・感月・二七七

（土45）
往事眇茫都似夢
むなしくてみそぢの夢はすぐしきぬ老のねざめもいまよりやせん（一七五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一七・一一〇七「十年三月三十日別微之於澧上十四年三月十一日夜遇微之於峽中停舟夷陵三宿而別言不尽者以詩終之因賦七言十七韻以贈且欲寄所遇之地与相見之時為他年会話張本也」
（前略）
歯髪蹉跎将五十　関河迢遰過三千　生涯共寄滄江上　郷国俱抛白日辺
往事渺茫都似夢　旧遊零落半帰泉　酔悲灑涙春杯裏　吟苦支頤暁燭前
（後略）
〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・感歎・五一七
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・懐旧・七四三

〈同一句題〉（慈定88）、（伏6）、香川景樹『桂園一枝』七五五「往時眇茫都似夢」

（土46）
白髪鏡中慙易老
よそにみし野原の霜のいかにしてかがみのうちに置きはじめけん（一七六）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・老・五二九
白髪鏡中慙易老　青山江上幾回春（「春情多」元稹）
〈句題他出〉『新撰朗詠集』雑部・老人・六七五

（土47）
毎夜座禅観水月
むねの月心の水もよなよなのしづかなるにぞすみはじめける（一七七）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六四・三一三〇「早服雲母散」
暁服雲英漱井華　寥然身若在煙霞　薬銷日晏三匙飯　酒渇春深一椀茶
毎夜坐禅観水月　有時行醉玩風花　浄名事理人難解　身不出家心出家
〈句題典拠〉『千載佳句』人事部・閑適・四八七

（土48）
但有泉声洗我心
かげすめる岩間の清水さはりおほみわがこころをしあらひつるかな（一七八）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五四・二四八九「宿霊巌寺上院」
高高白月上青林　客去僧帰独夜深　葷血屏除唯対酒　歌鐘放散只留琴
更無俗物当人眼　但有泉声洗我心　最愛暁亭東望好　太湖煙水緑沈沈
〈句題典拠〉『千載佳句』釈氏部・寺・一〇二五
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・山寺・五七九
〈同一句題〉（慈定69）、村田春海『琴後集』四五三「但有泉声洗我心」

（土49）
碧落無雲称鶴心
雲はるる空にきこえてなく鶴もよそのおもひはいふかひぞなき（一七九）

〈句題原詩〉許渾『丁卯詩集』巻上「寄殷堯藩先輩」
十載功名翰墨林　為従知己信浮沉　青山有雪諳松性　碧落無雲称鶴心
帯月独帰蕭寺遠　玩花頻醉庾楼深　尋思一見如瓊樹　空把新詩尽日吟
〈句題典拠〉『千載佳句』遊牧部・眺望・八八二
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・松・四二二
〈同一句題〉藤原惺窩『惺窩先生倭歌集』巻四・雑「碧落無雲称鶴心」

（土50）
但有双松当砌下
我もしり我もしられて年はへぬみぎりにうゑしふたもとの松（一八〇）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五五・二五二八「新昌閑居招楊郎中兄弟」
紗巾角枕病眠翁　忙少閑多誰与同　但有双松当砌下　更無一事到心中
金章紫綬看如夢　皁蓋朱輪別似空　暑月貧家何所有　客来唯贈北窓風
〈句題典拠〉『千載佳句』隠逸部・幽居・一〇一四
〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・松・四二一
〈同一句題〉（慈定66・寂28）

Ⅱ「詠五十首和歌貞応二年二月十日」
春
（土51）
林変容輝宿雪紅
紅のかすみはけさやにほふらん雪のはやしの春のはつ花（二〇四）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・早春・一四
庭増気色晴沙緑　林変容輝宿雪紅（「草樹暗迎春」紀長谷雄）
〈同一句題〉足利義尚『常徳院詠』一六三「韻字ををきてよみ侍しに、林変容気宿雪紅」

（土52）
露暖南枝花始開
春の日のひかりに匂ふ梅のはなみなみよりこそ露もおきけめ（二〇五）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・梅・九二
誰言春色従東到　露暖南枝花始開（「庾嶺多梅樹南枝先開」菅原文時）
〈同一句題〉足利義尚『常徳院詠』一六四「露暖南枝花始開」

（土53）
鑽沙草只三分許
秋はまたわくべき道と成りやせんみどりみじかき庭の若草（二〇六）
〈句題原詩〉菅原道真『菅家文草』巻六・四四五「同賦春浅帯軽寒、応製」
不是吹灰案暦疏　浅春暫謝上陽初　鑽沙草只三分許　跨樹霞纔半段余
雪未銷通棲谷鳥　氷猶冪得伏泉魚　貞心莫畏軽寒気　恩煦都無一事虚
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・霞・七六

（土54）
気霽風梳新柳髪
春きぬとつげのをぐしもささなくに柳のかみをけづる春かぜ（二〇七）
〈句題原文〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・早春・一三
気霽風梳新柳髪　氷消浪洗旧苔鬚（「春暖早春賦」都良香）
〈同一句題〉（為2）

（土55）
旧巣為後属春雲
白雲をおのがすもりとちぎりてやみやこの花にうつるうぐひす（二〇八）
〈句題原詩〉菅原道真『菅家文草』巻六・四五三「早春内宴、侍清涼殿同賦鶯出谷、応製」
鶯児不敢被人聞　出谷来時過妙文　新路如今穿宿雪　旧巣為後属春雲
管絃声裏啼求友　羅綺花間入得群　恰似明王招隠処　荷衣黄壊応玄纁
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・鶯・七〇

（土56）
江霞隔浦人煙遠
あしびたく難波の浦の夕煙浪ぢへだててかすむころかな（二〇九）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・眺望・六二七
江霞隔浦人煙遠　湖水連天雁点遥（「遊宗福寺」橘直幹）

（土57）
林中花錦時開落
たつた山花のにしきのぬきをうすみさくかちるかにまよふ春かな（二一〇）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・春興・二三
林中花錦時開落　天外遊糸或有無（「春上寺望聚落」島田忠臣）

（土58）
落花狼藉風狂後
花さそふこのした風のふくままになほ時しらぬ雪ぞみだるる（二一一）

〈句題原詩〉大江朝綱『御物小野道風筆屏風土代』「惜残春」
艶陽尽処幾相思　招客迎僧欲展眉　春入林帰猶晦跡　老尋人到詎成期
落花狼藉風狂後　啼鳥竜鐘雨打時　樹欲枝空鶯也老　此情須附一篇詩
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・落花・一二九

（土59）
山腰帰雁斜牽帯
立ちかへる雲ゐの雁を帯にせる山のすがたぞ春はさびしき（二一二）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・雁付帰雁・三二五
山腰帰雁斜牽帯　水面新虹未展巾（「春暁閑出」都在中）

（土60）
春情難繫夕陽前
夕づくひかすみのしたにかたぶきて入逢のかねに春ぞのこれる（二一三）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・眺望・六二九
老眼易迷残雨裏　春情難繫夕陽前（「春日眺望」藤原篤茂）

夏

（土61）
竹亭陰合偏宜夏
ときはなるかげしげりあふささ竹のおほみや人の袖ぞすずしき（二一四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六八・三四六二「和楊尚書罷相後夏日遊永安水亭兼招本曹楊侍郎同行」
道行無喜退無憂　舒巻如雲得自由　良冶動時為哲匠　巨川済了作虚舟
竹亭陰合偏宜夏　水檻風涼不待秋　遥愛翩翩双紫鳳　入同官署出同遊
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・晩夏・一六八
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・夏興・一二六
〈同一句題〉熊谷直好『浦のしほ貝』四二二「竹亭陰合偏宜夏」

（土62）
花薫紫麝凱風程
たが袖のにほひを風のさそひきて花たちばなにうつしそめけん（二一五）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・橘花・一七二
枝繫金鈴春雨後　花薫紫麝凱風程（具平親王）

（土63）
谷静纔聞山鳥語
あしびきの山ほととぎすしのぶなりうの花かこふたにの一むら（二一六）

〈句題原詩〉大江朝綱『御物小野道風筆屏風土代』「送僧帰山」
一自方袍振錫行　別師還媿六塵情　雖観秋月波中影　未遁春花夢裏名
谷静纔聞山鳥語　梯危斜踏峡猿声　夜深莫歎迷帰路　定有霜鍾度嶺鳴
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・猿・四六〇

（土64）
松高風有一声秋
松かげやみにしむ程はなけれども風にさきだつ秋の一声（二一七）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・納涼・一六四
池冷水無三伏夏　松高風有一声秋（「夏日閑適」源英明）
〈同一句題〉（朗18）、一色直朝『桂林集』七三「松高風有一声秋といふ心を」、香川景樹『桂園一枝』二一八「松高風有一声秋」

（土65）
未是蟬悲客意悲
夏ふかきもりのうつせみねにたててなくこの暮はわれさへぞうき（二一八）
〈句題原詩〉菅原道真『菅家文草』巻四・二五三「新蟬」
新発一声最上枝　莫言泥伏遂無時　今年異例腸先断　不是蟬悲客意悲
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』夏部・蟬・一九五

秋
（土66）
風従昨夜声弥怨
きのふより夜半の松かぜ音たててうらみぞそむるあまのは衣（二一九）
〈句題原詩〉大江朝綱『御物小野道風筆屏風土代』「七夕代牛女」
独坐青楼漏漸深　支頤想像暁来心　風従昨夜声弥怨　露及明朝涙不禁
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・七夕・二一五

（土67）
炎景剰残衣尚重
蟬のはのうすき衣もなほおもし秋の日数もなれぬこのごろ（二二〇）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・早秋・二一〇
炎景剰残衣尚重　晩涼潜到簟先知（「立秋後作」紀長谷雄）

（土68）
暁露鹿鳴花始発
わがやどの庭の秋萩咲きそめてこのあかつきの露ぞうつろふ（二二一）

〈句題原詩〉菅原道真『新撰万葉集』巻上・八六「秋歌三十六首（ノ一）」
商飆颯颯葉軽軽　壁蛬流音数処鳴　暁露鹿鳴花始発　百般攀折一枝情
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・萩・二八二

（土69）
竹風鳴葉月明前
おとづるる夜半のあらしやふけぬらんまがきの竹をいづる月かげ（二二二）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・秋興・二二六
第一傷心何処最　竹風鳴葉月明前（「早秋感懐」島田忠臣）

（土70）
由来感思在秋天
身にしめし秋の夕のながめより物おもふわれとなりにけるかな（二二三）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・秋興・二二五
由来感思在秋天　多被当時節物牽（「早秋感懐」島田忠臣）

（土71）
緑草如今麋鹿苑
ふかくさや秋ののらにも成りはててあるじがほなるさをしかの声（二二四）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・古京・五二八
緑草如今麋鹿苑　紅花定昔管絃家（「過平城古京」菅原文時）

（土72）
水底摸書雁渡時
初雁のつばさにかくる玉章のかげさへみゆるやま川の水（二二五）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・水付漁夫・五一七
沙頭刻印鷗遊処　水底模書雁度時（「洞庭湖」大江朝綱）

（土73）
蔓草露深人定後
はらはねばふけゆくままに露ぞおく草にやつるる庭のかよひぢ（二二六）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・秋夜・二三六
蔓草露深人定後　終宵雲尽月明前（「秋夜」小野篁）

（土74）
蘆洲月色随潮満
みつ塩にすさきのあしもみがくれて月よせかへるみしまえの浪（二二七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・白・八〇二
蘆洲月色随潮満　葱嶺雲膚与雪連（「賦白」源順）

（土75）
蘭薫苑嵐摧紫後
むらさきにたがそめおきし藤ばかまその色となくふくあらしかな（二二八）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・菊・二七一
蘭薫苑嵐摧紫後　蓬莱洞月照霜中（「花寒菊点叢」菅原文時）

冬

（土76）
毎朝声少漢林風
紅葉ちる梢の時雨よわるなりきのふはあらしけふは木がらし（二二九）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・落葉・三一二
逐夜光多呉苑月　毎朝声少漢林風（「落葉山中路」具平親王）

（土77）
雪点林頭見有花
時雨までつれなき色とみしかどもときは木ながら花咲きにけり（二三〇）
〈句題原詩〉菅原道真『菅家文草』巻一・二「臘月独興」
玄冬律迫正堪嗟　還喜向春不敢除　欲尽寒光休幾処　将来暖気宿誰家
氷封水面聞無浪　雪点林頭見有花　可恨未知勤学業　書斎窓下過年華
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・氷付春氷・三八四

（土78）
霜妨鶴唳寒無露
おく露のむすべばしろき霜のうへに夜ふかきつるの声ぞさむけき（二三一）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・氷付春氷・三八五
霜妨鶴唳寒無露　水結狐疑薄有氷（「呈源秀才先」高丘相如）

（土79）
群源暮叩谷心寒
とぢやらぬこほりの下になみさえて谷の小川ぞ冬ごもりゆく（二三二）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山付山水・四九五
衆籟暁興林頂老　群源暮叩谷心寒（「秋声多在山」大江以言）

（土80）
人無更少時須惜
をしめども老ばかりこそつもりけれあすはみそぢの数ならぬ身も（二三三）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・暮春・四七
人無更少時須惜　年不常春酒莫空（「春光細賦」小野篁）

恋

（土81）
楊貴妃帰唐帝思
まぼろしをうつつばかりになぐさめてまださめやらぬ夢のかよひぢ（二三四）

〈句題原詩〉『類聚句題抄』九九・源順「対雨恋月」
雲稠尚望清光透　水暗難忘素影生　楊貴妃帰唐帝思　李夫人去漢皇情
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・十五夜付月・二五〇
〈同一句題〉（朗83）

（土82）
年年別思驚秋雁
秋ごとにわすれぬかりの声きけばたちわかれにし人ぞ恋しき（二三五）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・擣衣・三五〇
年年別思驚秋雁　夜夜幽声到暁鶏（「擣衣詩」具平親王）

（土83）
寒閨独臥無夫婿
ひとりのみねやのさむしろうちはらひあかしわびぬる冬のよなよな（二三六）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・恋・七八五
寒閨独臥無夫婿　不妨蕭郎枉馬蹄（「和江侍郎欲来美乃国」十市采女）

（土84）
身化早為胡朽骨
あかざりしみやこをこふる涙こそつひにこしぢの雪ときえしか（二三七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・王昭君・六九九
身化早為胡朽骨　家留空作漢荒門（「王昭君」紀長谷雄）

（土85）
洲蘆夜雨他郷涙
夢にだにまだみしまえのあしのはにみやこ恋しき袖のあめかな（二三八）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・行旅・六四五
洲蘆夜雨他郷涙　岸柳秋風遠塞情（「秋宿駅館」橘直幹）
〈同一句題〉藤原為家『為家集』一四〇一「洲蘆夜雨他郷涙（正嘉二年）」

雑
（土86）
終宵床底見青天
かたしきやねやの板間のあれしより空もひとつに露ぞおきける（二三九）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・故宮付破宅・五三六
向暁簾頭生白露　終宵床底見青天（「居舎壊」三善善宗）

（土87）
蕭索村風吹笛処
笛のねのほの吹きすさぶ秋かぜにとほぢさびしき里の一むら（二四〇）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・田家・五六八
蕭索村風吹笛処　荒涼隣月擣衣程（「粟田障子田家秋意」高丘相如）

（土88）
故山無主晩雲孤
人しれぬ山ぢのおくに住みなれて夕暮ごとにかへるしら雲（二四一）
〈句題原詩〉『扶桑集』巻七・隠逸部・紀長谷雄「無隠」
幽人帰徳遂難逋　抽却蒿簪別艸廬　虚澗有声寒溜咽　故山無主晩雲孤
青郊不顧煙花富　緯闕初生羽翼扶　巣許若能逢此日　何因終作穎陽天
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仙家付道士隠倫・五五一

（土89）
晴後青山臨牖近
窓ちかきむかひの山に霧晴れてあらはれわたるひばらまきはら（二四二）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山家・五六一

晴後青山臨牖近　雨初白水入門流（「田家早秋」都良香）

（土90）
三千世界眼前尽
みわたせばいく雲ゐとも白雲のかぎりをかぎるゆふ暮の空（二四三）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山寺・五八三
三千世界眼前尽　十二因縁心裏空（「竹生島作」都良香）

（土91）
深洞聞風老檜悲
苔ふかきほらのあき風吹きすぎてふるきひばらの音ぞかなしき（二四四）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・故宮付破宅・五三五
荒籬見露秋蘭泣　深洞聞風老檜悲（「春日過仁和寺」源英明）
〈同一句題〉（為6）

（土92）
人如鳥路穿雲出
飛ぶ鳥のかよふばかりのしるべまで雲のかけはしふみみてしかな（二四五）
〈句題原詩〉菅原道真『菅家文草』巻五・三七四「遊竜門寺」
随分香花意未曽　緑蘿松下白眉僧　人如鳥路穿雲出　地是竜門趁水登
橋老往還誰鶴駕　閣寒生滅幾風灯　樵翁莫笑帰家客　王事営営罷不能
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山寺・五八二

（土93）
暮鳥棲煙守廃籬
しとどなく籬の竹の夕煙いくよかへぬる人すまずして（二四六）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・故宮付破宅・五三四
孤花裏露啼残粉　暮鳥棲風守癈籬（「次妃旧院」惟良春道）

（土94）
触石春雲生枕上
岩がねのまくらの夢もさめやらでよこ雲かすむ春の明ぼの（二四七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山家・五六二
触石春雲生枕上　銜嶺暁月出窓中（「春卜山寺」橘直幹）

（土95）
暁鼯飛落峡煙深
あか月のけぶりもふかき山の辺にをりしりがほのむささびの声（二四八）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山・四九三
夜鶴眠驚松月苦　暁鼯飛落峡煙寒（「旧居詠懐」都良香）

（土96）
未遁春花夢裏名
ちる花のあだなる春の夢のなもいとはずながらいとはしきかな（二四九）
〈句題原詩〉大江朝綱『御物小野道風筆屏風土代』「送僧帰山」→（土63）に既出
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・無常・七九五

（土97）
儻得難逢一乗文
うどんげののりの花にもあひにけり菩提のたねをうゑてける身は（二五〇）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仏事・五九九
已終未習千年役　儻得難逢一乗文（「採菓汲水勧学会」慶滋保胤）

（土98）
一生西望是長襟
よにふればいくそ思ひはおもひかはにしをのぞむぞながき物おもひ（二五一）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・餞別・六三五
　万里東来何再日　一生西望是長襟（「酬沈三十」小野篁）

（土99）
　諫鼓苔深鳥不驚
おとたえしいさめのつづみとりなれてこけむすほどに年ぞへにける（二五二）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・帝王付法皇・六六三
　刑鞭蒲朽蛍空去　諫鼓苔深鳥不驚（「無為而治」小野国風）

（土100）
　不老門前日月遅
年へても老せぬ門をさしてけり空に月日のすまん限りは（二五三）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・祝・七七五
　長生殿裏春秋富　不老門前日月遅（「天子万年」慶滋保胤）
〈同一句題〉（朗52）

（⑪土御門院「句題五十首」（Ⅰ・Ⅱ）ここまで）

⑫藤原為家「朗詠百首」（為1〜為9）

【略解説】

『夫木抄』所収の、藤原為家（一一九八―一二七五）の朗詠句題和歌九首（含存疑一首）。句題は基本的に七言一句の詩句を用いている。貞応三年（一二二四年）当時、為家は二七歳。

【参考】

佐藤恒雄『藤原為家研究』（笠間書院、二〇〇八年）所収「為家の初期の作品（Ⅱ）」

【底本】 新編国歌大観『夫木抄』（底本・静嘉堂文庫本）

【本文】

（為1）
　梅／朗詠百首、窓梅北面雪封寒
日影なきかたえは雪にとぢながらかつがつにほふ窓の梅が枝
（春三・七〇六、雑一・八〇六三・北）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・立春・二
　池凍東頭風度解　窓梅北面雪封寒（「立春日呈芸閣諸文友」菅原篤茂）

（為2）
　貞応三年朗詠百首、（気霽風梳新柳髪）
青柳の夜の間の露の玉かづらかけて吹きほす庭の春風（春三・七八〇）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』春部・早春・一三
　気霽風梳新柳髪　氷消浪洗旧苔鬚（「春暖早春賦」都良香）
〈同一句題〉（土54）

（為3）
　貞応三年朗詠百首、望山出月猶蔵影
山のはは出づる景色に匂へどもまだ影かくす秋の夜の月（秋四・五一二三）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・秋晩・二三一
　望山幽月猶蔵影　聴砌飛泉転倍声（「秋夕口号」菅原文時）

（為4）
　貞応三年朗詠百首、一夜林霜葉尽紅
むすびけるひとよのしものあさおきにみないろまさるきぎの紅葉ば（秋五・五八一六）

〈句題原詩〉温庭筠『温飛卿詩集』巻九「盤石寺留別成公」
　槲葉蕭蕭帯葦風　寺前帰客別支公　三秋岸雪花初白　一夜林霜葉尽紅
　山疊楚天雲圧塞　浪遥呉苑水連空　悠然旅榜頻回首　無復松窓半偈同
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・霜・三六八
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・暮秋・二一〇

（為5）
朗詠百首、冬歌、閨寒夢驚　或添孤婦砧上
夢むすぶねやさむからししづのめがさゆる霜夜に衣うつこゑ（冬一・六五三七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』冬部・霜・三六九
閨寒夢驚　或添孤婦之砧上　山深感動　先侵四皓之鬢辺（「青女司霜賦」紀長谷雄）

（為6）
洞／同（深洞聞風老檜悲）、朗詠百首
風ふけばふる木のひばらこゑたててあとなきほらにむかしこふらし（雑三・八九八三）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・故宮付破宅・五三五
荒籬見露秋蘭泣　深洞聞風老檜悲（「秋日過仁和寺」源英明）
〈同一句題〉（土91）

（為7）
洞／同（朗詠）百首、石床留洞嵐空払
おのづからいく千とせまでふりぬらんいしのゆかふくほらの山かぜ（雑三・八九八四）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・仙家付道士隠倫・五四七
石床留洞嵐空払　玉案抛林鳥独啼（「坤元録御屏風山中有仙家」菅原文時）

（為8）
松／貞応三年朗詠百首、外物独醒松澗色
竜田山したまでかはる紅葉ばにひとり色なき谷のまつ風（雑一一・一三八二四）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』秋部・紅葉・三〇四
外物独醒松澗色　余波合力錦江声（「山水唯紅葉」大江以言）

（為9）
山家／貞応三年朗詠百首、銜峰暁月出窓中
峰の庵の窓よりいづる月だにも有明の比はなほまたれけり（雑一二・一四四七七）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題典拠〉『和漢朗詠集』雑部・山家・五六二
触石春雲生枕上　銜嶺暁月出窓中（「春卜山寺」橘直幹）

（⑫藤原為家「朗詠百首」ここまで）

⑬葉室光俊『閑放集』（光1～光13）

【解説】
葉室光俊（法名・真観、一二〇三―一二七六）の家集『閑放集』所収の句題和歌一六首。句題として用いられている詩句は七言一句が十五、五言一句が一である。なお（光9）句題の「行」字は題字の末尾が冒頭に混入したものであり、四言の詩句が五言の句題となっている。詩句の出典は、七句が『千載佳句』で最多であるが、宋詩を含み、当時の漢籍受容の一端を示すものである。

【参考】
小川剛生「句題和歌と唐宋詩」（『室町文化の座標軸――遣明船時代の列島と文事――』勉誠社、二〇二一年）

（可能な限り原本に当たっているが、一部小川氏の示す本文をそのまま使っているところがある）

【底本】新編私家集大成（底本・神宮文庫本）

【本文】
（光1）
山〔　〕蟬声薄暮悲
秋くればさらでも物のかなしきに夕の山にせみのなくなる（五）
〈句題原詩〉王維『王右丞文集』巻四「早秋山中作」
無才不敢累明時　思向東渓守故籬　不厭尚平婚嫁早　却嫌陶令去官遅
草間蛩響臨秋急　山裏蟬声薄暮悲　寂莫柴門人不到　空牀独与白雲期
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・早秋・一五二、『新撰朗詠集』秋部・虫・三〇八

（光2）
古集に、蛍火飛来促織鳴
蛍とぶゆふかげ草のしら露にはたおる虫も秋と鳴なり（五四）
〈句題原詩〉『石倉歴代詩選集』巻七九・雍陶「宿石門山居」
窓灯欲滅夜愁生　蛍火飛来促織鳴　宿客幾回眠又起　一渓秋水枕辺声
（光3）
古集に、日晩深山水景寒
秋の日のさすや夕の山かげはした行水もをとぞさむけき（六〇）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋興・一七〇
秋迎暁月鴻声早　日映深山水気寒（「喜到家」賀蘭遂）
（光4）
人過遠村秋日暮
旅人やとをちの里にすぎぬらん秋風さむみ日ぞ暮にける（六一）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題他出〉『千載佳句』別離部・行旅・九五〇
人過遠村秋日晩　鳥飛平野暮天空（「秋暮」李潭）
（光5）
古集に、呉苑秋風月満頻
ながめばやいかなるその秋風にみちては月のくまなかるらん（六九）
〈句題原詩〉許渾『丁卯集』巻上「題蘇州虎丘寺僧院」、『文苑英華』巻二三八
暫引寒泉濯遠塵　此生多是異郷人　荊渓夜雨花開疾　呉苑秋風月満頻
万里高低門外路　百年栄辱夢中身　世間誰似西林客　一臥煙霞四十春
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋夜・一九三
（光6）
心懸秋月照呉関
空はれていづれのせきかてらすらん心にかかる秋の夜の月（七〇）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題他出〉『千載佳句』別離部・別離・九〇五
騎躡春風離漢苑　心懸秋月照呉関（「徳征詩」僧去奢）
（光7）
風易秋月雁行斉
空はれて夜わたる風やおくるらん月にひとしきはつかりのこゑ（七一）
〈句題原詩〉原拠不明
〈句題他出〉『千載佳句』人事部・兄弟・四〇五
雲布長天竜勢逸　風高秋月雁行斉（「送舎弟厳府」崔致遠）
（光8）
故人心似中秋月
見ればまづ昔の人の心までおもひしらるる秋の夜の月（七二）
〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻七「中秋李漕氷壺燕集」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻四・節候部・中秋
把酒氷壺接勝游　今年喜不負中秋　故人心似中秋月　肯為狂夫照白頭
（光9）
行（ママ）月明星稀
なかなかにくもらぬ夜半の月にこそ空なるほしはまれに見えけれ（七三）
〈句題原詩〉『文選』巻二七・楽府上・曹操「短歌行」、『古今合璧事類備用』巻七二
（前略）
月明星稀　烏鵲南飛　繞樹三匝　何枝可依
山不厭高　海不厭深　周公吐哺　天下帰心
（光10）
水流無限月明多
末とをくながるる水にやどりても猶あまりある月の影かな（七四）
〈句題原詩〉劉禹錫『劉禹錫集』巻六・楽府上「隄上行三首（ノ二）」、『万首唐人絶句』

巻五

江南江北望煙波　入夜行人相応歌　桃葉伝情竹枝怨　水流無限月明多

（光11）

月明江上笛声多

ふけゆけば笛の音あまたきこゆなりいかなる江にか月のすむらん（七五）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題他出〉『千載佳句』天象部・風月・二七四

風起竹間蛍影乱　月明江上笛声多（「秋夜旅泊」道彦）

（光12）

江鷗散霰夜無伴漁父

かもめとぶ入江をさむみさ夜更て友なきあまや月を見るらん（七六）

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・漁父・許彦国

栄辱従来総不知　幾間茅屋対漁磯　江鷗散処夜無伴　荷葉老時秋有衣

（光13）

夜半鐘声到客船

舟とむる入江の楓しもさえて夜ぶかき鐘を月に聞かな（七七）

〈句題原詩〉張継「楓橋夜泊」（『三体詩』巻一、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻六・昼夜門・夜、『唐詩紀事』巻二五、『文苑英華』巻二九二）

月落烏啼霜満天　江楓漁火対愁眠　姑蘇城外寒山寺　夜半鐘声到客船

（光14）

月穿疎屋夢難眠

侘ぬれば夢みるほどのなぐさめもねやもる月にかなはざりけり（七八）

〈句題原詩〉杜荀鶴「旅中臥病」（『全唐詩』巻六九二）

秋来誰料病相縈　枕上心猶算去程　風射破窓灯易滅　月穿疎屋夢難成

故園何啻三千里　新雁纔聞一両声　我自与人無旧分　非干人与我無情

〈句題他出〉『千載佳句』天象部・風月・二七三

〈同一句題〉（土21）

（光15）

黄葉落時聞擣衣

衣うつをとこそをちにきこゆなれ山の木の葉に風や吹らん（一〇一）

〈句題原詩〉朱長文「望中有懐」（『唐詩紀事』巻二八）

竜向洞中銜雨出　鳥従花裏帯香飛　白雲断処見明月　黄葉落時聞擣衣

（光16）

菊倚荒庭寂寞開

露よりも老の涙ぞつもるらんあれたる庭のきくのふちとは（一〇三）

〈句題原詩〉『南陽集』巻三・趙湘「九日幽居書懐」

九月蟬稀九日催　年光如逐水声回　人思往事凄涼在　菊倚荒庭寂寞開

落葉偶従池上過　夕陽初傍酒辺来　白衣去後無消息　雨湿東離欲長苔

（⑬葉室光俊『閑放集』ここまで）

⑭一条実経『円明寺関白集』より八首（円1～円8）

【解説】

一条実経（一二二三―一二八四）の家集『円明寺関白集』所収の句題和歌八首。『円明寺関白集』は文永七年（一二七〇）年以前成立。全一一一首で、四季・恋・雑に部類されており、句題和歌は各部に散在して収められいる。題として用いられている詩句は、五言一句・五言二句・七言一句と様々で、出典は『白氏文集』が六句、宋之問が一句、不明一句である。

【底本】新編私家集大成（底本・冷泉家時雨亭叢書『中世私家集　八』所収「後一条前関白実経詠」）

【本文】

（円1）

春／夜来巾上涙　一半是春氷

とけやらぬ春のこほりぞしられぬるなをよさむなる袖のなみだに（三）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一八・一一九五「閨怨詞三首（ノ二）」

珠箔籠寒月　紗窓背暁灯　夜来巾上涙　一半是春氷

（円2）
　春／園裏春梅今已発
さきにけりむめがかにほふたけかはのはしのつめなる春の花ぞの（六）

〈句題原詩〉原拠不明

（円3）
　春／花下忘帰因美景
うつろはで人のこころをはなもみよいくかもここにかくてありやと（二〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六一六「酬歌舒大見贈」
　去歳歓遊何処去　曲江西岸杏園東　花下忘帰因美景　樽前勧酒是春風
　各従微宦風塵裏　共度流年離別中　今日相逢愁又喜　八人分散両人同
〈句題他出〉『千載佳句』宴喜部・春宴・六九五、『和漢朗詠集』春部・春興・一八
〈同一句題〉（千13）、（慈定9）

（円4）
　夏／初着単衣支体軽
うらもなくけふおいらくぞわすれぬるたちゐもかろきてせみのは衣（二五）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一九・一二八〇「七言十二句贈駕部呉郎中七兄」
　四月天気和且清　緑槐陰合沙堤平　独騎善馬銜鐙穏　初著単衣支体軽
　退朝下直少徒侶　帰舎閉門無送迎　風生竹夜窓間臥　月照松時台上行
　（後略）
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・首夏・一二一、『新撰朗詠集』夏部・更衣・一三五
〈同一句題〉（土11）

（円5）
　夏／蟬声暮啾啾
くるる日のやまかきおほくなるままにこずゑのせみはこゑたてつなり（三四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五・〇一七九「永崇里観居」
　季夏中気候　煩暑自此収　蕭颯風雨天　蟬声暮啾啾
　永崇里巷静　華陽観院幽　軒車不到処　満地槐花秋
　（後略）
〈同一句題〉（慈定24）、『夫木抄』三五九九・八条院高倉「文集百首歌に、窓風雨天蟬声」

（円6）
　夏／但能心静即身涼
人とはぬみやまのいほのしづけきになつなきものは心なりけり（三六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一五・〇八五二「苦熱題恒寂師禅室」
　人人避暑走如狂　独有禅師不出房　可是禅房無熱到　但能心静即身涼
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・避暑・一三三、『和漢朗詠集』夏部・納涼・一六一
〈同一句題〉（千32）、（慈定22・寂9）、『為家集』四三四「心静即身涼〈文永八年四月十八日続百首題自和漢朗詠注出之〉」

（円7）
　秋／石上泉声帯雨秋
せきとむるいはまのみづのをとそへてむらさめすぐるあきの山ざと（四一）

〈句題原詩〉宋之問「三陽宮石淙侍宴応制」
　離宮秘苑勝瀛洲　別有仙人洞壑幽　巖辺樹色含風冷　石上泉声帯雨秋
　鳥向歌筵来度曲　雲依帳殿結為楼　微臣昔忝方明御　今日還陪八駿遊
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋興・一六九
〈同一句題〉（俊1）

（円8）
　雑／此身何足厭
はてはまたとてもかくてもあられけりなにかはさらに身をもいとはん（一〇一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五七七「逍遥詠」
　亦莫恋此身　亦莫厭此身　此身何足恋　万劫煩悩根
　此身何足厭　一聚虚空塵　無恋亦無厭　始是逍遥人
〈同一句題〉（慈定100）、『新後拾遺集』釈教・一五〇五・花園院「此身何足厭一聚虚空塵」

（⑭一条実経『円明寺関白集』ここまで）

⑮源資平『資平集』（資1～資10）

【解説】

源資平（一二二三―一二八四）の家集『資平集』所収の句題和歌一〇首。『資平集』は康治二年（一二七六）一月五日以後成立。『資平集』は総歌数一五〇首で、四季・雑の部立（一二五首）の後に、五戒・古集・物名・折句・沓冠の二五首を収める。このうちの「古集」が句題和歌に相当する部立となっている。句題は五言二句・七言一句・七言二句・七言四句と様々であるが、すべて『白氏文集』から選ばれている。

【参考】

錺武彦『鎌倉時代中後期和歌の研究』（新典社、二〇一二年）所収「『資平集』の「古集」十首について――源資平の『白氏文集』受容――」

【底本】

新編国歌大観（底本・宮内庁書陵部蔵本）

【本文】

（資1）

梨花結成実　燕卵化為雛　時物又如此　道情復何如

はなとりのおのが時しるをりをりにおなじみのりの道もかはらじ（一三一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四〇八「春暮寄元九」

梨花結成実　燕卵化為雛　時物又若此　道情復何如

但覚日月促　不嗟年歳徂　浮生都是夢　老小亦何殊

（後略）

（資2）

照水姿容雖已老　上山筋力未全衰

たに水にしらぬおきなのかげ見えてはなゆゑはるの山ぢくらしつ（一三二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五四・二四八七「自思益寺次楞伽寺作」

朝従思益峰遊後　時到楞伽寺歇時　照水姿容雖已老　上山筋力未全衰

行逢禅客多相問　坐倚漁舟一自思　猶去懸車十五載　休官非早亦非遅

（資3）

松柱石階竹編牆

竹あめるかきほのこけぢ跡たえてよのうきふしもさぞへだてけむ（一三三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九七五「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁五首（ノ一）」

五架三間新草堂　石階桂柱竹編牆　南檐納日冬天暖　北戸迎風夏月涼

灑砌飛泉纔有点　払窓斜竹不成行　来春更葺東廂屋　紙閣蘆簾着孟光

（資4）

雲生澗谷衣裳潤

露よりも袖にしをるるたにのとやあけくれ雲のたつにまかせて（一三四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九七七「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁五首（ノ三）」

長松樹下小溪頭　斑鹿胎巾白布裘　薬圃茶園為産業　野麋林鶴是交遊

雲生澗戸衣裳潤　嵐隠山厨火燭幽　最愛一泉新引得　清冷屈曲遶階流

〈句題他出〉『千載佳句』山居部・九九二、『新撰朗詠集』雑部・山家・五一四

（資5）

但恐鏡中顔　今朝老於昨

きのふ見し鏡のかげもけさはなほしものよもぎのふりまさりつつ（一三五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五三「歎老三首（ノ一）」

晨興照清鏡　形影両寂寞　少年辞我去　白髪随梳落

万化成於漸　漸衰看不覚　但恐鏡中顔　今朝老於昨

人生少満百　不得長歓楽　誰会天地心　千齢与亀鶴

吾聞善医者　今古称扁鵲　万病皆可治　唯無治老薬

〈同一句題〉『続門葉和歌集』雑下・七九四・観心院八清丸「文集の送老詩に可憐鏡中頻今朝老昨日といへる心をよめる」

（資6）

人年少満百　不得長歓楽

ももとせのなかばすぎにし老がよもこてふににたる夢かとぞおもふ（一三六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五三「歎老三首（ノ一）」→（資5）に既出

（資7）
　隔窓知夜雨　芭蕉先有声
むらさめをしらでやよはにすぎなましおとにぞたつる庭のばせうば（一三七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四四三「夜雨」
　早蛩啼復歇　残灯滅又明　隔窓知夜雨　芭蕉先有声

〈句題他出〉『新撰朗詠集』秋部・秋夜・二一三

（資8）
　宮漏三声知夜半　好風涼月満松筠
庭のまつまがきの竹におとづれて風ふくるよの月ぞすずしき（一三八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇七二二「同銭員外禁中夜直」
　宮漏三声知半夜　好風涼月満松筠　此時閑坐寂無語　薬樹影中唯両人

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋夜・一八七

（資9）
　誰家思婦秋擣帛　月苦風凄砧声幽
よさむなるたが秋風のあさぢはら月のありあけに衣うつらん（一三九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一九・一二八七「聞夜砧」
　誰家思婦秋擣帛　月苦風凄砧杵悲　八月九月正長夜　千声万声無了時
　応到天明頭尽白　一声添得一茎糸

（資10）
　十月鷹出籠　草枯雉菟肥
はしたかのおのが時しる神な月かりばのをのも霜がれにけり（一三三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一・〇〇三九「放鷹詩」
　十月鷹出籠　草枯雉兎肥　下韝随指顧　百擲無一遺
　鷹翅疾如風　鷹爪利如錐　本為鳥所設　今為人所資
（後略）

（⑮源資平『資平集』ここまで）

⑯飛鳥井雅有『隣女集』「文の心よみ侍し歌」（雅1～雅15）

【略解説】
飛鳥井雅有（一二四一―一三〇一）の家集『隣女集』巻三所収の漢文題和歌。「文の心よみ侍し歌」と題する一五首で、題として用いられている文は『孝経』『帝範』を出典とする。『隣女集』は巻ごとに順次加えられていったものであるが、巻三は永仁二年（一二九四）一二月二三日以前の編纂。

【参考】
本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院、二〇〇二年）所収「飛鳥井雅有『隣女集』瞥見――「文の心よみ侍し歌」をめぐって――」

【底本】新編私家集大成（底本・国立公文書館内閣文庫本）

【本文】
　文の心よみ侍りし歌中に

（雅1）
　人行莫大於孝
いにしへのあとはかたがたおほけれどおやにつかふる道ぞかしこき（一六七一）

〈句題原文〉『孝経』聖治章・第一〇
　子曰、天地之性、人為貴。人行、莫大於孝。孝、莫大於厳父。

（雅2）
　進思尽忠　退思補過
心をばつかふるみちにすすめども猶たちかへり身をぞいさむる（一六七二）

〈句題原文〉『孝経』事君章・第二一
　子曰、君子之事上也、進思尽忠、退思補過、将順其美、匡救其悪、故上下能相親也。

（雅3）
　一人有慶　兆民頼之
あまつそら春たちくればのも山もおのがさまざま花さきにけり（一六七三）

〈句題原文〉『孝経』天子章・第二

呂刑云、一人有慶、兆民頼之。

（雅4）
在上不驕　高而不危
おほぞらの星のくらゐはたかけれど道たがはねばかげぞ久しき（一六七四）

〈句題原文〉『孝経』諸侯章・第三
子曰、居上不驕、高而不危。制節謹度、満而不溢。

（雅5）
戦戦兢兢　如臨深淵　如履薄氷
そこひなき岩がき淵の薄氷心もとけぬよの中のうさ（一六七五）

〈句題原詩〉『孝経』諸侯章・第三
詩云、戦戦兢兢、如臨深淵、如履薄氷。

（雅6）
夙夜匪懈臣　事一人
しも雪にわが身をせめてくるとあくと君につかふるとしぞへにける（一六七六）

〈句題原文〉『孝経』卿大夫章・第四
詩云、夙夜匪懈、以事一人。

（雅7）
資於事父臣　事君其敬同
たらちねのおやにしたがふ心もて君につかふる道ぞかはらぬ（一六七七）

〈句題原文〉『孝経』士人章・第五
子曰、資於事父以事母、其愛同。故資於事父以事君、其敬同。故母取其愛、而君取其敬。兼之者父也。

（雅8）
自天之時　就地之利
なつはうゑ秋はかりたにたつ民のおのがままなる身とやしるらん（一六七八）

〈句題原文〉『孝経』庶人章・第六
子曰、因天之時、就地之利、謹身節用、以養父母。此庶人之孝也。

（雅9）
不以一悪忘其善
あだにちる色をうしとて山桜いづれの花におもひおとさん（一六七九）

〈句題原文〉唐太宗『帝範』審官篇
不以一悪忘其善、勿以小瑕掩其功。

（雅10）
倹以養性
世中はたまのうてなもなにかせん草の庵もこころこそすめ（一六八〇）

〈句題原文〉唐太宗『帝範』誡盈篇
夫君者、倹以養性。静以修身。倹則民不労、静則下不擾民。

（雅11）
禍福無門　唯人所召
うらみじななには入江のよしあしもにすむむしの名にぞ有りける（一六八一）

〈句題原文〉唐太宗『帝範』崇文篇
君子労処其難、不能逸居其易、故福慶流之。是知、禍福無門、惟人所召。欲悔非於既往、唯慎過於将来、択哲王以師、与無以吾為前鑑。

（雅12）
欲悔非於既往　唯慎過於将来
ゆくすゑをいまは思はんおもひがは過ぎにしうさはまたもかへらず（一六八二）

〈句題原文〉唐太宗『帝範』崇文篇↓（雅11）に既出

（雅13）
慾生於身　不遇則身喪
ふえによる秋のをしかもおもひより身をいたづらになしぞはてぬる（一六八三）

〈句題原文〉唐太宗『帝範』崇倹篇
故知驕出於志、不節則志傾、慾生於身、不遏則身喪。

（雅14）
茅茨不剪
ととのへぬくさののきばはよよへても道有るみよのためしにぞ引く（一六八四）

〈句題原文〉唐太宗『帝範』崇倹篇
茅茨不剪、采椽不断。舟車不飾、衣服無天。

（雅15）
王者欲明　讒人弊之
久方の月日はいづらくもるべきただ雨雲のおほふなりけり（一六八五）

〈句題原文〉唐太宗『帝範』去讒篇
故叢蘭欲茂、秋風敗之、王者欲明、讒人蔽之。此奸佞之危也。

（⑯飛鳥井雅有『隣女集』ここまで）

⑰日野俊光『俊光集』（俊1～俊7）

【解説】
日野俊光（一二六〇―一三二六）の家集『俊光集』所収の句題和歌七首。句題はすべて七言一句で、『白氏文集』『千載佳句』『和漢朗詠集』を出典とする。

【底本】新編国歌大観（書陵部蔵御所本〔五〇一・六九〇〕）

【本文】
（俊1）
石上泉声帯雨秋
いはにそそく泉のおとも秋なるにひびきかはせるゆふぐれの雨（三一三）

〈句題原詩〉宋之問「三陽宮石淙侍宴応制」
離宮秘苑勝瀛洲　別有仙人洞壑幽　巖辺樹色含風冷　石上泉声帯雨秋
鳥向歌筵来度曲　雲依帳殿結為楼　微臣昔忝方明御　今日還陪八駿遊

〈句題他出〉『千載佳句』四時部・秋興・一六九
〈同一句題〉（円7）

（俊2）
蛬思蟬声満耳秋
きりぎりすうらむる庭の夕かぜに蟬のこゑさへ秋にかなしき（三一四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇七〇四「題李十一東亭」
相思夕上松台立　蛬思蟬声満耳秋　惆悵東亭風月好　主人今夜在鄜州
〈句題他出〉『千載佳句』四時部・早秋・一四六、『和漢朗詠集』秋部・秋晩・二三〇
〈同一句題〉（慈定30）、『新続古今集』秋上・四二八・前中納言定嗣「相思夕上松台立蛬思蟬声満耳秋といへる心を」、加藤千蔭『うけらが花初編』五六五「相思夕上松台立　蛬思蟬声満耳秋」

（俊3）
残照下東籬
秋ふかきまがきの菊の露のうへにのこる夕日のかげぞさびしき（三一六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五四・二四二八「池上早秋」
荷芰緑参差　新秋水満池　早涼生北檻　残照下東籬
露飽蟬声懶　風乾柳意衰　過潘二十歳　何必更愁悲

（俊4）
門外夕陽寒映竹
しばの戸は雪のたえまもさえくれて竹の葉さむきゆふ日かげかな（三六九）

〈句題原詩〉原拠不明
〈句題他出〉『千載佳句』隠逸部・山居・九九九
門外夕陽寒映竹　洞中秋水暗連山（「過山居」何玄）

（俊5）
万株松樹青山下
雲かかるたかねの木木はみえわかでふもとにしるき松のむらだち（五八二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三三八「夜帰」

半酔閑行湖岸東　馬鞭敲鐙轡瓏璁　万株松樹青山上　十里沙堤明月中
楼角漸移当路影　潮頭欲過満江風　帰来未放笙歌散　画戟門開蠟燭紅

〈句題他出〉『千載佳句』遊放部・夜帰・八八六

（俊6）
草室深鎖白雲間

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題他出〉『千載佳句』遊放部・遊覧・八四五
漁艇遠飄滄海上　草室深鎖白雲間（「途中偶題」道彦）

〈同一句題〉（土37）

（俊7）
人間栄耀目縁浅

さきの世のむくひとしらでありしまでやうき身のほどをなげかれもせじ（五八四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二四八「老来生計」
老来生計君看取　白日遊行夜酔吟　陶令有田唯種黍　鄧家無子不留金
人間栄耀因縁浅　林下幽閑気味深　煩慮漸銷虚白長　一年心勝一年心

〈句題他出〉『千載佳句』隠逸部・幽居・一〇一五、『和漢朗詠集』雑部・閑居・六一七

〈同一句題〉（慈定59）

（⑰日野俊光『俊光集』ここまで）

⑱伏見院『伏見院御集』（伏1～伏7）

【解説】

伏見院（一二六五―一三一七）の家集『伏見院御集』（広沢切）に収められる句題和歌。句題として用いられる詩句の出典は、『白氏文集』『和漢朗詠集』『千載佳句』を主とする。

【参考】

阿尾あすか「伏見院の和歌題と漢文学」（『国語国文』86―4、二〇一七年四月）
中村健史『雪を聴く　中世文学とその表現』（和泉書院、二〇二一年）所収「伏見院歌出典考」

【底本】新編私家集大成『伏見院御集』。
（伏1～3）：伏見院宸翰御詠草春秋　広沢切　高松宮旧蔵
（伏4）：京都博物館旧蔵
（伏5）：開口神社蔵
（伏6）：森川馨氏蔵
（伏7）：伏見院詠草　東京国立博物館蔵（新編私家集増補）

【本文】

（伏1）
古巣、幽情只愛洞中春

をのづからもとめぬともは山かげにありけるものをはなとりのやど（二七八）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題他出〉『千載佳句』隠逸部・隠士・九八四
野性本憐松下月　幽情唯愛洞中春（「欲帰山」庄翺）

（伏2）
野草山花又欲春

あはれなりのやまの草木それだにもたがをしへたる春にかあるらん（二七九）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一三・〇六七七「過高将軍墓」
原上新墳委一身　城中旧宅有何人　妓堂賓閣無帰日
野草山花又欲春　門客空将感恩涙　白楊風裏一霑巾

（伏3）
陰陰花浣月

のきふかき花のかほりにそらとぢて木のまわづかにあくる月かげ（二八〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五二・二二七二「和順之琴者」
陰陰花院月　耿耿蘭房燭　中有弄琴人　声貌俱如玉
清冷石泉引　澹泞風松曲　遂使君子心　不愛凡糸竹

（伏4）

閑窓有月之時

うれへあかずねざめのまどのあきよいまたれしかとふや月は夜すがら（一〇二〇）

〈句題原詩〉原拠不明

〈句題他出〉『和漢朗詠集』雑部・閑居・六一五

幽思不窮　深巷無人之処　愁腸欲断　閑窓有月之時（閑賦）

〈同一句題〉（朗62）

（伏5）

寒林帯夕陽

ちりはてしこずゑのあとのゆふづくひさそはぬいろぞ木木にのこれる（一四五八）

〈句題原詩〉寇準『寇忠愍公詩集』「秋日原上」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩、『古今合璧事類備要』前集・巻一四・時令門・秋・雑詠

蕭蕭古原上　景物感離腸　遠嶠収残雨　寒林帯夕陽

渓声迷竹韻　野色混秋光　吟罷還西望　平沙起雁行

（伏6）

往事都如夢

さめてのちすぎての後のおもかげよなのみぞかはるゆめとうつつと（一六二二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一七・一一〇七「十年三月三十日別微之於澧上十四年三月十一日夜遇微之於峽中停舟夷陵三宿而別言不尽者以詩終之因賦七言十七韻以贈且欲寄所遇之地与相見之時為他年会話張本也」

（前略）

生涯共寄滄江上　郷国俱抛白日辺　往事渺茫都似夢　旧遊零落半帰泉

醉悲灑涙春杯裏　吟苦支頤暁燭前　莫問竜鐘悪官職　且聴清脆好文篇

（後略）

〈句題他出〉『千載佳句』人事部・感歎・五一七、『和漢朗詠集』雑部・懐旧・七四三

〈同一句題〉（慈定88）、（土45）、香川景樹『桂園一枝』七五五「往時眇茫都似夢」

（伏7）

月好風涼夜

しづかなるねざめのそらに月すみてはだへさむけき秋風のとこ（二六八）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻五六・二六八四「快活」

可惜鶯啼落花処　一壺濁酒送残春　可憐月好風涼夜　一部清商伴老身

飽食安眠消日月　閑淡冷笑接交親　誰知将相王侯外　別有優遊快活人

（⑱伏見院『伏見院御集』ここまで）

⑲頓阿『句題百首』（頓1～頓100）

【解説】

頓阿が選定した句題一〇〇題を各歌人がそれぞれ一〇〇首詠じたもの。延文五年（一三六〇）初め頃に句題の選定と詠歌の勧誘が行われ、康安から貞治初年（一三六一～六三）頃に成立した。頓阿一人の百首を収める伝本は「頓阿句題百首」「句題百首」、頓阿・良守・良春・頓宗・周嗣の五名の百首を収める伝本は「一花抄」「五玉集」「句題百首」と題されている。構成は、春一五首・夏一〇首・秋一五首・冬一〇首・恋一〇首・旅一〇首・閑居一〇首・雑二〇首。

【参考】

稲田利徳『和歌四天王の研究』（笠間書院、一九九九年）所収「『句題百首』（一花抄）の諸本と成立」、齋藤彰「句題百首考（一）」（『学苑』557、一九八六年五月）・同二（『学苑』560、一九八六年八月）・同（三）（『学苑』563、一九八六年一一月）、同（四）（『学苑』565、一九八七年一月）、同（五）（『学苑』577、一九八八年一月）、同（六）（『学苑』585、一九八八年九月）、同（七）（『学苑』590、一九八九年一月）、同（八）（『学苑』602、一九九〇年一月）、小川剛生「頓阿句題百首の源泉――宋末元初刊の詩選・詩話・類書との関係を中心に」（『藝文研究』117、二〇一九年）

（可能な限り原本に当たっているが、一部小川氏の示す本文をそのまま使っているところがある）

⑳三条西公条『称名院句題百首』（称1～称100）

【解説】

三条西公条（一四八七―一五六三）の春日社奉納百首。⑲頓阿『句題百首』題を用いた句題百首。内題と位署から、天文一一年（一五四二）冬もしくは翌一二年（一五四三）冬の成立。

【参考】
齋藤彰「公条句題百首の詠法（上）（下）（完）」（『学苑』779～781、二〇〇五年九～一一月）

【底本】
『頓阿句題百首』…新編国歌大観（底本・彰考館蔵本）
『称名院句題百首』…群書類従本

【本文】
春十五首
（頓1）
遥峰帯晩霞
頓阿　菅原や伏見の暮の面影にいづくの山もたつかすみかな（一）
良守　暮れかかる遠山鳥の尾上よりまだきへだててたつ霞かな（二）
良春　くれにけりそことも見えず春の日のながらの山は霞隔てて（三）
頓宗　入方の日影に見えて霞たつ山は夕ぞあらはれにける（四）
周嗣　暮行けば遠ざかるなり山の端にかすみやいとど立ちへだつらん（五）
（称1）
遥峰帯晩霞
朝霞わが三笠山雲はれてよその夕日の嶺ほのかなり
〈句題原詩〉劉克荘『後村居士詩』巻三「暝色」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻六・昼夜門・夜・無名氏「春夜」、『瀛奎律髄』巻一五
暝色千村静　遥峰帯浅霞　荷鋤帰別墅　乞火到隣家
疎鼓聞更遠　昏灯見字斜　小軒風露冷　自起灌蘭花
〈同一句題〉村田春海『琴後集』五〇「遥峰帯晩霞」
（頓2）
残雪更粘枝
阿　山ふかみ春ともいまだしらかしの枝たる雪ぞ消がてにする（六）
守　吹けば猶嵐の音にこほりつつおのれとけたぬ松のしら雪（七）
春　消がての雪ぞ落ちそふ春風の梢をはらふ松のしづえに（八）
宗　消がてに猶こそ残れ松の雪はらふもさゆる春の嵐に（九）
嗣　さもこそは春の光のよそならめ雪さへきえぬ谷の松がえ（一〇）
（称2）
残雪更粘枝
若菜つむみやこを遠み深山にはまた目にかかる枝の白雪
〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻三・節候門・立春・林季謙「歳前一日立春」
蠟蟻梅猶糝　春盤菜已糸　条風初被木　残雪更粘枝
（頓3）
春浅霜連夜
阿　朝ごとによのまの霜の消えやらでまだ萌出でぬ萩の焼原（一一）
守　春きても光よそなる玉ささのいくよの霜にむすぼほるらん（一二）
春　春も猶冬がれながらみしまえの蘆のよごとに霜はふりつつ（一三）
宗　よなよなの霜も猶おく手枕に春とや夢のむすぶともなき（一四）
嗣　春は猶浅沢沼にすむたづのうは毛にさゆるよなよなの霜（一五）
（称3）
春浅霜連夜
葉がへせぬ心をとめて呉竹の夜な夜な霜の春にさゆらん
〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・江景・潘紫巌「江行」
急櫓鳴鵝鸛　喧灘鬧鼓鼙　風随山曲折　船与浪高低
春浅霜連夜　天随月半渓　嵯峨如許石　直欠一鐫題
（頓4）
梅残数点雪
阿　梅の花かつ咲きにけり絶絶にのこる垣ねの雪と見るまで（一六）
守　白妙の雪のうちより咲きそめてちるまでまがふ梅の花かも（一七）
春　梅がえに今は春べと咲く花を猶冬ごもる雪かとぞ見る（一八）
宗　梅がえにかつさく花を鶯のなけども消えぬ雪かとぞ見る（一九）
嗣　窓ちかき梅の初花さきしより春寒からでのこるしら雪（二〇）
（称4）
梅残数点雪
かつさきて年のうちより伴ひし雪をぞ梅のならしがほなる
〈句題原詩〉王安石『臨川集』巻二六「題斉安壁」、『苕溪漁隠叢話』前集・巻三五、『詩人玉屑』巻一七・半山老人「一唱三歎」

日浄山如染　風暄草欲薫　梅残数点雪　麦漲一川雲

（頓5）
清月上梅花
阿　小夜ふけて月ぞもりつる出でぬ間もそれかとまがふ梅の梢に（二一）
守　春の日のくるるもしらずながむれば軒端の梅に月ぞいざよふ（二二）
春　よなよなの花咲きかへて梅がえにもりくる月の影ぞかはれる（二三）
宗　吹きわくる木の間の月の影ながら匂ひをおくる梅の下風（二四）
嗣　梅がえの木のまをいづる春の夜は花にかすまぬ月の影かな（二五）

（称5）
清月上梅花
闇にさへ隠れぬ梅のたち枝より月もさだかに身にやしむらん

〈句題原詩〉恵洪（徳洪）『石門文字禅』巻一〇「上元宿百丈」、『詩話総亀』巻一一、『錦繡万花谷』巻三・冬・詩、『詩人玉屑』巻二〇・禅林・恵洪、『古今合璧事類備要』前集・巻一四・時令門・冬・猿啼
上元独宿寒岩寺　臥看青灯映薄紗　夜久雪猿啼岳頂　夢回清月上梅花
十分春瘦緑何事　一掬帰心未到家　却憶少年行楽処　軟紅香霧噴東華
〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝』五二「清月上梅花」

（頓6）
柳間黄鳥路
阿　心せよ露だにおもき青柳の糸に木づたふ春のうぐひす（二六）
守　鶯の木づたふほどの羽風にもみだれやすきは青柳の糸（二七）
春　なきとめぬ花こそあらめ鶯の木づたひちらす青柳の糸（二八）
宗　青柳の糸の絶まや鶯の枝より枝にうつる通路（二九）
嗣　春風にむすぼほれ行く青柳の糸のみだれを分くるうぐひす（三〇）

（称6）
柳間黄鳥路
花にゆく道によるとや青柳の糸の乱れてうぐゐすのなく

〈句題原詩〉『苕溪漁隠叢話』前集・巻三七・蔡天啓、『詩人玉屑』巻三・宋朝警句、『同』巻一八・蔡天啓
城響濤頭入　江昏雨脚斜　柳間黄鳥路　波底白鷗天

（頓7）
春江浪拍空
阿　明けわたる空もひとつに難波江や霞よりたつ沖つ白なみ（三一）
守　漕ぎかへるおなじ入江もまよふらん霞の下によするしら浪（三二）
春　難波江や霞のおくに立つ浪の花こそ空のかざしなりけれ（三三）
宗　見渡せば空のかぎりもなごの海の霞にかかる澳つしら波（三四）
嗣　難波えや霞の間よりよる浪も雲ゐにかへる春の明ぼの（三五）

（称7）
春江浪拍空
のどかなる春のひかりの空かけて玉江のなみをみがく朝風

〈句題原詩〉秦観『淮海集』巻一一「題趙団練画江于暁景四絶（ノ四）」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・舟・秦少游「舟」
暁浦煙籠樹　春江浪拍空　煩君添小艇　画我作漁翁
〈同一句題〉林述斎『隅田川二百首』（一八三）「春江浪拍天」

（頓8）
春深花始開
阿　待つほどの半は過ぎぬ今よりの春や花みる日数ならまし（三六）
守　さきやらぬ春の日数はかさなりてまだ一枝のはつ桜かな（三七）
春　咲きにけり花はいくかとかぞふれば春の弥生に成りにけるかな（三八）
宗　山桜待つに日数のつもりきてさけばのこりの春ぞすくなき（三九）
嗣　いとど猶日数を花にをしむかな咲きそめぬれば春も程なし（四〇）

（称8）
春深花始開
きさらぎはさへかへるうちに送りきて春もいく程さける初花

〈句題原詩〉『江湖後集』巻三・周端臣「真州梅」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻七・百花門・梅花・周端臣「真州梅」
畝倒幾枝梅　粘枝半是苔　相伝前代種　曽歴太平来
山冷雪猶在　春深花始開　乱離無酒買　嚼蕊当銜杯

（頓9）
花開紅樹乱
阿　花の色にみだれにけりなさほ姫のしのぶにかあらぬ春の衣手（四一）

守　花桜さきそめしよりくれなゐの色にみだるる庭の春風（四二）
春　さくら花うつろはむとや朝日影にほへる雲に山風ぞふく（四三）
宗　紅にうつろはむとや咲く花にみだれてまじる嶺のしら雲（四四）
嗣　雲ながらうつりにけりな紅の初花ざくら色もひとつに（四五）

（称9）
花開紅樹乱
いづる日の色も霞をふく風の峰のさくらにきゆる白雪

〈句題原詩〉徐元杰『楳埜集』巻一二「湖上」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・湖・徐元杰「湖景」
花開紅樹乱鶯啼　草長平湖白鷺飛　風物晴和人意好　夕陽簫鼓幾船帰

（頓10）
花発風雨多
阿　世中はかくこそ有りけれ花ざかり山風吹きてはるさめぞふる（四六）
守　いかなれば嵐も雨もあやにくにいくかもあらぬ花にぞふらん（四七）
春　花ざかりしづ心なき山風にまづさそはれて春雨ぞふる（四八）
宗　つらきかな雲とみえつつ咲く花は雨と風とのやどりなりけり（四九）
嗣　ふる雨に猶やしほれんさくら花嵐におほふ袖はありとも（五〇）

（称10）
花開風雨多
心からよそめを雲と見えそめて花さきしより雨風の空

〈句題原詩〉『万首唐人絶句』巻一三「勧酒」、『唐詩紀事』巻六三・于武陵、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二五・性適門・離別・于武陵「離別」
勧君金屈巵　満酌不須辞　花発多風雨　人生足別離

（頓11）
坐久落花多
阿　見るままにふかくも花のつもるかなやすらふ陰に程やへぬらん（五一）
守　唐錦たたまくをしき木のもとに散りしく花のいくへなるらん（五二）
春　雪とのみまよひの中にふりはててそながらあらぬ花のかげかな（五三）
宗　いとど猶つもりぞ増る散る花の名残をしばししたふ木陰に（五四）
嗣　木の本のすみかも花にうづもれぬをしむ心に時はうつりて（五五）

（称11）
座久落花多
うつろふもおぼえず花にむかひゐてちりかひくもる帰さの道

〈句題原詩〉王維『王右丞相詩集』巻七「従岐王過楊氏別業応教」、『詩話総亀』巻五、『錦繡万花谷』前集・巻三・春・詩、『文苑英華』巻一七九、『唐詩紀事』巻三九、『詩人玉屑』巻四・風騒句法
楊子談経所　淮王載酒過　興闌啼鳥換　坐久落花多
径転迴銀燭　林開散玉珂　厳城時未啓　前路擁笙歌

〈同一句題〉木下幸文『亮々遺稿』一六三「坐久落花多」、小沢蘆庵『六帖詠草拾遺』四九「坐久落花多」

（頓12）
花落樹猶香
阿　花ちりて青葉にかはる梢より吹きくる風の猶にほふかな（五六）
守　思ひつつ見ればや花のかをるらん花は散りにし枝の青葉に（五七）
春　花の香のうつるばかりに吹きとめて青葉ぞにほふ木木の春風（五八）
宗　木のもとを花の跡とてちるよりも猶匂ひある春風ぞ吹く（五九）
嗣　ちりにけるその名残とてしばし猶木の本匂ふ山ざくらかな（六〇）

（称12）
花落樹猶香
よそにちる花とはみえて吹風も根にかへる物やにほひなる覧

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・山・李成季「深山」
日出歛蒼靄　雨余生晩涼　鳥啼人不見　花落樹猶香

〈同一句題〉堯恵『下葉集』九〇「花落樹猶馥」、小沢蘆庵『六帖詠草』二三二「花落樹猶香」

（頓13）
頽檐掛古藤
阿　紫の雲かとぞみる菴ふりて憂世をのきにかかる藤なみ（六一）
守　あはれにもかたぶきのこる軒端かなかかれる藤のつなぐばかりに（六二）
春　玉水も色にぞ落つる春雨のふるやの軒にかかる藤なみ（六三）
宗　年ふりてかたぶく後はさく藤の花にぞかかる軒端なりける（六四）
嗣　たごの蜑の宿までかかる藤の花波にあれ行く軒端ともみず（六五）

（称13）

頽檐掛古藤
松たかみさきかかる藤の波かけてくちぬる軒や露のひまなき

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻四「山中少憩」、『江湖小集』巻八〇・石屏続集、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・山・戴石屏「山行」
地僻人稀到　山寒水欲氷　聞鐘知有寺　見犬不逢僧
断壟森喬木　頽檐掛古藤　斜陽照孤影　詩骨瘦崚嶒

〈同一句題〉（連9）

（頓14）
歳時春猶少
阿　をしまるる心なればやいつはりも春の過ぐるはほどなかるらん（六六）
守　夢なれや春は幾日もあら玉の年にまれなる花の面かげ（六七）
春　尋ねばや花なきさとにすむ人も過ぐる月日は春ぞ少なき（六八）
宗　春は猶あかで暮れぬとおもへばやおなじ日数の分けて程なき（六九）
嗣　一とせの月日を春にすぐすとも花はわかれや程なかるべき（七〇）

（称14）
歳時春猶少
ながき日と名にこそたてれ惜むにはちぢのこがねを一時の春

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九二一「晩春登大雲寺南楼　贈常禅師」、『文苑英華』巻二二一、『瀛奎律髄』巻四七・釈梵類
花尽頭新白　登楼意若何　歳時春日少　世界苦人多
愁醉非因酒　悲吟不是歌　求師治此病　唯勧読楞伽

〈同一句題〉（千14）、（慈定13）

（頓15）
春尽鳥声中
阿　鶯の声さへ花となりにけりつもればくるる春の日数に（七一）
守　なく鳥はあかぬ心にまかすらん春の日数はかぎりありとも（七二）
春　花の山名残もとめず行く春のけふはしばしと鳴く鳥もがな（七三）
宗　なきとめぬ花こそあらめ鶯のしるしなきねも限りともきく（七四）
嗣　暮れて行く春よりも猶鶯のわかれをかこつこゑぞものうき（七五）

（称15）
春尽鳥声中
今は世に秋は又こん心とやくるれば春に鳥かへるこゑ

〈句題原詩〉『唐詩紀事』巻七〇・李昌符「傷春」、『詩人玉屑』巻三・宋朝警句（作者蔡懋）、『三体詩』巻三、『瀛奎律髄』巻二九・旅況類
酒醒郷関遠　迢迢聴漏終　曙分林影外　春尽雨声中
鳥思江村路　花残野岸風　十年成底事　羸馬倦西東

〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝拾遺』一〇七「春尽鳥声中」、熊谷直好『浦のしほ貝』三二〇「春尽鳥声中」

夏十首

（頓16）
深谷夏聞鶯
阿　春だにも春はよそなる谷陰のしげる木のまに鶯ぞなく（七六）
守　雪をいでて谷の鶯いつのまにふかきみどりの底になくらん（七七）
春　身はかくて春だにとぢし谷の戸に時しらぬねに鶯ぞなく（七八）
宗　谷深き夏のみどりに残るなり雪になれにし鶯のこゑ（七九）
嗣　卯の花の雪かとみゆる谷陰になく鶯の声ぞのこれる（八〇）

（称16）
深谷夏聴鶯
谷ふかみおなじかいごに夏きてはまつうぐゐすになく時鳥

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・山・潘紫巖「登嶺」
纔登西嶺路　詩思便能清　桟道雲間没　籃輿壁上行
遥山時見虎　深谷夏聞鶯　咫尺名山寺　猶分両日程

〈同一句題〉武者小路実陰『芳雲集』一一三一「深谷夏聞鶯」

（頓17）
緑樹連村暗
阿　夏山のしげさまされば木がくれてありとも見えず岡のべの宿（八一）
守　夏は猶人めはかるる山里のとなりも見えずしげる木陰に（八二）
春　山里の梢は花の跡もなし人めにかへてしげきころかな（八三）
宗　常盤なる色もわかれず槙の村よその梢も茂る青葉に（八四）
嗣　おしなべてしげる梢も見えわかずいづれ常盤の里の一むら（八五）

（称17）
緑樹連村暗

蚊やりたく宿のけぶりの深緑木木の梢のそことしもなき

〈句題原詩〉司空図『司空表聖詩集』巻二「独望」、『苕溪漁隠叢話』前集・巻六、『詩話総亀』巻八、『錦繡万花谷』前集・巻三・夏・詩、『万首唐人絶句』巻一八、『文苑英華』巻六八一、『詩人玉屑』巻六・命意・委曲、『古今合壁事類備要』前集・巻一三・時令門・孟夏・黄麦

緑樹連村暗　黄花出陌稀　遠陂春草緑　猶有水禽飛

〈同一句題〉熊谷直好『浦のしほ貝』三三二「緑樹連村暗」

（頓18）

山雲夏亦繁

阿　山の端にいつもかかれる白雲の猶たちのぼる夏の空かな（八六）

守　さらぬだにはれぬ雲ゐの山高み猶すみ侘ぶる五月雨の比（八七）

春　夏衣かさねてほすや白妙の雲たちのぼるあまのかぐ山（八八）

宗　たえだえにいつもかかると見し雲の山の端うづむ五月雨の比（八九）

嗣　をちこちの煙も雲にうづもれぬあさまの岳の五月雨の比（九〇）

（称18）

山雲夏又繁

朝夕に見なれし山も夏はただ峰かさなれる空のしら雲

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・隠逸・鮑当「隠逸」

湖水春来緑　山雲夏亦繁　何如隠君子　長嘯掩柴門

〈同一句題〉松平定信『三草集』三四「山雲夏忽繁といふことを」

（頓19）

松風五月寒

阿　五月山雨晴れそめて蟬の羽に衣手さむくまつ風ぞ吹く（九一）

守　時しらぬさこそは谷の松ならめ夏の最中も秋風ぞ吹く（九二）

春　雨はれておふる五月のうき草の末よりさむく松風ぞ吹く（九三）

宗　氷室山あたりの松に音たてて夏の半も風ぞ身にしむ（九四）

嗣　郭公なくや五月の山風も松をはらへば音ぞ身にしむ（九五）

（称19）

松風五月寒

五月まつ花たちばなにふる雨の枝に霜をく松風ぞふく

〈句題原詩〉李白『分類補註李太白集』巻九「見京兆韋参軍量移東陽二首（ノ二）」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩

聞説金華渡　東連五百灘　全勝若耶好　莫道此行難

猿嘯千溪合　松風五月寒　他年一携手　揺艇入新安

（頓20）

風樹咽鳴蟬

阿　山風の梢にさわぐならの葉にしばしきこえぬ蟬の声かな（九六）

守　夏山の松の梢を吹く風にあらそひかぬる蟬のもろ声（九七）

春　しばし又蟬の諸声とだえしてならの葉さわぐ山風ぞ吹く（九八）

宗　滝つ瀬のひびきは増る山風に木末の蟬の声むせぶなり（九九）

嗣　なく蟬の声は梢にとだえして風のみさわぐ森の下かげ（一〇〇）

（称20）

風樹鳴蟬咽

風ふきて木葉よりけに蟬の羽のうすき日のこる夕暮の声

〈句題原詩〉韓維『南陽集』巻七「水閣」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩

約略横雲島　欄干瞰玉淵　雨汀翹睡鷺　風樹咽嘶蟬

緑髪苺苔地　紅衣菡萏天　夜深三弄笛　月在釣魚船

（頓21）

秋声帯雨荷

阿　風わたる池のはちす葉露おちて秋に涼しき雨の音かな（一〇一）

守　露は玉蓮のうき葉に夏をへて秋とあざむく雨の音かな（一〇二）

春　はちす葉に雨ふりおける玉の緒のゆらく程なき秋の声かな（一〇三）

宗　ふる雨は蓮のうき葉にちる玉の秋にもこえて音ぞ涼しき（一〇四）

嗣　音たてて秋やいつしかかよふらん村雨涼し池の蓮葉（一〇五）

（称21）

秋声帯雨荷

ふる音の秋になりゆく雨により笠もかたぶく池の蓮葉

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一七・一〇七二「潯陽秋懐贈許明府」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩、『古今合壁事類備要』前集・巻一四・時令門・秋・晩景

霜紅二林葉　風白九江波　暝色投煙鳥　秋声帯雨荷

馬閑無処出　門冷少人過　鹵莽還郷夢　依俙望闕歌
（後略）

（頓22）
扇罷風生竹
阿　しばしまたならす扇の風やめてまがきの竹のそよぎをぞきく（一〇六）
守　手もたゆくならす扇の隙なれや竹によるよの窓の秋風（一〇七）
春　竹の葉は露もたまらず吹く風にならす扇やおきまさるらん（一〇八）
宗　手にならす扇の隙も涼しきに風になるよの窓のくれ竹（一〇九）
嗣　夏の夜はならす扇の風の間も音をぞのこす窓の呉竹（一一〇）
（称22）
扇罷風生竹
月はいでぬあけてたとへん扇をもさしをけとふく竹の下風

〈句題原詩〉『錦繡万花谷』前集・巻三・夏・詩・義山、『詩人玉屑』巻四・風騒句法、『古今合璧事類備要』前集・巻一三・時令門・夏・移床・李義山
罷扇風生竹　移床月過庭　乗舟泊山寺　着履到漁家
〈同一句題〉橘曙覧『志濃夫廼舎歌集』一〇四「扇罷風生竹」、香川景樹『桂園一枝』二〇八「扇罷風生竹」

（頓23）
泉声到池尽
阿　石ばしる山の滝つせひびきて末は音なきなつの池水（一一一）
守　せきいるる岩間ばかりに音たててしづかにすめる庭の池水（一一二）
春　音せぬもすずしかりける石ばしる滝のながれの末の池水（一一三）
宗　池水に音はなけれどすずしさはすゑまでたえぬ山の滝つせ（一一四）
嗣　滝つせをせけば音こそ聞えねど涼しさかよふ庭の池水（一一五）
（称23）
泉声到池尽
おちくるや山をいづみも池水にせきいれられて声のしづけき

〈句題原詩〉張祜『張承吉文集』巻三「題恵山寺」、『苕溪漁隠叢話』前集・巻三六、『唐百家詩選』巻一五、『文苑英華』巻二三八、『唐詩紀事』巻五七、『詩人玉屑』巻四・風騒句法、『三体詩』巻三、『古今合璧事類備要』前集・巻四九・釈教門・仏寺・東山寺、『瀛奎律髄』巻四七・釈梵類

旧宅人何在　空門客自過　泉声到池尽　月色上楼多
小洞生斜竹　重堦夾細莎　殷勤望城市　雲水暮鐘和

（頓24）
雨余生晩涼
阿　雨ははや過ぎぬる跡も其ままに夕露涼し木木の下陰（一一六）
守　村雨はよそになりぬる木がくれにたつ事やすき夕すずみかな（一一七）
春　秋かけて思ふもすずし夕立のなごりばかりの森の下露（一一八）
宗　ふる雨の名残も涼し浅茅はら秋になびきて結ぶ白露（一一九）
嗣　むら雨のなごりも涼し露結ぶ庭の浅茅の夏の夕暮（一二〇）
（称24）
雨余生晩涼
雨はれてゆふ日みえすく呉竹の風なき露のおちてすずしき

〈句題原詩〉↓（頓称12）に既出

（頓25）
蛍入定僧衣
阿　時しもあれうらなる玉やあらはるる蛍ぞやどる苔の衣手（一二一）
守　影見えぬこころの水のすみ染をありとや袖に蛍とぶらん（一二二）
春　とぶほたる山を出づべき星なれや暁ふかき苔のたもとに（一二三）
宗　飛ぶ蛍なれてぞかよふ袖をだにはらはぬばかりしづかなる夜に（一二四）
嗣　かげうつす心の水やしづかなる袖のほたるの玉やそふらん（一二五）
（称25）
蛍入定僧衣
とぶほたる入ぬる苔の袖をこそひかりをはなつ仏とも見め

〈句題原詩〉『文苑英華』巻二三七・劉得仁「宿僧院」、『三体詩』巻三、『瀛奎律髄』巻四七・釈梵類
禅寂無塵地　焚香話所帰　樹揺幽鳥夢　蛍入定僧衣
破月斜天半　高河下露微　翻令嫌白日　動即与心違

秋十五首
（頓26）
露気早知秋

阿　明けわたる朝の原も置く露の光にみえて秋はきにけり（一二六）
守　夏草の昨日もみえし露の間に袖までむすぶ秋はきにけり（一二七）
春　吹きむすぶ袂の露をかぞふればいそぢにかかる秋のはつ風（一二八）
宗　荻の葉の風をもまたで露むすぶ袖よりやがて秋ぞしらるる（一二九）
嗣　風は猶吹きもさだめぬ秋の色をさやかに見する野べの白露（一三〇）

（称26）
露気早知秋
荻の葉のそよぎそめてはくる秋のそれとも見えじをける朝露

〈句題原詩〉『詩話総亀』巻一二、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩・李宏
水光先見月　露気早知秋

（頓27）
一雨洗残暑
阿　夏のままに照る日の影も村雨の音より秋にかはる空かな（一三一）
守　雲ゐより秋はくればやむらさめの行手の風の涼しかるらん（一三二）
春　庭草に残る日影も此夕涼しくなりぬ秋のむらさめ（一三三）
宗　ふるままに照る日よわりて村雨の跡より秋の空ぞ涼しき（一三四）
嗣　常夏は花の名のみの草村にあつさ残さぬ秋のむらさめ（一三五）

（称27）
一雨洗残暑
秋かけてあせもしみみの夏衣あらふや清きむら雨の空

〈句題原詩〉『詩話総亀』巻一四、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩・陳甫
一雨洗残暑　万家生早凉

〈同一句題〉『大江戸倭歌集』七一〇・神谷真信「一雨洗残暑」

（頓28）
野色混秋先
阿　おく露も花の光に成りはてて野べは千種の色はまがはぬ（一三六）
守　宮城のの木の下露と花の色といづれか増るひかりなるらん（一三七）
春　咲きまじる花のの露の下染に秋のおもひの色をそへつつ（一三八）
宗　うつろへばいづれを露の光ともいさしらすげのまのの萩原（一三九）
嗣　暮行けば日影はうすき秋の野に花の光と露やなるらん（一四〇）

（称28）
野色混秋光
わくる野の影の小草もをく露をひかりは秋にあらはれにけり

〈句題原詩〉寇準『忠愍公詩集』巻中「秋日原上」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩、『古今合璧事類備要』前集・巻一四・時令門・秋・雑詠
蕭蕭古原上　景物感離腸　遠嶠収残雨　寒林帯夕陽
渓声迷竹韻　野色混秋光　吟罷還西望　平沙起雁行

〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』七四九「野色混秋光」、武者小路実陰『芳雲集』一九〇六「野色混秋光」

（頓29）
天高一雁横
阿　雲もはれ霧もへだてぬ中空をかすかにわたる雁の一行（ひとつら）（一四一）
守　雲ゐまで聞ゆるかりのつらさだに独おくるるねをや鳴くらん（一四二）
春　知るらめや蘆辺の友とねをぞなくあまとぶ雁はつらをはなれて（一四三）
宗　はるかなる空にも渡るほどみえて月にぞちかき雁の一つら（一四四）
嗣　天つ空雲ゐも見えてくる雁は声こそいとどかすかなりけれ（一四五）

（称29）
天高一雁横
雲はみな吹つくしたるあまつ風友もなくなくさむき雁がね

〈句題原詩〉『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩・呉正仲、『古今合璧事類備要』前集・巻一四・時令門・秋・過雁・呉正仲
木落千山瘦　天高一雁横

（頓30）
終夜着蛬声
阿　聞く人の涙はしるや蛬よるはすがらに枕にぞなく（一四六）
守　床の霜おきゐてきけば老が身のたぐひによわる蛬かな（一四七）
春　いつまでと露のよすがらきりぎりすかべなる草の底に鳴くらん（一四八）
宗　夜もすがらなきもよわらぬきりぎりす我にも増る思ひとぞきく（一四九）
嗣　よもすがら思ひを人に猶そへておのれ音をなくきりぎりすかな（一五〇）

（称30）
終夜着暗蛩
きりぎりす誰ことはらん秋の夜のながき思ひの心くらべは

〈句題原詩〉宋祁『景文集』巻二二「秋夕不寤」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二五・性適門・睡・宋景文公「秋夜不寐」

倦枕回尤数　東方不肯明　只将無睡耳　終夜着蛩声

（頓31）

稲花千頃浪

阿　ながめやる遠山もとをかぎりにて稲葉なみよる秋の夕風（一五一）

守　秋の田は雲をなすかは見渡せば風のまにまに浪ぞ立ちける（一五二）

春　末遠き伏見の田面に霧はれてほなみによするうぢの柴舟（一五三）

宗　風渡るたのもの末の山本はいなばの浪のみぎはなりけり（一五四）

嗣　湊田の田面はるかにみつ塩は風になみよる稲葉なりけり（一五五）

（称31）

稲花千頃浪

色づくやとをき稲葉のそよぎたつ波の花には秋も見えけり

〈句題原詩〉華岳（子西）『翠微南征録』巻八「登楼晩望〈次宋帥幾韻〉」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二五・性適門・眺望・華岳「眺望」

疏雨洗空碧　晩晴人倚楼　稲花千頃浪　楓葉一簾秋

遠岸明残日　孤村認小舟　渓山如愛我　相見亦回頭

（頓32）

江声入秋寺

阿　礒山のふもとの入江塩みちて月まち出づるみねのふる寺（一五六）

守　難波江や月のでしほの浪の音に打ちあはせたる入相の鐘（一五七）

春　里は荒れて難波の寺の入相にこゑうちそふる秋の夕塩（一五八）

宗　月もはや入江の浪の音ふけて鐘いそぐなりいその古寺（一五九）

嗣　みつしほの音ばかりして明行けば月は入江のいそのふる寺（一六〇）

（称32）

江声入秋寺

烏なき月おつる江の声すみてむかひの寺の鐘の夜ぶかさ

〈句題原詩〉『詩話総亀』巻三、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩・雍陶、『唐詩紀事』巻五六、『詩人玉屑』巻四・風騒句法

江声秋入寺　雨気夜侵楼

（頓33）

月色一窓虚

阿　我が心むなしき空の月影を窓しづかなる菴にぞ見る（一六一）

守　おなじ窓いくよの月になれぬらんあれずはいかにさびしからまし（一六二）

春　雪をだにあつめし窓に月見てもよるはすがらにするわざぞなき（一六三）

宗　しづかなる夜半の窓より思ふ事むなしき空の月を見るかな（一六四）

嗣　夢さめてしづかなる夜の窓の内を思ふもむなしき月の影かな（一六五）

（称33）

月色一窓虚

風の竹になる夜は夢も結びけりあかしかねたる窓の月影

〈句題原詩〉『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩・梵崇、『古今合璧事類備要』前集・巻一四・時令門・秋・山景

秋声万壑満　月色一窓虚

（頓34）

江清月近人

阿　蜑人の塩くむ影も難波えや月とともにぞ浪にうつれる（一六六）

守　難波江や蘆分け小舟さす棹のさはるばかりにやどる月かな（一六七）

春　月やどる入江の浪の立ちよればかげふむばかり見ゆる空かな（一六八）

宗　難波江やうつれる月の影清み氷にうかぶ蜑のつり舟（一六九）

嗣　夜もすがら月をや浪にみしま江の蘆べさし行く蜑の釣舟（一七〇）

（称34）

江清月近人

秋寒み身にならすべきねりぎぬの色にすむ江の月やめでまし

〈句題原詩〉孟浩然『孟浩然集』巻四「宿建徳江」、『苕溪漁隠叢話』後集・巻一六、『唐百家詩選』巻一、『万首唐詩絶句』巻四、『文苑英華』巻二九一、『唐詩紀事』巻二三、『詩人玉屑』巻四・風騒句法

移舟泊煙渚　日暮客愁新　野曠天低樹　江清月近人

〈同一句題〉松永貞徳『逍遊集』一五七二「江清月近人」

（頓35）

鶏声茆店月

阿　たれすみて明行く月ををしむらん鳥の音残る浅茅生のやど（一七一）

守　思ひきや草の庵に旅ねして鳥の音いそぐ月をみむとは（一七二）
春　月ぞすむ鳥は空ねとかこつべき人こそとはね浅茅生の宿（一七三）
宗　鳥の音のきこゆるまでに月は猶露によぶかき浅茅生の宿（一七四）
嗣　鳥のねはしばしは残る月ははやかたぶくほどのあさぢふの宿（一七五）

（称35）
鶏声茅店月
いかがねんかけのたれおの声にをく露うちなびく浅茅生の月

〈句題原詩〉温庭筠『温飛卿詩集』巻七「商山早行」、『苕溪漁隠叢話』前集・巻一九、『詩話総亀』巻六、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩、『文苑英華』巻二九四、『詩人玉屑』巻三・唐人句法・羈旅、『三体詩』巻三、『古今合璧事類備要』続集・巻四五・事為門・行旅、『瀛奎律髄』巻一四・晨朝類
晨起動征鐸　客行悲故郷　鶏声茅店月　人跡板橋霜
槲葉落山路　枳花明駅牆　因思杜陵夢　鳧雁満廻塘
〈同一句題〉木下長嘯子『挙白集』一〇五五「鶏声茅店月」

（頓36）
山暁月初上
阿　浮雲のわかるる隙にあらはれて山立ちのぼるありあけの月（一七六）
守　秋の夜も明けなんとする山の端にはかなくいづるありあけの月（一七七）
春　あなし吹くひばらがうへの山かづらつれなくうけて出づる月かな（一七八）
宗　待ちえてもみるほどぞなき秋の夜の明行く峰にいづる月影（一七九）
嗣　秋の夜も明行く山の木の間よりつれなくいづる月の影かな（一八〇）

（称36）
山暁月初上
待えても暁ちかしありつつもきえんはおしき山のはの月

〈句題原詩〉『文苑英華』巻二九一・張軫「舟行早発」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩
夜帆時未発　同侶暗相催　山暁月初下　江鳴潮欲来
稍分楊子岸　不弁越王台　自客水郷裏　舟行知幾迴

（頓37）
月向白波沈
阿　しばし猶かくれなはてそ山の端に中半の月のもなかともみん（一八一）
守　わたつ海や風吹くごとに浮きしづむ玉にあらそふ月の影かな（一八二）
春　梓弓末のまつ山入る月のかくれぬさきにこゆる浪かな（一八三）
宗　浪にいる影かとみえて和田の原空のかぎりに月ぞかたぶく（一八四）
嗣　よひの間の山の端出でし面影を浪に残して月ぞかたぶく（一八五）

（称37）
月向白波沈
ふけにけりうかべる月の船ならばしづまじ物をおきつ白波

〈句題原詩〉方干『玄英集』巻一「鏡中別業二首（ノ一）」、『詩話総亀』巻四四、『錦繡万花谷』後集・巻二一・隠逸・詩、『唐詩紀事』巻六三
寒山圧鏡心　此処是家林　梁燕窺春醉　巖猿学夜吟
雲連平地起　月向白波沈　猶自聞鐘角　棲身可在深
〈同一句題〉成島和鼎『千世のかげ』（『甲子夜話続編』巻七七所収）六二「月向白波沈」、小沢蘆庵『六帖詠草』九〇七「月向白波沈」

（頓38）
遠山青入霧
阿　梢のみ槙の外山にあらはれて里まではれぬ宇治の川霧（一八六）
守　初瀬山霞にまがふ面影の霧にのこれる秋のゆふぐれ（一八七）
春　つまかくす矢野のかみ山立つ霧にまだ末遠き秋の色かな（一八八）
宗　詠めやるすゑの松山跡もなし吹きこす霧の八重の塩風（一八九）
嗣　山の端はうづもれはつる夕霧に残るとほぢのさとの一むら（一九〇）

（称38）
遠山青入霧
時雨にも露にもいまだ色かへぬ山はいかでか霧のうちなる

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・郊野・潘紫巖「郊行」
出郭忽数里　雨余秋意偏　遠山青入霧　野水白平田
鷺立斜陽去　牛依古樹眠　不辞泥濘極　即此是豊年

（頓39）
風便数砧声
阿　此里もはやいそげとや秋風の砧の音をさそひきぬらん（一九一）
守　衣うつ音をさそはぬ時だにも夢やはみゆるねやの秋風（一九二）

春　里わかぬ夜寒のつてにうちそへてよその砧をさそふ秋風（一九三）
宗　さそはれて砧の音も聞ゆなり秋さむき夜の同じあらしに（一九四）
嗣　よそにうつ砧の音も聞ゆなり雲ゐの雁をさそふ嵐に（一九五）

（称39）
風便数砧声
かたしきの鳴のはねがき数そへて身にしむ風の衣うつらし

〈句題原詩〉銭起『銭考功集』巻九「江行無題一百首（ノ二七）」、『万首唐人絶句』巻五、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・舟・銭起「舟」
斗転月未落　舟行夜已深　有村知不遠　風便数声砧

（頓40）
新霜染楓葉
阿　くれなゐを何にそむらん立田山霜のたてもておれるにしきを（一九六）
守　梢よりうつろひそめて初霜のおく程みゆる庭の紅葉ば（一九七）
春　夕露もまだほしやらぬ紅葉葉を霜となりてや今朝はそむらん（一九八）
宗　秋さむき霜もよなよなおく山のいはかき紅葉色増るらし（一九九）
嗣　いつしかに木の葉も色やかはるらん月のかつらの初霜の比（二〇〇）

（称40）
新霜染楓葉
篠の葉にしみつくまではみぬ色のもみぢにふかき庭の初霜

〈句題原詩〉『詩話総亀』巻一二、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩・楊徽之、『詩人玉屑』巻三・宋朝警句・楊徽之
新霜染楓葉　皓月借蘆花
〈同一句題〉（連11）、『蒲生智閑集』四五六「新霜染楓葉」

冬十首

（頓41）
落葉無行路
阿　山人の紅葉ふみ分け行く跡をやがてぞうづむ木がらしの風（二〇一）
守　ふりしけるふもとの木の葉きてもとへわが庵まではふみ分かずとも（二〇二）
春　みるままに道もさりあへず木枯の吹きとふきぬる山のもみぢ葉（二〇三）
宗　おち葉にもかへさは道やしられまし分けくるままに跡を残さば（二〇四）
嗣　紅葉ばの散りしく山はとふ人も道もみながら分けやかぬらん（二〇五）

（称41）
落葉無行路
秋のゆき冬のくるとて一すぢの道だにみせずふる木葉かな

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二二・人品門・樵夫・（無名）「樵夫」
去去穿白雲　落葉無行路　但聞丁丁声　知是束薪処

（頓42）
木落見他山
阿　はるかなる伊駒の山もあらはれて梢の冬にかはるころかな（二〇六）
守　時雨ふる音はまぢかき木の間よりみゆる尾上に雲ぞかかれる（二〇七）
春　神無月風もたまらぬ木の間より山の端ながらもる日影かな（二〇八）
宗　冬がれの庭の木の間に顕れて軒端にちかきをちの山の端（二〇九）
嗣　ちりぬれば山は木のまにあらはれてよその紅葉の色をみるかな（二一〇）

（称42）
木落見他山
松杉もまじらぬ里の一むらの嵐の跡の山のまぢかき

〈句題原詩〉鄭谷『雲台編』巻上「登杭州城」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩、『唐詩紀事』巻七〇
漠漠江天外　登臨返照間　潮来無別浦　木落見他山
沙鳥晴飛遠　漁人夜唱閑　歳窮帰未得　心逐片帆還
〈同一句題〉熊谷直好『浦のしほ貝』八九五「木落見他山」

（頓43）
人跡板橋霜
阿　霜ふかき谷の板橋跡みえて日影のさきに出づる山人（二一一）
守　しひて行くたが別路の跡ならん霜に残れるまへの板ばし（二一二）
春　跡つけて出でつる人の帰るまで霜とけやらぬ谷の板ばし（二一三）
宗　おく霜に谷の板橋あとはあれど柴の戸までは問ふ人もなし（二一四）
嗣　おく霜の跡あらはれて山人の通ひふりたる谷の板ばし（二一五）

（称43）
人跡板橋霜
くちぬやとあやぶむそはの板橋もあとある霜や道をなすらん

〈句題原詩〉↓（頓称35）に既出
〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』八〇一「人跡板橋霜」、熊谷直好『浦のしほ貝』八二五「人跡板橋霜」

（頓44）
破林霜後月
阿　枝も猶のこる紅葉の数みえて霜夜の月の森の下陰（二一六）
守　紅葉てる霜の林の木の間より錦をやぶる冬の夜の月（二一七）
春　月ぞもる今は木の葉もふりはてて霜深きよの雲の林に（二一八）
宗　紅葉葉は落つる林の霜がれに猶したたらす月ぞもりくる（二一九）
嗣　此比はもりくる月に霜さえてしぐれし雲の林とも見ず（二二〇）

（称44）
破林霜後月
木のもとはあたため酒に焼つくすもみぢをうづむ霜の月影

〈句題原詩〉林逋『林和靖集』巻一「和朱仲芳送然社師無為還歴陽」、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩、『古今合璧事類備要』前集・巻一四・時令門・秋・雑詠
帰路過東関　行行一錫間　破林霜後月　孤寺水辺山
頂笠衝残葉　腰装歇暮湾　香灯旧吟社　清思逐師還
〈同一句題〉村田春海『琴後集』八〇二「破林霜後月」

（頓45）
山寒水欲氷
阿　外よりも先やこほらん夏箕川嵐もさむき山陰にして（二一一）
守　さえくらすかづらき山の山風やあすかの川の氷ならまし（二一二）
春　さえくらす霜の後せの山風に谷の小川も行きなやむなり（二一三）
宗　山風もくるればさむし夜のほどに氷やとぢん谷川の水（二一四）
嗣　夏箕川河音さむき山陰に月の氷やまづむすぶらん（二一五）

（称45）
山寒水欲氷
谷風に冬ごもりせんこもり江の泊瀬の水はうすごほりして

〈句題原詩〉↓（頓称13）に既出
〈同一句題〉『大江戸倭歌集』一一五八・田中直道「山寒水欲氷」

（頓46）
一鳥過寒水
阿　山川のいづくを床と夕暮はねになくをしのひとりゆくらん（二二六）
守　夜をさむみうきねの床をあくがれてつがはぬをしのいづち行くらん（二二七）
春　跡をだにたれ忍べとて山川の友なし千鳥鳴きてゆくらん（二二八）
宗　池水にしばし友まつあし鴨のこほればたへずよそにたつなり（二二九）
嗣　をし鳥の空に妻よぶ声すなりくるる川とやこほりとづらん（二三〇）

（称46）
一鳥過寒水
浪ならで友なし千鳥たちてゆく跡に寒けきあしのむらむら

〈句題原詩〉趙師秀『清苑斉詩集』「巖居僧」、『宋芸圃集』巻一八、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二二・人品門・僧・趙師秀「僧」、『瀛奎律髄』巻四七・釈梵類
開扉在石層　尽日少人登　一鳥過寒木　数花揺翠藤
茗煎氷下水　香炷仏前灯　吾亦逃名者　何因似此僧
〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝拾遺』三八五「一鳥過寒水」

（頓47）
清晨雪擁門
阿　霜枯の葎の門をとぢてけり八重ふりしける今朝の白雪（二三一）
守　朝まだき草の戸ざしも跡つけてあけまくをしき庭の白雪（二三二）
春　かくてはや身は初雪の朝氷とぢにし門を誰かはらはむ（二三三）
宗　今朝も猶人の跡をばいとはねど降りつむ雪ぞ門をとぢける（二三四）
嗣　降る雪に道とぢはてて待つ人のたのみもけさは杉たてる門（二三五）

（称47）
清晨雪擁門
今朝だにもふかき蓬の門さして雪の光やあくる空なき

〈句題原詩〉李廌『済南集』巻四「雪」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一三・天文門・雪・李方叔「雪霽」
紙窓明晃晃　雲日暗曖曖　半夜寒添被　清晨雪擁門
〈同一句題〉熊谷直好『浦のしほ貝』八七八「清晨雪擁門」

（頓48）

晴雪落長松

阿　朝日さす嶺の梢の雪おちて松はみどりにはるる空かな（二三六）
守　朝日影さすや尾上の松の雪とくるもしるく打ちなびきつつ（二三七）
春　をしほ山松も木だかく晴れそめて嵐のつてにおつるしら雪（二三八）
宗　朝日さす梢ばかりはあらはれて猶松かげにつもるしら雪（二三九）
嗣　日影さす高ねの雪のむらむらに松あらはれて山風ぞふく（二四〇）

（称48）

晴雪落長松

はれてだにけにふりつみし雪おれの枝やすからず松風ぞふく

〈句題原詩〉杜甫『集千家註杜工部詩集』巻一六「謁真諦寺禪師」、『詩人玉屑』巻四・風騒句法、『瀛奎律髄』巻四三・遷謫類

蘭若山高処　煙霞嶂幾重　凍泉依細石　晴雪落長松
問法看詩妄　観身向酒慵　未能割妻子　卜宅近前峰

〈同一句題〉（聖35）、加藤千蔭『うけらが花初編』八九七「晴雪落長松」、香川景樹『桂園一枝拾遺』四〇二「晴雪落長松」、熊谷直好『浦のしほ貝』八七九「晴雪落長松」

（頓49）

独釣寒江雪

阿　降りつもる雪には跡もなごの江の氷を分けて出づるつりぶね（二四一）
守　枯れはつる入江の蘆の雪の内に一葉のこるやあまの釣舟（二四二）
春　ふりすさむ雪はともまつ水のえに先跡みせていづる釣舟（二四三）
宗　ふる雪に又友もなし難波江や袖さゆる日の蜑の釣船（二四四）
嗣　難波江やこやもかくれてふる雪に帰る跡なきあまの釣舟（二四五）

（称49）

独釣寒江雪

ふる雪をひとりかた帆にかたぶけて寒き入江もつりの糸なき

〈句題原詩〉柳宗元『柳河東集』巻四三・古今詩「江雪」、『苕溪漁隱叢話』前集・巻一九、『錦繡万花谷』後集・巻二・雪・詩、『万首唐人絶句』巻二、『唐詩紀事』巻四三、『詩人玉屑』巻一五・柳儀曹

千山鳥飛絶　万径人蹤滅　孤舟蓑笠翁　独釣寒江雪

（頓50）

流年川暗度

阿　月も日もしばしよどまで行く年や淵瀬もしらぬ山川の水（二四六）
守　とまらずは雲のみをにてみし月の積りて年の暮に成りぬる（二四七）
春　飛鳥川月日ながれて徒にむかしを遠みくるるとしかな（二四八）
宗　天の川行く水よりもとしなみのくるるややすき月日なるらん（二四九）
嗣　川水のよどまぬ浪のみをよりも猶せをはやみ過ぐるとしかな（二五〇）

（称50）

流年川暗度

滝河は手をさへてともいひつべし身にせかれぬは年の暮哉

〈句題原詩〉『唐百家詩選』巻一七「夕次洛陽道中」、『文苑英華』巻二九五、『詩人玉屑』巻四・風騒句法、『瀛奎律髄』巻一五・暮夜類

秋風吹故城　城下独吟行　高樹鳥已息　古原人尚耕
流年川暗度　往事月空明　不復歎岐路　馬前塵夜生

恋十首

（頓51）

心知人不知

阿　なにとただ我のみしりて過ぐるまのうき有増に袖ぬらすらん（二五一）
守　かはらやのおなじ思ひの下もえにあらぬけぶりと人や見るらん（二五二）
春　しらせばや忍ぶが原にさすしめの草葉につけて露かかるとも（二五三）
宗　しらせばやしのぶもぢずり忍ぶるもたれ故ならぬ下のみだれを（二五四）
嗣　思ひかねしられぬ中に恋ひしなば煙を何の行へとかみん（二五五）

（称51）

心知人不知

いかがせんくちがためても我と人ひとしき心なれてしらずや

〈句題原詩〉権徳輿『権文公集』巻九「玉台体十二首（ノ八）」、『万首唐人絶句』巻一〇、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』（明鈔本附載）・巻門不明・閨怨

空閨滅燭後　羅幌独眠時　涙尽腸欲断　心知人不知

（頓52）

唯有涙痕多

阿　袖にはやせくほどもなし涙川何をか今はしがらみにせん（二五六）
守　みえぬらん人め忍ぶのすり衣なみだのかかる跡のみだれは（二五七）

春　はかなくも人めを袖につつみける憂名は身にもあまる涙を（二五八）
宗　よしさらば朽ちだにはてよ我が袂涙の跡のみえぬばかりに（二五九）
嗣　朽ちはてば何につつまむ憂名とてさのみ涙を袖にせくらん（二六〇）
（称52）
　唯有涙痕多
人のためいかにおほかる物としもしらぬ涙のつくしかた（マヽ）

〈句題原詩〉徐積『節孝集』巻二二「題扇十首　孀婦扇」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一七・器用門・扇・徐仲車「孀婦扇」
　已写共姜誓　仍題督護歌　更無脂粉汚　唯有涙痕多

（頓53）
　三年不見書
阿　なほざりの玉章をだに待ちも見ず雲ゐの雁の三たびくるまで（二六一）
守　新枕われはむかしの秋ぞともせめて告げこせかりのたまづさ（二六二）
春　そのままにひるこも今は立ちぬらんかきもながさぬ水茎のあと（二六三）
宗　もしほ草かく玉づさもまだ見ねば須磨のうらみに三とせわびつつ（二六四）
嗣　新枕むすばで待つとしらねばや三とせまで見ぬ人の玉章（二六五）
（称53）
　三年不見書
新枕こよひこそともたまづさにいはぬ計をたのむはかなさ

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻二・〇〇七二「続古詩十首（ノ八）」
　心亦無所迫　身亦無所拘　何為腸中気　鬱鬱不得舒
　不舒良有以　同心久離居　五年不見面　三年不得書
　（後略）

（頓54）
　涙尽腸欲断
阿　限りあれば涙も今はつきぬらんけふすぐすべき心地こそせね（二六六）
守　涙こそ色かはるまで成りにけれおもひはいつをかぎりなるらん（二六七）
春　限りぞとけふなきつくす涙こそ我が後の世のさきに立つらめ（二六八）
宗　しるらめや涙も袖につきはてて色もえぬべきむねの思ひを（二六九）
嗣　消えやらぬむねのおもひのせくままに袖にたえたる我が涙かな（二七〇）
（称54）
　涙尽腸欲断
一とをり涙の雨ははれてだに九かへりのおもひくるしき

〈句題原詩〉↓（頓称51）に既出
〈同一句題〉『新続古今集』恋四・一三八一・惟賢上人「ふるき詩の句を題にて歌よみける時、涙尽腸欲断といふ事を」、成島和鼎『千世のかげ』（『甲子夜話続編』巻七七所収）一一八「涙尽腸欲断」

（頓55）
　入夢到如今
阿　おもひねのはかなき夢にかはるかな打ちもはらはぬ夜半の枕を（二七一）
守　うつつこそはかなかりけれむば玉の夢路はもとのあしもやすめず（二七二）
春　見し夢の俤くもる年月や身にそふ中のへだてなるらん（二七三）
宗　おもかげを有りしながらに見る夢はうつつになるぞ別なりける（二七四）
嗣　なれて見し夢をしたへば今更にいとどおどろくうつつとぞなる（二七五）
（称55）
　入夢到如今
あひ見しははかなき夢に成はててつらき思ひをしづのをだ巻

〈句題原詩〉杜牧『樊川文集』巻二〇「寄遠人」、『万首唐人絶句』巻一四、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二五・性適門・離別・杜牧「離別」
　終日求人卜　迴迴道好音　那時離別後　入夢到如今

（頓56）
　花開更憶君
阿　たのめこし花のたよりをすぐすかな色みえてこそうつろひにけれ（二七六）
守　花になす心ならひに我が宿の庭のさかりはたちまされつつ（二七七）
春　とへかしなあらぬ色香もなきものを花にぞ人の心かはらで（二七八）
宗　花よりも猶あだなりや色かはる心づからの人のちぎりは（二七九）
嗣　山桜あだなる色もひとつにて見るに猶そふ人のおもかげ（二八〇）
（称56）
　花開更憶客
さきしより夜のま今朝のま移りゆく花をば見ずや心つらさよ

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二五・性適門・離別・趙文鼎「舟中送別」、

宋・佚名『詩家鼎臠』巻上・趙汝唫「送梅窓兄」
離歌休再畳　我亦不堪聞　山接詩愁去　雲随別袂分
官閑寧問禄　命薄謾能文　悵望梅辺屋　花開更憶君

（頓57）
空閨残燭夜
阑　あくるまで思ひつきせぬ独ねに涙かきくらす夜半の灯（二八一）
守　ひとりのみ起きゐる閨のともしびや思ひつきせぬたぐひなるらん（二八二）
春　消えわびぬむなしき床の灯やねなくに明くる夜を残すらん（二八三）
宗　待つ人のむなしきねやの灯の消えてやいとどおもひ絶えなん（二八四）
嗣　夜もすがらまつに心をつくすかなねやのともし火消えのこるまで（二八五）

（称57）
空閨残燭夜
またたくもいつまでとかや独寝の灯火もまた涙おちつつ

〈句題原詩〉↓（頓称51）に既出
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一二二四「空閨残燭夜」

（頓58）
恨別鳥驚心
阑　深き夜にいそぐとかこつ別路に又ひとりねのおどろかすらん（二八六）
守　鳥のねに心はあらじわかるるはこゆるならひの逢坂の関（二八七）
春　此ままに又もきかずは忍ばれん物とや鳥のおどろかすらん（二八八）
宗　別路に人は待得ていそげども身ひとつにうき鳥の声かな（二八九）
嗣　我だにもかこたぬ程の別路をなにとよぶかく鳥の鳴くらん（二九〇）

（称58）
恨別鳥驚心
鳥も又おどろきやせん関の戸のあくるもまたぬきぬぎぬの空

〈句題原詩〉杜甫『集千家註杜工部詩集』巻三「春望」、『詩人玉屑』巻四・風騒句法、『瀛奎律髄』巻三一・忠憤類
国破山河在　城春草木深　感時花濺涙　恨別鳥驚心
烽火連三月　家書抵万金　白頭搔更短　渾欲不勝簪

（頓59）
別後会難期
阑　わかれなばこよひばかりの人まだに又いつかはと思ふかなしさ（二九一）
守　立ちわかれまた夕暮をまつだにもたえてあらんと思ひやはせし（二九二）
春　えぞしらぬさらにはいつかあふくまや霧立ちわたりこよひ明けなば（二九三）
宗　別れては後の逢せも頼まねばこれやかぎりの中川の水（二九四）
嗣　逢ふまでの後の命もたのまねばこれやわかれのかぎりなるらん（二九五）

（称59）
別後会難期
わ〔　〕け定なき世も偽りもふたかたに又あはでたえめや

〈句題原詩〉『詩話総亀』巻四四・沈廷瑞、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・神仙・沈庭瑞「神仙」
名山相別後　別後会難期　金鼎銷紅日　丹田老紫芝
訪君雖有路　懐我豈無詩　休羨繁華事　百年能幾時
〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝』六二二「別後会難期」

（頓60）
何処更相逢
阑　いつか見むつらきところはおほくのみ月日つもりて待つかひもなし（二九六）
守　いまだにも手にもたまらぬ大ぬさのつひによるせをいかが頼まん（二九七）
春　いづくにかめぐりもあはむ下帯のとけてわかれし道をしらねば（二九八）
宗　ありしのみ忘れぬふしのささ枕又むすぶべきかたもしられず（二九九）
嗣　命こそ猶たのまるれいづくにてあひみむ事は頼みなけれど（三〇〇）

（称60）
何処更相逢
侘ぬればここもかしこもさはりある処かへてと思ふをろかさ

〈句題原詩〉『唐百家詩選』巻九・于武陵「夜与故人別」、『文苑英華』巻二八八、『詩人玉屑』巻三・唐人句法・自然、『古今合璧事類備要』続集・巻四六・事為門・別離・山万重
白日去難駐　故人非旧容　今宵一別後　何処更相逢
過楚水千里　到秦山幾重　話来天又暁　月落満城鐘

旅十首

（頓61）

桟路雲間没

阿　行末の岩のかけみち絶絶にうづみもはてず峰のしら雲（三〇一）

守　いづくにか木曽のかけはし行末も跡をもうづむ峰の白雲（三〇二）

春　岩ねふみ今幾重ともしら雲のたなびきわたる峰のかけ橋（三〇三）

宗　桟は雲より下にうづもれて夕日にのこる峰のかよひぢ（三〇四）

嗣　うづもるる峰の梯みえねども分くれば雲に残るかよひぢ（三〇五）

（称61）

桟道雲間没

ゆくとくと雲こそ渡れたちこめて風はふもとの峰のかけはし

〈句題原詩〉↓（頓称16）に既出

（頓62）

江辺問船子

阿　舟よばふ声ばかりして三島江や人こそみえね秋の夕ぐれ（三〇六）

守　おほくらやおもひ入江の渡しもり世をうぢ山の道しるべせよ（三〇七）

春　ことはむ舟さしよせよ住のえのえなつを過ぐるむこの浦人（三〇八）

宗　暮るる日に里とひかねて湊江のあまの舟をぞ宿と定むる（三〇九）

嗣　あまの子のとへど答へぬみなと江は舟にもぬしや定めざるらん（三一〇）

（称62）

江辺問船子

舟人はあまの子なれやくるる江にとへど答へず浜にかもねて

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・江景・許右丞「江」

江辺問舟子　潮落幾時回　野店無灯火　還須明月来

（頓63）

船行夜已深

阿　はりまがた尾上の鐘の聞ゆなり沖こぐ舟にさよやふけぬる（三一一）

守　灯のかげをしるべに漕ぎつれてあかしの沖に夜ぞふけにける（三一二）

春　小夜中と更行く月に舟出してとわたる空に雁ぞ聞ゆる（三一三）

宗　ゆらのとをよわたる月も更けにけり浦こぐ舟や遠くきぬらん（三一四）

嗣　浦風も磯辺の松に音すみて奥こぐ舟ぞ月にふけ行く（三一五）

（称63）

舟行夜已深

はるる夜の星の目あても方かへてあまのたく火の波へだて行

〈句題原詩〉↓（頓称39）に既出

〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝』六九二「舟行夜已深」

（頓64）

棹入黄蘆浦

阿　あしま行く浦の小舟にさす棹のみなれぬ方に宿やからまし（三一六）

守　舟とむる蘆のかれ葉のさらさらに夢ぢゆるさぬ浦風ぞ吹く（三一七）

春　かれはつるあしの浦舟さす棹のさはらぬ宿は浮ねなりけり（三一八）

宗　あし辺行くほどはかくれてさす棹の末のみ見ゆる浦の友ぶね（三一九）

嗣　難波人蘆分けを舟さす棹のかよひなれてやさはらざるらん（三二〇）

（称64）

棹入黄昏（蘆カ）浦

小舟さす棹のしづくやあしの葉をゆふべの色にそむる浦風

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻四「冬日移舟入峽避風」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・舟・戴石屏「舟」

棹入黄蘆浦　驚飛白鷺群　霜華濃似雪　水気盛於雲

市遠炭増価　天寒酒策勲　同舟有佳士　擁被共論文

（頓65）

蒼苔満山径

阿　暮れぬより日影もみえず深山木のうへはしげれる苔の通路（三二一）

守　草も木もふみ分けがたき奥山は苔こそ道のしるべなりけれ（三二二）

春　旅衣おりはへほさぬ山路かな真木の下露苔のしづくに（三二三）

宗　ふみわけてこゆる岩ねの苔莚よるは旅ねの山路にぞしく（三二四）

嗣　露結ぶあしたの程ぞみ山ぢの苔にも人の跡はありけり（三二五）

（称65）

蒼苔満山径

聞なれぬ鳥の声より人けなき山ぐちしるき苔のかよひぢ

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻二「贈郭道人〈詩句皆述其所言〉」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・隠逸・戴石屏「隠逸」

滅性能安楽　深居絶是非　英雄行険道　富貴隠危機

紙被如綿軟　藜羹勝肉肥　蒼苔満山径　最喜客来稀

（頓66）
郷信寄胡雁
阿　古郷にわぶとこたへよ山高み晴れぬ雲ゐにわたるかりがね（三二六）
守　今ははや故郷人もわするらんまつも空なる雁の玉札（三二七）
春　故郷のつてもわするなかへりこむ程は雲ゐの夜のかりがね（三二八）
宗　かへるさをいつと定めてかりがねの都へ行くにことはつてまし（三二九）
嗣　ことづてむかひこそなけれ行くかりのかへる雲ゐも都ならねば（三三〇）

（称66）
郷信寄胡雁
吹風に駒さへいばふふるさとのつて〔　〕の雁にうれしき

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・舟・呉公敏「泊舟」
潭影静沈沈　維舟傍竹林　郷心寄孤雁　寒信起疎砧
犬吠人家近　灯明樹影侵　客愁元不寐　夜雨更蛩吟

（頓67）
人行秋色中
阿　旅人の先立つ袖も秋草の花に分入るむさし野のはら（三三一）
守　たび衣たつ田の山を越行けば袖も色づく秋風ぞ吹く（三三二）
春　三室山そめももらさぬ時雨かな秋行く程は木葉ならねど（三三三）
宗　咲きにけり秋の萩原露分けてたび行く人の袖うつるまで（三三四）
嗣　暮れぬとも猶分けゆかん秋萩の花野の露を袖にかけつつ（三三五）

（称67）
人行秋色中
いろいろの木の葉打払ひゆく道は身にしむとても秋の山風

〈句題原詩〉呉可『蔵海居士集』巻下・「野歩」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・郊野・呉思道「野」
密竹蔵啼鳥　荒村起白煙　人行秋色裏　家在夕陽辺

（頓68）
路明残月在
阿　ささ分くる道もたどらず月まちて暁いづるゐなの山もと（三三六）
守　あふ坂やこえ行く跡に残るなり空にも関やありあけの月（三三七）
春　明けぬればさそひし月を中空にのこしてこゆる足柄の関（三三八）
宗　有明の山べさやかにのこらずは夜ぶかく出でて道やまよはん（三三九）
嗣　行くままに山下道もあらはれて木の間さやけき有明の月（三四〇）

（称68）
路明残月在
ともし火のうすきやどりをおき出て明はつるかといそぐ月影

〈句題原詩〉『唐詩紀事』巻五〇・王観「早行」、『詩人玉屑』巻四・風騒句法
鶏唱催人起　又生前去愁　路明残月在　山露宿雲収
村店煙火動　漁家灯燭幽　趨名与趨利　行役幾時休
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』九〇六「路明残月在」

（頓69）
灘声入夢寒
阿　なれぬ夜の川音さむみ草枕見るとしもなく夢路驚く（三四一）
守　すさまじき川瀬の波のうつつとも夢ともわかぬうき枕かな（三四二）
春　いそ枕川音さむみうつつとも夢ともしらで明けぬ此夜は（三四三）
宗　都いでて見る夢もなしいづみ川河音さむみ夜半の枕に（三四四）
嗣　古郷の夢はたえたる手枕に川音かよふよはのさむしろ（三四五）

（称69）
滝声入夢寒
おちたぎつ衣手さむみ早き瀬のこゑは氷も夢もむすばず

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻四「光沢渓上」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・渓・戴石屏「舟夜泊渓」
艤棹西岩下　舟人語夜闌　風林無鳥宿　石窟有竜蟠
月色連沙白　灘声入夢寒　暁来新得句　寄与故人看

（頓70）
客愁双鬢覚
阿　草枕旅の夜さむをかさねきて蓬のかみも霜ぞ置きそふ（三四六）
守　宮古いでていく秋かぜにたえぬらん鏡のかげも白川の関（三四七）
春　草枕よもぎの霜も古郷につげのを枕いつかとくべき（三四八）
宗　鏡山立ちよりて見む旅にてはかしらの雪も猶や積ると（三四九）

嗣　旅にきてつもる日数はおぼえぬにかしらの雪のふり増るらん（三五〇）

（称70）

客愁双鬢覚

けふいくかわけゆく道はをどろなる髪もおぼえず色かはる覧

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻三・節候門・立春・林季謙「歳前一日立春」

歳与梅花晩　春先爆竹鳴　客愁双鬢覚　時事寸心驚

閑居十首

（頓71）

幽居有余楽

阿　心さへとまるばかりに憂き事をきかぬ深山は住みよかりけり（三五一）

守　かくてこそ身をも心のやすむるをしらでや人の山陰の庵（三五二）

春　ひとりすむまやのあまりのたのしみや君にしられぬめぐみなるらん（三五三）

宗　これも又心をとめばしづかにて住みよき宿のかひやなからん（三五四）

嗣　かねておもふ身の有増の程よりも猶山里は住みよかりけり（三五五）

閑居十首

（称71）

幽居有余楽

ねがひただ水と山とにありとだに人にしられぬ影をしめつつ

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻二「山中即目二首（ノ二）」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・山・戴石屏「山居」

茅屋七五聚　沙汀八九磐　梯山畦麦秀　嚢石障渓湍

父老鶏豚社　児童梨栗盤　幽居有余楽　奔走愧儒冠

〈同一句題〉『大江戸倭歌集』一七一三・久胤、一七一四・新井金重「幽居有余楽」、井上文雄『調鶴集』七七七「幽居有余楽」

（頓72）

昼日（ママ）掩柴扉

阿　今更に暮れてもとぢず山風のおほふままなる柴のとぼそは（三五六）

守　さしこもる柴の扉はおのづからあけぬにくるる日こそおほけれ（三五七）

春　閉ぢはてき柴の扉のしばしこそ明けぬ暮れぬと人も待ちしは（三五八）

宗　さしながら又ぞ暮れぬる今朝までも夜半のままなる柴の扉を（三五九）

嗣　暮るるまでさながらとづる柴の戸を絶えず嵐の猶たたくらん（三六〇）

（称72）

尽日掩柴扉

我いでじ人もとふなと心よりとぢめはてたる柴の庵かな

〈句題原詩〉陸游『剣南詩稿』巻三三「羲農」

羲農去不反　釈老似而非　太息衆皆酔　逝将誰与帰

経時忘肉味　尽日掩柴扉　安得同心者　灯前語造微

〈同一句題〉木下幸文『亮々遺稿』一〇八五「尽日掩柴扉」

（頓73）

秋月離喧見

阿　ふけゆけばひばらの風も音さえて月しづかなる山のおくかな（三六一）

守　世を捨てぬ人も見るらめ秋の月心のすむはすみ増りつつ（三六二）

春　すみのぼる月に吹く夜の松風は心の空に音も聞えず（三六三）

宗　捨てしより身の浮雲も残らねば心にはれて月を見るかな（三六四）

嗣　世の中の憂より外と見るにだに月にはぬるるわが袂かな（三六五）

（称73）

秋月離喧見

山にてはただ鹿のこゑ耳にたつうき世のことはみな秋の月

〈句題原詩〉賈島『長江集』巻七「送惟一遊清涼寺」、『唐百家詩選』巻一五、『錦繡万花谷』後集・巻二八・僧・詩、『古今合璧事類備要』前集・巻四九・釈教門・僧・入定

去有巡台侶　荒渓衆樹分　瓶残秦地水　錫入晋山雲

秋月離喧見　寒泉出定聞　人間臨欲別　旬日雨紛紛

（頓74）

深居絶是非

阿　水清き山のおくには世の中のすむもにごるも聞えざりける（三六六）

守　水上を尋ねてぞすむ山川のかはる淵瀬はさもあらばあれ（三六七）

春　山川のすみそめしより音絶えて淵瀬にかはる世をも歎かず（三六八）

宗　人とはぬ山の奥にはよしあしの世のことわりも聞えざりけり（三六九）

嗣　なべて世の色にながめばおく山の花も紅葉もかひやなからん（三七〇）

（称74）
深居絶是非
軒の松まがれる枝もすぐなるものがさまざまたのむ影哉
〈句題原詩〉↓（頓称65）に既出
〈同一句題〉（連12）

（頓75）
山中無暦日
阿　春秋は梢の色にしらるれど月日をわかぬ山のおくかな（三七一）
守　うつり行く月日もしらぬ深山路をなにとて老の尋来ぬらん（三七二）
春　時ぞとて火は消えねども春はもえ秋はこがるる山の色かな（三七三）
宗　山里はつもる月日はしらねども松の嵐の音ぞなれぬる（三七四）
嗣　奥山にしらぬ月日のつもりきて老やうき世にかはらざるらん（三七五）

（称75）
山中無暦日
〔　〕くにふく羽風ぞしるべ奥山もみちかくる月の影かくれなき
〈句題原詩〉『苕溪漁隠叢話』前集・巻四二、『詩話総亀』巻一三、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・隠逸・李方叔「隠逸」
偶来松樹下　高枕石頭眠　山中無暦日　寒尽不知年

（頓76）
鳥啼人不見
阿　聞きなれぬ太山の鳥の声はして苔の菴に住む人もなし（三七六）
守　とふ人もなき奥山の苔衣おのれきなれて鳥や鳴くらん（三七七）
春　山深みまだ聞きしらぬ鳥の音もあらばぞ人に名をも聞くべき（三七八）
宗　人見えぬ柴のとぼその明暮は鳥もしづかになれて鳴くなり（三七九）
嗣　名もしらぬ鳥の声のみ聞えつつ身をおく山にとふ人もなし（三八〇）

（称76）
鳥啼人不見
人のくるならひあればぞ跡たゆる山かとみれはよぶこ鳥なく
〈句題原詩〉↓（頓称12）に既出

（頓77）
残生随白鷗
阿　老の波ここをとまりと立ちぞよるなるるかもめの契りたがはで（三八一）
守　老の波よるかたもなき捨舟になるるかもめや我をしるらん（三八二）
春　捨てしよりなるる鷗も驚かず世をうき舟のわれをわすれて（三八三）
宗　年をへてなれし鷗よ憂身世による方なみの行へしらせよ（三八四）
嗣　日にそへてうき身の友と浪の上になるる鷗よ心へだつな（三八五）

（称77）
残生随白鷗
波風の世をもかもめのしるといはばねむる真砂の上に契らん
〈句題原詩〉杜甫『集千家註杜工部詩集』巻一二「去蜀」、『錦繡万花谷』後集・巻一六・行旅、『詩人玉屑』巻四・風騒句法
五載客蜀郡　一年居梓州　如何関塞阻　転作瀟湘遊
万事已黄髪　残生随白鷗　安危大臣在　何必涙長流
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一七三〇「残生随白鷗」

（頓78）
閉門留野鹿
阿　野辺ちかき蓬が門をとぢやせん通ふ男鹿の臥しなるるまで（三八六）
守　松の門さすともしらで夕暮のまがきを山と鹿やなくらん（三八七）
春　野辺ちかし御法の門にさしこもり鹿の園とや宿をなさまし（三八八）
宗　さしこもる葎の門のあくるまで庭をも野べと鹿ぞ鳴くなる（三八九）
嗣　山里はむぐらの門もさしはてて庭なる鹿のかよひもぞする（三九〇）

（称78）
閉門留野鹿
野を近みみればなれくる鹿をさして馬をやいはん柴の戸の内
〈句題原詩〉王建『王司馬集』巻三「山居」、『苕溪漁隠叢話』後集・巻一四、『唐百家詩選』巻一三、『詩人玉屑』巻一六・山居詩、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・山・王建「山居」、『瀛奎律髄』巻二三・閑適類
屋在瀑泉西　茅檐下有渓　閉門留野鹿　分食養山鶏
桂熟長収子　蘭生不作畦　初開洞中路　深処転松梯

（頓79）

身在能無事

阿　今は只なす事もなし老いらくの心のままに世をやつくさん（三九一）
守　何事をなすとはなしにながゐして人のためうきかりの宿かな（三九二）
春　よをいのる心ぞなほも忘られぬなす事もなき身はやすくして（三九三）
宗　かくてすむ身はやすけれど捨ててみむ中中世をばいとはざりけり（三九四）
嗣　心をも身をもおなじと聞きしよりすめどもやすきうき世なりけり（三九五）

（称79）
身在能無事

味酒はいましめながらなれつべしなすこともなき身の友として

〈句題原詩〉方干『玄英集』巻一「鏡中別業二首　其二」、『詩話総亀』巻四四、『錦繡万花谷』後集・巻二一・隠逸・詩、『唐詩紀事』巻六三、『瀛奎律髄』巻二三・閑適類、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・隠逸・方干「隠居鑑湖」

世人如不容　吾自縦天慵　落葉憑風掃　香粳倩水舂
花朝連郭霧　雪夜隔湖鐘　身外無能事　頭宜白此峰

（頓80）
竹径通幽処

阿　尋ねばや是や憂世の外ならん竹のは山のおくの通路（三九六）
守　いにしへの竹のはやしの跡なれやうきふし遠き苔の下道（三九七）
春　ふみまよふ竹の下道世の中にあらぬ所やいづくなるらん（三九八）
宗　末見ゆる竹の下みち程もなし住家もさぞなかすかなるらん（三九九）
嗣　かすかなる煙に里もしられける竹より奥のみちの一筋（四〇〇）

（称80）
竹径通幽処

おどろかむ人かげもはやくるるよりすずめむれゐる竹の下道

〈句題原詩〉常建『常建詩』巻三「題破山寺後禅院」、『唐百家詩選』巻四、『苕溪漁隠叢話』前集・巻二〇、『詩話総亀』巻七、『錦繡万花谷』後集・巻二八・寺院・詩、『文苑英華』巻二三四、『唐詩紀事』巻三一、『詩人玉屑』巻三・唐人句法・幽野、『三体詩』巻三、『古今合璧事類備要』前集・巻四九・釈教門・仏寺・破山寺

清晨入古寺　初日照高林　竹径通幽処　禅房花木深
山光悦鳥性　潭影空人心　万籟此都寂　但余鐘磬音

雑二十首

（頓81）
半山帯夕陽

阿　あすもみむ夕日かくれぬ足引の山のなかばの松のむら立（四〇一）
守　山本は山の陰より暮れはてて峰に入日の色ぞうつろふ（四〇二）
春　夕づくひかくれもやらぬ山の端のこなたの松は影もうつらず（四〇三）
宗　ふもとよりまづ暮れそめてをぐら山峰に入日の影ぞ残れる（四〇四）
嗣　残りける高ねばかりはあらはれて日影の下に雲ぞくれ行く（四〇五）

（称81）
半山無〔帯カ〕夕陽

一かたははや暮はててゆふ日影のこるや須弥のなかばなる山

〈句題原詩〉『詩話総亀』巻一六「西峰」、『詩人玉屑』巻二〇・方外・希夷先生、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一四・地理門・山・陳摶「遊山西山」

為愛西峰好　吟頭尽日昂　岩花紅作陣　渓水緑成行
幾夜礙新月　半山無夕陽　寄言嘉遯客　此処是仙郷

（頓82）
鐘声雲外残

阿　明けわたる尾上の雲のいづくともしられず遠き鐘の音かな（四〇六）
守　出でてこし宿はいづくぞ初せ山雲ゐにのこるいりあひの鐘（四〇七）
春　老となるね覚の鐘の名残までわかれはをしき横雲の空（四〇八）
宗　よこ雲の明けはなれ行く尾上より夜ぶかき鐘の声ぞ聞ゆる（四〇九）
嗣　雲埋むひばらがおくは暮れはててよそに初せの鐘ぞ聞ゆる（四一〇）

（称82）
鐘声残雲外

雨はるる尾上の雲の明がたに鐘の声より月もいづらん

〈句題原詩〉厳羽『滄浪厳先生吟巻』巻二「訪益上人蘭若」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一六・宮室門・寺・厳儀卿「古寺」

独尋青蓮宇　行過白沙灘　一径入松雪　数峰生暮寒
山僧喜客至　林閣借人看　吟罷払衣去　鐘声雲外残

（頓83）
水窮天尽頭

阿　見わたせば空も限りは有るものを入日かたぶく沖つしら波（四一一）
守　三くまのの山のあなたや天の川雲より落つる滝のしら浪（四一二）
春　わたの原日に暮がたはしらねども空のはてこそ限りなるらめ（四一三）
宗　和田のはら遠きかぎりをみわたせば浪もひとつにかかる白雲（四一四）
嗣　ながめやる程ばかりこそ和田の原波と空との限りなるらめ（四一五）

（称83）
水窮天尽頭
わたつ海やのぼらぬ水ものぼるらんひとつにすめる天の川波

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二五・性適門・眺望・趙希逢「和」
遠山含暮景　無事試登楼　泛渚鷗終日、書空雁遥秋
朱簾高巻雨　野渡自横舟　望極到何許、水窮天尽頭

（頓84）
流水浸雲根
阿　かざごしや谷に夕ゐる白雲の中にぞ落つる木曽の山川（四一六）
守　きえぬとも誰かはしらん雲かかる山のいはねの水のうたかた（四一七）
春　よとともに雲ぞかかれる石間行く水のみなかみ音ばかりして（四一八）
宗　雲の波猶立ちそひて水上は峰より落つるやまの滝つ瀬（四一九）
嗣　たえだえにすゑはながれて行く水の浪かとみればかかる白雲（四二〇）

（称84）
流水浸雲根
たえずゆく水のあらへる石の上かはくまよりや苔のむすらん

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻五「道傍館」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一六・宮室門・館舎・戴石屏「館舎」
道旁誰氏館　借我坐閑尊　翁嫗出迎客　児童為掃門
好花生竹陽　流水浸雲根　倘遂卜隣約　為農老此村

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一四〇四「流水浸雲根」

（頓85）
山光落釣舟
阿　夕日さす礒山本の蜑小舟浦をへだててみるぞまぢかき（四二一）
守　宿やなきいそ山陰を暮れぬとてとまひきかくるあまの釣舟（四二二）
春　いさりしてあさこぐ舟の過ぎがてに日影うつろふいその山もと（四二三）
宗　礒山のかげ見る浪のみどりより蘆べにうつるあまの釣舟（四二四）
嗣　いそ山のかげや浪間にうつるらんみどりにうかぶあまの釣舟（四二五）

（称85）
山光落釣船
出る日の山よりみゆる朝なぎにつりする舟のかずもそふらん

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・渓・郭忠謨「渓居」
鑿破青山骨　初営数畝丘　泉分幽竇乳　峡束大江流
漁唱来花径　山光落釣舟　沙鷗驚笑語　片片起滄洲

（頓86）
船与浪高低
阿　浮きしづみさもさだめなき人の世や波にたゆたふ浦の釣ぶね（四二六）
守　おきつ舟風にたゆたふ浪間より見えみみえずみ遠ざかり行く（四二七）
春　沖つ風たつ白浪のうつごとにたゆたふ舟のさだめなの世や（四二八）
宗　世の中は浪のさわぎにこぐ舟の心さだめず浮きしづみつつ（四二九）
嗣　さだめなく立つしら波の世をうみに思ひたゆたふあまの釣舟（四三〇）

（称86）
船与浪高低
をもきをも又かろきをも波にのせ浪にひかるる船はあやうし

〈句題原詩〉↓（頓称3）に既出

（頓87）
風林無鳥宿
阿　ふしなるるねぐらの鳥の声もなし嵐吹くよの竹のはやしに（四三一）
守　風吹けばただ一枝のねぐらだにすみえぬ鳥のねをや鳴くらん（四三二）
春　風ふけば林の鳥もいづくにか南の枝のすをうつすらん（四三三）
宗　村鳥のやどらぬ夜半も枝たれて林の竹のなびく山風（四三四）
嗣　むら鳥のとまる林と思ひしにこよひや風のやどりなるらん（四三五）

（称87）
風林無鳥宿
花の木木もみぢの林風をいとふこころに鳥もねぐらとやせぬ

〈句題原詩〉↓（頓称69）に既出

（頓88）
天色無情談
阿　心なきむなしき空をかこつかな人はあはれといはぬ余りに（四三六）
守　ながむればあはれとぞ思ふ大空はなにの心の色もあらじを（四三七）
春　いにしへに心をとめてことへばみどりの空はいふかひもなし（四三八）
宗　大空のむなしき色はいかなればながむるからに哀そふらん（四三九）
嗣　草木までうるほふ雨は大空のむなしき色のめぐみなりけり（四四〇）
（称88）
天色無情談
遠くして遠からぬ道にあふぐ哉みてるをかくは久かたの空
〈句題原詩〉范石湖『石湖居士詩集』巻三「江上」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・江景・范成大「江」
天色無情淡　江声不断流　古人愁不尽　留与後人愁

（頓89）
人間苦人多
阿　人ごとにそむかれぬ世を憂き物と思ふやおなじ心なるらん（四四一）
守　かくてみな老のさかにやむかふらん見るもくるしき憂世なりけり（四四二）
春　世のうきは我にぞしりぬすぐる身にすてぬにかはる人はあらじな（四四三）
宗　捨てはてぬ我が身なりせば世の中のうき人数にいまやいらまし（四四四）
嗣　人ごとに心ひとつを捨てはてばすみうかるべき世の中もなし（四四五）
（称89）
人間苦人多
心そよあるにまかせば安からん世をわりなくも何嘆かまし
〈句題原詩〉→（頓称14）に既出

（頓90）
世路山河嶮
阿　杣川やおろすいかだにさす棹の心ゆるさぬ世にこそ有りけれ（四四六）
守　憂世をぞ猶捨てやらぬ車をも舟をもかへす道と見ながら（四四七）
春　いかだこそ杣山川のはやき瀬にたつはあやふき世を渡りつつ（四四八）
宗　そま山の道だにあるを筏士のくだすはやせもさぞなくるしき（四四九）
嗣　山よりも水よりも猶世の中の人の心のみちぞさがしき（四五〇）

（称90）
世路山何嶮
世をわたる思ひの家を出がたみ車をくだく山はあさしな
〈句題原詩〉劉禹錫『劉賓客外集』巻八「九日登高」、『万首唐人絶句』巻二、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻四・節候門・重陽・劉禹錫「登高有感」
世路山河険　君門煙霧深　年年上高処　未省不傷心
〈同一句題〉『新続古今集』雑下・二〇二〇・惟賢上人「世路山河嶮といふ事を」

（頓91）
清渓照孤影
阿　朝な朝なあか汲むたびに老いらくの影みる谷のみづからぞうき（四五一）
守　谷川のながれをむすぶたびごとにあふおもかげや友と成るらん（四五二）
春　われさへにすまずなりせば谷水の苔の下にや影もむもれん（四五三）
宗　わがむすぶ影より外に友もなしすむもひとりの谷の下水（四五四）
嗣　年をへてむすびなれたる谷水にしらぬ翁の影ぞそひける（四五五）
（称91）
清渓照孤影
わたりゆく我もひとりの一橋ともなふかげのきよき谷川
〈句題原詩〉→（頓称13）に既出

（頓92）
松多寺不見
阿　陰ふかき松よりおくや寺ならんくるる山路に人かへるなり（四五六）
守　年をへてその宮寺の道とへば一夜ながらの松ぞしげれる（四五七）
春　行きくれて尾上の鐘も音たえぬ寺こそしらね松風ぞふく（四五八）
宗　松ばらの奥よりかねは聞ゆれどありとはえこそ峰の古寺（四五九）
嗣　かすかなる鐘のひびきにしられけり松をへだつる奥の古寺（四六〇）
（称92）
松多寺不見
かはらにもおひつく松の深緑野寺は軒もみえずふりぬる
〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一六・宮室門・寺・戴石屏「寺」
借問開山祖　都栽幾万松　松多不見寺　人世但聞鐘

〈同一句題〉一条冬良『流霞集』三五「松多寺不見」

（頓93）
遠嶮収残雨
阿　此里に晴行く雨の末みえて一むらくもるをちの山の端（四六一）
守　雨はるる雲のとだえやたちぬはぬ遠山鳥のころもなるらん（四六二）
春　はれそめてみどりぞ深きあま雲のよそに成行く遠の山のは（四六三）
宗　雲のゐるとほちの峰や中空に晴行く雨の名残なりけん（四六四）
嗣　ふりきつる雨かと思へば程もなく遠ちの嶺に雲ぞ残らぬ（四六五）

（称93）
遠嶠収残雨
一かたは晴ゆくあとにたつ虹のてらすも雨をのこす山のは

〈句題原詩〉↓（頓称28）に既出
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一三八五「遠嶠収残雨」

（頓94）
落日沈沙頭
阿　吹上の真砂も高し夕日影かくるる山の峰と見るまで（四六六）
守　みつしほの入日の影のうつろひて紅くくる浜のまさご地（四六七）
春　白妙のほむけのあしの上風に夕日もなびく浜の真砂地（四六八）
宗　玉がしはみがくとも見る夕附日光をうつす吹上のはま（四六九）
嗣　しほ風にまさごの山は雲消えて日影かたぶく吹上の浜（四七〇）

（称94）
落日沈沙頭
わたし守はやのれといふ船よする真砂におしき夕日影かな

〈句題原詩〉原拠不明

（頓95）
清風隔世塵
阿　松風の吹くもいとはじかくてこそ浮世の塵は遠ざかりけれ（四七一）
守　まつ風をしる人にせん山ふかみこれぞ憂世の塵もまじらぬ（四七二）
春　山鳥の尾上の松のちりもせずうき世へだつる風の音かな（四七三）
宗　心にも浮世の塵をのこさぬはいかにはらふぞ水のまつ風（四七四）
嗣　いかにして憂世のちりを払はまし松の風きく山なかりせば（四七五）

（称95）
清風隔世塵
罪とがも打はらふ塵にまじはれる神風清き空やあふがむ

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻五「同安子順訪茅庵道人、鳳凰麒麟不可見道人語也」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・隠逸・戴石屏「隠逸」
道者日高臥　清風隔世塵　鳳麟不可見　猿鳥自相親
山木輪囷古　茶花冷淡春　草荒門外路　常怕有来人

〈同一句題〉（連13）

（頓96）
衰鬢臨朝鏡
阿　朝ごとにみるかげもうします鏡いつまでしらぬ翁なりけん（四七六）
守　くれはただみればなげきのます鏡なにと面に年のへぬらん（四七七）
春　翁さび見る影もうしいにしへをてらす鏡にあらぬものゆゑ（四七八）
宗　是ぞ此老となるもの朝な朝なむかふかがみにつもるしら雪（四七九）
嗣　いつのまに霜もおくらん朝な朝なみれば鏡の影ぞかはれる（四八〇）

（称96）
衰鬢臨明鏡
ます鏡くまとみえつる黒きすぢもはてはすくなき影も恥かし

〈句題原詩〉『万首唐人絶句』巻一一・李益「照鏡」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一七・器用門・鏡・李益「鏡」
衰鬢臨照鏡　将看却自疑　慙君明似月　照我白如糸

（頓97）
瀑近夜疑雨
阿　ね覚して雨かとぞきく此里の枕になるる滝のひびきを（四八一）
守　嵐山今は木の葉もふらぬよも雨かとおもふ滝の音かな（四八二）
春　今更に涙もからす滝の音も雨ときく夜の枕とほりて（四八三）
宗　山里になるる枕の滝の音は雨ときくよぞさらにさびしき（四八四）
嗣　山ざとの枕にひびく滝つせはなれても雨の音かとぞきく（四八五）

（称97）

瀑近夜疑雨
かり枕滝なくもがなはるる夜も雨きく夢のいとどひがたき

〈句題原詩〉『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・隠逸・儲泳「隠逸」
尽日掩柴門　何人得見君　祇因喧寂異　似有聖凡分
瀑近夜疑雨　山深晴亦雲　伝聞九霄翮　落羽正紛紛

（頓98）
鷺立斜陽天
阿　舟よする浦のみなとの夕日影うつろふ水に鷺わたるなり（四八六）
守　夕日影雨とふらしをかささぎのいづくの空をさして行くらん（四八七）
春　影うつるかたちをましみ夕附日さすや川辺にたてる白鷺（四八八）
宗　夕日さす遠山本の秋の色におのれまがはでわたる白鷺（四八九）
嗣　夕附日さすや川辺を行く舟の跡にも残る鷺のむら鳥（四九〇）

（称98）
鷺立斜陽去
浦づたひ夕日のかたにほす絹の香をなつかしみ渡るむら鷺

〈句題原詩〉→（頓称38）に既出

（頓99）
山田級級高
阿　麓までいなばの末をつたふらしをかのわさ田の秋の夕風（四九一）
守　高きよりひくきにおよぶ小山田の水の心に人ならはなん（四九二）
春　吹きまよふ山田のおもの秋風にのぼればくだる雲の浪かな（四九三）
宗　おのづからうへなる小田をあまりきてまかせぬ方も落つる山水（四九四）
嗣　たえだえの霧のうへなる小山田に秋のいなばの雲ぞ立ちそふ（四九五）

（称99）
山田級級高
せきあへず水に任せて麗川田の面をうくる山のはるけさ

〈句題原詩〉『中興群公吟稿』戊集巻二「南剣渓上」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一五・地理門・渓・戴石屏「渓行」
長舟不用舵　沙上木為篙　渓路湾環転　灘声日夜号
居人不覚険　行客始知労　四望無平地　山田級級高

（頓100）
僧談悟色空
阿　とく法の花の下紐色も香もむなしき程を尋ねてぞしる（四九六）
守　夢の世をかたりあはせてしほるかなおなじみ山に墨染の袖（四九七）
春　これも又むなしとぞきく墨染の色をふかしとおもふ心は（四九八）
宗　とく法を又とく人のなかりせばむなしき道に猶やまよはむ（四九九）
嗣　おどろかす友なかりせば夢の世をまことにすむと見てややみなん（五〇〇）

（称100）
僧談悟色空
色は皆むなしとしりている道にいかにさだめし墨染の袖

〈句題原詩〉徐照『芳蘭軒集』「宿寺」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻一六・宮室門・寺・徐霊暉「寺」
古殿清灯冷　虚廊葉掃風　掩関人跡外　得句仏香中
鶴睡応無夢　僧談必悟空　坐驚窓欲暁　片月在林東

（⑲頓阿『句題百首』・⑳三条西公条『称名院句題百首』ここまで）

㉑三条西実連『三条西実連詠草』「五十首詠草　古集五言一句為題／春十首」ほか（連1～連13）

【略解説】
三条西実連（一四四二―一四五八）の詠草所収の句題和歌一〇首。この詠草は、康正二年（一四五六）以後まとめられたものである。「五十首詠草　古集五言一句為題／春十首」と記されており、句題和歌五〇首のうち春部一〇首だけが残存したもの。句題はすべて五言一句で、一〇題のうち九題は『三体詩』から選ばれている。また、同じ折の詠作かどうかは不明であるが、別の箇所に六首の句題和歌が見いだせるので、それも一括して収めておく。

【参考】
本間洋一『王朝漢文学表現論考』（和泉書院、二〇〇二年）所収「中世私家集の世界と漢文学――その一表現層をめぐって――」、小川剛生「句題和歌と唐宋詩――出典から見た問題」（『室町文化の座標軸――遣明船時代の列島と文事――』勉誠出版、二〇二一年）

【底本】
新編私家集大成「実連Ⅱ」（底本・早稲田大学図書館蔵本へ2・4867・13）

【本文】
春十首
（連1）
雲霞出海曙
なごのうらや雲もかすみもほのぼのと春にあけたつなみのうへかな（九三）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・杜審言「早春游望」
独有宦游人　偏驚物候新　雲霞出海曙　梅柳渡江春
淑気催黄鳥　晴光転緑蘋　忽聞歌古調　帰思欲沾巾
（連2）
淑気催黄鳥
しら雪のふるすやさむき春の日のひかりにいづるたにのうぐひす（九四）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・杜審言「早春游望」→（連1）に既出
（連3）
春草年年緑
いくとせをふるののくさのはるといへばみどりもおなじいろにもゆらん（九五）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・劉長卿「漂母墓」
昔賢懐一飯　茲事已千秋　古墓樵人識　前朝楚水流
渚蘋行客薦　山木杜鵑愁　春草年年緑　王孫旧此遊
（連4）
帰鳴背落霞
春のきる袖のわかれとなりにけりかすみのよそにかへるかりがね（九六）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・李咸用「江行」
瀟湘無事後　征棹復嘔啞　高岫留残照　帰鴻背落霞
漁依沙岸草　蝶寄洑流槎　共説干戈苦　汀洲減釣家
（連5）
花発見流年
春をへてかはらぬはなもある物を根にもかへらずつもるとしかな（九七）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・劉長卿「喜鮑禅師自竜山至」
故居何日下　春草欲芊芊　猶対山中月　誰聴石上泉
猿声知後夜　花発見流年　杖錫閑来往　無心到処禅
（連6）
樹交花両色
枝かはすさくらのほかの花がたみめならぶ色をおよびやはせん（九八）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・岑参「南渓別業」
結宇依青嶂　開軒対翠嶠　樹交花両色　渓合水重流
竹径春来掃　蘭樽夜不収　逍遥自得意　鼓腹酔中游
（連7）
花落擁籬根
あさなあさなふりそふ花のしら雪にかきねや春を又へだつらん（九九）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・楊発「渓南書斎」
茅屋住来久　山深人閉門　草生垂井口　花落擁籬根
入院将雛鳥　攀蘿抱子猿　曽逢異人説　風景似桃源
（連8）
故園桃李月
さくももの花はかはらぬふるさとにたれ三か月のかげやどすらん（一〇〇）
〈句題原詩〉『三体詩』巻三・顧況「洛陽早春」
何地避春愁　終年憶旧遊　一家千里外　百舌五更頭
客路偏逢雨　郷山不入楼　故園桃李月　伊水向東流
（連9）
頽檐掛古藤
ふりにけり軒ばのふぢもとしなみもいく世の春をかけてさくらん（一〇一）

〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻四「山中少憩」
地僻人稀到　山寒水欲氷　聞鐘知有寺　見犬不逢僧
断壟森喬木　頽檐掛古藤　斜陽照孤影　詩骨瘦峻嶒
〈同一句題〉（頓称13）

（連10）
春尽雨声中
かきくらしふるはなみだか行はるのわかれぢしたふ夕ぐれの雨（一〇二）

〈句題原詩〉『三体詩』巻三・李昌符「旅游傷春」
酒醒郷関遠　迢迢聴漏終　曙分林影外　春尽雨声中
鳥倦江村路　花残野岸風　十年成底事　羸馬厭西東
〈同一句題〉三条西実隆『再昌草』解題・九二「（文亀二年）三月尽雨ふりたりしに、夜に入て春尽雨声中といふことを」

（連11）
新霜染楓
あだにをく霜とはいかがみむろ山そめて色こき木々のもみぢば（一六七）
秋寒き霜もよなよなおく山のいはかきもみぢ色まさるらし（一六八）
〈句題原詩〉『詩話総亀』巻一二、『錦繡万花谷』前集・巻三・秋・詩、『詩人玉屑』巻三・宋朝警句
新霜染楓葉　皓月借蘆花
〈同一句題〉（頓称40）、『蒲生智閑集』四五六「新霜染楓葉」
※四字題であるのが、四字結題に省略したものなのか、一字を書き落としたためであるかは不明だが、続く（連12）・（連13）とともに『頓阿句題百首』題であるので、ここにも収めた。

（連12）
深居絶是非
山水のすみそめしより音たえて淵せにかはる世をもなけかず（一六九）
いほしめて今ぞよしののよしあしもしらずうき世に遠ざかりぬる（一七〇）
〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻二「贈郭道人〈詩句皆述其所言〉」、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』巻二一・人品門・隠逸
滅性能安楽　深居絶是非　英雄行険道　富貴隠危機
紙被如綿軟　藜羹勝肉肥　蒼苔満山径　最喜客来稀
〈同一句題〉（頓称74）

（連13）
清風隔塵世
のがれきてきくもうき世のちりならば猶ふきはらへ嶺のまつかぜ（一七一）
こころにもうき世のちりをのこさぬはいかにはらふぞみねの松かぜ（一七二）
〈句題原詩〉戴復古『石屏詩集』巻五「同安子順訪茅庵道人鳳凰麒麟不可見道人語也」
道者日高臥　清風隔世塵　鳳麟不可見　猿鳥自相親
山木輪囷古　茶花冷淡春　草荒門外路　常怕有来人
〈同一句題〉（頓称95）

（㉑三条西実連『三条西実連詠草』ここまで）

㉒『竹内僧正家句題歌』四〇首（竹1～竹40）

【略解説】
曼殊院第二五世門跡・良鎮の主催で、内題によると長享元年（一四八七）一一月二五日成立。全四〇首の歌題はすべて七言一句で、黄山谷「演雅」（『黄山谷詩集注』巻一）の全句を用いている。出詠歌人は、良鎮の他、僧籍・堂上の当時を代表する二〇名。句題として用いられた「演雅」が禽鳥虫魚の生態を擬人化する教戒的な詩であると理解されていたため、和歌にもそれが濃厚に表れている。

【参考】
小山順子「室町時代の句題和歌――黄山谷「演雅」と『竹内僧正家句題歌』――」（『国語国文』76―1、二〇〇七年一月）

【底本】『大日本史料』第八編之二十、長享元年十一月二十五日条

【本文】
春十首
（竹1）
桑蠶作繭自纏裹　良鎮
とにかくに我身に思ひまとはれて桑このいとのたへがたき世や

（竹2）
蛛蝥結網工遮邏　冬良
秋のいろをまがきにとめて飛蝶のはかなやむすぶささがにの糸

（竹3）
燕無居舎軽始忙　実遠
はるごとにきつつ巣かくるつばくらめおのが家ぞとおもひやすらん

（竹4）
蝶為風光勾引破　通秀
身の行衛しらずも蝶のまどふ哉はなも夢なるはるの園生に

（竹5）
老鶴銜石宿水飲　教秀
むれいるやすざきのみさご夜は又浪の枕にうきねすらしも

（竹6）
稚蜂趁衙供蜜課　高清
巣をつくる軒に飛かふ山ばちの花をくすりとなすはかしこき

（竹7）
鵲伝吉語安得閑　永崇
よしあしを誰につげてか宿ごとにうかれがらすの鳴さわぐらん

（竹8）
鶏催晨興不敢臥　親長
となふなる時をたがへぬ庭とりのをのがねぬよをよそにしらせで

（竹9）
気陵千里蠅附驥　宣胤
遠しともしらず千里や過ぬらん毛にそふはいの馬にまかせて

（竹10）
枉過一生蟻旋磨　政為
をろかなる心をみせてよの中にすむ身も蟻のすさみならずや

（竹11）
蝨聞湯沸尚血食　為広
わく湯もて身をいたづらになさん虫ひとつ衣を何したふらん

（竹12）
雀喜宮成自相賀　実隆
我ための殿づくりかはむら雀かたらふ声のうれしがほなる

（竹13）
晴天振羽楽蜉蝣　等貴
あはれてふ夕をしらぬたのしみやはるるあさけの日を虫の影

（竹14）
空穴祝児成蜾蠃　宣親
なにとこの虫よむなしきあながちにさもあらぬみを我に似よとや

（竹15）
蛣蜣転丸賤蘇合　基綱
をのがすがたまろねの虫よいく薬蓬が島も問じとやおもふ

（竹16）
飛蛾赴燭甘死禍　良厳
はかなくも思ひをかけず夏の虫のこがれはてぬるあはれをぞしる

（竹17）
井辺蠹李嘈苦肥　寂誉
みを結ぶ宿のこずゑのすくも虫すぐすよをうき物とやはしる

（竹18）
枝頭飲露蟬常餓　和長
枝ごとのつゆのむ程を命とや身をうつせみの音にも鳴らん

（竹19）
天螻伏隙録人語　宗巧
いかなれば虫の命もあだの世にあしきをわきて記し置らん

（竹20）
射工含沙須影過　　俊通
江の水にまさごを含すむ虫の影まちわぶるよをや渡らん

（竹21）
訓狐啄屋真行怪　　冬良
くもるよのまどうつ雨と驚けば槙の板やをたたく鳥哉

（竹22）
蠨蛸報喜太多可　　実遠
待人に心つくさでささがにのふるまひしるき宿のゆふ暮

（竹23）
鸕鷀密伺魚蝦便　　和長
柳かげ水行石にゐるさぎのねぶるすがたに魚や待らん

（竹24）
白鷺不禁塵土涴　　通秀
にごり江にふかくは何をあさるらん鷺のみの毛も色かはるまで

（竹25）
絡緯何嘗省機織　　永崇
はたをりの枕にちかき声はあれど猶かたしきの袖ぞやつるる

（竹26）
布穀未応勤種播　　高清
はるきてもまだたねかさぬ苗代にうつつちくれの鳩の鳴なる

（竹27）
五枝鼯鼠笑鳩拙　　親長
身のほどを思ひもしらばつたなしと人の上をばいはずぞあらまし

（竹28）
百足馬蚿憐鼈跛　　俊通
足たたぬたぐひをなぞと我がほにいそぐもおなじ虫のあはれさ

（竹29）
老蚌胎中珠是賊　　宣胤
をのが身のあだと成らん玉の有貝とて人のひろふ習に

（竹30）
醯鶏瓮裏天幾大　　政為
ひしほすによるてふ虫やわづかなるをのがすみ家を空に知らん

（竹31）
蟷螂当轍恃長臂　　寂誉
小車をかりばの道にかへさずはしらじな虫のたけきこころを

（竹32）
熠燿宵行矜照火　　教秀
ともし火の光にまさるほたる哉くらき夜てらす数もあまたに

（竹33）
提壺猶能勧沽酒　　実隆
竹の葉のそよはるふかき山かぜにゐひをすすむる鳥の声哉

（竹34）
黄口只知貪飯顆　　良鎮
きぬの妻ふせごのしたをはなれぬや手がひになる雀成らん

（竹35）
伯労鐃舌世不問　　基綱
くつてこふ鳥もかへらぬ忍びねをしのばずとても誰かとがめん

（竹36）
鸚鵡纔言便関鏁　　宣親
籠にいるる鳥さへ物をいへばえにいはずはうきめ見えん物かは

（竹37）
春蛙夏蜩更嘈雑　　宗巧
おりふしをわすれぬ声のはかなさよ木末の蟬と水のかはづも

（竹38）
　土蚓壁蟬何砕瑣　　等貴
たとふなるもじのすがたをみる虫もをのがたぐひのしみの古文

（竹39）
　江南野水碧於天　　良厳
難波えの浪もはるかにみわたせばみどりの空につづくうなばら

（竹40）
　中有白鷗閑似我　　為広
しづかなる入江の水をすがたにてねぶる鷗ぞ我にひとしき

〈句題原詩〉黄山谷『山谷詩集注』巻一「演雅」
桑蠶作繭自纏裹　蛛蝥結網工遮邏　燕無居舎経始忙　蝶為風光勾引破
老鶴銜石宿水飲　稚蜂趨衙供蜜課　鵲伝吉語安得閑　鶏催晨興不敢臥
気陵千里蠅附驥　枉過一生蟻旋磨　蝨聞湯沸尚血食　雀喜宮成自相賀
晴天振羽楽蜉蝣　空穴祝児成蜾蠃　蛣蜣転丸賤蘇合　飛蛾赴燭甘死禍
井辺蠹李嘈苦肥　枝頭飲露蟬常餓　天螻伏隙録人語　射工含沙須影過
訓狐啄屋真行怪　蠨蛸報喜太多可　鸕鷀密伺魚蝦便　白鷺不禁塵土涴
絡緯何嘗省機織　布穀未応勤種播　五枝鼯鼠笑鳩拙　百足馬蚿憐鼈跛
老蚌胎中珠是賊　醯鶏瓮裏天幾大　蟷螂当轍恃長臂　熠燿宵行矜照火
提壺猶能勧沽酒　黄口只知貪飯顆　伯労鐃舌世不問　鸚鵡纔言便関鎖
春蛙夏蜩更嘈雑　土蚓壁蟬何砕瑣　江南野水碧於天　中有白鷗閑似我

（㉒『竹内僧正家句題歌』ここまで）

㉓『古文孝経和歌』（孝1～孝21）

【略解説】
『孝経』の各章を題として詠んだ和歌。跋文より、一条兼良の十三回忌のために企画されたものであると判明する。兼良は文明一〇年（一四八一）四月二日没であるので、明応二年（一四九三）成立である。二一名の歌人がそれぞれ、『古文孝経』の各章を題とした一首と、懐旧題の一首を詠んでいる。『古文孝経』の章順に配されているが、孝平章・第七を欠く。
　ほとんどの和歌は、各章題を歌題に示すのみであるが、一部、どの箇所の文に拠ったのか示しているものもあるため、句題和歌として本集成に収録した。また、本集成の性格からは、「懐旧」題の和歌は除くべきではあるが、金子彦二郎『句題和歌選集』が紹介して後、本文を収めたものも管見に入らないので、合わせて収めることとした。

【参考】
金子彦二郎『句題和歌選集』（長谷川書房、一九五五年）

【底本】金子彦二郎『句題和歌選集』（長谷川書房、一九五五年）（底本・金子彦二郎蔵阿波国文庫旧蔵本）

【本文】
（孝1）
詠古文孝経開宗明義章和歌
　近衛殿　従一位　政家
　身体髪膚受于父母
子はいかがあだに思はん父母（かぞいろ）にわかちし儘の身にしあらでも
　懐旧
面影はここを去らねど十年あまり三のさかひにめぐりもやする

〈句題原文〉『孝経』開宗明義章・第一
仲尼閒居、曾子侍坐。子曰、参、先王有至徳要道、以訓天下。民用和睦、上下亡怨。女知之乎。曾子避席曰、参弗敏。何足以知之乎。子曰、夫孝徳之本也。教之所繇生也。復坐。吾、語女。身体髪膚、受于父母。弗敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顕父母、孝之終也。夫孝始於事親、中於事君、終立於身。大雅云、亡念爾祖、聿修其徳。
〈同一句題〉『稲葉集』雑三・九〇二・法印頼忠「孝経の、身体髪膚は父母にうけたりといへる文をよみ侍りける」

（孝2）
詠古文孝経天子章和歌
　一条殿　大相国　冬良
国のおやとなりて教へよ人の子のためにもかかる道のまことを
　懐旧
心にはなほあらためぬ藤ごろも三とせの後も十とせかさねて

〈句題原文〉『孝経』天子章・第二

子曰、愛親者、弗敢悪於人。敬親者、弗敢慢於人。愛敬尽於事親、然後徳教加於百姓、刑於四海。蓋天子之孝也。呂刑云、一人有慶、兆民頼之。

（孝3）

詠諸侯章和歌

近衛殿御方　博陸侯　尚通

位山かたね（ママ）にのぼる人はみな危む道にこころゆるすな

懐旧

及ぶべき昨日の春の名残かは十とせあまりのつらき別れに

〈句題原文〉『孝経』諸侯章・第三

子曰、居上不驕、高而不危。制節謹度、満而不溢。高而不危、所以長守貴也。満而不溢、所以長守富也。富貴弗離其身。然後能保其社稷、而和其民人。蓋諸侯之孝也。詩云、戦戦兢兢、如臨深淵、如履薄氷。

（孝4）

詠大夫章和歌

二条殿　内大臣　尚基

何事も君にしたがふ心とてひとりは言はぬ言の葉の末

懐旧

さぞなげに思ひ出づらん思ひ出づる別れは我もならひ来（こ）し身を

〈句題原文〉『孝経』卿大夫章・第四

子曰、非先王之法服弗敢服。非先王之法言弗敢道。非先王之徳行弗敢行。是故、非法弗言、非道弗行。口無択言、身無択行。言満天下亡口過、行満天下亡怨悪。三者備矣。然後能保其禄位、而守其宗廟。蓋卿大夫之孝也。詩云、夙夜匪懈、以事一人。

（孝5）

夏日詠士（ママ）章和歌

甘露寺　権大納言　親長

生れこし身を思ふにも垂乳根（たらちね）の深きめぐみをあだに忘れじ

懐旧

その折をまださめやらず思ひしに十歳三とせもただ夢の中

〈句題原文〉『孝経』士人章・第五

子曰、資於事父以事母、其愛同。故資於事父以事君、其敬同。故母取其愛、而君取其敬。兼之者父也。故以孝事君則忠、以弟事長則順。忠順不失、以事其上。然後能保其爵禄、而守其祭祀、蓋士之孝也。詩云、夙興夜寐、亡忝爾所生。

（孝6）

詠庶人章和歌

上冷泉　正二位　為富

父母（かぞいろ）にうけし我が身のことわりを教の道になほぞおどろく

懐旧

世のためも誰（た）が身のためも今更にあらましかばと袖しぼるらし

〈句題原文〉『孝経』庶人章・第六

子曰、因天之時、就地之利。謹身節用、以養父母。此庶人之孝也。

（孝7）

夏日同詠三才章和歌

中御門　権大納言　宣胤

上を仰ぎ下を恵むも天地の中にたがはぬ人のことわざ

懐旧

仙人（やまびと）に言（こと）や問はまし桃の花散りて久しき行衛いかにと

〈句題原文〉『孝経』三才章・第八

曾子曰、甚哉、孝之大也。子曰、夫孝天之経也。地之誼也。民之行也。天地之経、而民是則之。則天之明、因地之利。以訓天下。是以其教弗肅而成、其政不厳而治。先王見教之可以化民也。是故、先之以博愛、而民、莫遺其親。陳之以徳誼、民興行。先之以敬讓、而民弗争。導之以礼楽、而民和睦。示之以好悪、而民知禁。詩云、赫赫師尹、民具爾瞻。

（孝8）

夏日同詠二首和歌

四条　正二位　隆量

孝治章

末の世もかかれとてやは慕ふらんさがなき道を忘れはてつつ

懐旧

歎けとて老やつれなきめぐりあふ卯月の今日のその名ばかりを

〈句題原文〉『孝経』孝治章・第九

子曰、昔者、明王之以孝治天下也。弗敢遺小国之臣。而況於公侯伯子男乎。故得万国之歓心、以事其先王。治国者、弗敢侮於鰥寡。而況於士民乎。故得百姓之歓心、以事其先君。治家者弗敢失於臣妾之心。而況於妻子乎。故得人之歓心、以事其親。夫然。故生則親安之、祭則鬼享之。是以天下和平、災害不生、禍乱不作。故明王之以孝治天下也如此。詩云、有覚徳行、四国順之。

（孝9）

夏日聴講古文孝経詠聖治章和歌

三条西　権大納言　実隆

郊祀后稷以配天

そのかみを仰ぐや更に久方の天（あめ）にならべてまつるかしこさ

懐旧

末の世の光とたのむ影きえし空もう月の今日をしぞ思ふ

〈句題原文〉『孝経』聖治章・第一〇

曾子曰、敢問、聖人之徳、亡以加於孝乎。子曰、天地之性、人為貴。人之行、莫大於孝。孝、莫大於厳父。厳父莫大於配天。則周公其人也。昔者、周公郊祀后稷以配天、宗祀文王於明堂以配上帝。是以四海之内、各以其職来祭。夫聖人之徳、又何以加於孝乎。是故親生育之、以養父母曰厳。聖人因厳以教敬、因親以教愛。聖人之教不肅而成、其政不厳而治。其所因者本也。

（孝10）

夏日同詠古文孝経和歌

勧修寺　大蔵卿　経茂

かぞいろの数へ尽くさぬ恵をば民も仰ぐや君がをしへに

懐旧

ながめ如何に十年あまりの春過ぎてあすも卯月の三日月の空

〈句題原文〉『孝経』父母生績章・第一一

子曰、父子之道天性也。君臣之誼。父母生之、績莫大焉。君親臨之、厚莫重焉。

（孝11）

夏日詠古文孝経和歌

日野　大宰権帥　広光

孝優劣章

仰ぐべき親をばよその人にやは深きまことを猶ほ尽くすべき

懐旧

今も身につかふる道の残れるや問ふに答へし教なるらん

〈句題原文〉『孝経』孝優劣章・第一二

子曰、不愛其親、而愛他人者、謂之悖徳。不敬其親、而敬他人者、謂之悖礼。以訓則昏、民亡則焉。不宅於善、而皆在於凶徳。雖得志、君子弗従也。君子則不然、言思可道、行思可楽。徳誼可尊、作事可法、容止可観、進退可度。以臨其民。是以其民畏而愛之、則而象之。故能成其徳教、而行其政令。詩云、淑人君子、其儀不忒。

（孝12）

夏日詠古文孝経和歌

下冷泉　民部卿　政為

紀孝行章

つかへこしその垂乳根のなき跡になほ怠らぬ手向をや知る

懐旧

誰（た）が身にもあさくは嬉しさまざまの道しるべせし人の情は

〈句題原文〉『孝経』紀孝行章・第一三

子曰、孝子之事親也、居則致其敬、養則致其楽、疾則致其憂、喪則致其哀、祭則致其厳。五者備矣。然後能事其親。事親者、居上不驕、為下而不乱、在醜不争。居上而驕則亡、為下而乱則刑、在醜而争則兵。此三者不除、雖日用三牲之養、繇為弗孝也。

（孝13）

詠古文孝経和歌

冷泉　従二位　為広

五刑章

迷ふなよ五つにわかついましめも一つ心の道の学びを

懐旧

雨となる跡やはかたみ十年あまり三たび名に立つ関白白も

〈句題原文〉『孝経』五刑章・第一四

子曰、五刑之属三千、而辜莫大於不孝。要君者亡上、非聖人者亡法、非孝者亡親。此大乱之道也。

（孝14）

夏日同詠広要道章和歌

中山　権中納言　宣親

敬其父則子悦

よそにても思へ老蘇の森の露に木の下草もめぐみありとは

懐旧

今もここに残る光やみがき置きしその世の玉のゆかりなるらむ

〈句題原文〉『孝経』広要道章・第一五

子曰、教民親愛、莫善于孝。教民礼順、莫善于弟。移風易俗、莫善於楽。安上治民、莫善於礼。礼者敬而已矣。故敬其父則子悦、敬其兄則弟悦、敬其君則臣悦。敬一人而千万人悦。所敬者寡、而悦者衆。之此謂要道也。

（孝15）

詠広至徳章和歌

小倉　権中納言　季種

四の時こころ休める賤の男が親につかふる道はたがへず

懐旧

面影は現ながらに十あまり三年の夢ぞさむる夜もなき

〈句題原文〉『孝経』広至徳章・第一六

子曰、君子之教以孝也、非家至而日見之。教以孝所以敬天下之為人父者也。教以弟所以敬天下之為人兄者也。教以臣所以敬天下之為人君者也。詩云、愷悌君子、民之父母。非至徳、其孰能訓民、如此其大者乎。

（孝16）

夏日聴講古文孝経同詠感応章和歌

姉小路　参議　基綱

宗廟致敬鬼神著也

なき魂もここに来ませと生ける世に変らぬ道を猶や尽くさん

懐旧

のちは又我をも人や羨まむ在りしを見てし君がゆかりに

〈句題原文〉『孝経』応感章・第一七

子曰、昔者、明王事父孝、故事天明。事母孝、故事地察。長幼順。故上下治。天地明察、鬼神章矣。故雖天子、必有尊也。言有父也。必有先也。言有兄也。宗廟致敬、不忘親也。修身慎行、恐辱先也。宗廟致敬、鬼神著矣。孝弟之至、通於神明、光於四海、亡所不暨。詩云、自東自西、自南自北、亡思不服。

（孝17）

夏日同詠広揚名章和歌

園　参議　基富

垂乳根のいさめの道に叶ふ身は世にひろき名を得るとこそ聞け

懐旧

更に今音をや添ふらん四の緒にかけし心の跡慕ふとて

〈句題原文〉『孝経』広揚名章・第一八

子曰、君子之事親孝。故忠可移於君。事兄弟。故順可移於長。居家理。故治可移於官。是以行成於内、而名立於後世矣。

（孝18）

詠閨門章和歌

竜胤

君につかへ君を撫づてふその閨の門の外にやおきて去りけん

懐旧

いたづらに我が世もふりぬあはれ人あらましかばの歎せしまに

〈句題原文〉『孝経』閨門章・第一九

子曰、閨門之内、具礼矣乎。厳親厳兄。妻子臣妾、繇百姓徒役也。

（孝19）

夏日同詠諫諍章和歌

勧修寺　宮内卿　顕基

たらちねの親にあらそふ理の深き道をも知るよしもがな

懐旧
わきて其の恵の露をうけし身の今年の今日は袖ぞ濡れそふ

〈句題原文〉『孝経』諫諍章・第二〇
曽子曰、若夫慈愛襲敬、安親揚名、参聞命矣。敢問、子従父之命、可謂孝乎。子曰、参是何言与。是何言与。言之不通耶。昔者、天子有争臣七人、雖無道、弗失天下。諸侯有争臣五人、雖無道、弗失其国。大夫有争臣三人、雖無道、弗失其家。士有争友、則身弗離於令名。父有争子、則身弗陥於不義。故当不誼、則子不可以不争于父。臣不可以不争於君。故当不誼、則争之、従父之命、又安得為孝乎。

（孝20）
夏日同詠事君章和歌
中御門　右中弁　宣秀
出でつかへ帰りくる間も君がため安からぬこそ教にはあれ
懐旧
書き棄つる筆のすさびもたぐひなき心を残す人の言の葉

〈句題原文〉『孝経』事君章・第二一
子曰、君子之事上也、進思尽忠、退思補過。将順其美、匡救其悪、故上下能相親也。詩云、心乎愛矣。遐不謂矣。忠心臧之。何日忘之。

（孝21）
詠喪親章和歌
曼殊院　前大僧正　良鎮
人の親の教残せる此の里は千世もと思ふためにぞ有りける
懐旧
垂乳根のやまと魂ゆづりてはこの世に迷ふことやなからん

〈句題原文〉『孝経』喪親章・第二二
子曰、孝子之喪親也、哭弗依、礼亡容、言弗文、服美弗安、聞楽弗楽、食旨弗甘。此哀慼之情也。三日而食、教民亡以死傷生也。毀不滅性、此聖人之正也。喪、不過三年、示民有終也。為之棺槨衣衾以挙之、陳其簠簋、而哀慼之、哭泣擗踊、哀以送之。卜其宅兆、而安措之、為之宗廟、以鬼享之、春秋祭祀、以時思之。生事愛敬、死事哀慼。生民之本尽矣。死生之誼備矣。孝子之事終矣。

（跋文）
後成恩寺十三回の忌辰にあひあたり侍て、つとむるところの善事おほし。中にも、やまと歌に名だたるともがらをあつめて、古文孝経章を各題として、和語をすすめ侍て、内典外典の一致せるをあらはさしめんとなり。されば、仏も孝を名づけて戒とす。又はせいしとも名付といへり。孝の大なること始終なくして、讃仏乗の縁をむすび侍らんと也。
桃花末葉禿居士

㉓『古文孝経和歌』ここまで）

㉔永正元年八月二十五日「禁裏月次御会和歌」八七首（禁1～禁87）

【略解説】
永正元年（一五〇四）八月二五日成立。後柏原天皇禁裏の月次和歌として、後柏原天皇の他、全二九名の歌人が懐紙で各三首を詠進した。三首とも歌題は『白氏文集』を出典とする七言一句。

【参考】
小山順子「室町時代の句題和歌と三条西実隆」（『中世の文学と思想』新典社、二〇〇八年）

【底本】『公宴続歌』（和泉書院、二〇〇二年。底本・宮内庁書陵部蔵本）

【本文】
浸天秋水白茫茫
（禁1）
霧わたる水のながれ州末はれて明行なみもあき風の声　（無記・後柏原天皇）（〇五九六八）
（禁2）
月ぞすむよさのうら風はるばると秋なきなみに秋をひたして　邦ー高（〇五九六九）
（禁3）
しがのうらや雲ゐる山もかげみえて月をまちとる水のさやけさ　宣胤（〇五九七〇）
（禁4）
いつとなきふじのみ雪の面かげもただ秋かぜの田子のうら浪　実隆（〇五九七一）
（禁5）

すさまじとみる秋かぜのそらの雲それも立そふ水の白波　政為（〇五九七二）
（禁6）
雲はるるうらはの浪の白妙にくるるいそがぬあき風のそら　公兼（〇五九七三）
（禁7）
あまつ空浪の千里にかげみえて月のうへゆくよるの舟人　季経（〇五九七四）
（禁8）
そらのはて波のかぎりも有明の月にうかぶるにしの海つら　為広（〇五九七五）
（禁9）
雲霧に河かぜたちてすむ月もながるる水の末のしらなみ　俊量（〇五九七六）
（禁10）
かげうつすそらもひとつに海原や秋すさじ（ママ）きおきつしら浪　季経（種カ）（〇五九七七）
（禁11）
かげやどす月をさそひてはつ塩の行かたとをき沖つしら波　元長（〇五九七八）
（禁12）
にほの海や入日の末に夕月の面かげうかぶあきのさざなみ　重治（〇五九七九）
（禁13）
くれふかみ月まつ浦の霧はれてそらもひとつの浪の遠方　基富（〇五九八〇）
（禁14）
大空のかげをひたして秋の海や月のかつらにかかるしら波　実望（〇五九八一）
（禁15）
まつらがた明行月の行ゑをもいざしら浪のあき風のそら　雅俊（〇五九八二）
（禁16）
かげうかぶ月も千里の末はれて秋かぜみゆるおきつしら波　宣秀（〇五九八三）
（禁17）
秋の水のしろきをみれば大空のみどりをわたる浮嶋の松　和長（〇五九八四）
（禁18）
秋のそら水の上にも色きえて浪やはるかにくれのこるらん　永宣（〇五九八五）
（禁19）
雲水もひとつ色なるうなばらに夕浪しろきあき風ぞ吹　守光（〇五九八六）
（禁20）
明わたる霧の末ののさは水にそらもくもらぬ秋かぜぞ吹　済継（〇五九八七）
（禁21）
白雲にたちもおよばぬ浪の色も行ゑは同じ水の秋かぜ　公条（〇五九八八）
（禁22）
あまつそらうかぶもひろき秋の水の夕浪しろし月や出らむ　為学（〇五九八九）

（禁23）
うなばらや空もひとつにかぎりなき浪路はるかにはるる月影　尚顕（〇五九九〇）
（禁24）
天つそら末はひとつにわたつ海の浪より出る秋のよの月　伊長（〇五九九一）
（禁25）
行末はそらもひとつに雲霧の晴間にとをき沖つしら波　公音（〇五九九二）
〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九九九「登西楼憶行簡」
毎因楼上西南望　始覚人間道路長　礙日暮山青簇簇　浸天秋水白茫茫
風波不見三年面　書信難伝万里腸　早晩東帰来下峡　穏乗船舫過瞿唐
〈句題他出〉『千載佳句』遊牧部・眺望・八七四、『和漢朗詠集』雑部・山水・五〇一
〈同一句題〉（慈定35）

隣鶏鳴遅知夜長
（禁26）
秋のよはここにしもなく八声をも遠山どりにあかし侘つつ　（無記・後柏原天皇）（〇五九九三）
（禁27）
いく里の秋にかかこつゆふつげのなかぬかぎりは明やらじ夜を　邦一（高）（〇五九九四）
（禁28）
ながき夜ををそくなきてもつくるかとはば隣の鳥やこたへん　宣胤（〇五九九五）
（禁29）
秋寒き枕にちかき鳥のねもね覚の月にまたれてぞ鳴　実隆（〇五九九六）
（禁30）
いつよ（も）きくおなじ枕にゆふつげのなかでぞながきよをば告ける　政為（〇五九九七）
（禁31）
中がきをへだててききし鳥のねのねざめののちもながきよは哉　公兼（〇五九九八）
（禁32）
あしがきのま近きとりの声はせでよぶかき夢をさそふ秋風　季経（〇五九九九）
（禁33）
夜長しなそなたの里もいく度のねざめの後の鳥のひとこゑ　為広（〇六〇〇〇）
（禁34）
秋さむみねられぬままにあしがきのま近き鳥の声ぞきこゆる　俊量（〇六〇〇一）
（禁35）
秋寒みむぐらの宿のよやながきなれしもおそきよその鳥の音　季種（〇六〇〇二）

（禁36）
里つづきここらの鳥のほかになどふかき夜しらぬ一声もなき　元長（〇六〇〇三）
（禁37）
ながきよをかたりてぞまつそなたにもめさます宿の鳥の一こゑ　重治（〇六〇〇四）
（禁38）
しづかなる隣をきけば声をそきかけのたれ尾のながき夜の空　基富（〇六〇〇五）
（禁39）
中がきやかけのたれ尾のながきよをつげの枕のあかつきの声　実望（〇六〇〇六）
（禁40）
ひとりのみ先しる秋のね覚してよそにまたるる鳥のねもうし　雅俊（〇六〇〇七）
（禁41）
声近くねざめの後にきこえきぬかけのたれおのながきよの空　宣秀（〇六〇〇八）
（禁42）
秋のよのならひをなれにおほせつつ鳥がねいそぐ里の中垣　和長（〇六〇〇九）
（禁43）
鳥がねもいかにとはたる人声にとなりをきくもながきよの空　永宣（〇六〇一〇）
（禁44）
わが宿のとりもをそしとながきよをとなりに人のあすやかこたん　守光（〇六〇一一）
（禁45）
秋のよはよそにまたるる鳥の音もつゐにむなしきなをやかこたん　済継（〇六〇一二）
（禁46）
衣うつそなたの月もさよふ（ママ）てまだおどろかぬ鳥の声かな　公条（〇六〇一三）
（禁47）
人よいかにかきほへだつる鳥のねもまたぬね覚のながきよの空　為学（〇六〇一四）
（禁48）
軒近き八声の鳥の一こゑもなかぬねざめのながきよの空　尚顕（〇六〇一五）
（禁49）
ながきよをかつなぐさむる鳥もなし軒ばならぶる宿のね覚に　伊長（〇六〇一六）
（禁50）
秋ふかき夜はのね覚にまちわびぬこの里近きとりの初声　公音（〇六〇一七）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七四二「晩秋夜」
碧空溶溶月華静　月裏愁人弔孤影　花開残菊傍疎籬　葉下衰桐落寒井
塞鴻飛急覚秋尽　隣鶏鳴遅知夜永　凝情不語空所思　風吹白露衣裳冷
〈同一句題〉（慈定36）

林下幽閑気味深

（禁51）
たづねばやこのしたずみのみひとつは中中なをき道もしるらん　（無記・後柏原天皇）（〇六〇一八）
（禁52）
世のなかの色にはしらじ春の花秋のはやしのふかきこころは　邦一（高）（〇六〇一九）
（禁53）
代代のあとを残すはやしのかげなればこの山もとは住もなつかし　宣胤（〇六〇二〇）
（禁54）
誰かしる世はあさぢふの露のやど心にとをき雲のはやしに　実隆（〇六〇二一）
（禁55）
すみなればたれもおもはむ春秋のあはれをしるは木木の下廬　政為（〇六〇二二）
（禁56）
さびしとはよそにもきくか山深み林のおくの入相のこゑ　公兼（〇六〇二三）
（禁57）
よをうしとたれもいへどもおく山のはやしがくれを問人もなし　季経（〇六〇二四）
（禁58）
山ふかき心の水は落ばにも埋れん物か木木のしたいほ　為広（〇六〇二五）
（禁59）
住なるるわれも心の色にそむ秋のはやしの木木のした廬　俊量（〇六〇二六）
（禁60）
おもふことしげきはやしのかげにきてみねのましらもあはれとふ声　季種（〇六〇二七）
（禁61）
すまざりしさきぞくやしき猿さけぶ林のかげのこころふかさに　元長（〇六〇二八）
（禁62）
すむ人の心やちりをへだつらん雲のはやしのしづかなるかげ　重治（〇六〇二九）
（禁63）
石のうへ林のこかげやどととして苔をころものみこそやすけれ　基富（〇六〇三〇）
（禁64）
打けぶり竹のはやしのかげくれてあはれかずそふ露のした廬　実望（〇六〇三一）
（禁65）
春秋もしらぬ林のかげしめてすむやうきよをよそにすぐらむ　雅俊（〇六〇三二）
（禁66）
むかし住人の心のかしこさも竹のはやしにおもふかくれが　宣秀（〇六〇三三）

（禁67）
われはまだなれぬ住居をいつよりか林のとりの人にしづけき　和長（〇六〇三四）
（禁68）
廬むすぶかた山はやし水落てすめるこころにかよふまつ風　永宣（〇六〇三五）
（禁69）
時雨ふる雲の林のかげは今しづかに秋の色はみてまし　守光（〇六〇三六）
（禁70）
石のうへこのしたかげもうき物とおもはでしもやよをつくすらん　済継（〇六〇三七）
（禁71）
世のうさを思ひやるにもとにかくにふかくぞたのむ木木のした廬　公条（〇六〇三八）
（禁72）
おくふかくすめる林のしづけさをたのしむみちも人はあらじな　為学（〇六〇三九）
（禁73）
よそにやはむすびもとめんかげたのむ松のはやしの草のいほりは　尚顕（〇六〇四〇）
（禁74）
しづかなるかた山はやしかげくれて猶こころすむくさのかり廬　伊長（〇六〇四一）
（禁75）
朝風のほかにはうさもきこえこず竹のはやしのかげくらきいほ　公音（〇六〇四二）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二四八「老来生計」
老来生計君看取　白日遊行夜酔吟　陶令有田唯種黍　鄧家無子不留金
人間栄耀因縁浅　林下幽閑気味深　煩慮漸銷虚白長　一年心勝一年心
〈句題他出〉『千載佳句』隠逸部・幽居・一〇一五、『和漢朗詠集』雑部・閑居・六一七
〈同一句題〉（慈定59）、加藤千蔭『うけらが花初編』一四九六「林下幽閑気味深」

浸ー
（禁76）
雲も今さながら浪の中ぞらに月まつ沖をいづくとかみむ　堯ー胤（〇六〇四三）
（禁77）
かげはれてのぼらぬ水も大空の雲をひたせるあきの川浪　道ー永（〇六〇四四）
（禁78）
水しろき末のの秋の沢辺よりそらのみどりぞうつりかはれる　道ー応（〇六〇四五）
（禁79）
雲水も尾花の色にうつろひぬまのの入江の秋の夕ぐれ　仁ー悟（〇六〇四六）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一六・〇九九九「登西楼憶行簡」
↓（禁1～25）に既出

隣ー
（禁80）
ゆふつげの鳥はとなりの笛竹のよながきころと音こそをくるれ　堯ー胤（〇六〇四七）
（禁81）
なくをまつ鳥よりさきにながきよはめさます人や声かはすらむ　道ー永（〇六〇四八）
（禁82）
秋のよのながきをつげて里近きとりの初音はをそきそら哉　道ー応（〇六〇四九）
（禁83）
いく度もね覚しぬべしながきよにとなりの鳥のなかぬかぎりは　仁ー悟（〇六〇五〇）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻一四・〇七四二「晩秋夜」↓（禁26～50）に既出

林ー
（禁84）
かぎりある十年あまりもたつ杣やいかにしままの例はうれしさ有注　堯ー胤（〇六〇五一）
（禁85）
とびきても誰かはしらんしづかなる心のおくのふかき林は　道ー永（〇六〇五二）
（禁86）
今ぞしる木のま分入月かげのかすかにすめる山のこころを　道ー応（〇六〇五三）
（禁87）
よの中の住うかりしをしづかなる林のおくにおもひしりつつ　仁ー悟（〇六〇五四）

〈句題原詩〉白居易『白氏文集』巻六六・三二四八「老来生計」
↓（禁51～75）に既出

㉔「禁裏月次御会和歌」ここまで

㉕「水無瀬殿法楽和歌（文集百首）」（水1～水100）

【略解説】

永正二年（一五〇五）二月二二日の後柏原天皇禁裏御会和歌。続歌による百首和歌で、後柏原天皇の他、全二七名の歌人が詠進している。題はすべて五言一句で、白

居易『白氏文集』巻一～二〇から選ばれている。三条西実隆による撰題。構成は、春二〇首・夏一〇首・秋二〇首・冬一〇首・恋二〇首・雑二〇首。

【参考】
岩崎佳枝「句題和歌の系譜――三条西実隆から小澤蘆庵へ――」（『和歌文学研究』50、一九八五年四月）、稲田利徳「鎌倉・室町期和歌と白氏文集――閑適詩の受容――」（『白居易研究講座3　日本における受容韻文篇』勉誠社、一九九三年）

㉖三条西実隆「夏日詠百首（文集百首）」（実1～実100）

【略解説】
三条西実隆（一四五五～一五三七）の家集『雪玉集』巻八所収「夏日詠百首」。永正三年三月三日から五月七日にかけて独吟で百首を詠み、五月二三日に後柏原天皇の、同二六日に下冷泉政為の合点を得て成立した。題は前年の㉕「水無瀬殿法楽和歌」題を用いている。

【参考】
岩崎佳枝「句題和歌の系譜――三条西実隆から小澤蘆庵へ――」（『和歌文学研究』50、一九八五年四月）

【底本】「水無瀬殿法楽和歌（文集百首）」…公宴続歌研究会『公宴続歌』。但し、影印を確認し、本文を改めた箇所がある。
『雪玉集』…新編私家集大成（底本・北海道教育大学附属図書館蔵「雪玉集（寛文十年版本）」）

【本文】
春二十首
（水1）
　春風来海上
吹かふるはるはなべての沖つかぜなみの千里のたれに告らむ（〇六一四二）
（実1）
　春風来海上　　正二位実隆
明わたるよさのうら風ほのぼのと松よりみゆるはるのはつしほ（三〇五〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三九二「正月十五日夜月」
歳熟人心楽　朝遊復夜遊　春風来海上　明月在江頭
灯火家家市　笙歌処処楼　無妨思帝里　不合厭杭州
〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』一四「春風来海上」
（水2）
　雪消氷又釈　　邦高
朝日かぜ雪まそひゆくたかねより谷のこほりをわたるはるかぜ（〇六一四三）
（実2）
　雪消氷又釈
まよはずも春きにけりとみねの雪汀の氷あとやみすらむ（三〇五一）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻七・〇一八八「早春」
　雪消氷又釈　景和風復暄　満庭田地湿　薺葉生牆根
　官舎悄無事　日西斜掩門　不開荘老巻　欲与何人言
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』二二「雪消氷亦釈」、『新明題集』春・三二九～三三四（基熙・雅章・通茂・弘資・雅喬・時量）「雪消氷又解」
（水3）
　朝尋霞外寺　　道永
わけのぼるそでもしほれて朝霞山路露けきみねのふるでら（〇六一四四）
（実3）
　朝尋霞外寺
朝日かげむかひの寺の鐘の音にゆけば夜ぶかくかすむ山かな（三〇五二）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三七二「除官去未間」
　除官去未間　半月恣游討　朝尋霞外寺　暮宿波上島
　新樹少於松　平湖半連草　躋攀有次第　賞玩無昏早
　（後略）
（水4）
　南枝暖待鶯　　尭胤
はるもとき南のやまの松のうへにきみが代ならへひなのうぐひす（〇六一四五）
（実4）
　南枝暖待鶯
春日さすかすがの野べの松にこそまつかひあらめうぐひすのこゑ（三〇五三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一七・一一〇四「江州赴忠州至江陵已来舟中示舍弟五十韻」
（前略）
夏口煙孤起　湘川雨半晴　日煎紅浪沸　月射白砂明
北渚寒留雁　南枝暖待鶯　騈朱桃露萼　点翠柳含萌
（後略）
〈同一句題〉（高37）、『邦輔親王（新編私家集大成）』解題七七六、七七七「南枝暖待鶯」、西洞院時慶『前参議時慶卿集』一八五「南枝暖待鶯」、中院通村『後十輪院内府集』六五、六六「南枝暖待鶯」、『後水尾院御集』五三「南枝暖待鶯」、冷泉為村『為村集』二六三～三五九、加藤千蔭『うけらが花初編』五二「南枝暖待鶯」、村田春海『琴後集』六二「南枝暖待鶯」

（水5）　貞敦
風揺白梅朶
きえのこる雪かとみればさく梅のはなをしらせてにほふはるかぜ（〇六一四六）
（実5）
風揺白梅朶
月のかたの思ひの外ににほひしやむめのたち枝の春のさよ風（三〇五四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三六二「郡斎暇日辱常州陳郎中使君早春晩坐水西館書事詩十六韻見寄亦以十六韻酬之」
（前略）
誰伴寂寥身　無弦琴在左　遥思毘陵館　春深物嬝娜
波払黄柳梢　風揺白梅朶　衙門排暁戟　鈴閣開朝鎖
（後略）
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一〇五「風揺白梅朶」

（水6）　宣胤
波払黄柳梢
露ぞちる川ぞひやなぎ末なびくうれ葉はなみのかかるばかりに（〇六一四七）
（実6）
波払黄柳梢
しだりあふ柳のはなや枝ながらまづ波かかるみづのうきくさ（三〇五五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三六二「郡斎暇日辱常州陳郎中使君早春晩坐水西館書事詩十六韻見寄亦以十六韻酬之」→（水実5）に既出

（水7）　実隆
暮采山上蕨
おりのこす名残やあかぬあさごろも日もゆふ露のみねのさわらび（〇六一四八）
（実7）
暮采山上薇
白雲の暮るもあかずはつわらびみねへふもとへおりのぼりつつ（三〇五六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇六七「続古詩十首（ノ三）」
朝采山上薇　暮采山上薇　歳晏薇亦尽　飢来何所為
坐飲白石水　手把青松枝　撃節独長歌　其声清且悲
（後略）
〈同一句題〉三条西実隆『雪玉集』二八一「暮采山上蕨」

（水8）　実香
背春有去雁
はるよいま名におふはなのみやこをばいかに見すててかりのゆくらん（〇六一四九）
（実8）
背春有去雁
別るるもなにかうらみむ天津雁はなき春のみやこなりせば（三〇五七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五二八「初到忠州登東楼寄万州楊八使君」
（前略）
憑軒望所思　目断心悁悁　背春有去雁　上水無来船
我懐巴東守　本是関西賢　平生已不浅　流落重相怜
（後略）

（水9）　政為
風燕双双飛
ひとりゆくとりもこそあれつばくらめかたらひすてぬはるかぜの空（〇六一五〇）
（実9）
風燕双双飛
春風にふるすをとふもいもとせのちぎりしらるるつばくらめかな（三〇五八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三六八「厳十八郎中在郡日改制東南楼因名清輝未立標牓徴帰郎署予既到郡性愛楼居宴遊其間頗有幽致聊成十韻兼戯寄厳」

（前略）
碧窓戛瑶瑟　朱欄飄舞衣　焼香巻幕坐　風燕双双飛
君作不得住　我来幸因依　始知天地間　霊境有所帰

（水10）　季経
月流春夜短
梅がかにかすめるそらはあかぬよのはやくもあくる月をしぞおもふ（〇六一五一）

（実10）
月流春夜短
おしと思ふ心のうちのよぶかさや月にしられぬかすこなるらむ（三〇五九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇八〇四「和夢遊春詩一百韻」
（前略）
酩酊歌鷓鴣　顛狂舞鴝鵒　月流春夜短　日下秋天速
謝傅隙奔光　簫娘風過燭　全凋蕣花折　半死梧桐禿
（後略）

〈同一句題〉細川幽斎『衆妙集』一九六「二月廿五日東福寺哲長老詩歌興行侍りしに、月流春夜短といふことを」

（水11）　為広
春深微雨夕
暮深みはるもはつせのはなの跡にあめそほ降てかねかすむこゑ（〇六一五二）

（実11）
春深微雨夕
花鳥もつれなからめやその色とわかぬ袖だに雨のゆふべを（三〇六〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五六八「庭松」
（前略）
接以青瓦屋　承之白沙台　朝昏有風月　燥湿無塵泥
疏韻秋槭槭　涼陰夏淒淒　春深微雨夕　満葉珠灌灌
（後略）

（水12）　俊量
巣禽下相呼
こゑたてて別やしたふなくとりの出しふる巣にのこるすもりも（〇六一五三）

（実12）
巣禽下相呼
軒端よりすだつすずめのすずろなる友さへここになるるあはれさ（三〇六一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三六三「官舎」
（前略）
稚女弄庭果　嬉戯牽人裾　是日晩弥静　巣禽下相呼
嘖嘖護児鵲　啞啞母子烏　豈唯云鳥爾　吾亦引吾雛

（水13）　宣親
覓花来渡口
所せくさののわたりのそでの色にはつせのはなのさかりをぞ見る（〇六一五四）

（実13）
覓花来渡江
たづねてもさかずは猶や里の名のう治のわたりを花にかこたん（三〇六二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一九・一二三三「中書夜直夢忠州」
閣下灯前夢　巴南城底遊　覓花来渡口　尋寺到山頭
江色分明緑　猿声依旧愁　禁鐘驚睡覚　唯不上東楼

（水14）　季種
花時鞍馬多
駒なべていまこそいそげはなさけばわけぬ野山も見ぬさともなく（〇六一五五）

（実14）
花時鞍馬多
駒の足も時こそ有けれ花ざかり道さりあへず打むれてゆく（三〇六三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一・〇〇一五「贈元稹詩」
（前略）
之子異於是　久処誓不諼　無波古井水　有節秋竹竿
一為同心友　三及芳歳蘭　花下鞍馬遊　雪中杯酒歓
（後略）

〈同一句題〉望月長孝『広沢輯藻』一七九「勝円寺月次に、花時鞍馬多」、『大江戸倭歌集』春・二八九・小笠原長武、二九〇・飯田孝忠「花時鞍馬多」

（水15）
豈独花堪惜　　元長
とふ人もこころをそへよかずならで身ひとりおしむはなはちるやと
（実15）
豈独花堪惜
散ことのなげきばかりのあるじにて咲をばよその花とやは見む（三〇六四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇三九二「西明寺牡丹花時憶元九」
前年題名処　今日看花来　一作芸香吏　三見牡丹開
豈独花堪惜　方知老暗催　何況尋花伴　東都去未廻
（後略）
（水16）
萎花蝶飛去　　重治
小てふだになどわするらむしほるるもをのれすみあらす花のやどりを（〇六一五七）
（実16）
萎花蝶飛去
よの中を思ふもかなし花といへどうつれば蝶もすまずなり行（三〇六五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五五六「歩東坡」
（前略）
緑陰斜景転　芳気微風度　新葉鳥下来　萎花蝶飛去
閑携斑竹杖　徐曳黄麻履　欲識往来頻　青蕪成白路
〈同一句題〉加藤千蔭『うけらが花初編』二三四「萎花蝶飛去」、香川景樹『桂園一枝』一一二「萎花蝶飛去」
（水17）
故山花正落　　実望
吹ぬまもなをちりみだれよしのやまあらしをさそふはなのしら雪（〇六一五八）
（実17）
故山花正落
雲ときえ雪とちり行花の跡のかたはらさびし深山木のかげ（三〇六六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五三一「寄王質夫」

（前略）
年顔漸衰颯　生計仍蕭索　方含去国愁　且羨従軍楽
旧遊疑是夢　往事思如昨　相憶春又深　故山花正落
（水18）
藤飄落水花　　宋世
玉藻にもさくはななれやむらさきのよせてかへらぬ池のふぢなみ（〇六一五九）
（実18）
藤飄落水花
さく藤のをのがなみこそはる風にちらでも水のはなとみえけれ（三〇六七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九三四「春末夏初閑遊江郭二首（ノ一）」
閑出乗軽屐　徐行踏軟沙　観魚傍溢浦　看竹入楊家
林迸穿籬筍　藤飄落水花　雨埋釣舟小　風颺酒旗斜
（後略）
（水19）
明朝三月尽　　雅俊
暮なむとおもへばあすのあさつゆも今よひのはるのそでに落つつ（〇六一六〇）
（実19）
明朝三月尽
けふは又ねてのあしたの夢もありとたのむこてふの春もはかなし（三〇六八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・一三六五「飲散夜帰贈諸客」
鞍馬夜紛紛　香街起闇塵　迴鞭招飲妓　分火送帰人
風月応堪惜　杯觴莫厭頻　明朝三月尽　不忍送残春
（水20）
春帰日復暮　　和長
くれてゆくはるはけふよりみなせがはとまらぬ水のかげやしたはむ（〇六一六一）
（実20）
春帰日復暮
暮にけり春よいづくに行とりの入あひのかねのみねのしら雲（三〇六九）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四八七「送春」

三月三十日　春帰日復暮　惆悵問春風　明朝応不住
送春曲江上　眷眷東西顧　但見撲水花　紛紛不知数
（後略）

夏十首
（水21）
新樹葉成陰　永宣
しげりあふ梢はさらにもとかしはもとの一木のかげとしもなし（〇六一六二）
（実21）
新樹葉成陰
浅みどり春見し色にひきかへてかへでかしはの露のすずしさ（三〇七〇）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三七〇「翫新庭樹因詠所懐」
靄靄四月初　新樹葉成陰　動揺風景麗　蓋覆庭院深
下有無事人　竟日此幽尋　豈唯翫時物　亦可開煩襟
（後略）

（水22）
鳥思残花枝　守覚
よそはみなちりはてぬらし夏やまのはなのかたみにうぐひすのなく（〇六一六三）
（実22）
鳥思残花枝
咲残る花にや忍ぶうぐひすの木づたひちらすはるのこずゑを（三〇七一）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一七八「首夏同諸校正遊開元観因宿翫月」
（前略）
清和四月初　樹木正華滋　風清新葉影　鳥恋残花枝
向夕天又晴　東南余霞披　置酒西廊下　待月杯行遅
（後略）
〈同一句題〉（千30）、加藤千蔭『うけらが花初編』三〇四「鳥思残花枝」
（水23）
杜鵑声似哭　賢房
ほととぎすこゑのあはれやきく人の袖にもかかるむらさめのそら（〇六一六四）
（実23）
杜鵑声似哭
せきあへぬ思ひ有ともほととぎすふるさと人に心してなけ（三〇七二）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・五四〇「江上送客」
江花已萎絶　江草已銷歇　遠客何処帰　孤舟今日発
杜鵑声似哭　湘竹班如血　共是多感人　仍為此中別
〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝拾遺』一三三「杜鵑声似哭」
（水24）
傾心向日葵　公条
ながき日をなをあかずとやあふひぐさ夕影したふこころ見すらん（〇六一六五）
（実24）
傾心向日葵
君をあふぐ心をとはばあふひぐさむかふ日影をさしてこたへん（三〇七三）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一三・〇六〇八「代書詩一百韻寄微之」
（前略）
念涸誰濡沐　嫌醒自歠醨　耳垂無伯楽　舌在有張儀
負気衝星剣　傾心向日葵　金言自銷鑠　玉性肯磷緇
（後略）

（水25）
苦雨初入梅　為孝
ふりそむる空にも見えず五月雨はいかばかりなる日かずをかへむ（〇六一六六）
（実25）
苦雨初入梅
晴ぬまをいかにしのばむふりそむるけふだに木木のさみだれの宿（三〇七四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇五〇九「孟夏思渭村旧居寄舍弟」
嘖嘖雀引雛　稍稍筍成竹　時物感人情　憶我故郷曲
故園渭水上　十載事樵牧　手種楡柳成　陰陰覆牆屋
（中略）
九江地卑湿　四月天炎燠　苦雨初入梅　瘴雲稍含毒
泥秧水畦稲　灰種畠田粟　已訝殊歳時　仍嗟異風俗
（後略）

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』四二九「苦雨初入梅」、加藤千蔭『うけらが花初編』三九一「苦雨初入梅」

（水26）
梢梢筍成竹　　尚顕
葉をしげみ枝をかさねてことし生のみぎりの竹のたかくなるかげ（〇六一六七）

（実26）
梢梢筍成竹
いつのまにねはふと見えし竹の子のこずゑにをよぶかげと成らん（三〇七五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇五〇九「孟夏思渭村旧居寄舍弟」→（水実25）に既出

〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝拾遺』一二二「稍稍筍成竹」

（水27）
夏雲忽嵯峨　　為和
嶺高みそらなるやまも夕立のあとよりうかぶ雲のひとむら（〇六一六八）

（実27）
夏雲忽嵯峨
をのづから雨をふくめるみねなれや照日をさふる雲の一むら（三〇七六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四一四「青竜寺早夏」

（前略）
春去未幾日　夏雲忽嵯峨　朝朝感時節　年鬢暗蹉跎
胡為恋朝市　不去帰煙蘿　青山寸歩地　自問心如何

（水28）
風落嫋翠蓋　　邦高
風ゆるく吹うごかしてはちすばにみだれもはてぬ露のすずしさ（〇六一六九）

（実28）
風荷嫋翠蓋
池水のかざしにさせるはちす葉に玉ぬきちらす露の夕かぜ（三〇七七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一七六「答元八宗簡同遊曲江後明日見贈」

（前略）
水禽翻白羽　風荷嫋翠茎　何必滄浪去　即此可濯纓
時景不重来　賞心難再幷　坐愁紅塵裏　夕鼓鼕鼕声

（後略）

（水29）
樹樹風蟬声　　政為
なく蟬よはつ秋かぜの木ずゑをばいまいく日とかこゑつくすらん（〇六一七〇）

（実29）
樹樹風蟬声
なくせみにもみぢの木木のあき風もきく心ちする山のした露（三〇七八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二四七「秋遊原上」

（前略）
自我到此村　往来白髪生　村中相識久　老幼皆有情
留連向暮帰　樹樹風蟬声　是時新雨足　禾黍夾道青

（後略）

（水30）
近水微涼生　　道永
ふくとなきかぜのけしきもさざなみのよるべすずしき庭のいけみづ（〇六一七一）

（実30）
近水微涼生
待となき木のまの月もむすぶ手のしづくにうつる水のすずしさ（三〇七九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻七・〇三〇九「小池二首（ノ一）」
昼倦前斎熱　晩愛小池清　映林余景没　近水微涼生　坐把蒲葵扇　閑吟三両声

〈同一句題〉松永貞徳『逍遊集』九八九～九九二「近水微涼生」

秋二十首

（水31）
西風飄一葉　　宋世
先にきく西こそ秋のはじもみぢまだきにさそふきりのしたかぜ（〇六一七二）

（実31）
西風飄一葉
吹風のたよりもいかで桐のはのわが身ひとつの秋となりなん（三〇八〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四四二「新秋」
西風飄一葉　庭前颯已涼　風池明月水　衰蓮白露房　其奈江南夜　綿綿自此長
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』六二〇「西風飄一葉」

（水32）
早涼晴後至　　実香
雨すぐる蟬のは山の夕日かげのこる木ずゑに秋のはつかぜ（〇六一七三）
（実32）
早涼晴後至
初かぜと思ひしよりも下おぎのひとむらさめは秋をふかめて（三〇八一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇三九八「曲江早秋」
秋波紅蓼水　夕照青蕪岸　独信馬蹄行　曲江池四畔
早涼晴後至　残暑暝来散　方喜炎燠銷　復嗟時節換
（後略）

（水33）
秋露草花香
秋の野はみな月草のあさつゆにぬれてぞうつるそでのにほひも（〇六一七四）
（実33）
秋露草花香
はなといへばちくさながらにあだならぬ色香にうつる野べの露哉（三〇八二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三一二「逢張十八員外籍」
旅思正茫茫　相逢此道傍　晩嵐林葉闇　秋露草花香
白髪江城守　青衫水部郎　客亭同宿処　忽似夜帰郷

（水34）
秋蘭已含露　　為広
秋もまだおばなが袖はわかぬ野にわが露むすぶふぢばかまかな（〇六一七五）
（実34）
秋蘭已含露
ふぢばかまほころびてこそむらさきの色にくだくる露も見えけれ（三〇八三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四七六「村居臥病三首（ノ一）」
戚戚抱羸病　悠悠度朝暮　夏木纔結陰　秋蘭已含露
前日巣中卵　化作雛飛去　昨日穴中虫　蛻為蟬上樹
（後略）

（水35）
早蛩鳴復歇　　実隆
ほのかなるはつ秋かぜのきりぎりすまだゆか遠き声もめづらし（〇六一七六）
（実35）
早蛩鳴復歇
それとなく鳴そむる声は霜のしたの聞しにたるきりぎりすかな（三〇八四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四四三「夜雨」
早蛩啼復歇　残灯滅又明　隔窓知夜雨　芭蕉先有声
〈句題他出〉『新撰朗詠集』秋部・秋夜・二一三

（水36）
槿花不経宿　　宣親
いかなればほしの名におふ花の色の有明のほどにさきてきゆらん（〇六一七七）
（実36）
槿花不経宿
咲ていつ一夜もへけるあさがほに日かげをのみもうらみざらなむ（三〇八五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻七・〇三二三「斉物二首（ノ二）」
椿寿八千春　槿花不経宿　中間復何有　冉冉孤生竹
竹身三年老　竹色四時緑　雖謝椿有余　猶勝槿不足

（水37）
秋鴻次第過　　宣胤
こえてゆく鳥羽の山もとみるがうちにすゑは田面におつるかりがね（〇六一七八）
（実37）
秋鴻次第過
みずやその雲井を渡る雁だにもつらをみだらぬ道は有世を（三〇八六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四四四「秋江送客」
秋鴻次第過　哀猿朝夕聞　是日孤舟客　此地亦離群

濛濛潤衣雨　漠漠冒帆雲　不酔潯陽酒　煙波愁殺人

（水38）
　灘声秋更急　　季経
谷川やあさせのなみも音そへてはや秋ふかき山ぞしぐるる（〇六一七九）
（実38）
　灘声秋更急
音まさる八十瀬のなみやすずか川秋行人のおもひともなる（三〇八七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一八・一一四〇「陰雨」
　風霧今朝重　江山此地深　灘声秋更急　峡気暁多陰
　望闕雲遮眼　思郷雨滴心　将何慰幽独　頼世北窓琴
〈同一句題〉武者小路実陰『芳雲集』二六二三、二六二四「灘声秋更急」

（水39）
　山秋雲物冷　　尭胤
秋はまづ身にしむ色を山ひめの雲のころもにそめてみすらし（〇六一八〇）
（実39）
　山秋雲物冷
心なき雲とはたれかいは木にもおもひあれなと秋ぞしらるる（三〇八八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇二〇六「秋山」
　久病曠心賞　今朝一登山　山秋雲物冷　称我清羸顔
　白石臥可枕　青蘿行可攀　意中如有得　尽日不欲還
　（後略）
〈同一句題〉（定60）

（水40）
　迎秋夜更長　　貞敦
それとなくねざめせらるる秋のよのながきや人をおどろかすらむ（〇六一八一）
（実40）
　迎暁夜更長
をのがねをいくたびまちつ秋のよに夕付鳥はねざめやはせぬ（三〇八九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三二四「夜泊旅望」

少睡多愁客　中宵起望郷　沙明連浦月　帆白満船霜
近海江弥闊　迎秋夜更長　煙波三十宿　猶未到銭塘

（水41）
　天陰夕無月　　俊量
むら曇にながめてぞ思ふ月遅き夕のうさもあきのものとは（〇六一八二）
（実41）
　天陰夕無月
月は今たのむもいさやしら雲のこりしく暮は山だにもなし（三〇九〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五六「送兄弟迴雪夜」
　（前略）
　離襟涙猶湿　迴馬嘶未歇　欲帰一室坐　天陰多無月
　夜長火消尽　歳暮雨凝結　寂寞満炉灰　飄冷上階雪
　（後略）

（水42）
　月出清風来　　重治
たえだえにすだれうごかすあきかぜもまちいづる月に見えて涼しき（〇六一八三）
（実42）
　月出清風来
身にしむもこの世の外の色なれや月より落るよるの秋かぜ（三〇九一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇二〇四「禁中寓直夢遊仙遊寺」
　西軒草詔暇　松竹深寂寂　月出清風来　忽似山中夕
　因成西南夢　夢作遊仙客　覚聞宮漏声　猶謂山泉滴
〈同一句題〉望月長孝『広沢輯藻』四六〇「月出清風来」

（水43）
　月照青苔地（若カ）　　雅俊
ふみ分る月のひかりのしもきえてこけのみどりのあとのさやけさ（〇六一八四）
（実43）
　月照青苔地
山風の雲こそあらめ苔のうへのちりもくもらずやどる月かな（三〇九二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇七五二「秋思」
病眠夜少夢　閑立秋多思　寂寞余雨晴　蕭条早寒至
鳥棲紅葉樹　月照青苔地　何況鏡中年　又過三十二

（水44）
沙明連浦月　元長
まよはめやまさご地しろき難波がたことうらかけて月にゆくとも（〇六一八五）
（実44）
沙明連浦月
吹上の月かげきよしわかのうらのあしべのたづもここになかなむ（三〇九三）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三二四「夜泊旅望」→（水実40）に既出

（水45）
月斜天未明　実望
影うすく月はをちかたの山のはにわかれもやらぬよこぐものそら（〇六一八六）
（実45）
月斜天未明
秋のよの心におしむ月なれやかたぶくからにあけやらぬそら（三〇九四）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇七五一「涼夜有懐」
念別感時節　早蛩聞一声　風簾夜涼入　露簟秋意生
灯尽夢初罷　月斜天未明　闇凝無限思　起傍薬欄行

（水46）
城暗雲霧多　季経
小鹿なく山路もさぞなみやこさへ霧たつゆふべくもくらきそら（〇六一八七）
（実46）
城暗雲霧多
さざ波やふるきみやこのあきの色はただ雲きりの志賀の山ざと（三〇九五）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五三一「東楼晩」
脈脈復脈脈　東楼無宿客　城暗雲霧多　峡深田地窄
宵灯尚留焔　晨禽初展翮　欲知山高低　不見東方白
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一四一九「城暗雲霧多」

（水47）
秋雨檐菓落　和長
秋かぜに軒ばの山のおちしゐもまじるか雨の音のさびしさ（〇六一八八）
（実47）
秋雨檐菓露
田づらにはおちぼひろふと行人にみせばや雨の庭の木のみを（三〇九六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五五七「徴秋税畢題郡南亭」
（前略）
豈伊循良化　頼此豊登年　按牘既簡少　池館亦清閑
秋雨檐果落　夕鐘林鳥還　南亭日蕭灑　偃臥恣疎頑

（水48）
家家擣秋練　永宣
たが里もおなじゆふべのあき風に山本とをくころもうつなり（〇六一八九）
（実48）
家家擣秋練
夜さむをばおなじ心にわび人も身のほどほどのころも打らん（三〇九七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五二「秋霽」
（前略）
月出砧杵動　家家擣秋練　独対多病妻　不能理針線
冬衣殊未製　夏服行将綻　何以迎早秋　一杯聊自勧

（水49）
移座就菊叢　政為
をく露もよそめははなのしらぎくをたをらばおしとしたひよりつつ（〇六一九〇）
（実49）
移座就菊叢
白妙の袖かとみつつこしものをきくのかきねぞたちもさられぬ（三〇九八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二四八「九日登西原宴望」
病愛枕席涼　日高眠未輟　弟兄呼我起　今日重陽節
起登西原望　懐抱同一豁　移座就菊叢　餞酒前羅列
（後略）

（水50）
霜園紅葉多　　守覚
霜ふかき園生のこずゑみるもおしあきもむらむら木葉ちるやど（〇六一九一）
（実50）
霜園紅葉多
朝な朝な霜やかなしきたつたひめ我家の園としむる紅葉葉（三〇九九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇五二〇「司馬宅」
雨径緑蕪合　霜園紅葉多　蕭条司馬宅　門巷無人過　唯対大江水　秋風朝夕波
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』九四六「霜園紅葉多」

冬十首
（水51）
孟冬草木枯　　道永
冬来てはをきそふしものしたくさもおなじくち葉の木がらしのもり（〇六一九二）
（実51）
孟冬草木枯
草も木も神無月とやしほれ行身を知色の袖のしぐれに（三一〇〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇〇九〇「寓意詩五首（ノ一）」
（前略）
孟冬草木枯　烈火燎山陂　疾風吹猛焰　従根焼到枝
養材三十年　方成棟梁姿　一朝為灰燼　柯葉無孑遺
（後略）

（水52）
坐愁樹葉落　　為広
落葉さへ堪てきくべきやままどに心吹しほる木がらしのこゑ（〇六一九三）
（実52）
坐愁樹葉落
もみぢばは枝よりも猶木のしたにたたまくおしきにしきをぞしく（三一〇一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一八六「前庭涼夜」
露簟色似玉　風幌影如波　坐愁樹葉落　中庭明月多

（水53）
帆白満船霜　　俊量
こぎ出し夕のそでやさむからし霜をきまよふ興のつりぶね（〇六一九四）
（実53）
帆白満船霜
さえしよのあけのそほ舟白妙に色とりかへて霜や置らむ（三一〇二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二〇・一三二四「夜泊旅望」→（水実40）に既出

（水54）
水禽翻白羽　　実望
床かふるはかぜをさむみたつなみにをのれもさはぐあし鴨のこゑ（〇六一九五）
（実54）
水禽翻白羽
水鳥の霜の翅のうちはぶき氷の床をはらふさむけさ（三一〇三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一七六「答元八宗簡同遊曲江後明日見贈」
→（水実28）に既出

（水55）
珠箔籠寒月　　宣親
ふる雪のすだれふきまく山かぜに神さびわたるつきのさむけさ（〇六一九六）
（実55）
題落（珠箔籠寒月）
木がらしのたえずも有哉玉だれのみすてていらん月ならなくに（三一〇四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一八・一一九五「閨怨詞三首（ノ二）」
珠箔籠寒月　紗窓背暁灯　夜来巾上涙　一半是春氷

（水56）
檐氷纔結穂　　季経
かりてほすいな葉のほなみ残るらん田面の廬ののきのたるひは（〇六一九七）
（実56）
檐氷纔結穂
この朝け軒のたるひの初尾ばなさぞな霜夜のいもが手枕（三一〇五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二七六「江州雪」
新雪満前山　初晴好天気　日西騎馬出　忽有京都意
城柳方綴花　檐氷才結穂　須臾風日暖　処処皆飄墜
（後略）

（水57）
山冷微有雪
ふきをくるかぜはしぐれにくもりきておもひくまなきみねのはつゆき（〇六一九八）
（実57）
山冷有微雪
面かげや身にしむ物のさむからぬ今朝見えそむる峰の白雪（三一〇六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三五五「初領郡政衙退登東楼作」
（前略）
頼是余杭郡　台榭遶官曹　凌晨親政事　向晩恣遊遨
山冷微有雪　波平未生濤　水心如鏡面　千里無纖毫
（後略）

（水58）
飄零上階雪　季種
おもかげに春やかよひてあふぎみるみはしの雪のはなとちるらん（〇六一九九）
（実58）
飄零上階雪
たをやめのかへすたもとのそれもかとみはしのうへにかかる雪かな（三一〇七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五六「送兄弟迴雪夜」→（水実41）に既出

（水59）
枝弱不勝雪　宋世
落ぬべくおもひし露のはてやこれ雪におらるる庭のむらはぎ（〇六二〇〇）
（実59）
枝弱不勝雪
折とても花も紅葉もこのごろの雪におしまむ枝はあらじを（三一〇八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇一一六「有木詩八首（ノ六）」
（前略）
彩翠色如柏　鱗皴皮似松　為同松柏類　得列嘉樹中
枝弱不勝雪　勢高常懼風　雪圧低還挙　風吹西覆東
（後略）

（水60）
芳歳忽已晩　和長
くるるをもさのみいとはじとしのはのおひよはるまでもありてつかへば（〇六二〇一）
（実60）
芳歳忽已晩
身につもる年ならずとも月雪のなごりあるべきくれにやはあらぬ（三一〇九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇二〇一「寄李十一建」
（前略）
分手来幾時　明月三四盈　別時残花落　及此新蟬鳴
芳歳忽已晩　離抱悵未平　豈不思命駕　吏職坐相縈
（後略）

恋二十首
（水61）
莫問胸中事　為広
身はつゐのたきぎつきてものこるべきおもひのほどはとはずともしれ（〇六二〇二）
（実61）
莫問胸中事
あぢきなくむねにみつともとがむなよ恋はあさまの煙ならじを（三一一〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇五一九「早秋晩望兼呈韋侍御」
（前略）
夫君亦淪落　此地同飄寄　憫黙向隅心　摧頹触籠翅
且謀眼前計　莫問胸中事　潯陽酒甚濃　相勧時時酔

（水62）
誰識相念心　重治
もらさずはたれかはしらむ恋しともうしともおもふこころひとつを（〇六二〇三）
（実62）

誰識相念心
なをざりに思ふが中にあらばこそをしはかりてもよそにしられめ（三一一一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四〇七「寄元九」
（前略）
蕙風晩香尽　槐雨余花落　秋意一蕭条　離容両寂寞
況随白日老　共負青山約　誰識相念心　韝鷹与籠鶴

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一二六五「誰識相念心」

（水63）　俊量
与君生此世
むまれ逢てせめてはおなじ世にすむをちぎりになしてなぐさみねとや（〇六二〇四）

（実63）　実隆
与君生此世
思ふかひありともなしのおなじ世にむまれあひしもうき契り哉（三一一二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三五六「清調吟」
（前略）
芳節変窮陰　朝光成夕照　与君生此世　不合長年少
今晨従此過　明日安能料　若不結跏禅　即須開口笑

（水64）　邦高
無実有虚名
世にしらぬわが名よいかにありぬやとこころにとふもうきなみだかな（〇六二〇五）

（実64）　実隆
無実有虚名
いさやそのねも見しことはしら波にうきながれ木のうき沈みつつ（三一一三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇〇九二「寓意詩五首（ノ三）」
促織不成章　提壺但聞声　嗟哉虫与鳥　無実有虚名
与君定交日　久要如弟兄　何以示誠信　白水指為盟
雲雨一為別　飛沈両難并　君為得風鵬　我為失水鯨
音信日已疎　恩分日已軽　窮通尚如此　何況死与生
（後略）

〈同一句題〉中院通村『後十輪院内府集』一一一七「無実有虚名　曼殊院宮聖廟法楽」

（水65）　実隆
夢中握君手
恋わぶる袖のなかにやぬるたまのなくなくきみが手にもふれつる（〇六二〇六）

（実65）　実隆
夢中推君手
玉の緒のゆらくためしは見しゆめのなごりしもこそみだれ侘ぬれ（三一一四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四二一「初与元九別後忽夢見之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然感懐因以此寄」
永寿寺中語　新昌坊北分　帰来数行涙　悲事不悲君
悠悠藍田路　自云無消息　計君食宿程　已過商山北
昨夜雲四散　千里同月色　暁来夢見君　応是君相憶
夢中握君手　問君意何如　君言苦相憶　無人可寄書
（中略）
上論遷謫心　下説離別腸　心腸都未尽　不暇叙炎涼
云作此書夜　夜宿商州東　独対孤灯坐　陽城山館中
（後略）

（水66）　元長
無夕不思量
行やせむとはれやするといくたびかおもひわづらふ夕ぐれのそら（〇六二〇七）

（実66）　政為
無夕不思量
恋しさは折ふしごとの面かげもさらにゆふべのものとなりぬる（三一一五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四五一「夜雨」
我有所念人　隔在遠遠郷　我有所感事　結在深深腸
郷遠去不得　無日不瞻望　腸深解不得　無夕不思量
（後略）

（水67）　政為
暗凝無限思
しるやいかにはてなき雲を心にてこの夕暮もたちうかれぬる（〇六二〇八）

（実67）　政為
暗凝無限思

雲水もかぎりはあれや空にみつおもひぞさらに行かたもなき（三一一六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇七五一「涼夜有懐」→（水実45）に既出

（水68）
　独対孤灯座
ふけにけりわれやなつむしともし火によるのおもひもいたづらにして（〇六二〇九）

（実68）
　独対孤灯坐
まどろまぬかべにも見えて待人にさながらむかふともし火のかげ（三一一七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四二一「初与元九別後忽夢見之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然感懐因以此寄」→（水実65）に既出

〈同一句題〉『霞関集』恋・八八九・源重澄「独対孤灯座〈文集句題〉」

（水69）
　相逢是何日　　道永
あぢきなやめぐり逢べき月日をも人にたのまぬゆく末のそら（〇六二一〇）

（実69）
　相逢是何日
いのちをばさらにもいはじたのめてもあひみんことの定めなきよに（三一一八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四八九「別李十一後重寄」
　（前略）
　俱承金馬詔　聯秉諫臣筆　共上青雲梯　中途一相失
　江湖我方往　朝庭君不出　蕙帯与華簪　相逢是何日

〈同一句題〉『霞関集』恋・八九一・源重澄「相逢是何日〈文集句題〉」

（水70）
　会稀歳月急　　永宣
こよひぞとまつだにあるをあはぬまのうきとし月はいかですぎけむ（〇六二一一）

（実70）
　会稀歳月急
うつろふをうき歎にてあふことのまれなる色や月日なるらん（三一一九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四八六「寄楊六」
　（前略）
　唯君於我分　堅久如金石　何況老大来　人情重姻戚
　会稀歳月急　此事真可惜　幾廻開口笑　便到髭鬚白
　（後略）

（水71）
　抱枕無言語　　宣親
くろ髪のおもかげのこる枕香にいはむかたなのわすれがたみや（〇六二一二）

（実71）
　抱枕無言語
いかにせん此世ながらのわかれぢもふるきまくらはいふかひもなし（三一二〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一四・〇七八八「昼臥」
　抱枕無言語　空房独悄然　誰知尽日臥　非病亦非眠

〈同一句題〉武者小路実陰『芳雲集』三八八六、三八八七「抱枕無言語」

（水72）
　君意軽偕老　　宋世
ともに老共にかたらふためしだにあれば有世ときみはしらずや（〇六二一三）

（実72）
　君意軽偕老
あだなれや老となるまでかはらじのながきためしは思ふともなき（三一二一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九七「婦人苦」
　蟬鬢加意梳　蛾眉用心掃　幾度暁粧成　君看不言好
　妾身重同穴　君意軽偕老　惆悵去年来　心知未能道
　今朝一開口　語少意何深　願引他時事　移君此日心
　（後略）

（水73）
　語少意何深　　宣胤
いかにせむこころふかさをうらみてもなをうちとけぬひとのことの葉（〇六二一四）

（実73）
　語少意何深

たなれてもしらずよいかにみちのくのいはてのたかの心ふかさは（三一二二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一二・〇五九七「婦人苦」→（水実72）に既出

（水74）　　実香
　仍嗟別太頻
したひえぬこころをしぬてくだかけのいそぐにたへぬきぬぎぬのそら（〇六二一五）

（実74）
　仍嗟別太頻
何事をかたらひをかむいつとなくわかるるきははのどかならぬに（三一二三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一七・一〇一六「送客春遊嶺南二十韻」
　已訝遊何遠　仍嗟別太頻　離容君感促　贈語我殷勤
　迢遞天南面　蒼茫海北濱　訶陵国分界　交趾郡為隣
　（後略）

（水75）　　賢房
　帰来数行涙
しらせばやわかれしけさの床のうへにつつみかねたるそでのなみだを（〇六二一六）

（実75）
　帰来数行涙
わりなくもけさせきあへぬなみだかなあはでこしよもあればあるみに（三一二四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻九・〇四二一「初与元九別後忽夢見之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然感懷因以此寄」→（水実65）に既出

（水76）　　雅俊
　亦莫厭此身
うきものとおもひはすてじかくてしも世世のちぎりはなき身ならずや（〇六二一七）

（実76）
　亦莫厭此身
いとふなよいとひすつとも今更に立にし名をばとりもかへさじ（三一二五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五七七「逍遥詠」
　亦莫恋此身　亦莫厭此身　此身何足恋　万劫煩悩根
　此身何足厭　一聚虚空塵　無恋亦無厭　始是逍遥人

（水77）　　堯胤
　真偽何由識
今日もまたきかばゆふげのくちうらにあはましものかとひもとはずも（〇六二一八）

（実77）
　真偽何由識
偽のありやなしやもめに見えぬ神はたのまじかけていふとも（三一二六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・一一三「有木詩八首（ノ三）」
　（前略）
　上受顧眄恩　下勤澆漑力　実成乃是枳　臭苦不堪食
　物有似是者　真偽何由識　美人黙無言　対之長歎息
　（後略）

（水78）　　季種
　至死不相離
雲とならむ朝はしらずおなじ世にけふはへだてもなきちぎりかな（〇六二一九）

（実78）
　至死不相離
いける日のちぎりかはらで苔の下つかのまをだに立もはなれじ（三一二七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・一〇二「和陽城駅詩」
　（前略）
　上言陽公行　友悌無等夷　骨肉同衾裯　至死不相離
　次言陽公跡　夏邑始棲遅　郷人化其風　少長皆孝慈
　（後略）

（水79）　　公条
　十書九不達
まれにだに見ずやいかにとおぼつかなかきやる文のかずはつもれど（〇六二二〇）

（実79）
　十書九不達
いくたびの雲井のかりにつけてしもげに〔　　〕まれの玉づさ（三一二八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇五〇七「寄行簡」
（前略）
相去六千里　地絶天邈然　十書九不達　何以開憂顔
渇人多夢飲　饑人多夢餐　春来夢何処　合眼到東川

（水80）
音信日已疎　為孝
いたづらにすぐすたよりをおもふにはこころのほかのとだえとも見ず（〇六二二一）
（実80）
音信日已疎
たえまのみあやうかりつる末つゐにかよふ音せぬはしと成ぬる（三一二九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇〇九二「寓意詩五首（ノ三）」→（水実64）に既出

雑二十首
（水81）
宮樹影相連　雅俊
おくふかく雲かさなりて巻向の檜原をそこの色もわかれず（〇六二二二）
（実81）
宮樹影相連
あまそそきあきの時雨とふる宮の木の下みちぞ分んかたなき（三一三〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一九・一二五九「新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士」
（前略）
丹鳳楼当後　青竜寺在前　市街塵不到　宮樹影相連
省吏嫌坊遠　豪家笑地偏　敢労賓客訪　或望子孫伝
（後略）
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草拾遺』二八八「宮樹陰相連」

（水82）
鶴憶松上風　尚顕
ふくかぜはまつにきこえてあしたづの雲井にたかき万代のこゑ（〇六二二三）
（実82）
鶴憶松上風
夜半に吹みやまおろしやさむからし松にすむつる声もおしまぬ（三一三一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一八三「見蕭侍御憶旧山草堂詩因以継和」
琢玉以為架　綴珠以為籠　玉架絆野鶴　珠籠鎖冥鴻
鴻思雲外天　鶴憶松上風　珠玉信為美　鳥不恋其中
（後略）

（水83）
心与竹倶空　元長
春秋にこころもとめじみさほなる竹をや直きともとうへまし（〇六二二四）
（実83）
心与竹倶空
なよ竹の折べくもなくなびくこそ世にふる道の心なりけれ（三一三二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一九・一二六五「偶題閣下庁」
静愛青苔院　深宜白鬢翁　貌将松共瘦　心与竹倶空
暖有低檐日　春多颺幕風　平生閑境思　尽在五言中

（水84）
山明虹半出　実香
雨はるるこの山もとに見えそめてにじをはしなるたき川のすゑ（〇六二二五）
（実84）
山明虹半出
むら雨のたえまの日影さすかたににじみえそめてむかふ山のは（三一三三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・一三三五「晩興」
極浦収残雨　高城駐落暉　山明虹半出　松闇鶴双帰
将吏随衙散　文書入務稀　閑吟倚新竹　筠粉汚朱衣
〈同一句題〉武者小路実陰『芳雲集』四一八〇、四一八一「山明虹半出」

（水85）
天低極海隅　賢房
海原や入日の雲にかぎりなきかぎりもみゆるなみのうへかな（〇六二二六）
（実85）
天低極海渦
月も日もうみより出てうなばらの光にそらのかぎりをもみつ（三一三四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九〇八「東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十二補闕杜十四拾遺李二十助教員外竇七校書」

南去経三楚　東来過五湖　山頭看候館　水面問征途
地遠窮江界　天低極海隅　飄零同落葉　浩蕩似乗桴
（後略）

（水86）
暮雨湿村橋
あはれにもくるるよしらぬゆききかな里のたなはしあめはかかれど（〇六二二七）

（実86）
暮雨湿村橋
暮ぬとて人もやいそぐ雨きほふさとのいたばしをともとどろに（三一三五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一〇・〇四七一「渭村雨帰」

（前略）
閑旁沙辺立　看人刈葦茗　近水風景冷　晴明猶寂寥
復茲夕陰起　野思重蕭条　蕭条独帰路　暮雨湿村橋

（水87）
山中契泉石　為広
楽しまんこころなりせばいはのはざま朽木の陰もよしややまみづ（〇六二二八）

（実87）
山中契泉石
水清く岩かさなりてちりの世の跡たえよともなれる山かな（三一三六）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻七・〇二九二「春遊西林寺」

（前略）
緬彼十八人　古今同此適　是年淮寇起　処処興兵革
智士労思謀　戎臣苦征役　独有不才者　山中弄泉石

（水88）
薙草通上経　実隆
里はあれぬいづれかみつのみちぞともわかぬ蓬をはらひかねつつ（〇六二二九）

（実88）
薙草通三径
たれを今松のみどりもしら菊も荒にしままの道をはらはむ（三一三七）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一五・〇八〇七「渭村退居寄礼部崔侍郎翰林銭舎人詩一百韻」

（前略）
世慮休相擾　身謀且自強　猶須務衣食　未免事農桑
薙草通三径　開田占一坊　昼扉扃白版　夜碓搗黄粱
（後略）

〈同一句題〉三条西実隆『雪玉集』二六一三「薙草通三径」

（水89）
林幽不逢人　貞敦
かすかなるかた山はやしおくふかみすむ身よいかにあふ人もなし（〇六二三〇）

（実89）
林幽不逢人
妻木とるこの下道のさびしさはたださをしかのあとばかりにて（三一三八）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二六四「遊悟真寺詩　一百三十韻」

（前略）
月与宝相射　晶光争鮮妍　照人心骨冷　竟夕不欲眠
暁尋南塔路　乱竹低嬋娟　林幽不逢人　寒蝶飛翩翩
（後略）

〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草拾遺』二七八「林幽不逢人」

（水90）
掩涙別郷里　守覚
古郷はやがてかへらむあらましになみだもみせぬわかれなりけり（〇六二三一）

（実90）
掩涙別郷里
涙をばとめてや出んふるさとのわかれを人にこころづよくは（三一三九）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇〇六六「続古詩十首（ノ二）」

掩涙別郷里　飄颻将遠行　茫茫緑野中　春尽孤客情
駆馬上丘壟　高低路不平　風吹棠梨花　啼鳥時一声

（後略）

（水91）
行客舟已遠　　邦高
見つつおもふ名残もかなしこぎ出し跡なきなみの興津ふなびと（〇六二三二）
（実92）
行客舟已遠
みるままに漕消てゆくふねの中の心もさぞなあとのしらなみ（三一四一）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五三六「送客廻晩興」
城上雲霧開　沙頭風浪定　参差乱山出　澹濘平江浄
行客舟已遠　居人酒初醒　嫋嫋秋竹梢　巴蟬声似磬
〈同一句題〉『霞関集』旅・一一二五・読人不知「行客舟已遠〈文集句題〉」

（水92）
暮宿波上島　　宋世
ゆきかへる宮この夢をまつしまやくるるをじまにうきまくらして（〇六二三三）
（実93）
暮宿波上島
夕けぶり又もみてしか塩がまのまへのうきしまうきねながらも（三一四二）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻八・〇三七二「除官去未間」→（水実3）に既出

（水93）
日有帰山情　　重治
帰りえぬもとのこころのあらましの山をおもはでくらす日もなし（〇六二三四）
（実91）
雲有帰山惜
思ひたつ心なしとやみねのくもしれかしふかくちぎる山路を（三一四〇）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一八〇「早送挙人入試」
（前略）
日出塵埃飛　群動互営営　営営各何求　無非利与名
而我常晏起　虚住長安城　春深官又満　日有帰山情
〈同一句題〉小沢蘆庵『六帖詠草』一三七八「雲有帰山情」、上田秋成『藤簍冊子』

四三三「雲有帰山情」

（水94）
只将琴作伴　　季経
松風のいづちかさそふをろかなるわがつま琴のともとなるねを（〇六二三五）
（実94）
只将琴作伴
秋風にひとりや袖をしほらましかきなすことのこゑなかりせば（三一四三）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一六・〇九三一「憶微之傷仲遠　李三仲遠去年春喪」
幽独辞群久　漂流去国賒　只将琴作伴　唯以酒為家
感逝因看水　傷離為見花　李三埋地底　元九謫天涯
（後略）

（水95）
静読古人書　　為和
文の上もうつるははやきはるあきを心の道にのどめてや見む（〇六二三六）
（実95）
静談古人書
さりともとたのめひのもと神代よりただしき道を文にみるにも（三一四四）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻六・〇二五九「詠拙」
（前略）
葺茅為我廬　編蓬為我門　縫布作袍被　種穀充盤餐
静読古人書　閑釣清渭浜　優哉復遊哉　聊以終吾身
〈同一句題〉木下幸文『亮々遺稿』一一二八「静読古人書」

（水96）
往事思如作　　宣胤
ながれゆくなみだやけふの水無瀬河みなきのふなるむかしがたりに（〇六二三七）
（実96）
往事思如昨
ますかがみうつりかはれる年月もきのふけふかの世世の面かげ（三一四五）

〈句題原詩〉『白氏文集』巻一一・〇五三一「寄王質夫」→（水実17）に既出

（水97）
　浮世短於夢　　為孝
さめぬべきうつつをいつとしらぬ世は夢とも何にさだめてかみむ（〇六二三八）
（実97）
　浮世短於夢
何か思ふ五十年は過ぬ行すゑはありとみるまも明くれのゆめ（三一四六）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻一八・一一六二「野行」
　草潤衫襟重　沙乾屐歯軽　仰頭聴鳥立　信脚望花行
　暇日無公事　衰年有道情　浮生短於夢　夢裏莫営営
〈句題他出〉（千108）
（水98）
　万緑皆已消　　尭胤
つゆのくれ霜のあしたもたがならん鹿林のこがらしのあと（〇六二三九）
（実98）
　万緑皆已消
はてはそのもみぢも花も山風にながむと思ひしぬしやたれなる（三一四七）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻七・〇三三〇「山中独吟」
　人各有一癖　我癖在章句　万緑皆已銷　此病独未去
　毎逢美風景　或対好親故　高声詠一篇　恍若与神遇
　（後略）
（水99）
　君恩如雨露　　実望
雨露のめぐみもさぞなたみにおほふ君がこころの世にかぎりなき（〇六二四〇）
（実99）
　君恩如雨露
民の草うけてもしるやはるの雨秋の露とは君がめぐみを（三一四八）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻二・〇一〇一「和思帰楽詩」
　（前略）
　心中志気大　眼前爵禄軽　君恩若雨露　君威若雷霆
　退不苟免難　進不曲求栄　在火弁玉性　経霜識松貞
　（後略）
〈同一句題〉武者小路実陰『芳雲集』五〇一六、五〇一七「君恩如雨露」、加藤千蔭『うけらが花初編』一四九四「君恩如雨露」
（水100）
　幸逢太平代　　政為
ありふべき身をばたのまでこしままにおさまれる代のためしをぞ見る（〇六二四一）
（実100）
　幸逢太平代
つかへきて嬉しきせにもあへる代や戸ざしもきかぬ関の藤川（三一四九）
〈句題原詩〉『白氏文集』巻五・〇一七五「常楽里閑居偶題十六韻兼寄劉十五公輿王十一起呂二炅呂四穎崔玄亮十八元九稹劉三十二敦質張十五仲元時為校書郎」
　帝都名利場　鶏鳴無安居　独有懶慢者　日高頭未梳
　工拙性不同　進退亦遂殊　幸逢太平代　天子好文儒
　（後略）
〈同一句題〉『邦輔親王（新編私家集大成）』解題・四五八「幸逢太平代」、武者小路実陰『芳雲集』五〇一九～五〇二一「幸逢太平代」、加藤千蔭『うけらが花初編』一四八〇「幸逢太平代」、木下幸文『亮々遺稿』一二九二「幸逢太平代」、香川景樹『桂園一枝拾遺』七一三「幸逢太平代」、『大江戸倭歌集』二〇四九・源忠敏、二〇五〇・本居内遠「幸逢太平代」

（㉕水無瀬殿法楽和歌（文集百首）・㉖三条西実隆「夏日詠百首（文集百首）」ここまで）

㉗「聖廟法楽和歌（杜甫句題五十首）」（聖1～聖50）

【略解説】
永正三年（一五〇六）五月四日の後柏原天皇禁裏御会和歌。続歌による五十首和歌で、後柏原天皇の他、全一六名の歌人が詠進している。題はすべて五言一句で、杜甫の詩を出典とする。後柏原天皇撰題で、三条西実隆が題の原案を検討して用捨を加えた。構成は、春一二首・夏七首・秋一二首・冬七首・恋六首・雑六首。

【参考】
嶋中道則「近世堂上和歌と漢文学――句題和歌をめぐって――」（『近世堂上和歌論

集』明治書院、一九八九年）、小山順子「室町時代の句題和歌――永正三年五月四日杜甫句題五十首について――」（『中世の文学と学問』思文閣出版、二〇〇五年）

【底本】

公宴続歌研究会『公宴続歌』（底本・宮内庁書陵部蔵本）。但し、影印を確認し、本文を改めた箇所がある。

増補史料大成『宣胤卿記』（臨川書店、一九七二年）

【本文】

（聖1）　邦高

東風吹春氷

こちふかばにほへとききし花やまづ氷をいづるみづのしらなみ（〇六二四二）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻四「送率府程録事還郷」

（前略）

途窮見交態　世梗悲路渋　東風吹春氷　決莽后土湿

念君惜羽翮　既飽更思戢　莫作翻雲鶻　聞呼向禽急

〈同一句題〉『後水尾院御集』三〇「東風吹春氷」、熊谷直好『浦のしほ貝』一五、一六「東風吹春氷」

（聖2）

流霜分片片

春の色にたなびかれゆく霞にもおもはぬみちやきさらぎのそら（〇六二四三）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻九「宗武生日」

（前略）

詩是吾家事　人伝世上情　熟精文選理　休覓綵衣軽

凋瘵筵初秩　欹斜坐不成　流霞分片片　涓滴就徐傾

（聖3）　実隆

鶯入新年語

霜雪にむせぶおもひもうぐひすのうちとけけりなはるのひかりに（〇六二四四）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一〇「傷春五首（ノ二）」

鶯入新年語　花開満故枝　天青風巻幔　草碧水通池

牢落官軍速　蕭条万事危　鬢毛元自白　涙点向来垂

（後略）

〈同一句題〉烏丸光広『黄葉集』三六四「鶯入新年語」、中院通村『後十輪院内府集』「鶯入新年語／寛永五正十九内御会始」、『後水尾院御集』六二「鶯入新年語」、武者小路実陰『芳雲集』二一〇、二一一「鶯入新年語」、西洞院時慶『前参議時慶集』五七一、五七二「鶯入新年語　陽明御会始」

（聖4）　宣胤

梅花交近野

ゆきかへるいくそのそでかにほふらんさとちかき野のむめのしたみち（〇六二四五）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一二「送王侍御往東川放生池祖席」

東川詩友合　此贈怯軽為　況復伝宗匠　空然惜別離

梅花交近野　草色向平池　儻憶江辺臥　帰期願早知

〈同一句題〉中院通村『後十輪院内府集』一三一「梅花交近野　同（寛永）九四廿五仙洞聖廟御法楽月次」

（聖5）　政為

臥柳自生枝

青柳の枝さしそふるはるなくはただおもかげやみづの埋木（〇六二四六）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一一「過故斛斯校書莊二首（ノ二）」

燕入非傍舎　鷗帰秪故池　断橋無復板　臥柳自生枝

遂有山陽作　多慙鮑叔知　素交零落尽　白首涙双垂

（聖6）　為広

春風草又生

冬枯し霜の岡べのまくずはらみどりにかへるはるかぜぞふく（〇六二四七）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻五「不帰」

河間尚征伐　汝骨在空城　従弟人皆有　終身恨不平

数金憐俊邁　総角愛聡明　面上三年土　春風草又生

〈同一句題〉西洞院時慶『前参議時慶集』六七一、六七二「春風草又生　禁中御会二首」

（聖7）　宣親
帰雁喜青天
うきたびもかへるさになるこころとやなみだのそらのはるるかりがね（〇六二四八）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻九「倚杖」
看花雖郭外　倚杖即渓辺　山県早休市　江橋春聚船
狎鷗軽白浪　帰雁喜青天　物色兼生意　凄涼憶去年

（聖8）　季種
衣霑春雨時
たちおほふかすみのうちのはるさめはふるともわかでそでぞしほるる（〇六二四九）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻三「大雲寺賛公房四首（ノ三）」
心在水精域　衣霑春雨時　洞門尽徐歩　深院果幽期
到扉開復閉　撞鍾斉及茲　醍醐長発性　飲食過扶衰
把臂有多日　開懐無愧辞　黄鶯度結構　紫鴿下罘罳
愚意会所適　花辺行自遅　湯休起我病　微笑索題詩

（聖9）　元長
故園花自発
むかしをばわすれぬものよ住すてしたがふるさとぞ春のはなぞの（〇六二五〇）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻四「憶弟二首（ノ二）」
且喜河南定　不問鄴城囲　百戦今誰在　三年望汝帰
故園花自発　春日鳥還飛　断絶人煙久　東西消息稀

〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝』一〇〇「故園花自発」

（聖10）　宋世
花辺行自遅
おもひたつよし野の花や遠からむゆく手のはるにこころとどめて（〇六二五一）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻三「大雲寺賛公房四首（ノ三）」
↓（聖8）に既出

〈同一句題〉西洞院時慶『時慶Ⅱ（詠草）』五二、五三「寛永九　卯　二月ノ延引　聖廟法楽　花辺行自遅」

（聖11）　雅俊
吹花随水去
ゆく水のおなじいはねにさそひきてはなもなみこすやまかぜぞふく（〇六二五二）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一二「絶句三首（ノ三）」
謾道春来好　狂風大放顛　吹花随水去　翻却釣魚船

（聖12）　和長
寂寂春将晩
このときをはるの名残におもへとや鳥かへるやまの入あひのそら（〇六二五三）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻七「江亭」
坦腹江亭暖　長吟野望時　水流心不競　雲在意倶遅
寂寂春将晩　欣欣物自私　故林帰未得　排悶強裁詩

（聖13）　済継
冥冥子規叫
暮ぬやといそぎしものをほととぎすなきつる山の木木のしたみち（〇六二五四）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻六「法鏡寺」
（前略）
洩雲蒙清晨　初日翳復吐　朱甍半光炯　戸牖粲可数
拄策忘前期　出蘿已亭午　冥冥子規叫　微径不復取

（聖14）　為孝
仲夏苦夜短
みじかよの月も最中の影おしきならひは秋もまたやみてまし（〇六二五五）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻五「夏夜歎」
永日不可暮　炎蒸毒我腸　安得万里風　飄颻吹我裳
昊天出華月　茂林延疎光　仲夏苦夜短　開軒納微涼
（後略）

（聖15）
涼月白紛紛　　為和
清滝や月のしらいとくりみだし秋かぜまたぬなみのすずしさ（〇六二五六）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻二一「陪鄭広文遊何将軍山林十首（ノ九）」
床上書連屋　階前樹払雲　将軍不好武　稚子総能文
醒酒微風入　聴詩静夜分　絺衣挂蘿薜　涼月白紛紛
（聖16）
脩竹不受暑　　雅綱
すずみよるかげにはなつもなよたけのながき日あかずくらすころかな（〇六二五七）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一「陪李北海宴歴干亭」
東藩駐皁蓋　北渚凌清河　海右此亭古　済南名士多
雲山已発興　玉佩仍当歌　脩竹不受暑　交流空湧波
（後略）
（聖17）
暗飛蛍自照　　政為
おもひにはまよふものから夕やみの空さりげなくゆくほたるかな（〇六二五八）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一一「倦夜」
竹涼侵臥内　野月満庭隅　重露成涓滴　稀星乍有無
暗飛蛍自照　水宿鳥相呼　万事干戈裏　空悲清夜徂
〈同一句題〉烏丸光広『黄葉集』六七六「院聖廟御法楽に、暗飛蛍自照」
（聖18）
荷浄納涼時　　宋世
荷葉のきよきにうつるすずしさや心よりわくいづみなるらむ（〇六二五九）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻二「陪諸貴公子丈八溝携妓納涼晚際遇雨二首（ノ一）」
落日放船好　軽風生浪遅　竹深留客処　荷浄納涼時
公子調氷水　佳人雪藕糸　片雲頭上黒　応是雨催詩

（聖19）
葉密鳴蟬稠　　邦高
しげりあふならのした葉はつれなくて風におちくる蟬のもろごゑ（〇六二六〇）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻二一「夏日李公見訪」
（前略）
巣多衆鳥闘　葉密鳴蟬稠　苦遭此物聒　孰語吾廬幽
水花晚色静　庶足充淹留　預恐樽中尽　更起為君謀
（聖20）
牛女年年度
天河かけてもしらじうつろふも去年のわたりの瀬にこそ有けれ（〇六二六一）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻五「天河」
常時任顕晦　秋至最分明　縦被微雲掩　終能永夜清
含星動双闕　伴月落辺城　牛女年年度　何曾風浪生
〈同一句題〉中院通村『後十輪院内府集』五八七、五八八「牛女年年渡／元和二七夕公宴」、三一七「牛女年年渡」、武者小路実陰『芳雲集』一七五九「牛女年年渡」
（聖21）
高秋収画扇　　宣胤
露ならでをくものとなるあふぎこそうらみがほにもうちしめりぬれ（〇六二六二）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一八「傷秋」
林僻来人少　山長去鳥微　高秋収画扇　久客掩柴扉
懶慢頭時櫛　艱難帯減囲　将軍思汗馬　天子尚戎衣
（後略）
（聖22）
名園花草香　　実隆
色も香も野となりてこそ深草の花にむかしの秋もしのばじ（〇六二六三）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻二〇「入衡州」
（前略）

参錯走州渚　春容転林篁　片帆在郴岸　通郭前衡陽
華表雲鳥埤　名園花草香　旗亭壮邑屋　烽櫓蟠城隍
（後略）

（聖23）　雅俊
秋虫声不去
きりぎりすなれしいくよの手枕にむすばぬ夢の末やしるらむ（〇六二六四）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻六「除架」
束薪已零落　瓠葉転蕭疎　幸結白花了　寧辞青蔓除
秋虫声不去　暮雀意何如　寒事今牢落　人生亦有初

（聖24）　為広
荊扉対麋鹿
をどろみだれむばら閉むる扉にもうきはさはらぬ鹿のこゑごゑ（〇六二六五）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一七「暁望」
白帝更声尽　陽台暁色分　高峰寒上日　疊嶺宿霾雲
地圻江帆隠　天清木葉聞　荊扉対麋鹿　応共爾為群

（聖25）　季種
宿雁起円沙
みなと田もほのかに見えてあけゆけば雁ぞむれたつうらの真砂ぢ（〇六二六六）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻八「草堂即事」
荒村建子月　独樹老夫家　雪裏江船渡　風前逕竹斜
寒魚依密藻　宿鷺起円沙　蜀酒禁愁得　無銭何処賒

（聖26）　元長
秋窓尚曙途（遅歟）
あけぼのの色と見つつもあきはなをね覚よぶかきまどのうちかな（〇六二六七）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻九「客亭」
秋窓猶曙色　木落更天風　日出寒山外　江流宿霧中
聖朝無棄物　老病已成翁　多少残生事　飄零似転蓬

（聖27）　宣親
月出山更静
そま人はかへるあとよりあまびこもこたへぬみねをいづる月かげ（〇六二六八）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻六「西枝村尋置草堂地夜宿賛公土室二首（ノ二）」
天寒鳥已帰　月出山更静　土室延白光　松門耿疎影
躋攀倦日短　語楽寄夜永　明然林中薪　暗汲石底井
（後略）

（聖28）　和長
雲月遮微明
うき雲も月にあへるをひかりにてさやかにゆくやあかつきのそら（〇六二六九）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一九「宿青草湖」
洞庭猶在目　青草続為名　宿槳依農事　郵籤報水程
寒氷争倚薄　雲月逓微明　湖雁双双起　人来故北征

〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝拾遺』秋・二九〇「雲月逓微明」

（聖29）　政為
入簾残月影
残るよの軒ばのにしに影見えて月やしのぶのすだれもるらん（〇六二七〇）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻九「客夜」
客睡何曽著　秋天不肯明　入簾残月影　高枕遠江声
計拙無衣食　途窮仗友生　老妻書数紙　応悉未帰情

（聖30）　為孝
江流宿霧中
あくるよを入江の霧のうちにみて出し小舟やすゑまよふらん（〇六二七一）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻九「客亭」→（聖26）に既出

〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝拾遺』秋・三〇〇「江流宿霧中」、『大江戸倭歌集』秋・八一九・高橋止織「江流宿霧中」

（聖31）

菊蕊独盈枝　　済継

秋のきくうつろふはなのにほひもやおらばといひしはぎのうへの露（〇六二七二）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一二「雲安九日鄭十八携酒陪諸公宴」

寒花開已尽　菊蕊独盈枝　旧摘人頻異　軽香猶暫随

地偏初衣袷　山擁更登危　万国皆戎馬　酣歌涙欲垂

〈同一句題〉烏丸光広『黄葉集』九〇四「同（慶長）六年、菊蕊独盈枝」

（聖32）

葉稀風更落　　実隆

吹のこす木のはすくなきやまかぜは枝にたまらぬ音もさむけし（〇六二七三）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻五「野望」

清秋望不極　迢遞起曽陰　遠水兼天浄　孤城隠霧深

葉稀風更落　山迴日初沈　独鶴帰何晩　昏鴉已満林

（聖33）

人遠鳧鴨乱　　為和

人影はみえぬ古江のすてぶねにあらそふとこやあぢむらのこゑ（〇六二七四）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻九「通泉駅南去通泉県十五里山水作」

渓行衣自湿　亭午気始散　冬温蚊蝱集　人遠鳧鴨乱

登頓生曽陰　欹傾出高岸　駅楼衰柳側　県郭軽煙畔

（後略）

（聖34）

寒日経檐短　　宋世

ほどぞなき小屋のあしぶき隙みえて軒ばにめぐる冬の日のかげ（〇六二七五）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一六「寄杜位」

寒日経檐短　窮猿失木悲　峡中為客恨　江上憶君時

天地身何往　風塵病敢辞　封書両行涙　霑洒裛新詩

（聖35）

晴雪落長松

ふりつみしこずゑの雪もなごりなくさすや夕日の軒のつまかぜ（〇六二七六）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一六「謁真諦寺禪師」

蘭若山高処　煙霞嶂幾重　凍泉依細石　晴雪落長松

問法看詩妄　観身向酒慵　未能割妻子　卜宅近前峰

〈同一句題〉（頓称48）、加藤千蔭『うけらが花初編』八九七「晴雪落長松」、香川景樹『桂園一枝拾遺』四〇二「晴雪落長松」、熊谷直好『浦のしほ貝』八七九「晴雪落長松」

（聖36）

雪裏江船渡　　雅俊

ふりつみしみぎはの雪をひかりにて月は入江によするふなびと（〇六二七七）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻八「草堂即事」↓（聖25）に既出

（聖37）

艶艶待春梅　　邦高

梅のはな雪のしづ枝にさきいでて春をこてふとたれにつぐらむ（〇六二七八）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一〇「早花」

西京安穏未　不見一人来　臘日巴江曲　山花已自開

盈盈当雪杏　艶艶待香梅　直若風塵暗　誰憂容鬢催

（聖38）

歳暮日月疾　　雅俊

今ぞしるうつる月日のはやきをもくれゆくとしにおどろかれつつ（〇六二七九）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一八「写懐二首（ノ二）」

（前略）

天寒行旅稀　歳暮日月疾　栄名忽中人　世乱如蟻蝨

古者三皇前　満腹志願畢　胡為有結縄　陷此膠与漆

（後略）

（聖39）

君意人莫知　　政為

たちかへりおもへばえこそたのまれねうしとも見えぬこころふかさは（〇六二八〇）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻二「夜聴許十一誦詩愛而有作」

（前略）

精微穿溟涬　飛動摧霹靂　陶謝不枝梧　風騒共推激

紫燕自超詣　翠駮誰翦剔　君意人莫知　人間夜寥闃

（聖40）　和長

久待無消息

まつことははる秋にしてたがかたにいまはよるなるあまつかりがね（〇六二八一）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一一「寄邛州崔録事」

邛州崔録事　聞在果園坊　久待無消息　終朝有底忙

応愁江樹遠　怯見野亭荒　浩蕩風塵外　誰知酒熟香

〈同一句題〉中院通村『後十輪院内府集』一〇二〇「久待無消息／寛永九四廿五仙洞聖廟御法楽」

（聖41）　実隆

苦道来不易

ゆめにてもをろかならんにかくまでもとふべきものとおもひやはする（〇六二八二）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻五「夢李白二首（ノ二）」

浮雲終日行　遊子久不至　三夜頻夢君　情親見君意

告帰常局促　苦道来不易　江湖多風波　舟楫恐失墜

（後略）

（聖42）　宣親

相対如夢寐

たのみそめあひみつるにもおもふかな夢てふもののうつつわくとは（〇六二八三）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻三「羌村三首（ノ一）」

（前略）

妻孥怪我在　驚定還拭涙　世乱遭飄蕩　生還偶然遂

隣人満牆頭　感嘆亦歔欷　夜闌更秉燭　相対如夢寐

〈同一句題〉西洞院時慶『時慶Ⅱ（詠草）』五四、五五「同（聖廟法楽）相対如夢寐」

（聖43）　為広

中宵涙満床

まつ夜半の床の山川いさやともいはば深行袖にせかめや（〇六二八四）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻一六「暮春題瀼西新賃草屋五首（ノ五）」

欲陳済世策　已老尚書郎　不息豺虎闘　空慙鴛鷺行

時危人事急　風逆羽毛傷　落日悲江漢　中宵涙満牀

（聖44）　季種

別来歳月周

あふことをまたいつかはととし経ても有しわかれのつらさにぞまつ（〇六二八五）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻三「彭衙行」

（前略）

遂空所坐堂　安居奉我歓　誰肯艱難際　豁達露心肝

別来歳月周　胡羯仍構患　何当有翅翎　飛去墮爾前

（聖45）　宋世

野寺隠喬木

たれかまた野辺より末に墨ぞめの夕さびしき木木のしたみち（〇六二八六）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻九「謁文公上方」

野寺隠喬木　山僧高下居　石門日色異　絳気横扶疎

窈窕入風磴　長蘿紛巻舒　庭前猛虎臥　遂得文公廬

（後略）

〈同一句題〉香川景樹『桂園一枝』雑上・八二二「野寺隠喬木」

（聖46）　邦高

雨瀉暮檐竹

呉竹のけぶりの末葉さしおほひふる雨くらき窓のくれがた（〇六二八七）

〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻三「大雲寺賛公房四首（ノ四）」

（前略）

自顧転無趣　交情何尚新　道林才不世　恵遠徳過人

雨瀉暮檐竹　風吹青井芹　天陰対図画　最覚潤竜鱗

（聖47）
遠水兼天浄　　元長
神代よりすめるを空のみどりをもうつしてきよき水のゆく末（〇六二八八）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻五「野望」→（聖32）に既出
（聖48）
野風吹征衣
おもふにも陰なき野べぞくさまくらたびゆくそでをかぜのやどりに（〇六二八九）
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻六「別賛上人」
（前略）
異県逢旧友　初欣写胸臆　天長関塞寒　歳暮飢凍逼
野風吹征衣　欲別向曛黒　馬嘶思故櫪　帰鳥尽斂翼
（後略）
（聖49）※底本欠。『宣胤卿記』永正三年五月四日条に依る。
故人入我夢　　宣胤
さめやすきならひもぞうき夢にくる人も我身も老の世がたり
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻五「夢李白二首（ノ一）」
死別已呑声　生別常惻惻　江南瘴癘地　逐客無消息
故人入我夢　明我長相憶　恐非平生魂　路遠不可測
（後略）
（聖50）
神明依正直
※底本欠。但し、当該杜甫句題五十首の組題を襲用した寛永九年（一六三二）四月二十五日聖廟法楽和歌より（聖50）の題が判明する。
〈句題原詩〉『集千家註杜工部詩集』巻八「病柏」
有柏生崇岡　童童状車蓋　偃蹙竜虎姿　主当風雲会
神明依正直　故老多再拝　豈知千年根　中路顔色壊
（後略）

㉗「聖廟法楽和歌（杜甫句題五十首）」ここまで）

（もりた　たかゆき　南山大学准教授）
（あお　あすか　相愛大学准教授）
（こやま　じゅんこ　京都女子大学教授）
（たけしま　かずき　京都府立大学准教授）
（つた　きよゆき　大阪大学准教授）
（やまなか　のぶゆき　京都女子大学講師）

中古・中世句題和歌略史

小山　順子

はじめに

本報告書は、平安時代から室町時代末期に至る句題和歌の作品を集成し、句題和歌研究の資料提供を試みたものである。

句題和歌作品に関しては、個々の作品に関する論考は厚いのだが、その歴史を縦断して説いたものは管見に入らない。わずかに金子彦二郎『句題和歌撰集』（長谷川書房、一九五五年）が、平安時代から明治時代初期に至る句題和歌作品十三を取り上げ、本文を収めているのが、作品集成として管見に入るものである。金子彦二郎が『句題和歌選集』の「はしがき」に、刊行目的を以下のように記している。

殊にそれが、外来文学である中国詩文の類を、その題材として詠出されたものであれば、比較文学的な新研究面からも、きはめて取りつき易くもあり、又有力な文献でもある訳で、これによつて、彼我両国間の文学を対照し比較しつつ、精厳な態度で吟味し、鑑賞することによつて、その精神的風土を異にする両国民間の詩思と歌藻との在り方と、わが国風和歌への受容醇化の様相や、語彙に与へた変化や多様性や、其の歌想にも、複雑味や清新味やを寄与した影響関係などについても、これを現実に目睹し、実証し得るからである。

句題和歌が研究対象として注目される理由については、金子の挙げるものの他にも、句題と原詩との本文異同、出典となった資料がいかなる性質のものであるのか、どのような漢詩・句に注目し題として選んでいるかなど、漢籍受容の具体相を示すものであるという点も挙げられる。いずれにせよ、日本における漢籍受容や翻訳・翻案の問題を考える上で、句題和歌が持つ意義は大きく、本研究課題の報告書として、資料集成を試みた次第である。

報告書の末尾に、本報告書における作品集成を踏まえた「中古・中世句題和歌略史」を記し、その歴史を概観する。

なお句題和歌とは、狭義には、既存の漢詩文の一句ないしは複数句を歌題として用いて詠む詠法を指す。広義の句題和歌としては、「仮名句題和歌」と呼ばれる、和歌の一句を歌題として詠む詠法や、経典の経文を題とする経文和歌もある。本報告書では研究課題が「古代・中世の《翻訳》意識―訓読と翻案のあいだを探る―」であるため、「句題和歌」を狭義の漢詩文句題和歌のみ、すなわち既存の漢詩文句を歌題とする和歌のみを対象として作品を集成した。本稿でも「句題和歌」は漢詩文句題和歌を指す。

また、和歌において特定の漢詩文・佳句を念頭に置きながら和歌を詠む方法は、本歌取りと共通する技法として定着している。佳句取り・漢詩取り・句題和歌的詠法などと呼ばれるものであるが、本報告書では、依拠する漢詩文を題として前提・明示するという点に重点を置いたので、念頭に置いて作られた、または歌合判詞で典拠として漢詩文が指摘されているなど、内容から漢詩文を踏まえると判断される和歌は集成・考察の対象としていない。

一、平安時代中期から院政期

既存の漢詩句を題とするという発想の源は、中国の六朝詩から見られる句題詩にある。句題詩は、題となる漢詩句に用いられている漢字をすべて首聯で詠み込んだ上、首聯以外では句題の文字を用いてはならず、別の表現を用いて題意を詠むことが求められる。句題詩においては、故事（本文）を巧みに用たり、豊富な語彙を駆使することが作者の腕の見せ所であった。

しかし、漢詩句を題として和歌を詠むという句題和歌の詠法は、別言語を和歌に移すという翻訳・翻案の意識が根底に存在することになる。また、漢詩に表現された風物をいかに日本の風土に合わせた表現にするかという点に、焦点が合わされる。句題和歌の濫觴である千里「句題和歌」は、その序文に「臣儒門余孽、側聴言詩、未習艶辞、不知所為。今臣僅纔搜古句、構成新歌」と記す。和歌に習熟していないという謙遜を述べてはいるが、ここには儒者の家柄であり漢学に通じる千里が、漢詩句に基づき自身の和歌を詠む試みであると明示されている。

千里が拓いた句題和歌の試みは、漢詩文と和歌の交渉が積極的に展開された『古今集』時代、後続の句題和歌を生んでいる。

清涼殿のみなみのつまに、みかはみづながれいでたり。その前栽に松浦沙あり、延喜九年九月十三日に賀せしめたまふ。題に「月にのりてささらみづをもてあそぶ」、詩歌こころにまかす

ももしきのおほみやながらやそしまをみるここちするあきのよの月

（『躬恒集』一〇）

「よるの雲をさまりて月のゆくことおそし」といふだいを人のよませ給ふに

あま雲のたなびけりともみえぬよは行く月影ぞのどけかりける（『貫之集』七九五）

躬恒歌は「乗月弄潺湲」（『文選』巻二六・謝霊運「入華子崗是麻源第三谷」）、

貫之歌は「夜雲収尽月行遅」（『千載佳句』四時部・秋夜・一九一・野展郢、『和漢朗詠集』秋部・月・二五三）を句題としたものだ。『古今集』にも千里「句題和歌」から一首が採られ（千36、但し詞書は「題しらず」）、『古今集』撰者にも千里の句題和歌が注目されていたこと、句題和歌という詠法が他の歌人にも広まったこと、さらに、特に躬恒歌からはその技法が宮廷の雅会にも用いられたことが判明する。千里の挑戦は、後続の歌人たちを刺激し、以後、句題和歌は様々な歌人によって試みられた。

その中で、白居易「長恨歌」から句題を選んだ句題和歌が藤原高遠によって詠まれる。それに先立つ作品として『伊勢集』所載の「長恨歌の屏風を亭子院のみかどかかせたまひて、その所所よませたまひける」という詞書を持つ十首（五二～六一）がある。これは、「長恨歌」を題材とした屏風絵を描きその内容を和歌に詠むというもので、「みかどの御になして」「これはきさきの御歌にて」と、玄宗皇帝・楊貴妃の立場から、その場面における心情を和歌に表現するものだった。この作品は、本報告書には、明確に依拠する漢詩文句題が示されたものを収載するという主旨のもと収めなかったが、「長恨歌」の絵画化・和歌化という日本的受容を示す作品として注目されてきた。日本における白居易詩の人気と受容については贅言を要さないが、句題和歌の歴史においても、大江千里に続く句題和歌のまとまった作品が「長恨歌」「上陽白髪人」から句題を選んだものだったことは注意される。また高遠のみならず、源道済も「長恨歌」の詩句から四字を抜き出し、結題として用いた和歌十首を残している。

院政期の祝部成仲による新楽府題五首和歌も、この系列にある作品である。白居易の新楽府および「長恨歌」から句題を選んで詠んだ和歌で、新楽府・「長恨歌」の変わらない人気と注目を語るものだ。

但し、新楽府・「長恨歌」は、たとえば「王昭君」が『永久百首』の歌題になるなど、特に五美人の人名が歌題とされることは多かったものの、高遠・道済・成仲のように新楽府・歌行から句題を選ぶことは、句題和歌の主流とはならなかった。新楽府・「長恨歌」から句題を選んだのは、単にその詩句が優れた表現を持つ名句だったからではなく、その原詩が、物語性に富んだ人気のある漢詩であり、一句のみならず新楽府・歌行全体を念頭に置きつつ内容を和歌に移すという意識のもとにあったと考えられる。新楽府・歌行の漢詩句題が句題和歌の主流とならなかった理由として、二点を指摘しておく。一つは、句題和歌の展開に従い、多様な漢詩文からの句題が選ばれるようになったことである。新たな句題和歌が企画され、撰題されると、句題にもバリエーションが求められ、これまで用いられたことのない漢詩文を句題として使用しようとする意欲が歌人たちに生じた。その視点から見れば、既に人気が高く広く知れ渡っている新楽府・歌行ではない作に目が向いたのだろう。もう一点は、句題和歌が百首歌等の定数歌の形式に沿った組題として構成企画されるようになると、物語性が強い新楽府・歌行の漢詩句題は、かえって主題を限定し、組題に組み込みにくかったという理由である。「長恨歌」の詩句は、恋題として利用されている（たとえば慈円・定家・寂身「文集百首」においては、恋五首のうち四句題が「長恨歌」を出典とする）例があるとはいえ、背景が容易に立ち上がってくるために、かえって句題としては制限が多かったと考えられる。

院政期のもう一つの句題和歌は、大江匡房『匡房集』所収の句題和歌である。十首が収められているが、十首のうち八首までは、『千載佳句』『和漢朗詠集』にも見いだせる詩句を句題として用いている。佳句集から直接に採句したのでなくとも、佳句集が参照された可能性は高い。『千載佳句』『和漢朗詠集』から句題が選ばれる句題和歌は、藤原隆房『朗詠百首』、土御門院「句題和歌」（二種）、藤原為家「朗詠百首」と続くが、その先蹤として『匡房集』所収句題和歌は注目される作品である。

二、鎌倉時代初期

平安時代末から、句題和歌が定数歌の形式で詠まれ始める。大江千里「句題和歌」は、百十五首の句題和歌と句題和歌でない詠懐部十首の、全百二十五首からなるが、定数歌の形式が完成する以前のものである。千里「句題和歌」は、『李嶠百二十詠』を参照した構成であったと想定されるが、各部に句題を分けて百首ないし五十首歌の形式で詠まれる句題和歌が本格的に始まるのは、平安時代末からだった。少なくとも、作品の現存状況から見ると、そのように判断される。定数歌形式の句題和歌で、作品全体が残る最も古いものは藤原隆房『朗詠百首』である。これはその名のとおり全ての句題を『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』から撰び、百首歌の形式で各部に題を分けて構成したものだ。以後、定数歌形式の句題和歌が続くことになる。

隆房『朗詠百首』は、定数歌形式に当てはめているとはいえ、部の名称は「管弦部」「餞別部」と、漢詩の類題集や朗詠集の影響をいまだ残している。また、源光行『百詠和歌』は、各部の名称も『李嶠百二十詠』を踏襲している。しかしその後の定数歌形式の句題和歌では、各部の名称も『堀河百首』の伝統的な部・題に沿うようになる。こうした点からも、句題和歌の和様化の一端を看取できる。

慈円・定家・寂身による「建保六年文集百首」の主催・撰題はともに慈円であるが、句題として最大四句まで用いており、原詩全体または他の箇所まで意識した表現が散見する。句題と言いつつも、原詩全体に目を配った上で和歌に移すという営為は、全ての「建保六年文集百首」詠に見いだせるわけではないが、句題和歌の詠法と意識としても注目されるものだ。また、「建保六年文集百首」のもう一つの特徴としては、複数人が参加する企画だという点である。これまで、千里『句題和歌』以来、句題和歌は基本的に個人の営為として取り組まれたものだった（但し、『道済集』所収の長恨歌句題和歌は「長恨歌、当時好士和歌詠みしに」とあり、複数名が参加した企画と

推測される）。和漢兼作の歌人が、自身の和漢双方に通じる知識や技巧を発揮し、または技術を磨く上で句題和歌という形式が用いられたと考えられるが、「建保六年文集百首」においては、慈円・定家・寂身だけではなく、女性歌人の八条院高倉も参加していたと推測される。さらに「建保六年文集百首」は北野社に奉納する法楽百首として企画されたものであった。個人の営み・試みではなく、複数人が参加したことが明確な句題和歌として、また何らかの目的を有する定数歌を句題和歌の形式で詠むという点においても、後続の句題和歌の先蹤にあたる作品である。こうした点においても、句題和歌が、漢詩文との交渉を表に立てた特殊な形式を保持しつつも、通常の定数歌に接近してゆく過程を見いだせる。

三、鎌倉時代中後期

特定の出典、それも佳句集から句題を撰び、定数歌として構成する試みは、その後も続く。土御門院の二種の「句題五十首」は、それぞれ『和漢朗詠集』から日本人作者による漢詩句を、『千載佳句』から中国人作者による漢詩句を選んだもので、また藤原為家「朗詠百首」は、『夫木抄』に九首が残るのみではあるが、詞書から元来は百首歌であったことが判明する作品である。

土御門院「句題五十首（二種）」を除き、鎌倉時代中期の句題和歌については、歌人の家集に断片的に残される程度で、まとまって伝わるものはほとんど無い。葉室光俊、一条実経、源資平、伏見院、日野俊光の句題和歌を本報告書に収載したが、他にも勅撰集・私撰集に断片的に残される句題和歌は数多い。どのような目的で詠まれたものであるか、不明であるとしか言えないが、たとえ百首歌であっても、個人的な詠作の域を出ないものがほとんどであると推測される。

但し、この時期の句題和歌にも注目される展開がある。

一つは、句題として用いられる出典の拡大だ。葉室光俊『閑放集』所載の句題和歌には、宋詩から句題を採ったものが見られる。宋代の詩話・総集を利用したものと推測されるが、いち早い宋詩受容としても注目されるものである。また、飛鳥井雅有『隣女集』所収の句題和歌は、『孝経』『帝範』を出典とする文を句題として用いている。この時代の句題和歌も、『白氏文集』および佳句集が句題の出典の中心であることは動かないが、これまで句題として用いられてこなかった漢詩文から、新たな句題を選んで用いる点に、句題和歌の新しい展開があった。五首以上が残る句題和歌を収載するという本報告書の主旨から収めることができなかった作品に、次のものがある。

古集百首歌中、鵲笏悲織女帰
なごりをやなれもしるらん七夕のわかれをいそぐかささぎのはし（『藤谷集』九六）

冷泉為相が「古集百首」を詠んでいたことが知られるが、この句題はいまだ出典が明らかでない。鎌倉時代中後期の句題和歌については、当時の漢籍受容の在り方と合わせて、まだまだ課題が残されている。

もう一つは、句題和歌の広がりである。勅撰集・私撰集・私家集に断片的に残されている句題和歌作品からは、幅広い人々によって句題和歌が詠まれていたことが窺われ、題詠の一形式として句題和歌が広まっていたことが窺われる。

四、南北朝から室町時代

南北朝期の句題和歌における最大の作品は、『頓阿句題百首』である。頓阿が選んだ句題による百首組題を、他の四人の歌人とともに詠んだものだ。句題はすべて五言一句であり、また定数歌形式として整備されたものである。後世にも三条西公条が組題として襲用している。

『頓阿句題百首』の大きな特徴は、用いられた句題の出典の範囲が、従来の朗詠集・『千載佳句』といった佳句集や『白氏文集』を中心とする唐詩から、宋詩にまで本格的に広がったことである。摘句にあたっての資料は総集や詩話であると推測されている。

また、『頓阿句題百首』の句題がすべて五言一句で統一されているのは、漢詩句を原詩の文脈から切り離し、五字題として扱う傾向を窺わせる。白居易の新楽府・歌行句題和歌や、「建保六年文集百首」が、原詩全体の内容を背景として意識しながら和歌を詠んでいたのとは異なる意識が認められる。企画の上では、漢詩文から選んだ句であるという特殊性を担保しつつも、和歌としては通常の題詠とさほど差異が認められないという傾向と句題和歌のあり方は、室町時代後期の句題和歌に引き継がれることになる。

五山の隆盛により、漢籍受容が拡大・深化した室町時代、句題和歌も様々に詠まれた。鎌倉時代中後期に見られたのと同様に、新たな出典から句題を選び用いた作品には、『孝経』を用いた『古文孝経和歌』、黄山谷「演雅」を用いた『竹内僧正家句題歌』、杜甫の詩句を用いた「聖廟法楽五十首」がある。前代までとは異なり、杜甫や黄山谷といった禅林で重視・愛好された漢詩の受容が和歌にも及んでいるのである。

また、室町時代後期の句題和歌の展開として重要なのが、禁裏和歌御会の題として用いられたという点である。「永正二年文集百首」「聖廟法楽五十首」がそれに当たるが、後柏原天皇禁裏の月次御会において、句題を組題とした題が用いられた。これは、それまでの句題和歌が、たとえ複数人が参加する企画であっても、あくまで私的な場における詠作であったのとはまったく異なる。禁裏の最も晴儀の詠歌の場である禁裏御会に句題が用いられたのは、その後の句題和歌およびその題の広がりを考える上で、

画期となるものだった。

禁裏御会和歌で句題を用いた最初の例にあたる永正元年（一五〇四）「禁裏御会和歌」は、共通する三句題をすべての歌人が詠進し、「永正文集百首」「聖廟法楽五十首」は続歌形式で詠まれている。つまり、多人数に題を配って詠ませたもので、詠進に臨む歌人の句題和歌に対する思い入れや挑戦の度合いといったものは斟酌されない。『頓阿句題百首』が五言一句に句題を統一し、組題としての形式を整えたことで、通常の題詠との差異が生まれにくくなったと先述した。この傾向は、特に「永正文集百首」「聖廟法楽五十首」に顕著であり、原詩から切り離され、句題として切り出された部分だけを、どのように和歌に裁ち入れ、題意を満たすかに重点が置かれるのである。

「永正文集百首」「聖廟法楽五十首」の、①形式面を五言一句に句題を限定する、②原詩の内容から切り離して句題を五字題として扱う、③組題として禁裏御会和歌の題に用いられた、という三点は、近世の句題和歌に大きな影響を与えた。すなわち、個人の試み・営みという枠を出て、禁裏御会和歌という晴の場において、組題として整理されて使用されたことにより、後世にも題の先蹤として参照され、襲用されたのである。近世の句題和歌が、中古・中世のそれをいかに受容し継承したかの一端として、近世の歌人たちが同じ句題を詠んだ例が多いことは、本報告書の〈同一句題〉の項目を見れば明らかである。

簡略にではあるが、句題和歌の史的展開について、概要を述べた。句題和歌は、漢詩文を和歌に翻訳・翻案する技法、句題と原詩との本文異同、歌人・歌壇論など、様々な面からの考究が必要となる。本報告書は、句題和歌の歴史を追えるよう、作品を収集することを試みたが、重要な作品を見落としていること、また見識が不充分で行き届かない部分があることも充分に予想される。様々、ご指摘・ご叱正を乞う次第である。

（こやまじゅんこ　京都女子大学教授）

中古・中世句題和歌一覧（稿）

令和4年3月31日印刷
令和4年3月31日発行
（100部）

編集・発行
森田貴之　阿尾あすか　小山順子
竹島一希　蔦　清行　山中延之

科学研究費助成事業（科研費）
基盤研究（C）課題番号19K00356
古代・中世の《翻訳》意識―訓読と翻案のあいだを探る―
（代表者　南山大学森田貴之）

発行者
〒466-8673
愛知県名古屋市昭和区山里町18
南山大学人文学部日本文化学科
南山大学人文学部日本文化学科森田貴之研究室

印刷・製本
〒500-8074　岐阜県岐阜市七軒町15
西濃印刷株式会社

不許複製　禁無断転載・再配布